【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4111

(様式1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究((1)－①－ア)		
【事業概要】他機関との連携を図り、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築を推進する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　津田徹英

【スタッフ】山梨絵美子(部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、小林達朗(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世（研究員)、橘川英規（研究員)、城野誠治(専門職員)、福永八朗（アソシエイトフェロー)、田所泰（アソシエイトフェロー)、津村宏臣(同志社大学准教授・客員研究員)、吉崎真弓（国立情報学研究所特任研究員・客員研究員)、久保田裕道(無形文化遺産部無形民族文化財研究室長)、早川泰弘(保存修復科学センター分析科学研究室長)、山内和也(文化遺産国際協力センター地域環境研究室長)、平出秀文（研究支援推進部管理室長)

【主な成果】

(1)当研究所の刊行物一覧の内容精査を行い、遺漏刊行物についての情報を収集することで、個々の刊行物について把握し、その一覧をウェブサイトで公開した。併せて、公開レベルを確認し、公開可能なものについては端末上での閲覧ができるための準備を進めた。

(2)Picture　Web で管理していた画像情報をワードプレスに移行した。

(3)刊行物アーカイブシステムに過去の展覧会情報データを移行させ、運用を開始した。

(4)調査・研究の公表として 2015 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会で口頭発表を行った。

(5)『美術画報』第 6 編から第 46 編までの入力を完了させ、公開した。

【年度実績概要】

(1)

・全所的アーカイブの一環として、当研究所が開所以来の刊行物を網羅した一覧を作成し、遺漏刊行物がないか各部・センターにはかって情報を収集し、「東京文化財研究所刊行物一覧」をウェブサイトで公開した。

・上記の刊行物一覧に記載された刊行物のうち PDF のない刊行物について PDF 化をすすめた。

・併せて、上記の刊行物一覧に記載された刊行物ひとつ一つに公開レベルを確認・設定し、公開可能なもについては Web 上での公開の準備をすすめた。

・上記のことがらを進めるため、東京文化財研究所アーカイブ WG 協議会を４回にわたって開催した（27 年 8 月 3 日、10 月 13 日、12 月 25 日、28 年 2 月 19 日)

・当研究所の研究誌『美術研究』１～200 号（1932 年から 1959 年）の誌面を PDF で公開した。併せて著作権者・同継承者不明の論文・記事等公開の手続きを進めた。

(2)Picture　Web で管理していた画像情報をワードプレスに移行した。

(3)併せて刊行物アーカイブシステムの評価を行い、『日本美術年鑑』刊行のための入力と図書業務が連動するように改良を行った。

(4)2015 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会（27 年 6 月 6 日、国立西洋美術館講堂）の口頭発表の内容は以下の通り。「文化財情報における専門的アーカイブの構築―東京文化財研究所の取り組み」(田中淳副所長、皿井舞主任研究員)

(5)『美術画報』第 6 編から第 46 編（1899 年～1923 年）までの入力を完了させ、公開した。

【実績値】

・研究情報のウェブサイトでの公開件数３件（備考欄①②③)

・調査・研究の成果公表１件（備考欄④)

【備考】

①「東京文化財研究所 刊行物一覧」

②『美術研究』１～200 号

③『美術画報』第 6 編から第 46 編

④ 口頭発表「文化財情報における専門的アーカイブの構築―東京文化財研究所の取り組み」

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4111
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	S	A	A	A	A	A

判定理由
適時性：公的機関としての活動の透明性が求められる昨今にあって、東京文化財研究所刊行物一覧の公表により研究所のこれまでの研究成果と透明性を一挙に明確に示し得たことは極めて高い成果である。
独創性：他ならない研究所のこれまでの研究成果、活動実績・蓄積を全所的に公表し得た点に高い独創性を示し得た。
発展性：東京文化財研究所刊行物一覧の公表は、これまでの活動実績の単なる公表に留まらず、これをベースにして逐次、情報の蓄積と公表が見込めることとなったことは大きな成果である。
効率性：各部・センターでの実績を全所的に一括して公表・総覧することが可能となったことにより、効率性が高まった。
継続性：文化財情報の公開は開所以来の蓄積・実績に立脚しつつ、積極的に外部発信を行った成果は大きい。
正確性：東京文化財研究所刊行物一覧の公表を行ったことにより、これまで行ってきた研究とその成果を正確に公表できるようになった成果は大きい。

２．定量的評価

観点	ウェブサイトでの公開件数	調査・研究の成果公表				
評定	A	A				

判定理由

ウェブサイトでの公開件数：デジタルアーカイブ３件をウェブサイト上で公開することができた。特に、「東京文化財研究所刊行物一覧」の公表は、質・量的にみて、開所以来の東京文化財研究所の活動とそれにともなう研究成果を網羅・総覧できるようにしたものであり、研究所のこれまでの活動とその成果についての透明性をはかった点は、これまでなし得なかったものである。
調査・研究の成果公表　：アーカイブに関する研究会で口頭発表を行い、文化財情報における専門的アーカイブの構築についての東京文化財研究所の活動の周知と成果の公表を国内外の関係者に広く公表することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当研究所の開所以来の刊行物（成果報告書）を網羅した「東京文化財研究所刊行物一覧」の一覧を公開することで、これまで研究所が行ってきた研究活動内容が、刊行物を介して外部から目に見えるようにするなど大きな成果を挙げた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今中期計画期間にもとづいて、継続的に文化財の研究情報を蓄積しつつ公開・活用するための手法について研究し、「東京文化財研究所刊行物一覧」をウェブサイトで公開するなどして、所期の目標以上の成果を達成することができた。 次期中期計画では当研究所の文化財に関する調査･研究の成果･データをより国際標準に沿う形で整え、共有するための研究をおこなっていきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4112

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究((1)－①－イ)

【事業概要】

日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長　小林達朗

【スタッフ】山梨絵美子(部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、津田徹英(文化財アーカイブス研究室長)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世（研究員)、橘川英規（研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男（成城大学特任教授・客員研究員)、三上豊（和光大学教授・客員研究員)、近松鴻二（学習院大学非常勤講師・客員研究員)、吉田千鶴子（東京藝術大学非常勤講師・客員研究員)

【主な成果】

(1)・東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業を行った。
　・美術史研究のためのコンテンツづくりとして、平安時代在銘彫刻作品の銘文データの入力と編年目録（年表）の作成を行った。
　・イケムラレイコ氏の公開対談会を行った。

(2)・明治期の美術書簡に関連する研究の成果を企画情報部研究会（27 年 8 月 30 日）において口頭発表を行った。

(3)・イケムラレイコ氏の公開対談会の内容を企画情報部ウェブ上で公開した。
　・(1)の成果にかかる内容を『美術研究』416、417、418 号に掲載した。
　・東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作の『記事珠』について、ウェブサイト上での公開に向けてのパイロット版の作成改良を行った。

(4)・津田徹英がこれまでの調査研究の成果として『平安密教彫刻論』(中央公論美術出版　本文 808 頁　28 年 3 月）を刊行した。

【年度実績概要】

(1)・黒田清輝宛書簡 7,570 通の手紙に記された内容が把握できるよう、判読作業を行い、内容検索ができる目録作成作業を進めた。
　・すでに研究所のデータベースとして公開されている 10 世紀から 15 世紀に至る絵画作例の銘文を集めた『年紀資料集成データベース』に対応する彫刻作例の銘文データベースを構築すべく、平安時代の在銘彫刻作品の銘文データ入力、編年目録の作成を進めた。

(1)黒田清輝宛書簡の判読と内容の入力作業

　・イケムラレイコ氏と、企画情報部長山梨絵美子、主任研究員皿井舞による公開対談「「かたち」の生成をめぐって―イケムラレイコの場合」(27 年 6 月 9 日）を東京文化財研究所セミナー室において開催した。

(2)・黒田清輝宛書簡のうち、一群をなす書簡について、企画情報部研究会（27 年 8 月 30 日）で、外部研究者を交えて口頭発表を行った。
　・高山百合「黒田清輝宛岡田三郎助書簡　翻刻と解題」、松本誠一「岡田八千代の小説から見た岡田三郎助像」

(3)・(1)の成果を踏まえ、27 年度刊行の『美術研究』に「研究資料」として掲載した。
　・『美術研究』416～418 号掲載：児島　薫「藤島武二による黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について（2）～（4)」

(4)・当プロジェクトに含まれる研究の成果を津田徹英『平安密教彫刻論』(中央公論美術出版　本文 808 頁　28 年 3 月）として刊行した。

【実績値】

発行物数：掲載論文 3 件（①～③）刊行物 1 件④
発表数　：発表 2 件（⑤～⑥）　　公開対談 1 件（⑦）

【備考】論文

①②③児島薫「藤島武二から黒田清輝、久米桂一郎宛書簡について（2）～（4)」　『美術研究』416～418 号

刊行物

④津田徹英『平安密教彫刻論』(中央公論美術出版　本文 808 頁　28 年 3 月）

発表（企画情報部研究会 27 年 8 月 30 日）

⑤高山百合（福岡県立美術館学芸課学芸員）「黒田清輝宛岡田三郎助書簡　翻刻と解題」

⑥松本誠一（佐賀県立博物館・佐賀県立美術館副館長）　「岡田八千代の小説から見た岡田三郎助像」

公開対談（於東京文化財研究所セミナー室　27 年 6 月 9 日）

⑦「「かたち」の生成をめぐって―イケムラレイコの場合」

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4112
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	A	A	B	B	A	

判定理由
適時性：近代美術史上重要でありながら、内容が明らかでないため研究者に共有されていると言い難い黒田清輝宛書簡について、内容の把握・公開に向けた整理を迅速に行うとともに、外部研究者を交えてその研究交流の促進のために研究会を開催、さらにその内容を『美術研究』において公表するなど、重要資料について共有化作業を進展させることが出来たことは大きな成果である。
独創性：当研究所ならではの資料の活用を行った。また、これまでの成果を専門書として公刊した。その他成果の一端はオープンレクチャーにて公表するとともに、26 年度主催シンポジウムに関連する対談を公開で行うなど、当研究所こそが可能な美術研究基盤の整備、公開を行い大きな成果をあげた。
発展性：10 世紀から 15 世紀に至る絵画作例の銘文を集めた『年紀資料集成データベース』を彫刻の分野にまで展開すべく、日本彫刻作例の銘文データベースの構築を目指し、27 年度は平安時代の在銘彫刻作品の銘文をデータ入力し、併せて編年目録の作成を進めるなど膨大な資料群について基盤整備を発展させることができた。
継続性：26 年に引き続き、黒田清輝宛書簡の内容把握を進めるとともに、その成果を『美術研究』に研究資料として引き続き提示することができた。
正確性：黒田清輝宛外国人書簡について、明治期および古書体専門の客員研究員及び研究補佐員の助力を得て、資料解明の正確性を期すことができたことは大きな成果である。

２．定量的評価

観点	発行物数	発表数				
評定	B	B				

判定理由
発行物数：論文数が3件、刊行物１件であり、目標値に達しているためＢと評価した。
発表数　：発表数が3件であり、目標値に達しているためＢと評価した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近世書簡の調査翻刻に関しては充分な進捗を見、また論文・発表に関しても充実した内容となり、総合的にＢと評価した。 正確性と継続性を見据えつつ黒田清輝宛書簡を、影印と翻刻を対比的に配して、一点ずつに解題を付して行う資料紹介の手法は、資料紹介のあり方として規範・定型をなし得るものであり、この手法を踏襲しつつ、引き続き翻刻・解題の充実に努めたい。併せて、文化財研究の「今」を見据え、研究の発展性を念頭に置きつつ、ウェブサイト、研究会、講演などさまざまな手法を用いて、成果の周知と公表を行っていきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に対する実施状況は、所期の目的を達成している。次期中期計画においても継続して調査・研究を踏まえた美術史研究のためのコンテンツの形成、研究交流促進と成果公表のための研究会等の開催を行っていきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4113

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究((1)－①－ウ)

【事業概要】日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長　塩谷　純

【スタッフ】田中淳(副所長)、山梨絵美子(部長)、橘川英規(研究員)、城野誠治(専門職員)、田所泰（アソシエイトフェロー)、三上豊(和光大学教授・客員研究員)、丸川雄三(国立民族学博物館准教授・客員研究員)、河合大介（客員研究員)

【主な成果】

(1)A.畑正吉資料の調査、B.三木宗策作品及び文献調査、C.松澤宥作品・資料の調査。

(2)A.明治 40 年代のパリにおける美術家の交遊関係の解明、B.三木宗策の文献目録・年譜作成。

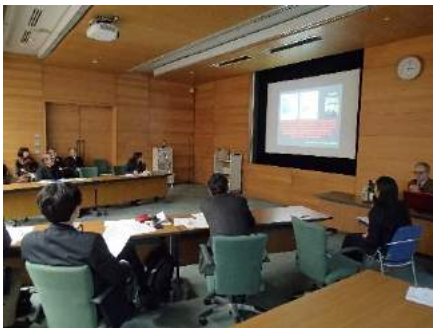
(3)A.「生誕 150 年　黒田清輝―日本近代絵画の巨匠」展の開催及び図録の刊行、B.「新海竹太郎資料一覧」の『美術研究』誌上公開、C.矢代幸雄／バーナード・ベレンソン往復書簡等のオンライン展示及び研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」の開催、D.「没後 70 年　三木宗策の世界　木彫の正統」展図録への文献目録掲載。

【年度実績概要】

(1)A.27 年 5 月 2 日に彫刻家畑正吉の遺族宅に伝わる写真原版の調査を行ない、11 月には同原板の寄贈を受けた。B.27 年 5 月 21 日に文京区大圓寺・台東区全生庵で、27 年 6 月 16 日に葛飾区西圓寺・江戸川区燈明寺で彫刻家三木宗策の作品及び文献調査を行なった。C.27 年 10 月 15 日に現代美術家の松澤宥作品・資料の調査を行なった。

(2)A.(1)A の調査により、明治 40 年代にパリへ留学していた畑正吉と安井曾太郎・藤川勇造ら美術家との交遊の様子が明らかになった。B.(1)B の調査に基づき三木宗策の文献目録を編纂、これまで顧みられることの少なかった作家の基礎情報を明らかにした。

(3)A.28 年 3 月 23 日より東京国立博物館との共催で「生誕 150 年　黒田清輝―日本近代絵画の巨匠」展を同館にて開催、同展の図録で黒田の画業に関するテキストおよび作品解説を掲載した。B.26 年度に当研究所へ寄贈となった新海竹太郎資料の一覧を田中修二氏（大分大学）と作成、『美術研究』416 号（27 年 8 月）に掲載した。C.美術史家矢代幸雄とその師であるバーナード・ベレンソンの往復書簡を、ハーバード大学ルネサンス研究センター及び越川倫明氏（東京藝術大学）と共同で 27 年 6 月 30 日よりウェブ上でオンライン展示、また 28 年 1 月 13 日に研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」を開催した（一部科研)。D.郡山市立美術館で 27 年 10 月 31 日から開催された「没後 70 年　三木宗策の世界　木彫の正統」展の図録に(2)B の文献目録を掲載した。



研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」の様子

【実績値】

論文発表　3 件（①～③)

学会発表　7 件（④～⑩)

【備考】

論文

①田中淳「展覧会評　歴史をつくる学芸員の眼」(『美術研究』417　28 年 1 月)

②山梨絵美子「黒田清輝の画業と遺産」(東京国立博物館『生誕 150 年　黒田清輝―日本近代絵画の巨匠』展図録　28 年 3 月)

③河合大介「研究ノート 赤瀬川原平と《山手線事件》―〈匿名性〉を手がかりとして―」(『美術研究』418　28 年 3 月)

発表

④塩谷純「近代歴史画の魅力」(井原市立田中美術館講演会　27 年 5 月 16 日)

⑤山梨絵美子「美術商林忠正―欧米と日本の異なる「美術」概念のはざまで」(ハイデルベルク大学東アジア美術研究所国際シンポジウム「日本美術史研究の現在―グローバルな視点から」　27 年 10 月 24 日)

⑥田中淳「住友春翠と近代美術　黒田清輝の支援者」(新居浜市美術館講演会　27 年 11 月 21 日)

⑦山梨絵美子「ベレンソンと矢代幸雄をつなぐ両洋の美術への視点」(研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」28 年 1 月 13 日)

⑧田中淳「近代日本美術の基層をめぐって―岸田劉生を中心に」(総合研究会　28 年 3 月 1 日)

⑨塩谷純「近代日本画を支えた人たち」(川越市立美術館講演会　28 年 3 月 21 日)

⑩山梨絵美子「黒田清輝の画業―美術で社会を変える試み」(東京国立博物館講演会　28 年 3 月 26 日)

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4113
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	S	A	A	A	A	A

判定理由
適時性、独創性：物故作家の調査を進める中で、松澤宥のような作品と資料が分かちがたく結びついた現代作家を対象として取り組むことは、今日の美術アーカイブのあり方に一考を促すものとして特に評価されよう。また多くの仏像制作を手がけた三木宗策のような、従来の近代彫刻史の文脈では捉え難い作家の営為を 27 年度は明らかにすることができたことは極めて高い成果である。
発展性、効率性：この中期計画で解読を進めてきた矢代幸雄とバーナード・ベレンソン間の往復書簡を、27 年度はウェブ上で公開することができた。書簡中に登場する人物にはリンクをはるなど、ウェブ公開の利点を生かした利便性の高いものとなっている。さらにその成果をふまえた研究会「美術史家矢代幸雄における西洋と東洋」も開催した。
継続性、正確性：当研究所の創設に寄与した洋画家ということで、昭和 5 年の開所以来、調査研究を続けてきた黒田清輝の大回顧展を開催、同展の図録にはその集大成となる論文や作品解説を掲載し、今後の黒田研究の基礎文献となるよう努めた。

２．定量的評価

観点	論文発表	学会発表				
評定	A	A				

判定理由
論文発表・学会発表：論文発表3件、学会発表7件と、いずれもこれまでの研究成果をすみやかに発表し、例年以上に内容・数量ともに充分な成果発表を実施することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田清輝、三木宗策ら近現代美術家および矢代幸雄ら美術史家・評論家の資料の調査を進め、展覧会やウェブサイト等で公開するなど定性的にも定量的にも目標以上の成果を達成した。 中期計画の目標達成に加え、27 年度は畑正吉資料や松澤宥資料の調査等、次の中期計画に繋がる新資料の調査に着手することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田清輝展の開催や新海竹太郎資料の整理公開、矢代幸雄書簡のウェブ公開等、この中期計画で手がけてきた研究の集大成を果たすことができた。次期中期計画においても、新海資料のデジタル化や矢代書簡の邦訳等、さらなるステップアップを図りたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4114

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究((1)－①－エ)

【事業概要】様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長　小林　公治

【スタッフ】山梨絵美子（部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（文化形成研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、橘川英規（研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、中野照男（客員研究員）

【主な成果】

(1)・真珠科学研究所と螺鈿器に使われている貝の客観的な識別方法開発を目的とした共同研究を開始した。
・研究所が所蔵するガラス乾板のデジタル化作業を引き続き実施するとともに、新たに企画情報部が所蔵する文化財撮影Ｘ線フィルムのデジタル化を行なった。
・『日本絵画史年紀資料集成十世紀―十四世紀』についてデータを拡充するとともに入力を実施した。
・柳澤孝氏から寄贈された南・西アジア画像資料の整理を進め、データベース化を行なった。
・サントリー美術館において、同館所蔵漆器類の調査を行った。
・東慶寺において、同寺所蔵漆器類の熟覧調査を実施した。
・この他、真珠科学研究所との研究協議・サンプル提供を実施した。

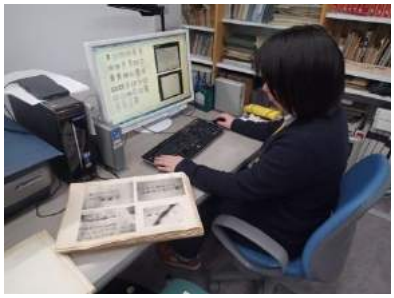
(2)・企画情報部 9 月研究会において、志村明氏・秋本賀子氏から、伝統的絹生産技術および伝世絵画に使われている画絹との関係について発表いただいた。
・サントリー美術館での調査・検討成果について、『美術研究』417 号誌上にて考察として報告した。
・先年来調査を行なってきた東京国立博物館蔵普賢菩薩像について、『美術研究』416 号に論文として成果公表した。
・26 年度調査、愛知県陶磁美術館で調査を行なった朝鮮製および中国製螺鈿漆器について編年的位置付けの検討を行ない報告した。

(3)・デジタル化したガラス乾板及びＸ線フィルムについては、文字データなどの確認・整理・補筆作業などを行い順次ウェブサイトにアップして公開した。

【年度実績概要】

(1)・ガラス乾板デジタル化作業では 27 年度内に 7,163 枚のガラス乾板、8,623 枚の X 線フィルムをデジタル化し、そのうちの 6,157 枚について新たに文字データ入力校正や整形加工を行った（28 年 3 月 16 日現在)。
・サントリー美術館が所蔵する桃山時代および江戸時代初期の螺鈿および漆器類、また東慶寺が所蔵する室町時代から江戸時代にかけての漆器類について詳細な実見調査を行い、文様表現や製作技術・材料などについての検討・意見交換を行なった。
・日本絵画史年紀資料について、862 件の記録についてデータ補完した上でデジタル入力を行ない、また文字資料について翻刻、検討を実施した

(2)・デジタル化できたガラス乾板・X 線画像のうち、種々の入力校正や画像加工が終了し、サーバーにアップしてウェブサイト公開を行った画像は 9,786 件となった（28 年 3 月 16 日現在)。



ガラス乾板文字情報調査・入力状況

【実績値】

発表件数　1 件(①)
論文掲載数　3 件(②～④)
調査件数　2 件

【備考】

① 志村明・秋本賀子「絹生産における在来技術について」(「第 5 回企画情報部研究会」　27 年 9 月 29 日)
② 小林達朗「東京国立博物館蔵国宝・普賢菩薩像の表現および平安仏画における「荘厳」」(『美術研究』416 号　27 年 8 月 10 日)
③ 小林公治「南蛮漆器書見台編年試論」(『美術研究』417 号　28 年 1 月 21 日)
④ 小林公治「15-17 世紀朝鮮螺鈿漆器編年および日本製螺鈿器との並行関係検討」(『鹿島美術研究年報』第 32 号別冊　27 年 11 月 15 日)

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4114
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：本プロジェクトは、美術品を中心とした有形文化財についての理解を促進させるため、多面的な視点から研究を進めようとするものである。27 年度はこれまで行なった調査や研究について論文として早急な成果公開を行なえた。また美術史分野ではこれまでほとんど知られていなかった分野についての報告と情報共有を行なうことができた。
独創性：本研究プロジェクトでは、美術史研究では比較的関心が低く、研究者も少ない工芸品研究についても目を向け様式論以外の視点による多角的研究を進めたり、代表的仏画について高解像度画像に裏付けられた独創的分析研究を実施することなどを行なえた。
発展性：27 年度実施し公表した研究事例とその成果は、他の作品などにも適用可能な汎用性を持つものであり、以後の高い研究発展性を持つ基礎的な研究であると評価することができる。
効率性：個別性が重視される美術作品研究においては効率性は時に矛盾する考え方であるが、データのデジタル入力を実施し、インターネットを通じた幅広い公開を行なうなど、データの活用に対してなどで効率性に配慮して進行している。
継続性：本プロジェクトの調査や研究は地道かつ継続的に実施されているものである。
正確性：学術的にきちんと裏付けされた論証可能なデータを用いて研究を進めるなど、正確性を重んじた客観性を持つ研究を進めている。

２．定量的評価

観点	発表件数	論文掲載数	調査件数			
評定	B	B	B			

判定理由
発表件数：27 年度は、機会をとらえてプロジェクトに即した研究成果の公表を行なうことができた。
論文掲載数：これまで調査検討を重ねてきた研究対象について、論文という形での成果公開を行なうことができた。
調査件数：少しずつではあるが、着実に各機関や寺社などでの調査を実施している。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については、真珠科学研究所とのこれまでにない斬新な共同研究の着手やこれまでの調査成果を論文発表するなど、着実な成果公表が行なえた。定量的評価についてはデータの公開などでまとまった件数の実績を上げることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画最終年度にあたる27年度は、これまで実施してきた調査について、ひとつの区切りとなる調査成果の検討結果をまとめた論文としての発表を行なうことができた。もちろん、これですべてが完結するわけではなく、28年度以降も新たな研究計画の下で、より大きな研究進展が得られるように努力したい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4121

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究（(1)－②））

【事業概要】

近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査を行い、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的性格・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は研究者等の研究に供する。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長　吉川　聡

【スタッフ】

小原嘉記（中京大学国際教養学部准教授、客員研究員）、渡辺晃宏（都城発掘調査部副部長）、馬場 基（都城発掘調査部主任研究員）、山本 崇（都城発掘調査部主任研究員）、桑田訓也（史料研究室研究員）、山本祥隆（史料研究室研究員）、中村一郎（写真室主任）、栗山雅夫（写真室技術職員）、鎌倉 綾（写真室技能補佐員）、飯田ゆりあ（写真室アソシエイトフェロー）

【主な成果】

東大寺が所蔵している興福寺僧の日記から、興福寺における神仏分離・廃仏毀釈の様相が明確となった。興福寺は奈良随一の大寺院だったが、神仏分離の際には大きな打撃を受けている。その詳細が判明したことは、奈良における文化財伝存状況や寺社の歴史、さらには現代日本における神仏関係の解明に寄与するはずである。また愛媛県横峰寺所蔵の蔵王権現関係資料の原本調査から、奈良県大峯山の信仰が、全国に伝播していく様相をうかがうことができた。

【年度実績概要】

・興福寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、二条家記録第 11 函～第 17 函・井坊家記録の調書を作成した。また、第 109 函等の写真を撮影した。
・仁和寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、御経蔵聖教第 64 函～第 74 函の調書原本校正・写真撮影を実施した。
・薬師寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第６函～第８函の目録校正、第 25 函の写真撮影を実施した。また、東京大学史料編纂所の公開研究会において報告を行った。
・唐招提寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、宝蔵・新宝蔵等に所在する資料の確認作業・整理作業を行い、宝蔵第２函～第３函を写真撮影した。
・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教の第 80 函～第 85 函の調査データ入力、第 56 函等の撮影等を行った。また、その中に見いだした興福寺僧の明治維新期の日記の調査成果により、興福寺における神仏分離の様相について論稿を公表した。
・上記の興福寺僧関係資料については、現在もご子孫の元にある個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して、調査を開始した。また、内山永久寺関係の、個人所蔵の資料について調査を実施した。
・愛媛県横峰寺が所蔵する資料について、原本調査の成果を公表した。また三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第５函～第６函、経典等の調書を作成し、仏像・神像等の写真撮影を実施した。
・調査協力の依頼を受けて、石山寺調査、文化庁依頼の仁和寺聖教調査等に協力した。

神仏分離の調査成果の論稿

【実績値】

刊行物・論文等数２件（①～②）

（参考値）調査資料点数

興福寺：調書作成資料点数 242 点、写真撮影資料点数 64 点
仁和寺：調書原本校正資料点数 472 点、写真撮影資料点数 476 点
薬師寺：調書原本校正資料点数 86 点、写真撮影資料点数 172 点
唐招提寺：調書原本校正資料点数 34 点、写真撮影資料点数 227 点
東大寺：調査データ入力資料点数 898 点、写真撮影資料点数 521 点
三仏寺：調書作成資料点数 625 点、写真撮影資料点数 7 点
奈良の旧家等：調書作成資料点数 209 点、写真撮影資料点数 26 点

【備考】

① 吉川聡「廃仏毀釈　発見された奈良・興福寺僧の日記」『月刊住職』第 498 号、2016.1
② 吉川聡「石鎚山の縁起からみた蔵王権現信仰」『奈良文化財研究所紀要 2015』2015.6

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4121
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	A	B

判定理由

適時性：近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、適時性が高い調査である。

独創性：横峰寺の調査成果については、文献に錯簡があることに初めて気づいた結果、釈読が可能となったものであり、独創性が認められる。

発展性：調査資料には、日本史を研究する上で重要な内容を持つものが多く含まれている。また 27 年度は特に、興福寺の神仏分離の状況を明確にすることができた。これは、その際に寺社のもとを離れた資料の追跡にも資するものであり、発展性がある。

効率性：資料の状況・緊急性等に合わせて、調書の取り方・撮影方法などを変えており、効率性を充分考慮している。

継続性：膨大な資料を、長年にわたって着実に中断なく、全容を把握する調査を実行している。このような調査は大学等の機関ではなしえない事業であり、継続性に極めて優れている。

正確性：調査資料の重要性に鑑みて、詳細・正確な調査を実施している。

２．定量的評価

観点	刊行物・論文等数					
評定	B					

判定理由

刊行物・論文等数：2件という目標の数を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	興福寺・仁和寺・薬師寺・唐招提寺・東大寺・三仏寺の調査を実施した。その調査の成果として、興福寺の神仏分離・廃仏毀釈の実像を明らかにすることができた。さらに、興福寺関連資料として、個人蔵資料の調査も開始し、また愛媛県横峰寺の所蔵資料から大峯山の信仰の伝播状況を推測するなど、近畿を中心とする古寺社関係資料の調査研究を、やや広い視点から実施することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。各寺院の調査は、予定通り実施できた。神仏分離関係の検討を行ったことにより、興福寺関係などの個人所蔵の資料も、調査の対象とすることができた。今次中期計画の５年間全体について振り返ると、目録・史料集・報告書の公刊や、データベース増補等を実現できた。以上から順調と判定した。今後も、現在蓄積しつつある寺社の調査データを、目録・史料集等の形で公表していく必要があるだろう。また、寺社所蔵資料の調査をいっそう進め、さらには、そこから流出した資料なども、積極的に調査する必要があるだろう。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4131

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究（(1)－③）

【事業概要】

我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証（調査研究）を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	建造物研究室長　林良彦

【スタッフ】

箱崎和久（遺構研究室長）、西山和宏（都城発掘調査部主任研究員）、海野　聡（遺構研究室研究員）、鈴木智大（遺構研究室研究員）、番　光（文化遺産部建造物研究室研究員）、西田紀子（企画展示室研究員）

【主な成果】

文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料「ガラス乾板」について画像のデジタルデータ化により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を「法隆寺金堂古材調査」を継続的に実施した。このほか、受託事業により、鳥取県若桜町の伝統的建造物群保存対策調査、山梨県富士吉田市の北口本宮冨士浅間神社社殿の詳細調査、秋田県横手市増田町の歴史的建造物の調査を行った。

・所内で保管している文化財建造物等の保存修理時の撮影ガラス乾板を整理して、約 600 枚の画像をデジタル化した（デジタル化は外注）。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。
・古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を 21 年～26 年度に引き続き実施した。27 年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査を行い、西院金堂の現地調査を終了し、図面の作成や補足調査を行った。なお、調査にあたっては、年代学研究室の協力を得た。
・鳥取県若桜町の伝統的建造物群保存対策調査、山梨県富士吉田市の北口本宮冨士浅間神社社殿の詳細調査、秋田県横手市増田町の伝統的建造物群保存地区に残る町家 2 件の詳細調査を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成等を行い、後者 2 件について報告書を刊行した。

北口本宮冨士浅間神社社殿調査

【実績値】

刊行図書数 3 冊（①）
学会等発表件数 3 件（②）、論文等数 6 件（③）
保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化 600 枚
古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査 10 回

【備考】

刊行図書
① 横手市教育委員会『横手市指定有形文化財　松浦千代松家住宅調査報告書』28.3
② 横手市教育委員会『登録有形文化財　佐藤又六家住宅調査報告書』28.3
③ 北口本宮冨士浅間神社『北口本宮冨士浅間神社建造物詳細調査報告書』28.3

学会等発表
②林良彦「伝統的建造物群保存地区における修理修景」文化庁伝統的建造物群保存地区関係者集会、27.7　ほか 2 件

論文等
③海野聡「古代建築のイメージの限界-描かれた古代建築の特質―」、『奈良文化財研究所紀要 2015』、27.6　ほか 5 件

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4131
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：鳥取県若桜町で行っている伝統的建造物群保存対策調査は自治体の文化財保存に対する協力で失われつつある日本の集落町並みを保存する上で緊急性が高い。
独創性：古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、法隆寺古材調査では「技術・技法」等の視点を加え、独創性のある研究内容といえる。
発展性：法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査行い、成果を資料化することは、古代建築研究の展開に大きく貢献するものである。
効率性：限られた人員に対し充分な成果を出している。
継続性：文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。
正確性：受託業務として行った増田町建造物調査や北口本宮冨士浅間神社の社殿調査においては、詳細かつ正確な調査にもとづいて、その価値を明確にすることで、近年文化庁で推進されている文化財の保存・活用によるまちづくり施策に、大きく貢献している。

２．定量的評価

観点	刊行図書数	論文等数	学会等発表件数	保管建造物関係資料整理	古代建築研究現地資料収集	
評定	B	B	B	B	B	

判定理由
刊行図書数：受託調査の報告書3冊を刊行できた。
論文等数：目標値の6件に達した。
学会等発表件数：目標の3件に達した。
保管建造物関係資料整理：建造物修理にともなう写真乾板600枚を修復デジタル化した。
古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査のうち、金堂分の現地調査について完了し、図化、整理を行った。
刊行図書数以下は特に目標値を挙げていないが十分に成果が認められるので、Ｂと判定した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施できた。 ・受託事業で、北口本宮冨士浅間神社、増田町の歴史的建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できる。 ・古代建築の研究「法隆寺古材調査」は継続して行っている基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考える。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は基礎的な作業であるが、これを継続させたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究である。法隆寺古材調査は膨大な作業量があるが 現場での作業を続けるとともに研究成果をまとめて公表して行く。受託各事業は自治体や所有者の求めに応じて行っているが、いずれも文化財建造物や伝統的建造物群の保存に大きく資するものである。これについても力を注ぎたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4141

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－1)

【事業概要】我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　飯島　満

【スタッフ】高桑いづみ(無形文化財研究室長)、菊池理予(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、星野厚子(東京藝術大学助手・客員研究員)、早川典子(保存修復科学センター主任研究員)

【主な成果】

(1) 能楽について、戦国時代の囃子や謡の旋律を調査し、成果を公表した。また、能楽で用いられた楽器を中心に調査を行い、成果を公表した。
(2) 染織技術を支える原材料や道具等について調査を行い、その成果を公表した。
(3) 無形文化遺産部が所蔵する音声資料の整理を行い、その成果を公表した。
(4) 上演機会が著しく減少している伝承芸能について実演記録を作成した。

【年度実績概要】

(1) 戦国時代の伝書を読み解き、当時の謡のリズムは江戸時代以降とは異なっていたこと、桃山時代の旋律はかなりの割合で当時のアクセントに従っていたことを解明した。成果は能楽学会大会、日本演劇学会秋の研究集会、無形文化遺産部公開学術講座などで公表した。絵画資料と芸能の関係についても考察し、楽劇学会大会で発表した。
(2) 染織技術のうち、埼玉県の熊谷染の事例を中心に、原材料や道具の入手・供給、道具のメンテナンスの状況等の調査を行い、報告書（付録：記録映像資料）にまとめた。また、伝統技術の伝承に関する研究会を東京文化財研究所で開催した。一方、染織技術と材料の関わりを検討するため、友禅染を例に天然材料と合成材料を比較する研究会を文化学園服飾博物館との共催で開催した。
(3) 義太夫節浄瑠璃の曲節の実演集（東京文化財研究所所蔵 LP 盤）について、収録内容を整理し公表した。
(4) 連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録 14 席を作成した。なお、神田松鯉師については時代物 1 演目の収録が完了し（27 年 9 月まで全 20 回）、新たな演題で記録する運びとなった。また、ほとんど上演されなくなっている落語の正本芝居噺について、林家正雀師による実演記録 2 席を作成した。

神田松鯉師による講談『柳沢昇進録』
28 年 1 月 26 日

【実績値】

学会等発表　6 件（①～⑥）／論文等発表　4 件（⑦～⑩）／報告書刊行　2 件（⑪⑫）／（参考値）記録作成　16 席

【備考】

①高桑いづみ「地拍子の古態―早歌からの継承―」能楽学会　27 年 6 月 21 日　早稲田大学
②高桑いづみ「楽劇研究と絵画資料」楽劇学会　27 年 6 月 28 日　国立能楽堂
③高桑いづみ「シンポジウム　能の復元的上演の可能性―「能」を現代に蘇らせる手法―」日本演劇学会 27 年 10 月 25 日 法政大学
④菊池理予「染織技術の伝承　その現状と課題―熊谷と京都を事例として―」無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会Ⅱ 27 年 11 月 11 日　東京文化財研究所
⑤高桑いづみ「明治以前の謡とアクセント」第 10 回無形文化遺産部公開学術講座 27 年 12 月 18 日　東京国立博物館平成館
⑥高桑いづみ「楽器行脚 20 年」東京文化財研究所総合研究会　28 年 1 月 12 日　東京文化財研究所
⑦菊池理予「復刻銘仙の製作と技術の伝承―分業のこれから―」『きものモダニズム』須坂クラシック美術館　27 年 9 月 26 日
⑧菊池理予「道具と技術の関わり―熊谷地域の染色工房を調査して―」『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書』東京文化財研究所　27 年 9 月 30 日
⑨高桑いづみ「室町時代のアクセントと謡のフシ」『無形文化遺産部研究報告』第 10 号　28 年 3 月 30 日
⑩飯島満『七代目豊沢広助　義太夫の種類と解説―無形文化遺産部プロジェクト報告―』東京文化財研究所　28 年 3 月 30 日
⑪『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書』東京文化財研究所　27 年 9 月 30 日
⑫『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会Ⅱ「染織技術の伝承と地域の関わり」報告書』東京文化財研究所 28 年 3 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4141
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	A	A	B	A		

判定理由
適時性・独創性：我が国の無形文化遺産には存続が危ぶまれているものが少なくない。26 年度から継続して調査を実施した熊谷染（埼玉県熊谷市）も、多くの染物工房が廃業を余儀なくされている。そうした状況下、染織技術のみならず、原材料・道具等にまで範囲を広げ調査することになったのだが、廃業後では実現不可能な事業であり、時宜にかなったものと評価できる。また『無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書』には、熊谷染の調査時に収録した記録映像が報告内容に対応する参考資料として添付されている。こうした報告書は工芸技術の分野ではほとんど類例のないものであり、独創性の観点からも高く評価できる。
発展性：能楽の音楽学的研究は長年の実績が学会でも高く評価されているが、室町時代の日本語アクセントと謡の相関性についての解明は、能楽の伝承実態を明らかにする上で重要な知見をもたらしたものと評価できる。
また、文化財保護委員会が作成した資料には、いまだにその存在が広く認知されていないものがある。当研究所が所蔵する義太夫節の解説レコードも、具体的な収録内容が十分に紹介されておらず、前回のプロジェクト報告書（23 年 3 月刊）で紹介できなかった部分（七代目豊沢広助による弾き語り）を整理・公開したが、昭和 30 年代に溯る演奏者による録音であり、基礎資料としての活用が期待できる。
継続性：無形文化遺産部では、これまで数多くの実演記録を作成してきたが、講談（一龍斎貞水師）の記録作成は 14 年度から現在に至るものであり（神田松鯉師は 21 年度より）、東京文化財研究所ならではの長期的な事業として評価できる。

２．定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表	報告書刊行			
評定	A	A	B			

判定理由
学会等発表・論文等発表：それぞれ6件と4件で例年に増して内容・数量ともに充実した発表を実施することができた。特に、所内外の学会及び研究会にて能楽の音楽学的研究は高い評価を受けており、室町時代の日本語アクセントと謡の相関性についての解明は、能楽の伝承実態を明らかにする上で重要な知見をもたらしたことは大きな成果となった。
報告書刊行　：27年度はプロジェクトに関わる報告書も刊行することができ、定量的に十分である。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	目標以上の成果を達成していると判断し、総合的評価をＡとした。28年度計画においても、我が国の無形文化遺産の保護に資する調査・資料収集・記録作成等を実施し、プロジェクトの一層の充実を目指したい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	無形文化財を中心に、我が国の無形文化遺産に関する調査研究を継続的かつ発展的に実施することができた。現状記録の必要な伝統芸能・伝統技術等についても、順調な記録作成の実施により、資料の蓄積も着実に行うことができた。以上により、所期の目的を達成することができた。 中期計画期間において、 能楽、染織技術等について継続的に調査を行い、成果を発表するとともに、講談等伝承芸能の実演記録も着実に蓄積することができた。以上の事により所期の目標を達成することができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4142

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究（(1)－④－2)

【事業概要】

我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産研究部長　飯島　満

【スタッフ】

久保田裕道（無形民俗文化財研究室長)、今石みぎわ（研究員)、齊藤裕嗣（國學院大學大学院兼任講師・客員研究員)、菊池健策（都留文科大学非常勤講師・客員研究員）

【主な成果】

民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行った。特に 27 年度は、これまで重点を置いてきた被災した民俗文化財の調査・記録に加え、「無形文化遺産の防災」の観点から現状調査や情報収集、関係者間のネットワーク形成を図った。

また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。27 年度は、災害を始めとする文化継承の危機にあたって、外部の力をいかに継承の力に変えていくかというテーマを取り上げ、関係者間の協議やネットワーク形成を図った。その成果は報告書にまとめ、関係者及び関係機関等に配布した。さらに、無形文化遺産情報ネットワーク協議会も開催し、震災後 5 年間の活動の課題の整理と今後の展望について関係者間での情報共有を行った。

【年度実績概要】

(1)無形民俗文化財に関する調査・資料収集

民俗芸能の調査として咲前神社太々神楽等について、民俗技術の調査として箕の製作技術や鵜飼漁の技術等について、伝承や保護の実態についての現地調査や資料収集を行い、現状を把握するとともに現地関係者とのネットワークを構築した。また継続テーマである「削りかけ」状祭具に関わる技術と風俗慣習の研究として、石川県や青森県において調査を行った。

(2)被災地域の無形文化遺産に関する調査・記録とアーカイブの構築

民俗芸能、風俗慣習の調査として東日本大震災被災地である浪江町の苅宿鹿舞、宮城県女川町の祭礼及び獅子舞等に関して調査を行い、資料収集・記録保存を行った。また国立研究開発法人 防災科学技術研究所と無形文化遺産アーカイブスの開発を行い、28 年 3 月には、全国版に先駆けて「311 復興支援 無形文化遺産アーカイブス」を公開した。収容する映像・画像資料等についても随時収集や寄贈受け入れ等を行い、整備を進めた。

(3)研究集会の開催

第 10 回無形民俗文化財研究協議会を 27 年 12 月 4 日「ひらかれる無形文化遺産―魅力の発信と外からの力」をテーマに東京文化財研究所において開催し、154 名の参加を得た。4 件の事例報告（松井今日子・五十嵐千江・柳沢拓哉・狩俣恵一）をもとにコメンテーター2 名(菊池健策・小岩秀太郎)を含めた総合討議を行った。成果は『第 10 回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。

また 28 年 3 月には第 4 回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を東京文化財研究所において開催。東北被災地域における無形文化遺産の復興支援に関わる様々な分野の関係者が参加し、課題の整理と今後の展望について協議した。

【実績値】

学会等発表　3 件（①～③）

論文等発表　3 件（④～⑥）

【備考】

発表件数

① 久保田裕道「神楽の歴史と鷺宮咲前神社太々神楽」鷺宮咲前神社太々神楽奉納二百年記念式典　27 年 10 月 24 日

② 今石みぎわ「生きた文化財を継承する―無形文化遺産と被災・復興」東北大学東京分室会議室　27 年 10 月 25 日

③ 今石みぎわ「小正月を彩るツクリモノの世界」第 6 回 儀礼文化講座　27 年 12 月 13 日

論文

④ 久保田裕道「神楽の歴史と鷺宮咲前神社太々神楽」他『鷺宮咲前神社と太々神楽二百年記念誌』27 年 10 月 24 日 鷺宮咲前神社太々神楽二百年記念事業実行委員会

⑤ 久保田裕道「3.11 以降の東北民俗芸能の状況と再評価」『岩手県民俗芸能北京公演プログラム』国際交流基金 27 年 10 月 17 日

⑥ 久保田裕道「無形文化遺産としての儀礼文化」『儀礼文化学会紀要』第２号　儀礼文化学会　28 年 3 月 31 日

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4142
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	S	A	A	A		

判定理由

適時性：継承の危機にある無形民俗文化財の調査研究、記録作成は極めて必要性、緊急性が高い。特に東日本大震災以降は、無形文化遺産が持つ地域コミュニティの紐帯としての機能が再認識されたことにより、被災地域に限らず、その活用に対する助言・提言が求められている。それに対して、文化財の記録保存に留まらない活用の在り方を模索し、提示したことは、社会的ニーズに合致したものとして高く評価できる。また、無形文化遺産アーカイブを開発・公開したことは、貴重な記録の保全・拡充・活用に資するのみならず、震災復興・文化財防災に貢献できる点において、適時性に照らしても極めて高く評価できる。

独創性・発展性・継続性：
国内唯一の無形民俗文化財の研究部として全国の関係者を集めて専門的観点から協議会を開催し、関係者のネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化の観点から見て、その独創性を十分に評価できる。さらに、無形文化遺産情報ネットワークを通じ、無形文化遺産の防災についての議論を深めたことは、独創性、発展性において十分に評価できる。

２．定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評定	A	A				

判定理由
学会等発表・論文等発表：発表件数、論文等掲載数ともに高く評価できる。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	五年間を通じて継続してきた被災地域における無形民俗文化財の調査・研究の成果は、過疎高齢化や少子化により継承が困難になっている全国の無形民俗文化財の保護に際しても活用できるものであり、社会的ニーズの高い課題に取り組むことができるなど、当初の計画以上の成果をあげることが出来た。さらに27年度は無形文化遺産の防災という新たな観点を取り入れることにより、より広い課題の共有と議論の深化を図ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。最終年度にあたり、中期計画の趣旨に沿って報告書を刊行した。重点的に行ってきた東日本大震災の被災地域における無形民俗文化財の調査・研究の成果を取りまとめることにより、全国の継承が困難な無形民俗文化財の保護や無形文化遺産の防災に対する提言となった。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4143

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集（(1)－④－３）

【事業概要】無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　飯島　満

【スタッフ】高桑いづみ（無形文化財研究室長）、久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、石村智（主任研究員）、菊池理予（研究員）、今石みぎわ（研究員）、二神葉子（企画情報部情報システム研究室長）

【主な成果】

韓国国立無形遺産院との交流事業において、23 年度に調印した合意書（当時の韓国側の組織名は韓国国立文化財研究所）に基づき、研究員の受け入れを内容とする研究交流を計画通り実施した。また関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し、海外研究者への助言や調査協力を通して、無形文化遺産分野における国際的情報収集及び情報提供・発信を行った。

またユネスコ無形文化遺産条約をめぐる国際的な動向を把握し、我が国の無形文化遺産の保護に活用するため、ユネスコ無形文化遺産条約第 10 回政府間委員会に参加し、情報収集を行った。

【年度実績概要】

(1)韓国との交流事業では、23 年度に調印した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流合意書」に基づき、韓国国立無形遺産院から、調査研究記録課の方劭蓮学芸研究士を 27 年 6 月 1 日～22 日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流及び共同調査を実施した。また、27 年度で第 2 期が終了するのを受け、28 年度の成果報告会及び 28 年度以降の事業の継続について話し合いの場を設けた。

(2)またユネスコ無形文化遺産条約第 10 回政府間委員会（開催国ナミビア：27 年 11 月 30 日～12 月 4 日）に参加し、ユネスコ無形文化遺産条約に関する情報収集をおこなった。その成果は『無形文化遺産研究報告』第 10 号において「無形文化遺産の保護に関する第 10 回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」として報告した。さらに、近年のユネスコ無形文化遺産条約の運用の動向を分析するための研究会「ユネスコ無形文化遺産条約をめぐる近年の動向」を 28 年 2 月 18 日に東京文化財研究所において開催した。

ナミビア初の無形文化遺産の代表リスト登録が決まり、喜びにわく会場内の様子（ユネスコ無形文化遺産条第10回政府間委員会　於：ナミビア・ウイントフック）

【実績値】

学会等発表　1 件

論文等発表　1 件

【備考】

二神葉子「ユネスコ無形文化遺産条約をめぐる近年の動向」28 年 2 月 18 日　東京文化財研究所

二神葉子「無形文化遺産の保護に関する第 10 回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』第 10 号　東京文化財研究所　28 年 3 月 30 日

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4143
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
評定	B	B	B			

判定理由
適時性：韓国は現在、無形文化遺産に係る保護政策を国内的にも国際的にも促進しており、その中心機関である韓国国立無形遺産院との研究交流は、同国の状況をリアルタイムで把握することができる絶好の機会である。
発展性・継続性：第２期５年目を迎えた韓国との研究交流事業は、相手方の改組後も滞りなく継続されている。第２期が27年度で終了するのを受け、今後の事業継続について話し合いの場を持つなど、緊密な関係を継続している。またユネスコ無形文化遺産条約政府間委員会については、毎年スタッフを派遣しており、継続的に情報収集を行っている。

２．定量的評価

観点	学会等発表	論文等発表				
評定	B	B				

判定理由
27年度は主にユネスコ無形文化遺産条約に係る研究会および論文発表を実施したが、当初予定した回数を達成したと考える。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国との交流に関しては、相手方の改組後も、研究員の派遣交流が実施できるなど当初の計画通りであった。国際会議等での情報収集も、効率的に実施することができた。ユネスコ無形文化遺産条約政府間委員会における情報収集については継続的に実施しつつ、その情報の分析を進め、その成果の発信・活用に努めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	韓国国立無形遺産院との研究交流は順調であり、国際会議等における情報収集も、当初の計画通りに実施している。ユネスコ無形文化遺産条約政府間委員会における情報収集については継続的に実施し、その成果をこれまで十分に蓄積しており、中期計画の目標を十分達成していると考える。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4151

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備）（(1)－⑤－ア）

【事業概要】

遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料収集・調査・整理等を行い、遺跡等の保存・整備・活用に関する一体的な研究を推進し、適切な管理・整備等に資する。また、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行う。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　内田和伸

【スタッフ】

高橋知奈津（研究員）、前川歩（研究員）、中島義晴（主任研究員）、小野健吉（副所長）

【主な成果】

「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」をテーマに「平成 27 年度　遺跡整備・活用研究集会」を開催し、遺跡の活用においてデジタルコンテンツを用いている自治体やコンテンツ制作会社等から情報収集を行うとともに、最先端の研究、代表的な事例に関する発表および総合討議からなる研究集会を開催した。26 年度の成果については、『平成 26 年度遺跡整備・活用研究集会報告書　史跡等の整備・活用の長期的な展開』を刊行・配布するなど、その普及等を行った。また、福岡県や中国の西安・洛陽から担当者を招き、「遺跡整備事例研究会」を行った。

【年度実績概要】

・国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動として遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を３回実施した。
　①中国現地調査　内田・中島　唐長安城跡大明宮跡（西安市）・隋唐洛陽城跡（洛陽市）・殷墟跡（南陽市）他
　②韓国慶州調査　内田　月城跡・月精橋跡復元橋・チョクセム遺跡発掘館他（慶州市）
　　上記の調査成果概要を内田が「近年の隣国古都の遺跡整備」として研究所内の研究会で報告。
　③三重県内現地調査　内田・高橋　上野城跡と旧崇広堂（上野市）・宝塚古墳（松阪市）・斎宮跡（明和町）
・27年12月18日（金）に、「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」を主題とし、27年度遺跡整備・活用研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した。参加者117人（発表者・関係者除外）。
・26 年度の遺跡整備・活用研究集会開催後、の成果について検討を加え、奈良文化財研究所紀要 2015」に報告するとともに、報告書『平成 26 年度遺跡整備・活用研究集会報告書　史跡等の整備・活用の長期的な展開』を編集・刊行した。
・遺跡整備事例研究会を２回開催した。
　①中国西安・洛陽の発掘調査と整備について担当者に報告してもらう研究会を28年3月2・3日に開催した。
　発表内容は「長安城大明宮跡の発掘調査成果」「長安城大明宮跡の整備」「洛陽城跡の発掘調査成果」「洛陽城跡の整備」であった。
　②福岡県内の最新の遺跡整備の現状について福岡県の担当者に報告してもらう研究会を 27 年 12 月 17 日に開催した。
　発表内容は「福岡県内の遺跡整備の現状について」であった。

研究集会でのデモの様子

【実績値】

1. 研究集会開催数　3 回　備考①
2. 刊行図書数　1 件　備考②
3. 論文等数　7 件　備考③

【備考】

①研究集会

遺跡整備・活用研究集会「デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用」　27.12.18(参加者数： 117 名)
遺跡整備事例研究会「福岡県内の遺跡整備状況」27.12.17(参加者数：4 名)
遺跡整備事例研究会「西安・洛陽の発掘調査と整備」28.3.2・3(参加者数：15 名)

②刊行図書

『史跡等の整備・活用の長期的な展開』平成 26 年度遺跡整備・活用研究集会報告書報告書　27.12

③論文等

内田和伸「平城宮跡の保存および活用」『慶州月城と世界文化遺産の調査と研究』韓国国立慶州文化財研究所 27.11
内田和伸「史跡名勝天然記念物の保護の仕組み」『全史協 50 年のあゆみ』全国史跡整備市町村協議会 27.10
内田和伸「平城宮東院庭園での活用プログラム「庭の宴」」『遺跡学研究』第 12 号日本遺跡学会 27.11
内田和伸「大明宮・洛陽宮跡の遺跡整備現況調査」『奈文研ニュース』奈良文化財研究所 27.12
中島義晴「史跡等の整備・活用の長期的な展開」『奈良文化財研究所紀要 2015』奈良文化財研究所 27. 6
中島義晴「総括 史跡等の整備・活用の長期的な展開について」『平成 26 年度遺跡整備・活用研究集会報告書』奈良文化財研究所 27.12
高橋知奈津「遺跡におけるデジタルコンテンツの活用」『奈文研ニュース』奈良文化財研究所 28.3

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4151
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	B	B	B

判定理由
適時性：デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用に関する研究集会は、ここ2･3年で急速に普及してきているＡＲ（ＣＧを用いた拡張現実）等による遺跡に関する復元景観などの展示技術と課題を扱ったものであり、時宜を得たものと言える。
独創性：デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用に関する研究集会は、これまでに無く独創的なものと言える。
発展性：27年度の研究集会は、ＡＲ技術は日進月歩で進化しており、導入自治体も増えている。さらに継続して新しい技術やそれを用いた遺跡の管理手法等に関して情報の収集・発信を続ける必要性がある。
効率性：研究集会の開催、報告書の刊行等をスケジュール通りに進めることができ、事業を効率的に実施できた。
継続性：遺跡の保存・活用に関する基礎的・応用的な検討を基礎としながら、研究集会の開催等を通じ、遺跡整備について継続的に検討を進めている。
正確性：研究集会での配付資料および昨年度の研究集会報告書の作成にあたり、必要な調査・検討を行い、正確な情報が提供できた。

２．定量的評価

観点	研究集会開催回数	刊行図書数	論文等数			
評定	A	B	A			

判定理由
研究集会開催回数：回数での目標はなかったが、必要に応じて研究集会を3回開催できた。
刊行図書数：計画通り、1冊刊行できた。
論文等数：目標以上の十分な成果が認められる。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り堅調に事業を実施した。特に、ＡＲ技術など近年急速に普及しはじめている、デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用に関する研究集会については、事前に全国の自治体にアンケート調査を行い、先行事例やシステム開発中の事例を把握した上で研究集会を開催した。参加者に議題となる技術内容を実感してもらえるようにタブレット端末や最新のヘッドマウントディスプレイなどを使った体験デモも行った。これらの工夫により研究会ではシステム普及の現状や最新技術の情報、課題等を容易に共有することができた。研究会後も資料や情報提供に関する依頼も多く、これからシステム開発しようとしている自治体も多数あり、極めて時宜を得た研究会であったと評価できる。日進月歩の技術であるため、数年後にも同様の研究集会が必要と考えられる。また、過年度研究集会の報告書を刊行し、遺跡の整備に関する論文等も多数発表して、調査・研究の成果は顕著であった。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画においては、「国際的動向の観点」からも遺跡の活用に関する調査研究を行うことになっているが、特に27年度は、平城宮跡等とも関係の深い、中国の長安・洛陽の宮殿跡、韓国の慶州の宮殿跡について現地調査を行うとともに、中国側担当者の招聘により現地の詳しい情報の収集・共有ができ、近年その数を増している中国の国家考古遺跡公園は文化庁認定の日本遺産と同様に称号であること等がわかった。今後も引き続き情報収集をおこない、国際的動向を意識しながらも国内の遺跡の保存活用を「地域振興」へも寄与できるようにするための研究が必要である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4152

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査および研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（庭園）（(1)－⑤－イ）

【事業概要】

庭園史に関する文献調査等の基礎的資料の収集・研究を進め、成果を公表する。また現存庭園に関する国内外での現地調査を行い、その保護に資する研究をおこなう。併せて、文化財庭園に関わる所蔵資料の整理・研究を進める。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　内田和伸

【スタッフ】

中島義晴（文化遺産部主任研究員）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）、小野健吉（副所長）、エドワーズ・ウォルター（中国科学院心理学研究所、客員研究員）、マレス・E・ベルナール（総合地球環境学研究所、客員研究員）

【主な成果】

23 年度から 26 年度に実施してきた「庭園の歴史に関する研究会」のまとめとして、研究論集『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』を出版した。本論集は、中世庭園に関して総合的かつ学際的な研究対象として扱ったもので、中世庭園史研究の進展に大いに寄与する内容とすることができた。

また、奈良市における庭園の悉皆的調査では、民家・寺院の庭園の現地調査を行い、奈良市内に現存する庭園の現状・意匠的特徴等を把握することができた。

【年度実績概要】

・学報『鎌倉・室町時代庭園の研究』の刊行

23 年度から 26 年度までに、当研究室では中世庭園の研究をテーマに、「庭園の歴史に関する研究会」を実施してきた。本研究会は、所内外の庭園史・建築史・文献史・絵画史等の研究者とともに、分野横断的に庭園について議論を行うことを目的としたもので、年度ごとに「鎌倉時代の庭園」「禅宗寺院の庭園」「室町時代の将軍の庭園」「戦国時代の城館の庭園」をテーマに研究報告及び討議をおこなってきた。27 年度は、これらの研究会の成果のまとめとして、研究会参加者 14 名に論文執筆を依頼し、とりまとめたものである。また巻末には中世庭園に関する資料を付した。中世庭園について、総合的・学際的な視点から編集された論文集は、これまでに無いもので、中世庭園史研究の進展に資する成果をあげることができた。

・連携研究：奈良市における庭園の悉皆的調査

奈良市と連携研究協定を結び、奈良市における庭園の悉皆的調査に取り組み、民家庭園 12 件、寺院庭園 10 件について、現地調査を終了した。また、報告書作成に向けて、周辺資料の収集、調査成果のとりまとめを開始した。

・発掘庭園データベース更新に向けた事例収集を実施した。

・森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、国内外の庭園・遺跡を撮影したスライドを分類し、注記整理を進めた。また資料目録のデジタル化を進めた。

奈良市における庭園調査の様子（N 家住宅庭園）

【実績値】

報告書等刊行件数：2 件（①～②）

論文等数：４件（④⑤⑥）

【備考】

刊行図書

① 学報第 96 冊　研究論集『鎌倉・室町時代の庭園の研究』奈良文化財研究所 2016.3

② 小野健吉『日本庭園の歴史と文化』吉川弘文館 2015.9.29

論文等

③ 高橋知奈津「戦国時代の城館の庭園」『奈良文化財研究所紀要 2015』奈良文化財研究所 2015.6

④ 小野健吉「中世庭園史の概観と研究の現状」『鎌倉・室町時代庭園の研究』奈良文化財研究所 2016.3

⑤ 中島義晴「中世日本における境致の概念および庭園との関連」『鎌倉・室町時代庭園の研究』奈良文化財研究所 2016.3

内田和伸「平城宮東院庭園での活用プログラム「庭の宴」」『遺跡学研究』第 12 号日本遺跡学会 2015.11

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4152
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由

適時性：学報『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』をとりまとめ、近年発掘調査によって新たな検出が相次ぎ、研究の進展が期待される中世の庭園について、論文集として刊行することができた。

独創性：学報『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』は、庭園史学のみならず、建築史学、美術史学、文献史学、考古学の多分野の研究者とともに取り組んで成果をまとめ、これまでにない学際性の高い論集とすることができた。

発展性：学報『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』の刊行は、従来研究の進んでいない中世の庭園に関する総合的な論集で、中世庭園史の研究の進展に大いに資するものである。これらの研究の進展により、埋蔵文化財発掘調査に基づく考古学的研究の発展も期待できる。

効率性：報告書の刊行時期を踏まえ、庭園の現地調査等の日程を計画的に調整し、年度内での報告書の刊行を含め、スケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。

継続性：今期中期計画で継続的に取り組んでいる中世の庭園の歴史に関する研究について、最終年度に学報を刊行することができた。また、資料収集やデータの改訂に向けた作業等、前年度から行ってきた事業を着実に進めることができた。

正確性：発掘庭園に関する正確な情報提供のため、新たな事例収集・更新内容の検討を実施することができた。

２．定量的評価

観点	報告書等刊行件数	論文等数				
評定	B	B				

判定理由

報告書等刊行件数：計画通り、報告書を１冊刊行した。
論文等数：上記、刊行物にスタッフの2本の論文を掲載することができたことをはじめ、十分な成果が認められる。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施した。特に、中期計画の最終年度として、これまで継続的に取り組んできた「庭園の歴史に関する研究会」の成果として、学報『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』を刊行できたことは、中世庭園史及び考古学的研究の発展に大いに寄与するもので、意義があった。また、現存する庭園の調査や、庭園に関する基礎的資料の収集・整理も着実に進めることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中世の庭園史に関する文献調査、庭園の現地調査、庭園に関する基礎的資料の収集・整理について、着実に進め、最終年度として学報『中世庭園の研究－鎌倉・室町時代－』を刊行することができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4153
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(国際研究交流)((1)－⑤－ウ)

【事業概要】
不動産文化財等に関連する各種研究成果について、米国コロンビア大学との研究交流のもとに成果発表を行う。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長　内田和伸

【スタッフ】
小野健吉（副所長）、杉山洋（企画調整部長）、中島義晴（文化遺産部景観研究室 主任研究員）、佐藤由似（企画調整部国際遺跡研究室 研究補佐員）

【主な成果】
平成 23 年度から米国・コロンビア大学において奈良文化財研究所職員が行った研究発表について、英文の論文集としてまとめ、刊行した。

【年度実績概要】
・平成 23 年度から米国・コロンビア大学において奈良文化財研究所の９名の職員が行った研究発表について、英文の論文集『Lectures from the International Research Exchange between Nara National Research Institute for Cultural Properties and Columbia University, 2011-2015』としてまとめ、刊行した。

・収録論文

ONO Kenkichi　The Garden of Fujiwara no Toshimori's Estate Depicted in *Kasuga gongen genki e*

SHIMIZU Shigeatsu　Authenticity and the Dismantling-and-Repair Method of Architectural Restoration in Japan

ISHIMURA Tomo　Memories of a Sacred Landscape: Lost Female Rituals and the Surviving Cultural Landscape in the Amami Islands of Japan

HIRASAWA Tsuyoshi　Protection of Cultural Properties in Japan, and the Policy for "Places of Scenic Beauty"
Basic Study on the Preservation of Openly Exhibited Soil

WAKIYA Soichiro　Structural Remains: Analysis of Soil Moisture Changes at the Miyahata Site

UNNO Satoshi　Maintaining Japan's Important Cultural Buildings: Using Both Larger Diameter and Long Logs in the Conservation and Construction of Japanese Wooden Architecture

KIKUCHI Yoshito　*Matsuri* in Japan's Historic Districts: Using Traditional Festivals as a Driver in Local Communities

SEINO Takayuki　In Search of Desirable Management of Historic Parks: From Past to Present to Future

HOSHINO Yasuharu　A Review of the Application of

27 年度刊行した論文集

【実績値】刊行図書数：1 冊

【備考】

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4153
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：中期計画の最終年度のとりまとめとして、論文集を刊行することができた。

独創性：不動産文化財に関する研究成果について英語の論文集としてまとめ、刊行した。

発展性：日本における調査研究の成果について、外国においても共通するテーマを扱い英文で表記した。

効率性：コロンビア大学の関係者の来日に合わせて、日本でも打合せを行った。

継続性：平成 23 年からの研究交流を着実に進めた。

正確性：論文は、自ら行っている研究の成果を主題としており正確な情報に基づくものである。

２．定量的評価

観点	刊行図書数					
評定	B					

判定理由
刊行図書数：計画通り、論文集を刊行することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画通り事業を実施し、不動産文化財等に関する研究成果を論文集としてまとめ、奈良文化財研究所で実施している調査研究の成果について情報発信を行うことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	米国･コロンビア大学との研究交流のもとに不動産文化財等に関連する研究成果の発表を昨年度まで行ってきた。27 年度はこれらのとりまとめとして、論文集を刊行することができた。併せて、28 年度以降の研究交流事業の方向性等を確認できた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-1

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城京右京一条二坊四坪・一条南大路・西一坊大路の発掘調査（(1)－⑥－ア）

【事業概要】

古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施する。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長　渡辺　晃宏

【スタッフ】

馬場基、神野恵、林正憲（以上、都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、丹羽崇史（以上、考古第二研究室研究員）、石田由起子、川畑純（以上、考古第三研究室研究員）、桑田訓也（史料研究室研究員）、海野聡（遺構研究室研究員）、大橋正浩（同アソシエイトフェロー）、高妻洋成（埋蔵文化財センター保存・修復科学研究室長）、脇谷草一郎、田村朋美（以上、同研究員）、小池伸彦（同遺跡・調査技術研究室長）、村田泰輔（同アソシエイトフェロー）、中村一郎（企画調整部写真室主任）、栗山雅夫（同技術職員）、鎌倉綾（同技能補佐員）

【主な成果】

・平城京右京一条二坊四坪・一条南大路・西一坊大路の発掘調査を実施し、多大な成果を挙げた。
　奈良時代の西一坊大路西側溝、一条南大路北側溝を検出し、その変遷過程を明らかにした。
　奈良時代後半の平城京右京北部域の再開発に関連する一条南大路の大規模改修工事の実態を明らかにした。
　平城京廃都後の土地利用のあり方を明らかにした。

【年度実績概要】

発掘調査面積は 1089 ㎡。調査期間は 27 年 4 月 6 日～6 月 17 日、10 月 19 日～10 月 30 日。

・基本層序

調査区北部では暗褐色粘土の地山上に暗灰色粘質土、灰褐色粘質土、旧耕土・床土と旧庁舎の造成土が堆積する。調査区南部では、褐色粘土または灰色細砂の地山上に灰褐色粘質土、旧耕土・床土、旧庁舎の造成土が堆積する。

・主な検出遺構

奈良時代の遺構として、西一坊大路西側溝と一条南大路北側溝を検出した。西側溝は新旧２時期とこれを迂回させたとみられる溝があり、北側溝は３時期の変遷がある。また平安時代の掘立柱建物群と廃棄土坑を検出し、中世の井戸・落ち込みを検出した。坪内では性格不明の井戸状遺構を検出した。

・主な出土遺物

土器、瓦（緑釉瓦片含む）、木器、金属器、金属製品、石製品、自然遺物等がある。

調査区全景（南から）

・調査所見

西一坊大路西側溝および一条南大路北側溝の変遷から、当初掘削された条坊側溝において元来の軟弱地盤であることに起因する溝肩の崩壊が起こり、これらの対策として、迂回溝を伴う大規模な改修・再整備工事がおこなわれていたことが明らかになった。改修の時期は奈良時代後半にあたり、西大寺の造営を始めとする平城京右京北部域の活発な再開発と関連するものとみられ、注目される成果である。

また、平安時代後期の掘立柱建物群は４時期以上の変遷があり、大規模な四面廂建物も存在することから、当該期の富豪層の居宅の可能性もあり、平城京廃都後の土地利用の変遷を解明するうえで重要な手がかりを得た。

【実績値】

論文等数：1 件（①）

（参考値）

出土遺物：瓦片 74 箱（うち軒丸瓦 9 点、軒平瓦 11 点、緑釉瓦 2 点）、土器片 36 箱、木製品 5 点、金属製品 11 点（鉄釘・鉄滓等）、石製品（砥石）4 点、種子・骨・木炭等

記録作成数：実測図 57 枚（A2 判）、遺構写真 54 枚（4×5）、デジタル写真約 1,000 枚

【備考】

①小田裕樹「平城京右京一条二坊四坪・一条南大路・西一坊大路の発掘調査　平城第 546 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』28 年 6 月（予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-1
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	A	A	B	B

判定理由
適時性：大規模工事という機会を捉え広範囲に及ぶ発掘調査を実施し、26 年度の第 530 次調査と併せて大規模な都城遺構を調査して、多くの成果を得ることができた。
独創性：考古学のみならず、文献史・建築史からの分析や、堆積学や木材分析などを含む多様な自然科学的分析など、学際的な検討・調査をおこない、多くの成果を上げることができた。
発展性：明らかになった条坊遺構の変遷過程は、西大寺の造営など奈良時代後半における平城京右京北部域の再開発という歴史的画期に対応するもので、今後周辺域での調査においても留意すべき重要な視点を得ることができた。
効率性：重機の有効活用や調査員・作業員の効果的な配置によって、迅速かつ効率的に調査を遂行できた。
継続性：平城京内の詳細で正確な条坊データの蓄積に寄与することができた。今後の周辺域での調査においても重要な指標となると考える。
正確性：調査員間での十分な意思疎通と、部内・所内検討会を開催することにより、正確な調査を実施することができた。

２．定量的評価

観点	論文等数					
評定	B					

判定理由
論文数：目標値の１件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	・平城京条坊遺構の詳細な情報を取得し、奈良時代史上の歴史的画期である平城京右京北部域の開発との関連性を見いだせる新知見を得た。 ・今後周辺域での調査における重要な視点を提示できた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間において、古代都城の解明に資する、重要で多大な成果を得て、調査成果を積み重ね研究を推進し、所期の目標を達成することができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-2

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮第一次大極殿院内庭部の発掘調査　（(1)－⑥－ア）

【事業概要】

古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施する。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長　渡辺　晃宏

【スタッフ】

芝康次郎（考古第一研究室研究員）、大谷育恵（同アソシエイトフェロー）小池伸彦（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長）、村田泰輔（同アソシエイトフェロー）、中村一郎（企画調整部写真室主任）、鎌倉綾（同研究補佐員）

【主な成果】

・第一次大極殿院内庭部の発掘調査を行い、重要な知見を得た

調査は第一次大極殿の正面（東区）と内庭部西より（西区）で行った。

東区では奈良時代前半の幢旗遺構の有無の確認を目的とし、調査区内にはその痕跡がないことを確認した。

西区では第一次大極殿内庭部の東西に存在するとされる井戸の有無および時期の確認を目的とした。調査の結果、奈良時代前半の大土坑を検出し、遺構の正確は未確定ながら一時的な構造物であることを明らかにした。

【年度実績概要】

発掘調査面積は 328 ㎡。調査期間は 27 年 7 月 1 日～10 月 2 日。

・基本層序

東区、西区とも現地表面（H=73.0～3m）下には厚い整備盛土があり、その下位に旧表土、水田耕作土、床土、礫混じり褐色土（上層礫敷、下層礫敷）、橙色粘質土、暗褐土などの造成土、明黄褐色ないし黄褐色粘土（地山）とつづく。東区では、礫敷下位の造成土が 10～20 ㎝であるのに対して、西区では、その西端で約 60 ㎝となり、第一次大極殿の中軸から外側に向かって厚い。上層礫敷面の標高は、東区北端で 70.4m、南端で 70.2m、西区北端で 70.1m、南端で 69.7mであり、東西方向は概ねフラットだが、南北方向は北から南に向かって緩やかに標高を下げる。

・主な検出遺構

東区　柱穴２基を確認した。柱穴は奈良時代後半のもので、掘方は一辺 0.8～1.0mの方形で深さ 40 ㎝。両者は規模や埋土から別の建物遺構に由来すると考えられる。

西区　奈良時代前半の大土坑１基、奈良時代後半以降の東西溝１条を検出した。大土坑は一辺 2.7m四方の正方形で、深さ約２m。東西溝は幅 1.1～1.3m、深さ約 20 ㎝の素掘溝。

西区大土坑検出状況（南西から）

・主な出土遺物

西区の大土坑では、底に堆積する埋土から、木簡（おもに削片）を含む木製品（燃えさし・檜皮）が出土した。

・調査所見

東区　検出遺構は上層礫敷を切りこむ柱穴２基であり、下層礫敷を切り込む奈良時代前半の遺構は確認できなかった。したがって、少なくともこの調査区付近には東西一列に並ぶタイプの幢旗遺構は存在しないと考えられる。

西区　上層礫敷面の遺構は東西溝１条である。東西溝はその位置関係および埋土の出土遺物から平安時代初頭に位置付けられる。上層礫敷下位から検出した大土坑は、井戸枠が存在せず、抜取穴も確認できないことから、井戸と断定することはできない。ただし、東方の SE7145 とは第一次大極殿院の中軸を挟んで対称の位置に存在することや、規模や埋土の類似から、両者は関連をもつ一時的な構造物であった可能性が高い。

【実績値】

論文等数：1 件（①）

（参考値）

出土遺物：瓦片３箱（うち軒丸瓦１点）、土器片２箱、木製品３箱（燃えさし・削片等）、木簡 83 点

記録作成数：実測図 16 枚（A2 判）、遺構写真 22 枚（4×5）、デジタル写真約 340 枚

【備考】

①芝康次郎「平城宮第一次大極殿院内庭部の発掘調査　平城第 551 次」『奈良文化財研究所紀要　2016』28 年 6 月（予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-2
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：第一次大極殿院整備にも資する重要な所見を、整備計画策定に先立つ時期に得ることが出来た。
独創性：積み重ねられた既往の調査成果を精緻に分析して課題を明確に絞り込み、さらに正確な測量によって課題解決に向けた調査計画を策定して調査に望むことができた。
発展性：第一次大極殿院の成立過程に関する新たな見通しを得て、既存の研究成果の再整理への影響も含めて、今後の研究への指針となる成果をえることができた。
効率性：当該地区を利用する各種イベントとの競合を回避しつつ、効率よく調査を行うことができた。
継続性：第一次大極殿院地区の学術的解明作業を、従来の成果の上に積み上げ、新たな知見を得ることが出来た。
正確性：遺構の検出面の詳細な検討を意識した調査の運営などによって、正確な遺構の把握を行うことができた。

２．定量的評価

観点	論文等数					
評定	B					

判定理由
論文数：目標値の１件を達成した

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・学術的にも、また遺跡整備の観点からも重要かつ正確な成果を得ることができた。 ・イベント開催とも調整を行い、遺跡の活用という観点からも適切な対応が出来た。 ・論文数は目標値を達成した。 今回の成果を踏まえ、次年度以降も平城宮・京の解明に向けて研究や調査を計画したい。 なお、平城宮内では各種イベントが盛んに行われるようになっており、これらのスケジュール等との調整をより一層綿密にする必要がある。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・計画通り調査が進み、成果を確実に挙げている。 以上より、中期計画の所期の目標を達成している。 28 年度以降もこうした成果を踏まえ、また継続的に調査研究を進めていきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-3

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東大寺東塔院跡の発掘調査（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】古代都城の解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長　渡辺　晃宏

【スタッフ】

箱崎和久・山本祥隆・石田由紀子・浦蓉子・大谷育恵・小田裕樹・芝康次郎・丹羽崇史・神野恵・鈴木智大・大橋正浩（以上、都城発掘調査部）、中村一郎・栗山雅夫・飯田ゆりあ・高田祐一（以上、企画調整部）、脇谷草一郎（埋蔵文化財センター）、南部裕樹（東大寺）、廣岡孝信（奈良県立橿原考古学研究所）、

【主な成果】

・東大寺東塔院跡の発掘調査を行い多大な成果を挙げた。

鎌倉時代再建時の塔基壇や、基壇下裾部の石敷き舗装などを確認した。それにより、塔基壇が奈良時代創建時より一回り大きく造り替えられていたことが判明し、また塔本体の柱配置などに関する情報を得た。

奈良時代創建時の塔基壇の一部が鎌倉時代再建時の塔基壇の中に良好な状態で遺存していることを確認した。

鎌倉時代再建時の回廊の位置をほぼ特定した。

【年度実績概要】

発掘調査面積は 720 ㎡。調査期間は 27 年 7 月 21 日～12 月 15 日。

・基本層序塔及び回廊の基壇上は、表土及び近世以降の堆積層（平均約 20cm）の直下に基壇土が確認される。塔基壇土は主に鎌倉時代再建時の盛土で、基壇縁辺近くでは奈良時代創建時の盛土も遺存する。回廊基壇には地山削り出しの部分も存する。基壇下裾部は、表土下に瓦片を多量に含む近現代の土壌が厚く堆積し、それと地山との間に鎌倉時代または奈良時代の整地土が遺存する。

・主な検出遺構

鎌倉時代：塔基壇の縁辺部で凝灰岩製の基壇外装（延石など）を、基壇下裾部で石敷き舗装を検出した。基壇上面では近代に礎石を撤去した際の抜取穴 9 基を確認した。基壇北面階段の北側では回廊北門に向かう参道の縁石を検出し、また東面回廊の東西両雨落ち溝及び南面回廊の北雨落ち溝を確認した。

奈良時代：部分的に、凝灰岩製の塔基壇外装（延石・地覆石・束石・羽目石）を検出した。

鎌倉時代再建時の塔基壇検出状況（北東から）

・主な出土遺物

奈良時代から鎌倉時代にかけての軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・磚、鉄製品（釘・鎹など）、青銅製品（風鐸破片）

・調査所見

東塔について、鎌倉時代再建時の基壇規模（平面約 27m四方、高さ 1.7m以上）が判明するとともに、塔本体の柱配置を復元するための重要なデータを得た。現在のところ、再建塔は中央間 20 尺、両脇間 18 尺の３間四方と想定される。また、奈良時代創建時の基壇外装も一部遺存していることを確認し、そこから基壇平面規模（約 24m四方）を推定しえた。これにより、鎌倉時代の再建時に基壇が一回り大きく造り替えられていたことが明らかになった。

回廊について、特に東面・南面において雨落ち溝などを検出し、その位置をほぼ特定した。これにより、東塔院域が調査前の想定より広大であったことが明らかになった。

塔基壇下裾部の石敷き舗装や塔基壇北面階段と回廊北門をつなぐ参道の縁石などの遺構も、良好な状態で検出された。これらは、東塔院の全体像を解明するための貴重な資料となる。

【実績値】

論文等数：1 件（①）

報道発表等件数：2 件

現地説明会数：　1 件

（参考値）

出土遺物：瓦片 4000 箱、土器片 5 箱、鉄製品 2 箱、青銅製品 1 箱

記録作成数：実測図 117 枚（A2 判）、デジタル写真約 1,800 枚

【備考】

①山本祥隆ほか「東大寺東塔院跡の発掘調査　平城第 550 次（東大寺第 164 次）」『奈良文化財研究所紀要　2016』28 年 6 月（予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-3
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	S	B	B	A

判定理由
適時性：東大寺東塔院という重要な遺跡につき、東大寺の整備計画および要請に合わせつつ、発掘調査を実施することができた。
独創性：事前のレーダー探査の成果を元に発掘調査計画を立案した。また、従来からの建築史的研究の積み重ねを十分に踏まえて課題設定を行いながら調査を進める等、奈文研ならではの総合的で多様な調査を進めることができた。
発展性：鎌倉再建の東塔院について重要な知見を得ることが出来たと共に、計画的かつ抑制的な部分調査によって奈良時代創建時の様相を知るための重要な知見をもえることができ、今後の調査を進める上での重要な情報が積み重ねられた。また、東大寺・橿原考古学研究所との共同調査を円滑に進められたことも、大きな成果である。
効率性：調査人員を効率的に配置することで、限られた期間内で大きな成果をあげることができた。
継続性：当研究所では、寺院基壇建物に関する豊富な調査経験の蓄積をしてきている。これを研究所内で共有しつつ、調査に反映することで、大きな成果を挙げることができた。
正確性：考古学・文献史学・建築史学等の観点に、さらに自然科学的知見からの分析も踏まえた調査によって、正確な調査を行うことができた。

２．定量的評価

観点	論文等数	記者発表等件数	現地説明会数			
評定	B	B	B			

判定理由
論　文　数：目標値の１件を達成した
記者発表等件数：目標値の２件を達成した
現地説明会数：目標値の１件を達成した

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	・東大寺東塔は、明治時代以来の研究により、様相がほぼ明らかにされていると考えられてきており、主としてその追認作業や詳細の確認になると想定されていた。しかしながら、今回の調査により、従来全く想定されていなかった事実を明らかにすることができた。 具体的には、①鎌倉時代再建の東大寺東塔の規模を確定した。また、②鎌倉時代基壇が奈良時代の基壇を完全に覆い込んで再構築している様相を明らかにした。この2点は、従来全く想定されていなかったものである。 ・周辺の舗装などの具体的様相も明らかにすることができた。また、奈良時代の規模についても、一定の見通しを得ることができ、調査計画策定に重要な情報を得ることが出来た。 ・東大寺東塔院回廊について知見を深め、レーダー探査では確定し得ない情報を得ることができた。 ・東大寺・橿原考古学研究所との共同調査を円滑に行うことができた。 ・論文数・記者発表数・現地説明会数など、数値目標を達成することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	明治以来の研究を大きく覆すような、当初の見込みをはるかに越える大きな成果を上げている。そして、従来からの調査研究の蓄積による複雑な遺構の状況の詳細な理解、状況の変化に応じた臨機応変で適切な調査方法の選択、レーダー探査の活用、学際的研究の総括など、奈文研ならではの取り組みによって成果を上げることが出来ている。さらに、他機関との円滑な共同調査も進めることができている。これらにより、著しい成果を挙げている。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-4

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行（(1)－⑥－ア）

【事業概要】

国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。本プロジェクトでは古代都城の解明のため、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。

【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長　　渡辺　晃宏

【スタッフ】

玉田芳英（都城発掘調査部部長）、馬場基、青木敬、（以上、都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、大澤正吾(以上、考古第二研究室研究員)、清野陽一（考古第三研究室研究員）海野聡(遺構研究室研究員)、小池伸彦(埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長)

【主な成果】

(1)第 19 回古代官衙・集落研究集会「宮都・官衙・集落と土器(官衙・集落と土器 2)」を開催。
　各地域における在地集落の土器様相を踏まえた上で宮都・官衙遺跡に特有の土器様相について検討を行った。
　各地域の分析結果に即して、それぞれの地域における特徴的な土器様相が生まれる背景について議論した。
　土器の観察視点や整理・調査の方法についての議論を行い、今後の調査・研究における課題を共有した。

(2)『第 18 回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１』(奈良文化財研究所研究報告 15) (①)の刊行
　昨年度開催した第 18 回研究集会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。

【年度実績概要】

(1)研究集会(27 年 12 月 11～12 日、於：平城宮跡資料館講堂)の開催

研究報告は、松本太郎「東国の官衙・集落と土器様相」、長直信「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」、春日真実「越後の官衙・集落と土器様相」、村田晃一「陸奥国北辺における城柵の造営と集落・土器」、小田裕樹「飛鳥・藤原・平城地域とその周辺の土器様相」、市川創「難波地域とその周辺の土器様相」、筒井崇史「京都府南部における土器様相」の計７本。

報告後、会場からの質問や意見を交えつつ、報告者を中心に討論を行った。

研究集会開催に際しては、報告資料集（②）を編集・刊行し、参加者等に配布した。

研究集会の討論の様子

(2)『第 18 回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１』(①)の刊行

26 年度開催した第 18 回古代官衙・集落研究集会の成果報告書として、『第 18 回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１』(奈良文化財研究所研究報告 15) (①)を刊行した。

【実績値】

公刊図書数：2 件(①②)
論　文　数：2 本(①②)

(参考値)

研究集会参加者 149 名
アンケート回答 135 名(回収率 90.6%)
アンケート結果　大変有意義であった 84 名、有意義であった 48 名、普通 3 名、あまり有意義でなかった 0 名、有意義でなかった 0 名
報告書(①)　総頁数：192 頁　所収：論文７本、討論

【備考】

①『第 18 回古代官衙・集落研究会報告書　官衙・集落と土器１』(奈良文化財研究所研究報告 15) 2015 年 12 月
②『第 19 回古代官衙・集落研究集会　宮都・官衙・集落と土器(官衙・集落と土器 2)研究報告資料』2015 年 12 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-4
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	A	B	B	B

判定理由
適時性：古代官衙・集落遺跡の調査・研究推進上における重要かつ適切な課題を設定し、第19回研究集会を開催した。26年度開催した第18回研究集会の成果を、遅滞なく研究報告書として刊行し、広く公開した。
独創性：官衙に特徴的に見られる土器の出土状況を、地域毎に抽出する作業を通じて、官衙の特性や地域の特徴、さらにはそれらの事象の歴史的意義づけを論じることができた。
発展性：土器は、遺跡の性格にかかわらず普遍的に出土する遺物であるため、さらに多くの地域・遺跡での分析を通じて、より豊かな成果を得ることができ、またその歴史性を描くことが可能になる。こうした見通しと新たな課題を、報告者のみならず参加者も含めて共有することができた。
効率性：地方官衙関係遺跡データベース構築作業との連携により、効率を高めた。また、報告者とメールを利用して綿密な連絡を取ることで、研究集会の質的向上を図った。
継続性：当研究所の事業として、19回目の研究集会を開催した。また26年度と同一テーマを設定し、昨年度抽出された課題を新たな視点から見直すなど、継続的開催によって、多くの研究成果が蓄積された。また研究所内外から積極的な情報提供や研究集会への参加等を得ている。
正確性：研究集会において、各報告者と会場参加者も含めて議論等を行い、特に具体的な遺構・遺物の図面・写真を用いての討論も交えることで、研究成果・問題意識を確認・共有した。

２．定量的評価

観点	公刊図書数	論文数				
評定	B	B				

判定理由
公刊図書数：目標件数2件を達成した
論　文　数：目標件数2件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・適切なテーマ設定の下に研究集会を開催し、地方自治体職員も含め、多くの参加者を得た。報告・討論とも充実しており有意義であった。こうした状況は、参加者アンケートの結果からも確認できる。 ・充実した内容の研究報告書を、目標の期日に刊行し、公開した。 28年度以降も、適切なテーマ設定を行い、研究集会の開催と質の高い報告書刊行を継続的に行うことを目指したい。なお、研究集会は、地方自治体の埋蔵文化財担当職員等も含め、全国的で高度な研究・調査情報交換・共有の場としての役割も果たしている。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・研究集会での報告や討論を通じて、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得た。 ・全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じ、本研究所の研究の質的向上に資した。 ・研究報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となった。 本研究集会及び報告書は、古代国家形成・古代都城研究に役立ち、また全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員をはじめとした参加者からその継続を望む声も大きい。今後も継続して事業を推進する必要がある。継続的な事業実施のためにも、報告書編集作業の一層の効率化、適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催を進めていきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-5

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行（(1)－⑥－ア）

【事業概要】

国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財造物に関する基礎的調査研究を実施する。古代都城の解明のため、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。

【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長　　渡辺　晃宏

【スタッフ】

清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹・林正憲(以上、都城発掘調査部主任研究員)、石田由紀子・川畑　純・清野陽一（以上、同部考古第三研究室研究員)、中川二美・山本亮(以上、同室アソシエイトフェロー)

【主な成果】

(1)　第 16 回古代瓦研究会シンポジウム「８世紀の瓦づくりＶ　－ 東大寺式軒瓦の展開－」を開催

(2)　シンポジウムの開催にあたり、発表要旨集を作成した。

【年度実績概要】

(1)研究会シンポジウム（28 年 2 月 6～7 日・於：平城宮跡資料館）の開催

口頭研究報告は２日間で８本を実施した。

口頭報告終了後、口頭報告者８名により、当該型式を中心とした瓦の文様、技法の共通性、瓦の年代観、各地における当該型式の歴史的意義などについて討論を実施した。

(2)報告書の刊行

シンポジウムの発表要旨集（①）を制作し、配布した。

古代瓦研究会総合討議の様子

【実績値】

公刊図書数：1 件(①)

論　文　数：8 本(②)

(参考値)

研究集会参加者 124 名

アンケート回答 88 名(回収率 71.0%)

シンポジウムの内容について：・東大寺式軒瓦の製作技法についてよく分かった。

今後取り上げてほしいテーマ：国分寺の瓦、道具瓦、瓦窯について。

【備考】

①『８世紀の瓦づくりＶ　－ 東大寺式軒瓦の展開－』第 16 回シンポジウム発表要旨集、28.2

②廣岡孝信「東大寺の東大寺式軒瓦」、石田由紀子「平城宮の東大寺式軒瓦」、清野陽一「頭塔の東大寺式軒瓦」
今井晃樹「西大寺・西隆寺・興福寺の東大寺式軒瓦」、原田憲二郎「新薬師寺・元興寺の東大寺式軒瓦」、
小谷徳彦「近江地域の東大寺式軒瓦」、渡部明夫「讃岐地域の東大寺式軒瓦」、倉澤正幸「信濃地域の東大寺式軒瓦」

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-5
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由

適時性：シンポジウムの課題設定は、東大寺東塔の発掘調査終了直後でもあり、注目が集まった。
独創性：奈良時代の大寺院の瓦を総合的に比較検討できる点で、これまでにない成果を上げることができた。
発展性：今後、調査が進む奈良の寺院や各地の出土瓦研究の指針を得ることができた。
効率性：平時は個別に調査研究される資料が、一所に集まり比較検討できたので、相互の類似や相違点をその場で確認検討することができた。
継続性：計画どおり奈良時代後半の重要な瓦についてのシンポジウムを実施した。今後は、この成果をもとに奈良時代末までの瓦の調査研究を実施していく。
正確性：予稿集には、各寺院、各遺跡出土の瓦の実測図や拓本、細部の写真などを豊富に掲載しており、今後の研究に資する正確で詳細なデータを提供した。

２．定量的評価

観点	公刊図書数	論文数				
評定	B	B				

判定理由
公刊図書数：目標件数1件を達成した
論　文　数：目標件数8件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・シンポジウムでは、適切な課題設定のもと、高度で有意義な議論を展開することができた。 ・研究者・資料が一堂に会しての議論により、成果や問題点の共有ができた他、予稿集も資料集として有意義なものを編集することができた。 以上、定性的・定量的評価とも目標を達成している。28年度以降も継続的に重要かつ時宜に適した課題を設定し、研究の共有と発展を目指したい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・計画通り着実にシンポジウムを実施することができた。 ・研究会の内容は有意義であり、またその内容の社会発信も計画通り実施することができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-6

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査（大極殿院）((1)－⑥－ア)

【事業概要】「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6 世紀末から 8 世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、官衙地区については研究所発足当初から、中枢部については 11 年度以降、実態解明のための計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 玉田芳英

【スタッフ】

尾野善裕(考古第二研究室長)、西山和宏、廣瀬　覚、森川　実(都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、川畑　純、清野陽一(考古第三研究室研究員)、前川　歩(遺構研究室研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、山本　亮(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、福嶋啓人(遺構研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(企画調整部写真室再雇用職員)、栗山雅夫(企画調整部写真室技術職員)、飯田ゆりあ(企画調整部写真室アソシエイトフェロー)

【主な成果】

・藤原宮大極殿院の発掘調査（飛鳥・藤原第 186 次）を実施した。
・調査の結果、藤原宮の中枢部において、藤原宮の時代を中心とする前後の時期にわたる遺構変遷を明らかにすることができた。
・発掘調査で得た新知見より、今後の調査計画を明確にすることができた。

【年度実績概要】

・調査地：　藤原宮大極殿院（飛鳥・藤原第 186 次）
・目　的：　藤原宮大極殿院の様相解明。大極殿前面広場の空間利用の解明。
・調査期間：　27 年 4 月 2 日～28 年 2 月 26 日
・調査面積：　1548 ㎡
・調査成果：　藤原宮大極殿の南面において藤原宮造営期の南北大溝（運河）１条、南北溝１条、斜行溝１条、藤原宮期の大極殿南面階段痕跡 2 基（中央と東階段）、礫敷広場を確認した。このほか、奈良・平安時代の建物 6 棟、奈良・平安時代の塀 2 条、平安時代の井戸 1 基、奈良時代以降の耕作溝群などを確認し、藤原宮中枢部における飛鳥時代から平安時代までの遺構変遷を明らかにした。

南門部分の運河を埋め、その東側に迂回して付け替えた南北溝から派生する斜行溝は、南門の北側で運河を埋め残した凹みに連結することが判明した。藤原宮の造営過程に新たな知見を加えた。

また、大極殿南面階段痕跡は、藤原宮中枢部の構造を解明し、他の古代の宮殿との比較研究を行ううえで重要な遺構である。

これらの調査成果から、28 年度以降の継続調査につながった。

調査区全景（南から）

【実績値】

発表件数：4 件（論文等 2 件①・④、報道発表 1 件②、現地説明会 1 件③）

（参考値）

出土遺物：軒瓦等 117 点（13 箱）、丸平瓦コンテナ 159 箱、土器・土製品コンテナ 86 箱、木製品・木質遺物コンテナ 42 箱、金属製品 6 点、石器・石製品 1 箱、種実・獣骨・冶金関連遺物等 14 箱

記録作成数：遺構実測図 75 枚、写真〈4×5〉113 枚、デジタル写真 593 枚

現地説明会来場者数：1122 人

【備考】

①清野陽一「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 186 次)」『奈文研ニュース』No.59　27.12
②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 186 次調査）記者発表資料」27.10. 09
③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 186 次調査）現地説明会資料」27.10.12
④奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 186 次調査)」『奈良文化財研究所紀要 2016』28.6（予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-6
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	B	A	B

判定理由

適時性：藤原宮大極殿院の様相を解明するために、必要な場所を選定して適切な調査を行った。近年、平城宮では第一次大極殿院の復原整備にともなう調査研究を継続的に実施しており、大極殿院の復原的研究が大きく進展するなか、その源流となる藤原宮大極殿院の実態解明を行う本調査は、時宜を得たものといえる。

独創性：藤原宮中枢部において、藤原宮造営期から平安時代までの遺構変遷を明らかにした。特に、これまでその詳細が不明であった大極殿南面階段の詳細を明らかにし、予想を大きく上回る貴重な調査成果を得た。

発展性：藤原宮中枢部の空間利用、造営過程の実態解明に関する成果を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。我が国初の本格的古代都城である藤原宮の中枢部の状況を明らかにすることにより、今後の古代都城研究の発展に大きく寄与する成果といえる。

効率性：従前の調査成果などから事前に十分な準備を行うとともに、3D測量・図化など最新の調査手法を取り入れ効果的、効率的な調査を実施した。

継続性：藤原宮の様相解明のための長期的な調査研究の一環として、昨年度より継続して大極殿院の発掘調査を行った。27 年度は特に、これまでに知られていなかった藤原宮の造営過程や大極殿の構造を把握するなど、当初の予想を上回る成果を得た。今後の継続調査にとって重要なデータを蓄積することができた。

正確性：出土遺物・遺構を、その地域性や年代観の特徴・特性を踏まえ、正確かつ的確に記録を作成するとともに、その公表を行った。

２．定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					

判定理由

発表件数：当初予定の 4 件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	藤原宮中枢部の発掘調査及び出土遺物･遺構の整理調査を遅滞なく計画通りに実施することができた。特に今回検出した大極殿南面階段痕跡は、藤原宮中枢部の構造を解明するとともに、他の古代の宮殿との比較研究を行ううえで重要な遺構と位置づけられ、当初の予想を大幅に上回る特に大きな成果と言える。また、現地説明会の開催や図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行った。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本調査研究は、中期計画の５年間の各年度における藤原宮の発掘調査やそれに基づく研究成果などにより、発掘調査による古代国家の復元という中期計画の目標を着実に達成した。また、次期中期計画に向け研究の蓄積を加えることができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-7

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥地域発掘調査（(1)－⑥－ア）

【事業概要】

飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6 世紀末から 8 世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。奥山廃寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、その実態解明に向け調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 玉田芳英

【スタッフ】

西山和宏（都城発掘調査部主任研究員）、山本亮（考古第三研究室アソシエイトフェロー）、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）、飯田ゆりあ（企画調整部写真室アソシエイトフェロー）

【主な成果】

奥山廃寺東面回廊推定地で、奥山廃寺に伴うとみられる整地土層を確認し、溝状遺構１基を検出した。溝状遺構は東面回廊西端付近で南北方向に検出し、古代の瓦のみを含み奥山廃寺存続時か廃絶後の遺構と考えられる。また溝状遺構を境に整地土の土質が異なることを確認しており、回廊の内外で整地土を使い分けた可能性が考えられる。

【年度実績概要】

調査地：高市郡明日香村奥山 665、666 の一部
調査期間：27 年 12 月 14 日～18 日
調査面積：8 ㎡
調査成果：

- これまで調査データが得られていなかった奥山廃寺東面回廊推定地の西端にあたる位置で、南北方向の溝状遺構を検出した。古代の瓦のみを含むことから、奥山廃寺継続時か廃絶後の遺構であると考えられる。
- 整地土とみられる黄褐色の山土層を確認した。周辺で行われた過去の調査成果から、奥山廃寺に伴う整地土層の可能性がある。
- 溝状遺構を境に、東西で黄褐色山土に土質の差がみられ、東側の推定回廊下の黄褐砂の方がより均質となる。回廊の内外で整地土の質に差をもたせた可能性を想定できる。地山の形状は原地形を反映するとみられ、山土で地山の起伏を整地したものとみられる。
- 奥山廃寺東面回廊に関連すると考えられる遺構をはじめて確認し、奥山廃寺の実態解明に向けた貴重な成果を得ることができた。

出土遺物：瓦、土器

調査区全景（北東から）

【実績値】

発表件数：1 件（論文等）
（参考値）
出土遺物　　丸平瓦３箱、土器１箱
記録作成数　遺構実測図１枚、デジタル写真９枚、デジタルメモ写真 50 枚

【備考】

・山本亮「奥山廃寺の調査−飛鳥藤原第 185-10 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』28.6（予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4161-7
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：個人住宅の建て替え工事と並行して緊急的に実施し、適切に調査研究データの蓄積を行った。

独創性：我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な奥山廃寺において、これまで不明であった東面回廊の実態解明に寄与するデータを得ることができた。

発展性：奥山廃寺東面回廊推定地付近で、初めて寺院に関わると推定される遺構を検出したことにより、東面回廊の存在及び実態について見通しを得た。

効率性：工事と並行し面積及び工程に制約があるなかで、これまでの調査成果を踏まえ事前に十分な準備を行い、効率的に調査成果を得ることができ、また事前の予定通りの期間で調査を終えることができた。

継続性：奥山廃寺における継続的な調査研究の実施により、今後遺跡の全容解明を進めていくうえで参考となるデータを加えることができた。

正確性：遺跡及び遺構の特徴について、逐次スタッフ間で協議しつつ、共通した認識のうちに調査を進行し、正確かつ的確な記録を作成した。

２．定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					

判定理由
発表件数：当初目標の1件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	奥山廃寺東面回廊推定地で、寺院に関わると推定される遺構をはじめて確認するなど、飛鳥地域における発掘調査と出土遺物・遺構に関する調査研究を計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じ、調査成果の公開を適切に行った。今後の調査研究に有益な資料を得ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27 年度は奥山廃寺東面回廊について貴重な情報を加えたことなど、中期計画の 5 年間における調査研究成果の蓄積により、発掘調査による古代国家の具体像の復元という中期計画の目標を着実に達成することができた。また、次期中期計画に向けた見通しを得ることができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名　奈良文化財研究所　　処理番号　4162-1
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等（(1)－⑥－イ）

【事業概要】
国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、整理が終了したものより順次公表を行う。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副部長　渡辺晃宏

【スタッフ】
箱崎和久・神野　恵・青木　敬・今井晃樹・林　正憲・馬場　基・芝　康次郎・丹羽崇史・小田裕樹・石田由紀子・桑田訓也・山本祥隆・鈴木智大・海野　聡・浦　蓉子・大橋正浩（以上、都城発掘調査部）、中村一郎・栗山雅夫・鎌倉綾（以上、企画調整部）、高妻洋成・脇谷草一郎・田村朋美・金田明大（以上、埋蔵文化財センター）

【主な成果】
(1)27 年度の発掘調査出土遺物・検出遺構について、整理・分析及び研究、図面作成・写真撮影等の基礎作業を行った。
(2)26 年度以前の出土遺物・検出遺構に関する継続的な整理・分析研究・調査を行った。
研究を進展させ報告書作成に備えるとともに、出土文化財の保全に万全を期した。また、出土遺物の科学的分析・保存処理を行った。
(3)出版物等により、調査成果の公表を行った。

【年度実績概要】
(1)27 年度の発掘調査による検出遺構・出土遺物の整理と研究
・木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡等の整理・分析及び研究、検出遺構の図面トレース及び遺構の分析・解釈、撮影写真の整理を実施した。
・受託事業として行った平城京内の発掘調査についても、出土遺物や検出遺構の整理・分析研究といった基礎作業の大半は本事業で行っている。
(2)26 年度発掘調査出土遺物の整理と科学的保存処理
・過去の調査出土遺物の洗浄・整理・分析研究等の作業を継続的に実施した。
・過去の調査出土木製品及び木簡、金属製品の保存処理を継続して実施し、適宜遺物の材質等の分析を行った。
・旧大乗院庭園・平城京左京三条一坊及び平城宮東区朝堂院の学報作成に向けて、遺物・遺構の整理・分析・研究・執筆作業を行った。

木簡など多量の遺物を含む土の
洗浄・選別作業風景

(3)調査・研究成果の公表
・平城第 552・559 次調査で記者発表を実施した。また、27 年度の発掘調査の概報を作成した。
・出土木簡を整理作業を進めて釈文を検討し、その速報成果を『平城宮発掘調査出土木簡概報』43・44（①・②）として刊行した。
・特別展『地下の正倉院展』（27 年 10 月 17 日～11 月 29 日・於：平城宮跡資料館）を開催し、図録（③）を刊行するとともに、1 回の記者発表を実施した。

【実績値】
報告書等数：4 件（①～④）

【備考】
①『平城宮発掘調査出土木簡概報』43（27 年 12 月）
②『平城宮発掘調査出土木簡概報』44（27 年 12 月）
③『地下の正倉院展　木簡を科学する』（27 年 10 月）
④「Ⅲ平城宮跡等の調査概要」（『奈良文化財研究紀要 2015』28 年 6 月予定）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4162-1
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	A	B	A	B

判定理由
適時性：27 年度調査での検出遺構・出土遺物の資料的価値を明らかにし、随時発掘調査現場にフィードバックした。また、発掘調査現場の記者発表等の機会を利用した迅速な情報公開の他、『平城宮発掘調査出土木簡概報』を刊行し、文化財に関する普及啓発を促進した。
独創性：自然科学分野との連携により、多様な分析を試みるとともに、文化財保全に万全を期した。重要な土層については剥ぎ取りを行い、記録・保全に十全を尽くした。
発展性：新たに検出した遺構や遺物の分析・研究を通して、都城研究をさらに推進するとともに、今後の調査、研究に資する新知見を得、明らかにすべき課題を明確にすることができた。とりわけ、従来想定されていたものの現物は確認できていなかった、役所備え付けの大型歴名簡を確認することができ、『平城宮発掘調査出土木簡概報』に公表したことは大きな意義がある。
効率性：データベース化の促進等を積極的に行い、整理・管理作業を中心にその効率化を促進した。
継続性：従来の平城宮・京跡及び寺院跡の発掘調査で得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究成果を踏まえて、27 年度の研究に活用し、かつ新たな課題・視点の発見につなげ、『奈良文化財研究所紀要』において積極的に公開した。
正確性：出土資料を的確に資料化し、これまでの成果に新たな知見を得て、歴史的事実を正確に把握した。

２．定量的評価

観点	報告書等数					
評定	B					

判定理由
報告書等数：目標値 4 件を達成した

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・継続的な学術調査を、正確に、かつ多様な手法を用いて実施することができた。 ・図書の刊行・記者発表などを通じて、調査成果を積極的に公開することができた。 ・27年度の平城宮・京跡及び寺院跡で出土した膨大な考古資料・文字資料を継続的に整理・分析し、その概要を刊行するとともに、従来の調査資料を再度検討し、展覧会や正式な報告書の形でその成果を公表することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・国家の形成過程や当時の生活実態の解明に資する、検出遺構・出土遺物に関する総合的・多角的な調査・研究を実施した。 ・整理が終了した後にその調査成果をまとめ、迅速に公表した。調査成果の正確な公表に向けた基礎的作業を積み重ねた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4162-2
(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等((1)－⑥－イ)

【事業概要】27 年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施する。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長　玉田芳英

【スタッフ】
尾野善裕（考古第二研究室長)、清野孝之(考古第三研究室長)、西山和宏、森川実、廣瀬覚、降幡順子、山本崇(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人、和田一之輔（以上、考古第一研究室研究員)、大澤正吾（考古第二研究室研究員)、川畑純、清野陽一（以上、考古第三研究室研究員)、大林潤、前川歩（遺構研究室研究員)、大谷育恵（考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大（考古第二研究室アソシエイトフェロー)、山本亮(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、福嶋啓人(遺構研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫（企画調整部写真室再雇用職員)、栗山雅夫(企画調整部写真室技術職員)、飯田ゆりあ(企画調整部写真室アソシエイトフェロー)

【主な成果】
・27 年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。
・26 年度までの発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの再調査・再整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の再整理・再検討作業を実施し、成果の一部を公表した。

【年度実績概要】
・27 年度の発掘調査による遺物・遺構について
27 年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2016』等で公表する予定である。
・26 年度までの発掘調査による遺物・遺構について
発掘調査成果を報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理及び自然科学的分析を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業を継続的に実施した。
また、飛鳥地域出土の尾張産須恵器の集成を行うなど、過去の飛鳥・藤原京跡出土の遺物・遺構の再整理を実施し、その成果の一部を『奈良文化財研究所紀要 2016』等で論文として公表する予定である。
・成果の公表について
これまで飛鳥・藤原京跡で行った発掘調査および遺物・遺構の調査研究の成果をとりまとめ、『坂田寺出土建築部材調査報告書』『藤原宮出土馬の研究』（ともに 28 年 3 月刊行）の執筆・編集・刊行、『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』(28 年 6 月刊行予定）の執筆、編集を行った。

坂田寺回廊出土巻斗

【実績値】
発表件数：９件（刊行物３件①～③、論文５件④～⑧、研究発表１件⑨)

【備考】
①　奈良文化財研究所編『坂田寺出土建築部材調査報告書』(28 年 3 月)
②　奈良文化財研究所編『藤原宮出土馬の研究』(28 年 3 月)
③降幡順子ほか 4 名「古代鉛釉陶器・施釉瓦の科学分析からみた特徴」日本文化財科学会第 32 回大会（27 年 7 月 11 日)
④降幡順子ほか 2 名「東アジアの中での日本の古代鉛釉陶器の科学的特徴」『2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム発表要旨集』(27 年 8 月)
⑤山本崇「その後の藤原京―藤原宮京の退顛過程」奈良女子大学古代学学術研究センター編集・発行『都城制研究(9) 都城の廃絶とその後』(28 年 3 月)
⑥廣瀬覚「藤原宮大極殿基壇の測量調査－第 186 次」『奈良文化財研究所紀要 2016』(28 年 6 月予定)
⑦尾野善裕、森川実、大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要 2016』(28 年 6 月予定)
⑧清野孝之「藤原宮出土の藤原宮以前の瓦」『奈良文化財研究所紀要 2016』(28 年 6 月予定)

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4162-2
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	B	A	B

判定理由
適時性：新たに出土した資料を迅速に公開し活用に供した。過去の資料も今日的な観点から再整理、再分析を行い、特に27年度は、藤原京跡右京六条三坊の空間利用や飛鳥地域出土の尾張産須恵器、あるいは藤原宮の造営時に利用された馬の特質について、従来の調査成果を塗り替える極めて重要な結果を得た。
独創性：遺物・遺構の整理・分析方法について、従来までの方法に加え、出土遺物の理化学的分析や遺構の３Ｄ測量等を試みるなど、積極的に新たな整理・分析方法を追究した。
発展性：蓄積された遺物・遺構に関するデータを今後の調査研究に活かすため、資料化を行い、報告書にまとめた。さらに、その成果に基づき新たな視点から検討を加え、今後の調査研究の発展のために極めて重要な成果を得た。
効率性：新出及び蓄積された遺物・遺構に関するデータの調査・再調査を効率的に行った。
継続性：1956年に飛鳥寺、川原寺、飛鳥板蓋宮伝承地において調査を開始し、1973年からは飛鳥藤原宮跡発掘調査部を設置し、継続的に行ってきた遺物・遺構の調査研究に関する、膨大なデータの基礎的分析研究と保存処理を継続的に実施した。
正確性：新出資料や蓄積された資料の正確な資料的性格と価値を把握し、公表した。

２．定量的評価

観点	発表件数					
評定	B					

判定理由
発表件数：過去の調査研究の資料を整理研究し、８件の論文等を公表することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	27年度の出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、過去の出土遺物・遺構について今日的な観点からあらためて調査研究を行い、藤原京の土地利用状況や、出土建築部材、須恵器、瓦などの出土遺物の年代観、生産と供給の状況等について、これまでとは異なる貴重な研究成果を得た。また、理化学的分析や３Ｄ測量等の新たな手法を積極的に取り入れ、従来とは異なる視点から検討を加え、藤原宮出土馬の産地や飼料について新たな知見を加えた。27年度はこれらの調査成果を報告書や論文等にまとめるなど、調査研究成果の公開も積極的に行うことができた。これらの調査研究成果は当初の予想を大幅に上回るものであるといえる。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の５年間において、飛鳥・藤原京跡で出土した遺物・遺構の整理、調査研究、分析、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。発掘調査成果を公開するための調査研究を計画的に行い、報告書にまとめた。これらにより、飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等を行うという計画を達成した。 また、これらの調査研究の蓄積により、次期中期計画に向けた見通しを得ることができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4163

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究（(1)－⑥－ウ）

【事業概要】

飛鳥時代の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、出土遺物を中心とした資料の調査を実施する。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、山田寺等の飛鳥・藤原京跡内寺院の出土部材の研究を行う。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長　石橋茂登

【スタッフ】

西田紀子(学芸室研究員)、若杉智宏(学芸室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人(考古第一研究室研究員)、田村朋美（保存修復科学研究室研究員)、小沼美結（アソシエイトフェロー）

【主な成果】

(1)キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を継続した。
(2)飛鳥寺塔心礎出土品を含む飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理と調査を継続した。
(3)於美阿志神社石塔婆出土ガラス小壺の調査を行い、成果を公表した。
(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の調査成果を公表した。
(5)長法寺出土の押出三尊仏像・御正体の非破壊調査を実施した。
(6)山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。

【年度実績概要】

(1)壁画のうち特にキトラ古墳天文図、高松塚古墳星宿図を主として調査研究を継続し、成果を飛鳥資料館秋期特別展、関連イベントにおいて公表した。
(2)飛鳥寺塔心礎埋納品のうち収蔵庫保管の金属製品を中心にリストを作成し、一部の実測とＸ線ＣＴ画像撮影、箱の入れ替えなどの整理作業を行った。また飛鳥寺塔心礎出土ガラスの蛍光Ｘ線分析を行い、成果を研究図録として公表した。これらの作業は 28 年度も継続する予定である。
(3)於美阿志神社石塔婆出土ガラス小壺の蛍光Ｘ線分析を行い、その成果を論文として公表した。
(4)向原寺所蔵金銅観音菩薩立像について 26 年度実施した蛍光Ｘ線分析とＸ線ＣＴ画像撮影の成果を、論文として公表した。
(5)長法寺出土の押出三尊仏像・御正体について蛍光Ｘ線分析とＸ線撮影、３Ｄ計測、写真撮影、レプリカ作成を行った。
(6)重要文化財山田寺跡出土品のうち建築部材について計測調査を継続し、データを収集した。これらは中長期的な変化を知るための基礎データとなるものであるので、28 年度以降も継続する予定である。

(5) ３Ｄ計測の様子

【実績値】

研究図録数１件（①）
論文発表３件（②③④）
山田寺部材計測データ１年分　（２時間ごと１回、年間 4,380 回計測）

【備考】

①飛鳥資料館研究図録第 19 冊『飛鳥寺跡出土遺物の研究　ガラス玉類の考古科学的研究』28.3
②石橋茂登・降幡順子「向原寺所蔵金銅観音菩薩立像の調査」『奈良文化財研究所紀要 2015』 27.6
③石橋茂登・降幡順子・丹羽崇史・井上曉子・林佳美「於美阿志神社石塔婆出土ガラス小壺の調査」『奈良文化財研究所紀要 2015』 27.6
④諫早直人「飛鳥寺塔心礎出土馬具」『奈良文化財研究所紀要 2015』 27.6

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4163
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	B	A	B

判定理由
適時性：(2)飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理と調査は学術的に重要な資料であり、近年韓国などで同時代の類例が発見されている状況のなか、部分的とはいえ公表できた意義は大きい。(5)押出三尊仏像・御正体は当館に寄託されている資料だが、所有者の意向で近々寄託先が変更される可能性があり、機会を逃さずに実施した。(1)キトラ古墳壁画、高松塚古墳壁画における天文図・星宿関連の研究は、秋期特別展と関連イベントの内容に活かすことができた。
独創性：(1)中国式星図の研究はごく限られたものしかない状況であり、キトラ古墳・高松塚古墳の天文図・星宿図について詳細で正確な画像と実物に基づき研究を行った本研究は、これまでにない取り組みである。(3)於美阿志神社石塔婆出土ガラス小壺の調査は、従来美術工芸あるいは考古学的視点から年代推定されていたものを、成分分析によって製作時代を考察した点に独創性がある。(4)金銅仏の内部構造をＸ線ＣＴ画像で調査することはこれまでほとんど行われていなかった調査である。
発展性：(5)押出三尊仏像の調査では、通常は押出仏ならば表面の写真が公表されるところ、裏面側により原型に近い細かな造形が残されていることを見いだした。今後、同様な調査で従来と違う所見を得られる可能性が高い。(6)山田寺跡出土の建築部材の計測は、長期のデータ集積によって、保存処理して再組み立てを実施した有機質遺物の経年変化を知る上で重要な知見を得られると見込まれる。
効率性：実物資料を収蔵している飛鳥資料館が中心となって、他部門の研究員の協力を得ることで、多様な調査研究を滞りなく遂行することができた。
継続性：(2)飛鳥寺跡発掘調査出土品の再整理と調査は26年に引き続き実施しており、一部を成果として公表できるようになった。引き続き継続すべき研究である。(3)(4)(5)では長年当館に保管収蔵されてきた資料ながら、本格的な調査研究がなされていなかったものを対象とした研究である。当館にはまだ未調査の資料が多数保管収蔵されており、それらの調査研究を継続することで、新しい成果を得ることができる。
正確性：蛍光Ｘ線分析、Ｘ線ＣＴ画像撮影では当研究所の保存科学分野の研究員が調査することで適正な手法で、正確なデータを得ることができた。また各調査においては実測や計測のほか、写真撮影、Ｘ線画像、３Ｄ計測など複数の方法で記録を作成し、正確な情報の収集に努めた。

２．定量的評価

観点	研究図録数	論文発表	山田寺部材計測データ			
評定	B	B	B			

判定理由
研究図録数：目標値（年１冊以上）を達成できた。
論文発表：研究成果を適切に公表できた。
山田寺部材計測データ：目標値（１年分）を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	飛鳥資料館に保管収蔵されている資料を中心として、さまざまな調査研究を実施している。その成果も順次公表されており、奈良文化財研究所の一部としてふさわしい活動を行っているといえる。また山田寺跡出土建築部材の計測のように短期間では目立った成果とはならないが長期的には重要な成果になると見込まれる基礎的な調査研究も継続している点が評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	さまざまな調査研究を堅実に実施しており、研究図録も予定どおり刊行するなど、活動は全般的に精力的で順調といえる。とくに壁画古墳に関する調査研究は秋期特別展とも関連して研究成果をとりまとめてひろく公表できたことは大きな成果といえる。 今後も当研究所の体制と当館の保管収蔵資料を生かした、総合的な研究が期待される。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4164

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究（(1)－⑥－エ）

【事業概要】(1)中国社会科学院考古研究所との共同発掘調査成果の整理及び次期共同調査の打合せを行う。
(2) 遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡・遺物の調査と調査研究報告書を公刊する。
(3) 河南省文物考古研究院との共同研究、及び報告書刊行に向けての準備を行う。
(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　杉山洋

【スタッフ】(1) 渡辺晃宏・今井晃樹（以上、都城発掘調査部）、栗山雅夫（企画調整部）
(2) 玉田芳英・清野孝之・今井晃樹・廣瀬覚・石田由紀子・諫早直人・川畑純・大谷育恵（以上、都城発掘調査部）、小池伸彦（埋蔵文化財センター）、栗山雅夫（企画調整部）、他４名（呉炎亮・李新全・李竜彬・李霞）
(3) 玉田芳英・尾野善裕・森川実・丹羽崇史・降幡順子他６名（以上、都城発掘調査部）、難波洋三(埋蔵文化財センター)、中国側５名(楊文勝・張慧明・趙志文・李一丕・郭洋)
(4) 玉田芳英・渡辺晃宏・清野孝之・箱崎和久・廣瀬覚・青木敬・庄田慎矢・諫早直人・小田裕樹・川畑純・鈴木智大・海野聡（以上、都城調査部）、石橋茂登（企画調整部）、藤井裕之（埋蔵文化財センター）、韓国側７名（張恩恵他）

【主な成果】(1)北魏洛陽城出土遺物の整理研究及び同遺跡の発掘成果の報告会を実施した。
(2) 23 年～27 年遼西地区東晋十六国時期都城文化研究学術検討会（於遼寧省文物考古研究所）で研究発表を行った。
(3) 報告書刊行に向けての準備を進めるとともに、唐三彩関連資料の調査等を実施した。
(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。共同研究について成果をまとめた論集を刊行した。

【年度実績概要】
(1) 27 年６月に２名を洛陽に派遣し、出土遺物の整理を実施した。27 年 12 月に渡辺、今井が中国社会科学院考古研究所に赴き、次期共同調査について打合せをした。１月に社会科学院考古研究所の銭国祥氏を招聘し、北魏洛陽城の発掘成果の報告会を実施した（①）。
(2) 金嶺寺遺跡出土瓦の調査研究（清野）、大板営子墓地の造営過程の研究（廣瀬）、三燕と倭の金工品の比較研究（諫早）、遼寧省出土指輪の研究（大谷）とそれぞれの研究発表を行った（②）。
・金嶺寺遺跡出土瓦の製作技法、大板営子墓地の時期変遷と親族構造を明らかにした。三燕出土馬具等と倭の馬具等の技法的特色、遼寧省出土貴石象嵌指輪の実態を明らかにした。
(3) 唐三彩関連資料の調査等を行った（③）。
・27 年 12 月に３名を派遣し、河南省鄭州市にて「黄冶唐三彩窯」刊行に向けての打ち合わせを行い、唐三彩関連資料を調査した。
・27 年 11 月に河南省から５名を招聘した。
(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。
・共同研究にかかる研究者派遣３名、発掘調査交流に係る研究者派遣１名・受入れ１名。
・『奈文研ニュース』No.59・60 にて発掘調査交流の内容を公表した。(④)。
・『日韓文化財論集 3』を執筆、編集、刊行した（⑤⑥）。
・国立扶余文化財研究所『東アジア古代寺址比較研究(Ⅱ)－金堂址編－』(国立扶余文化財研究所学術研究叢書第 54 輯）を翻訳し、日本語版を刊行した（⑦）。

韓国、東宮と月池発掘調査風景

【実績値】口頭発表等数：５件（①、②）
論文等数：23 件（②、③、④、⑤、⑥、⑦）

【備考】①銭国祥「北魏洛陽城太極殿等の発掘調査」28 年１月 14 日
②清野孝之「遼寧省北票市金嶺寺遺跡出土瓦の調査」他３編（奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所編『2011 年－2015 年遼西地区東晋十六国時期都城文化研究学術検討会』資料集、27 年 11 月)。
③降幡順子・神野恵「奈良三彩技術与化学特征的研究 - 平城宮陶器Ⅱ之奈良 - 」『華夏考古』2015 年第４期（27 年 12 月）
④川畑純「日韓発掘交流に参加して」他１編（『奈文研ニュース No.60』28 年３月）
⑤箱崎和久・鈴木智大・海野聡「日本からみた韓半島の古代寺院金堂」(『日韓文化財論集 3』28 年３月）
⑥権宅章「高興野幕古墳から見た５世紀の対外交渉」他 12 編（『日韓文化財論集 3』28 年３月）
⑦奈良文化財研究所・国立扶余文化財研究所『東アジア古代寺址比較研究（Ⅱ）―金堂址編―』（日本語版）（27 年 12 月）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4164
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性 ： 報告会における発表や、刊行物における研究成果公表等、適切かつ速やかな公表を行った。
独創性 ： 奈文研が蓄積してきた精緻な調査方法を、中国・韓国の遺構や遺物の調査に応用することで成果を挙げている。
発展性 ： 各事業において、遺物の製作技法の分析等の調査研究が進み、また海外研究者との意見交換も進展したことにより、検討会資料や研究論集をまとめることができた。
効率性 ： 成果を公刊できる形まで、資料調査研究を効率的に進めることができた。
継続性 ： 現地調査の成果である実測図や写真データの集積が続けられている。
正確性 ： 現物資料の詳細な観察記録に基づくデータの蓄積が図られており、正確性は担保されている。

２．定量的評価

観点	口頭発表等数	論文等数				
評定	A	A				

判定理由
口頭発表等数 ： 目標値1件を越える5件を達成した。
論文等数 ： 目標値3件を越える23件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・中国・韓国双方の研究機関との連携を継続し、概ね計画通りの資料収集を行って成果を挙げた。 ・中国における報告会での発表や調査成果の公表によって、研究の成果を速やかに公けにした。 ・人的交流の促進により、多くの研究成果を共有しており、今後の共同研究の継続も期待できる。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の最終年度にあたり、これまで蓄積してきた資料の調査研究に基づいて、口頭発表や論文執筆により高い水準の研究発表ができ、(1) から (4) のいずれの研究も着実な成果を挙げて、所期の目標を達成している。 中国の研究機関、韓国の研究機関との共同研究が継続的に実施されることが、研究成果の共有と研究水準の向上に寄与するとともに、今後の研究の発展につながると考えられる。よって、28 年度以降も本事業を継続して進めていく計画である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4171

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究（(1)－⑦）

【事業概要】文化的景観及びその保護に関する基礎的・応用的な調査研究を推進し、諸外国との比較のもとに、我が国の文化的景観保護に関する情報の収集・検討等を行う。また、これまでの成果を踏まえつつ、文化的景観の学術及び保護に資する検討会を主催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に取り組む。

【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	景観研究室長　林良彦

【スタッフ】

中島義晴（文化遺産部主任研究員）、惠谷浩子（景観研究室研究員）、菊地淑人（景観研究室アソシエイトフェロー）、小浦久子（大阪大学准教授・客員研究員）、山下慎吾（魚と山の空間生態研究所代表・客員研究員）

【主な成果】

文化的景観研究集会及び「文化的景観学」検討会を開催し、文化的景観に関する体系化に関する検討を進めた。検討会の成果の一部については文化的景観スタディーズ第１冊としてまとめた。また、我が国及び諸外国の文化的景観保護に関する情報収集・検討の成果として、文化的景観資料集成第２集、第３集を刊行した。その他、文化的景観の現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。

【年度実績概要】

(1)基礎的・体系的研究

・ 文化的景観研究集会（第７回）「営みの基盤　生態学からの文化的景観再考」を 27 年 11 月 29 日～30 日に実施した。29 日のシンポジウム成果を踏まえ、30 日には「京都岡崎の文化的景観」にてエクスカーションを実施した。
・ 「文化的景観学」検討会を、27 年 5 月 10 日、6 月 2 日、8 月 6 日～7 日、10 月 10 日、12 月 7 日、28 年 2 月 28 日に開催し、文化的景観学の体系化及び成果の公表に向けた検討を進めた。このうち、27 月 6 日～7 日には、「長良川中流域における岐阜の文化的景観」にて現地調査・ディスカッションを行った。成果の一端を文化的景観スタディーズ第１冊として公表した（備考①）
・ 我が国及び諸外国の文化的景観保護に関する情報収集・整理・検討の成果として、文化的景観保存計画を中心とした資料集（文化的景観資料集成第２集・第３集）を刊行した（備考②③）。

文化的景観研究集会（第７回）の様子

(2)文化的景観保護に関する現地調査・研究

・ 宇治市、四万十市、阿蘇市等をフィールドに、それぞれの地方公共団体担当部局への協力を通じて、文化的景観の価値評価及び整備計画に関する検討を行った。
・ 奈良文化財研究所ウェブサイトにおいて公開している重要文化的景観選定地区に関する基礎的情報について、内容の更新・拡充等を図った。
・ 全国の文化的景観に関する協議等により、文化的景観の価値評価及び保護のあり方について検討を進めた。

【実績値】

刊行図書数：3 冊①②③

論文等数：8 件（講演・発表等 4 件④、論文等４件⑤）

【備考】

刊行図書

①奈良文化財研究所『地域のみかた－文化的景観学のすすめ』文化的景観スタディーズ第 1 冊 28.3

②奈良文化財研究所『文化的景観保存計画の概要（Ⅱ）』文化的景観資料集成第 2 集、27.7

③奈良文化財研究所『文化的景観保存計画の概要（Ⅲ）』文化的景観資料集成第 3 集、27.11

論文等

④惠谷浩子「日本の文化的景観の保全に関する現状と施策」日中大学交流文化遺産国際会議： 過去から未来へ－アジア・太平洋地域における建築・遺跡・景観保存の道筋、26.6　ほか３件（詳細については統計表参照）

⑤菊地淑人「世界遺産登録された棚田景観の価値と保護–フィリピンとインドネシアの比較–」奈良文化財研究所紀要、27.6　ほか３件（詳細については統計表参照）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4171
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	B	B

判定理由
適時性：文化的景観の概念及び調査・計画等を体系化することを目指した「文化的景観学」の取組は、過年度の検討会の成果について更に深化させることができ、また、生態学をテーマとした研究集会の開催へとつなげられた。また、資料集成についても、重要文化的景観選定地区が 50 地区に達した 27 年度に既選定地区の計画概要を網羅させることで、適時的なものとなった。
独創性：文化的景観の保護における複雑な課題に対して、これまで学術分野としての「文化的景観学」に関する体系的検討は行われておらず、とくに 27 年度の研究集会がテーマとした生態学分野との関わりは深い理解が得られていなかった。その点で、国内外の文化的景観保護への貢献は大きい。
発展性：文化的景観研究集会や「文化的景観学」検討会での検討、国内外の動向分析を通じて、文化的景観の概念適用と実践体系に関する検討を深化していくことは、地域社会の持続可能性にも大きく貢献できるものである。
効率性：数多くの分野との協働が欠かせない文化的景観に関する検討において、「文化的景観学」検討会に様々な専門と立場のメンバーを招聘して多角的な情報を共有し、議論を深めた。また、検討会の議論を研究集会へと展開させるなど、事業を連動させることで効率化に努めた。
継続性：26 年度まで 6 回にわたって開催してきた文化的景観研究集会、また 24 年度からの「文化的景観学」検討会の成果を踏まえつつ、「文化的景観学」検討会及び文化的景観研究集会（第 7 回）を実施し、文化的景観の保護に関する体系化に関する検討を深め、検討会の成果の一端を刊行物として公表した。
正確性：文化庁及び各地方公共団体との連携・協力の下に、国内外の文化的景観に関わる情報の把握・収集及び現地調査において、詳細かつ正確な把握・検討・公開等を行った。

２．定量的評価

観点	刊行図書数	論文等数				
評定	B	B				

判定理由
刊行図書数：計画通り 3 冊の報告書等を刊行した。
論文等数：広く文化的景観の諸課題の検討に応じ、国内外の講演会・研究会等のほか、刊行物への論文等の公表により、十分な成果が認められる。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	1：文化的景観に関する研究集会・検討会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、2：国内外の文化的景観保護に関する資料集成刊行を通じた基礎的・体系的な調査研究成果の公開、3：宇治市、四万十川流域、阿蘇地域などを対象とした現地での調査研究、4：学会・学術雑誌等での研究成果発表等、年度当初の計画を的確に遂行することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化的景観に関する研究集会・検討会の開催や資料集成の刊行、現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行することができた。特に、研究集会・検討会では文化的景観の概念及び調査・計画等の体系化に関する検討を深め、また、資料集成の刊行では、継続的に情報収集・整理をおこなっている国内外の文化的景観保護に関する基礎的情報の公開を通じて、保護行政・学術研究への貢献を図った。現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができた。 次期中期計画及び 28 年度計画では、文化的景観に関する研究集会・検討会を中心に、個別の事例・課題に対する検討を重ね、一定の知見を取りまとめ公表するとともに、国内における文化的景観整備活用事例についての基礎的な情報収集及び成果の公表等していくことが重要である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4181

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開（(1)－⑧－ア）

【事業概要】

官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査で抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行い、一般公開する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小池伸彦

【スタッフ】

山中敏史（元文化遺産部長、客員研究員）、小澤　毅（三重大学人文学部教授、客員研究員）、森本　晋（企画調整部国際遺跡研究室長）、馬場　基、青木　敬（以上、都城発掘調査部主任研究員）、小田裕樹、海野　聡，大澤正吾（以上、都城発掘調査部研究員）

【主な成果】

官衙関係遺跡・集落・宮都等の建物データについて全国的に網羅して作成した資料集成をもとに、報告書『長舎と官衙の建物配置』を刊行した。また、官衙・寺院関係遺跡及び井戸遺構に関するデータベースを作成し、官衙・寺院データベースでは関東地方の追加データについて新たに公開した。

【年度実績概要】

- 26 年度開催した第 18 回古代官衙・集落研究集会の報告書、『官衙・集落と土器 1』（奈良文化財研究所研究報告第 15 冊、①）として編集・刊行した。
- 26 年度開催した第 19 回古代官衙・集落研究集会「宮都・官衙・集落と土器」（官衙･集落と土器 2）の研究報告資料を作成した（②）。
- 前年度に引き続き、東京都・千葉県・栃木県・茨城県・福島県・山形県・秋田県について報告書のめくり作業・該当データ抽出を行い、国府・官衙・城柵やその他の官衙関係遺跡等の資料を追加収集・整理した。また、26 年度に続いて、25 年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業・該当データ抽出を行った。
- 27 年度新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。
- 26 年度に資料を収集した桁行 9 間・梁行 2 間あるいは 3 間の建物について、官営工房など特殊な性格を有するものが見られることを明らかにした。
- 27 年度は新たに、東京都・千葉県・栃木県・茨城県・福島県・山形県・秋田県と平城宮の古代井戸遺構に関する資料を収集・整理し、それらをデータベース化した。

古代地方官衙関係遺跡データベース画面

【実績値】

データベース入力・補訂件数：計 8,413 件

官衙関係遺跡データベース：遺跡数 205 件、文献データ 706 件、建物データ 854 件、画像データ 738 件

古代寺院遺跡データベース：遺跡数 138 件、文献データ 1,076 件、建物データ 622 件、画像データ 1,171 件

古代井戸データベース：遺跡数 307 件、文献データ約 1,529 件、井戸データ 1,067 件

公開データ数：計 90,745 件

官衙関係遺跡：遺跡数 1,677 件、文献データ 17,586 件、建物データ 20,578 件、画像データ 22,669 件

古代寺院遺跡：遺跡数 1,630 件、文献データ 17,443 件、建物データ 3,939 件、画像データ 5,223 件

報告書件数：1 件（①）

（参考値）

研究集会当日資料集：1 件（②）

【備考】

①小田裕樹ほか編『官衙・集落と土器 1』奈良文化財研究所研究報告第 15 冊、27.12.

②小田裕樹ほか編『宮都・官衙・集落と土器』第 19 回古代官衙・集落研究集会当日資料、27.12.

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4181
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：従来から需要の多い古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡データベースとともに、やはり需要の増加している井戸関連遺跡データベースについて、データ数を増加して公開することで需要に対応している。
独創性：全国を網羅していることに加え、様々な遺跡や遺構の性格分析・研究などに役立つ多彩な項目を設置したデータベースで、他に類を見ない。
発展性：発掘調査事例の多い関東地方のみならず、東北地方にもデータ収集範囲を広げてデータベースの更なる拡充を進めている。
効率性：全国的な官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・井戸関連遺跡に関する膨大なデータを公開し、様々な項目から必要に応じて素早くデータを抽出することができるため、遺跡等の各種分析・研究に対する利便性は極めて高い。
継続性：毎年増加し続ける遺跡データを継続的に収集・入力し公開しており、データベース全体の更新を続けている。
正確性：新出資料の追加に加え、既存のデータに関しても変更を生じた事項について改訂を行い正確性を保っている。

２．定量的評価

観点	データ入力・補訂件数	公開データ数	報告書件数			
評定	A	A	B			

判定理由
データ入力・補訂件数：目標の 2,500 件を大きく上回った。
公開データ数：目標の 60,000 件を大きく上回った。
報告書件数：計画通り1件を刊行した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	データベース入力件数、公開件数とも目標値を大きく上回ったほかに、26 年度設置した井戸関連遺跡データベースの入力が軌道に乗り順調にデータ数を増やしている。また、報告書『官衙・集落と土器 1』を刊行し、さらに研究集会資料集『宮都・官衙・集落と土器』を作成するなど、27 年度の目標を十分に達成していると言える。 毎年8,000～9,000件前後の発掘調査が実施されていることから、今後も全国で官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸についてデータ量が増加することは間違いない。それらの調査研究・文化財保護にあたる人々にとってこのデータベースは、遺跡や遺構データの抽出・分析等の面で一層の利便性・効率性を提供すると期待できる。従って、引き続き、古代官衙関連遺跡・古代寺院遺跡・古代井戸に関する新資料等を収集・整理し、これらデータベースの一層の充実を図りたい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来どおり、官衙関連遺跡・古代寺院については、新資料の収集・整理、既存データの補訂などで着実にデータの蓄積を進め、それらを順次、地域ごとに公開しており、27 年度は東京都など報告書点数の膨大な関東地方や東北地方の一部にまでの収集範囲を広げており、事業を計画通り順調に進めていると言える。今中期計画期間の最終年度である 27 年度は、古代官衙・寺院関連では、27 年度に入力の済んだ関東・東北地方の一部のうち、東京都・千葉県・栃木県・茨城県までのデータベースを公開した。古代井戸データベースでも順調に新データ入力を進めており、所期の目標を十二分に達成している。28 年度以降もデータベースの充実に努め、増加し続ける発掘調査データに対応していきたい。また、年度ごとに異なるテーマに従い、毎年度着実に資料集作成や報告書刊行を行っているが、これらについても 28 年度以降、継続していく所存である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4182

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査（(1)－⑧－イ）

【事業概要】

標記プロジェクトに関して、(1) 考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、(2) 高エネルギーＸ線ＣＴ法及びＸ線ＣＲ法の応用研究、(3) 漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化とデータベース作成、(4) 金属製遺物の埋蔵環境調査、(5) 出土木製遺物の保存に関する研究集会の開催、に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】

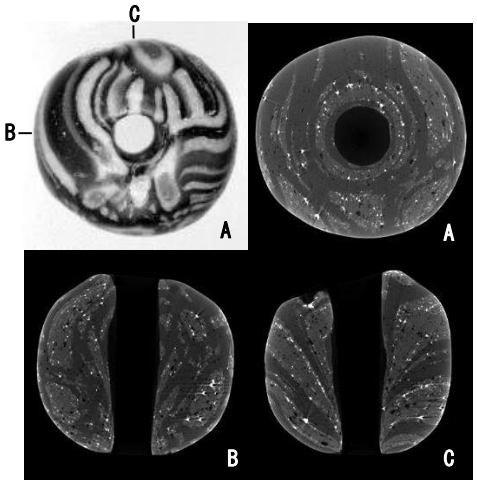
脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、杉岡奈穂子(保存修復科学研究室アソシエイトフェロー)、肥塚隆保(元副所長、客員研究員)

【主な成果】

(1) 標準試料のラマンスペクトルを集積するとともに、顔料、ガラス、石製品、紙資料のラマンスペクトルを取得した。
(2) 香川県まんのう町出土のモザイク玉について、X 線 CT 撮影を実施することで、複雑な構造を有する古代のモザイク玉の製作技法を明らかにすることができた。
(3) 青森県御所野遺跡出土遺物に付着した黒色物質を分析し、漆とされていた黒色物質がアスファルトであることを明らかにした。
(4) 古墳石室の埋蔵環境を再現した模擬石槨で金属試料の暴露試験および埋蔵環境調査を実施し、埋蔵環境が金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。また、交流インピーダンス法により金属の腐食速度について検討した。
(5)「出土木製遺物の保存に関する最近の動向」をテーマとした研究集会を開催した。

【年度実績概要】

(1) レーザーラマン分光分析とＸ線回折分析を併用することで、錫酸鉛着色による黄色カリガラスの存在を日本で初めて確認した（福岡県三雲遺跡加賀石地区出土)。また、炭化紙資料のラマンスペクトルや滑石製遺物のラマンスペクトルを集積した。
(2) 香川県まんのう町出土のモザイク玉について、マイクロフォーカス X 線 CT 撮影を実施することで、複雑な構造を有する古代のモザイク玉の詳細な製作技法を明らかにした。材質調査の結果と総合的に考察することにより、本資料がササン朝ペルシア産であることを実証的に示した。
(3) 青森県御所野遺跡より出土した遺物に付着していた黒色物質はこれまで漆であるとされてきた。クロロホルムへの溶解性と FT-IR による分析から、これらの黒色物質がアスファルトであることを明らかにした。
(4) 模擬石槨周辺の環境測定と石槨内に設置した金属試料の腐食試験から腐食過程のモニタリングを実施した。その結果、石槨内の結露発生箇所が季節ごとに変化すること、それに応じて金属の腐食速度が季節ごとに異なることがあきらかとなった。また、交流インピーダンス法の試験の結果、金属試料の腐食速度は試料近傍の溶存酸素濃度に支配されることが示唆された。
(5)「出土木製遺物の保存に関する最近の動向」と題した研究集会を開催し（28 年１月 22 日)、出土木製遺物の一時保管から保存処理後の保管環境に至るまでの現状と課題について、全国の文化財担当者と情報を共有し、総合討議を通じて様々な角度から意見交換を行った。



香川県出土モザイク玉の X 線 CT 画像

【実績値】

発表件数：14 件（①～②)
論文等数：7 件（③～⑤)
研究集会開催件数：1 件（⑥)

【備考】

発表

①Tomomi TAMURA, Katsuhiko OGA「A scientific and archaeological investigation on Roman glass artifacts unearthed in Japan」Technart2015, Catarnia, Italy, 2015.4.27.
②Tomomi TAMURA, Katsuhiko OGA「A study on production areas of Indo-Pacific beads from Southeast Asia to East Asia: scientific and archaeological approach」15th International Conference of the European Association of Southeast Asian Archaeologists, Paris, 2015.07.09.
他 12 件

論文等

③田村朋美・大河内隆之「香川県安造田東３号墳出土モザイク玉の材質・構造調査」『奈良文化財研究所紀要 2015』27.6.
④Tamura and Oga「Archaeometrical investigation of natron glass excavated in Japan」Microchemical Journal 126, 28.1.
⑤脇谷草一郎・柳田明進・小椋大輔・鉾井修一「模擬古墳から検討した埋蔵環境下における遺物保存に関する研究-石室内環境が金属製遺物の腐食におよぼす影響について-」『奈良文化財研究所紀要 2015』2015.6.26　他４件

研究集会

⑥研究集会「出土木製遺物の保存に関する最近の動向」（発表件数：6 件、参加人数：90 名、開催日：28.1.22)

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4182

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	継続性
判定	B	B	B	B	B	B

判定理由

適時性：古代の材料や技術に関する新しい知見を得るためには、自然科学的な手法による出土遺物の材質・構造調査が不可欠である。出土遺物の材質・構造調査には非破壊的な手法が求められており、各種の調査機器を応用することで、より多様な遺物の調査が可能となる。また、近年、遺物が埋蔵した状態で整備が行われる事例の増加しており、埋蔵環境中での遺物の劣化機構の解明が求められている。

独創性：古墳石室における埋蔵環境を再現した模擬石室において、鉄製遺物及び青銅製遺物の暴露試験を実施し、古墳石室内における金属製遺物の腐食に関する基礎データを収集した。古墳石室内を再現した埋蔵環境が金属製遺物の腐食に与える影響についての研究は他に類を見ない。

発展性：出土遺物の材質構造に関するデータを集積することで、近隣諸国だけでなく地中海周辺地域で出土した類例との比較研究も可能となり、現在のイスラエル地域で生産されたガラス製遺物が古墳時代の日本列島に流入していたことを明らかにすることができた。

効率性：大量に出土する玉類などの遺物の材質調査において、蛍光Ｘ線分析による分析に加えて、同時に多量の材質調査が可能な方法（ＡＲ法及びＣＲ法）を適用することで、8,000 点を越える遺物についても迅速かつ効果的な調査を実施できた。

正確性：蛍光Ｘ線分析法とレーザーラマン分光分析法に加え、可視分光分析法や非破壊微小点Ｘ線回折分析など、複数の分析法を併用することで、精度の高い材質調査を行うことができた。

継続性：分析装置を改良したことにより、多くの遺物の材質・構造調査のデータを継続的に取集することが可能となった。埋蔵環境調査に関しては、模擬古墳での暴露試験を行うことで継続的なデータの収集が可能となった。

２．定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会開催件数			
判定	A	A	B			

判定理由

発表件数　　：目標件数２件を大きく上回る 14 件を達成した。
論文等数　　：目標件数２件を大きく上回る７件を達成した。
研究集会開催件数：目標件数１件を達成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究事業を当初計画どおり順調に遂行しただけでなく、目標を大きく上回る発表・論文等数を達成することができた。ラマン分光分析に関しては、顔料、ガラス、石製品などの無機質遺物に加えて、炭化紙資料などの有機質遺物についてもデータを蓄積することができた。埋蔵環境調査に関しては、鷹島海底遺跡に設置した暴露試験のデータ回収を継続するとともに、模擬石室に本年度設置した暴露試験についてもデータ回収が進み、埋蔵環境が金属製遺物の腐食に及ぼす影響について解明するための貴重なデータが得られた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各種の調査機器を応用することで、より多様な遺物の調査を可能とし、漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化に漕ぎ着けた。さらに、埋蔵環境中での金属製遺物や木製遺物の劣化機構の解明を進めることができた。そして、中期計画の最終年度である 27 年度、目標であった出土木製遺物の保存に関する研究集会を開催できた。また、発表・論文等数でも目標を大きく上回った。以上のように、所期の目標を十分に達成していると認められる。ただし、構造調査の要であるＸ線透過撮影装置の老朽化が進んでおり、継続的な診断調査のためには早急な更新が不可欠である。次期中期計画でも、各種の分析手法を活用して出土遺物の診断調査を進め、考古遺物を安定した状態で保存・活用するための保存処理法の開発につなげていく予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4183
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データ収集（(1)－⑧－ウ）

【事業概要】土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材及び空気における熱・水分・溶質移動を推定し、それらが形成する環境を予測する解析技術に関する研究、及び土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】
降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)

【主な成果】
・土質遺構の露出展示保存を実施している平城宮跡遺構展示館を研究対象として、外界気象条件や覆屋内温熱環境、析出物の種類や分布、水質に関する実測調査を行うとともに、土中と覆屋内空気における熱、水分及び酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析を行った。
・石室保護施設が完成したガランドヤ古墳では、石室内での結露発生を抑制する換気や熱源の運用方法について検討した。さらに、同じ日田市に所在する穴観音古墳と法恩寺山３号墳の２基の装飾古墳で外界気象条件と石室内温熱環境に関する実測調査を行い、ガランドヤ古墳と併せて封土の状態や墳丘表面の被覆状況が石室内温熱環境に及ぼす影響について検討した。
・塩析出への対策が喫緊の課題となっている大分市元町石仏では、外界気象条件と覆屋内部の温熱環境の実測調査、及び26年度から継続して、季節毎に析出する塩の種類と分布、地下水の水質について調査を実施した。また石仏内部、露頭における熱水分移動解析を行い塩析出の要因について検討した。

【年度実績概要】
・平城宮跡遺構展示館では、覆屋内部および遺構周辺地盤の熱水分移動モデルを作成し、解析解から塩析出を抑制する手法について検討した。その結果、南棟周辺地盤への雨水の浸透を抑制すること、南棟の換気回数を減少させることが塩析出の抑制に対しては非常に効果的であることが示唆された。また南棟周辺地盤における水分移動のモデルを作成し、あわせて溶存酸素移動を計算することで地盤内の酸化還元環境を求めるモデルを作成した結果、地盤の酸化還元環境は地下水位変化に支配されることを明らかにした。
・ガランドヤ古墳は恒久的な石室保存施設が完成したため、石室内部の温熱環境が大きく変化した。夏季の外気由来の結露を抑制することが課題であるため、外気の相対湿度が65%以下の時のみ換気を実施し、石室内における結露発生の有無について観察を行った。その結果、7月から8月は外気の気温がきわめて高いため、相対湿度が65%以下であっても絶対湿度としては相当量の湿度となった。一方で、石室内は熱容量が極めて大きな空間であるため、石材表面温度の上昇が緩慢であり、外気由来の結露が発生した。今後は熱源などを使用して石材表面温度の上昇を促進する手法を検討する。
・元町石仏では露頭内部の熱水分移動解析を行い、冬季から春先にかけて石仏表面付近まで石材の含水率が増加する一方で、石材表面温度が低いことが示唆された。従って、この時塩析出の可能性がもっとも高いこととなり、塩析出による石材劣化の目視観察結果と調和的な結果を得た。

（上）ガランドヤ古墳奥壁の結露による濡れ
（下）地層境界で析出する塩（遺構展示館）

【実績値】
発表件数：８件（①～②）
論文等数：５件（③）
（参考値）
調査実施回数：９回　平城宮跡遺構展示館（3回）、ガランドヤ古墳（2回）、元町石仏（4回）

【備考】
発表
① 桑原範好、鉾井修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会近畿支部、27.6.27
② 脇谷草一郎、桑原範好、鉾井修一、小椋大輔、高妻洋成「平城宮跡遺構展示館における土質遺構露出展示保存に関する研究―遺構周辺地盤の酸化還元環境に関する検討―」日本文化財科学会第32回大会、27.7.12　ほか６件
論文
③ Soichiro Wakiya, Noriyoshi Kuwabara, Shuichi Hokoi, Daisuke Ogura “Deterioration of Remains Exhibited in the Excavation Site Exhibition Hall, Heijyo-kyu Palace Site” Advanced Materials Research Vol.1126, pp.39-52 2015。ほか４件

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4183
（様式2）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：遺跡の公開・活用が重要視される近年の社会・文化状況において、適切な環境下で遺跡の安定性を維持しつつ、観覧等の公開・活用に資する技術の研究・開発が今まさに求められている。
独創性：本研究では、整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを予め回避するために適切な環境の制御を行うことで、遺構保存を実現することを目的としており、土や石材の強化処置を主とする既往の手法とは異なる新たな取り組みである。
発展性：遺構を取り巻く環境は様々であるが、乾湿の繰り返しや塩類析出などの遺構で生じる劣化は熱、水分、溶質移動によって引き起こされる普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は汎用性に富んでおり、広範な分野にわたる様々な遺構への応用が可能である。
効率性：フィールド調査で使用する機材や調査手法は、異なる環境下にある多種多様な遺構で使用可能なものであることから、機器類の導入経費や運用面において効率は高い。
継続性：各調査フィールドにおいて調査の最終的な目標（長期的な目標）、及び各年の短期的な目標を明確に設定し、各地方公共団体の文化財担当者とも目標を共有しながら、長期的な文化財保護行政の一環としての調査研究という位置づけを得て事業を継続している。
正確性：恒常的な高湿度環境など、継続的な環境調査は過酷な条件下で行われることが多いが、それらに対する耐久性を備えた測定器具類を選定しており、得られたデータは充分な正確性を有する。また、研究は常に実測調査と数値解析の両者を並行して進めており、数値解析のみの結果で保存方法を検討するのではなく、解析結果と実測調査結果を常に比較対照して検討することで、正確な解析モデルの構築を行っている。

２．定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
評定	A	A				

判定理由
発表件数：目標値である２件を大きく上回った。
論文等数：目標値である２件を大きく上回った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各調査フィールドでの調査研究事業を当初の計画通り順調に遂行することができ、その成果発表は目標を大きく上回った。27 年度は 26 年度までの土中の熱、水分移動に加え、溶存酸素や溶質移動についても解析の検討対象として調査研究を行うことができた。28 年度はこれらの実測調査を行い解析モデルの精度を高める。また、土中に埋蔵されている金属製遺物や木製遺物の腐食は土壌の温度、溶存酸素濃度（酸化還元環境）、含水状態に大きく影響されることから、遺物の腐食についても解析モデルに取り込んで、埋蔵環境の推定や現地保存法の検討に発展させていく予定である。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今次中期計画期間の最終年度である27年度は、発表等の件数が目標を大きく上回り、26年度までの実測調査・解析等を継続しつつ、平城宮跡遺構展示館を中心にデータの蓄積と解析モデルの構築、さらにその解析結果から現在進行中の劣化を抑制する方法を検討するなど、中期計画全体として所期の目標を十二分に達成したと言える。一方で、ガランドヤ古墳や元町石仏では27年度に保護施設の改修が行われるなど、遺跡を取り巻く環境が変化し続けていることから、28年度以降も引き続き遺跡周辺の環境に関する実測調査、劣化状態の調査を実施する予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4211

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究((2)-①)

【事業概要】

本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法及びその応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長　小林　公治

【スタッフ】

山梨絵美子（部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（文化形成研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、橘川英規（研究員）、城野誠治（広領域研究室専門職員）、早川泰弘（分析科学研究室長）江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）

【主な成果】

- 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」第 17・18 巻の光学調査（カラー分割・近赤外線分割）を実施した。
- 奈良国立博物館との共同研究について、「天台高僧像「智顗」」、「聖徳太子及天台高僧像」十幅の光学調査（カラー分割・近赤外線）を実施した。
- 研究所修復プロジェクトの一環として、三の丸尚蔵館において西瓜図・厩図屏風の光学調査（全図・部分カラー・近赤外線）を、また日本銀行貴賓室において天井綴の全図撮影を実施した。
- 研究所文化遺産国際協力センターによる選定保存技術プロジェクトの一環として、日本国内各地において、玉鋼製造・錺金具制作・刀鍛冶・苧麻績み・藍製造・そうこう技術・宇陀紙制作・邦楽器弦製作・檜皮葺・苧麻引き・粗苧製造・うるし掻き技術・建具制作・竹籤製作・たたら製鉄・漆かき道具製作の撮影を実施した。
- 在外日本古美術品保存修復協力事業の一環としてポーランド・ブロツワフ国立博物館所蔵「秋野蒔絵硯箱」の撮影を実施した。
- 研究所保存修復プロジェクトの一環として、サントリー美術館において、「四季花鳥図屏風」の撮影を実施した。
- 研究所保存修復プロジェクトの一環として、佐野市立吉澤記念美術館において伊藤若冲著「菜蟲譜」の彩色調査を実施した。
- 研究所プロジェクトの一環として、三式戦「飛燕」の撮影を実施した。
- 研究所保存修復プロジェクトの一環として、三の丸尚蔵館において「萬国絵図」の全図・部分撮影を実施した。
- 研究所プロジェクトの一環として、サントリー美術館において、「小倉山蒔絵硯箱」の撮影、厳島神社において「平家納経」の撮影を実施した。
- 平等院の依頼を受け、鳳凰堂内須弥壇、鳳凰堂内彩色、鳳凰堂内須弥壇の撮影を実施した。
- 長崎県の依頼を受け、聖母マリア像の光学調査（カラー・蛍光・近赤外線）を実施した。
- 岡田美術館の依頼を受け、「鳳凰図・孔雀図」の撮影を実施した。
- 下記する成果品の他、データは画像処理を行った上で、記憶媒体に記録して保存している。

【年度実績概要】

- 27 年度は長期的に継続して実施している宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵」の第 17 巻及び 18 巻について、本プロジェクトによるデジタル画像形成とその成果画像の検討も加えた保存修復科学センタープロジェクトによる蛍光 X 線分析とを一連の作業として実施することができた。
- 研究所内プロジェクトの一環として、国内各地での伝統技術記録のための撮影、また保存修復事業による作品の作業記録撮影を行なった。
- 外部機関からの依頼に応じ、様々な貴重な文化財の画像記録撮影や光学調査を実施した。
- 調査成果については 3 冊の報告書として発刊することができた。
- 成果の一部については、カレンダー用画像として利用することで、成果を広くアピールすることができた。

【実績値】

光学調査件数　5 件

撮影件数　9 件

調査成果の公表数　4 件（備考①～④）

【備考】

① 城野誠治ほか「東京文化財研究所カレンダー2016」B3 東京文化財研究所編　27 年 12 月

② 城野誠治ほか「東京文化財研究所カレンダー2016」B5 東京文化財研究所編　27 年 12 月

③ 早川泰弘・城野誠治「平等院鳳凰堂須弥壇の金属部材の材料調査」『平等院鳳凰堂内光学調査報告書』 pp. 4-7 東京文化財研究所　28 年 3 月

④ 早川泰弘・城野誠治「四季花鳥図屏風の彩色材料調査」『四季花鳥図屏風 光学調査報告書書』 pp. 148-153 東京文化財研究所　28 年 3 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4211
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	B	B	B	B

判定理由
適時性：所内外の幅広い要望に応じ、またカレンダーといった形も含め、迅速な調査成果の公表に努めてきた。
独創性：本プロジェクトのデジタル画像形成方法は、長年の実地経験と画像形成技術、また文化財関係では国内では当研究所が唯一保有する機材に基づくもので、他機関や画像専門家の追随を許さない独自性の高いものであると言える。
発展性：以前に比べ、時代地域を超えた様々な文化財を対象として実施している。
効率性：非常勤職員ごとに担当業務を割り振るなど、調査成果が効率的に報告できるように進めている。
継続性：本プロジェクトの業務は複数年度にまたがって実施しているものも多く、成果も継続的に公表している。
正確性：デジタル画像の形成に当たっては対象とする文化財の実態・現状の正確な記録化を念頭に行なうと共に、手間のかかる画像の整理作業を効率的に進めることで、その成果を早急に確実に公表している。

２．定量的評価

観点	光学調査件数	撮影件数	調査成果の公表数			
評定	A	A	A			

判定理由

光学調査件数　：プロジェクト計画である2機関との共同研究を始め、所内外の様々な依頼に機敏に対応して多くの調査を実施した。特に、27年度は奈良国立博物館との共同研究にて「聖徳太子及天台高僧像」十幅などの光学調査を実施する等、時間と労力のかかる作業に取り掛かった中で、充分な調査を実施することができた。
撮影件数　：所内外の要請に応じ、できる限りの鷹揚なスケジュール調整を行なうことによって極めて多くの撮影依頼をこなし、例年に増して充分な撮影を実施した。
調査成果の公表数：所内外の業務依頼者に対し、迅速な適宜成果の報告を行なっていることに加え、印刷報告書のみならずカレンダーにて公表する等、多様な報告方法でかつ充分な調査成果の公表を行なうことができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価については様々な要望に応じた調査を適宜速やかに実施でき、またその対象も従来に比べより広く発展させることができた。さらに撮影件数はもとよりいくつもの報告書作成を行ない、定量的評価でも充実した内容でかなり多くのまとまった件数の実績を上げることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27 年度は継続的に行なってきた共同研究プロジェクトに加え、有形文化財・無形文化財など様々な対象について積極的な撮影を実施することができた。また依頼者に対する成果報告も適宜行なっていることから、所定の目標を達成していると評価する。新たな中期計画が始まる 28 年度以降にはより意義深い調査の実施や方法的検討に努めたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4221

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の測量･探査等に関する研究（(2)－②）

【事業概要】文化財保護に資する研究を主眼として、発掘調査の際の測量・計測による記録方法の高度化、非破壊的手段である探査による地下遺構の把握、その他遺跡を対象とした各種の研究法の開発と試験、活用方法の検討を行う。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長　小池伸彦

【スタッフ】金田明大(埋蔵文化財センター主任研究員)、西村康((財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所長、客員研究員)・西口和彦(客員研究員)

【主な成果】(1)三次元レーザースキャナーによる文化財計測の精緻化と迅速化を更に進め、応用研究を進めた。
(2)SfM（複数画像から撮影位置と方向を復原する技術）/MVS（前述の複数画像を利用した三次元形状計測データ生成技術）の実用化と精度検証を達成し、実践に移した。
(3)UAV（無人飛行艇）をプラットフォームとした各種遺跡調査システムを試行した。
(4)アレイ式地中レーダー・多チャンネル式電磁探査機・磁気探査機の試験を行い、必要な機器の開発を進めた。
(5)発掘調査記録の迅速化及び精緻化を目的とした簡便な手法の検討を重ねた。
(6)窯業生産資料の広域編年と流通に関連する研究を推進した。
(7)各地方公共団体等の依頼により、計測及び探査を実施した。

【年度実績概要】

(1)千葉県船塚古墳、奈良県薬師寺東塔などで計測試験をおこない、好成績を上げた。また、ＬｉＤＡＲ(ライダー)(レーザー・レーダー)技術の検討により、日本における遺跡周辺地形の計測手法の開発に着手した。
(2) SfM 及び MVS 技術を用いて、前年度実用化した、一般に普及しているデジタルカメラとコンピュータを用いた極めて安価かつ迅速な三次元計測手法により、以下の調査等を実施した。
平城宮・京、金沢城をはじめ、複数の遺構で計測を行った。加えて、計測データの多様な活用方法について検討し、研究会を開催した（参加者 66 名)。
(3)前年度実用化した小型 UAV による安価な空中写真計測システムにより、SfM/MVS 技術を用いた高精度遺構計測が可能となったが、今年度は改正航空法に関連する対応・対策を講じ、UAV の研究会での発表を行った。
また、改正航空法に関連する対応や、UAV の研究会での発表を行った。
(4)平城宮跡、大阪城等でアレイ式地中レーダー機器を試験した。また、遺跡に柔軟に対応可能な走査方法の検討と器具の製作を行った。各地で課題となっている城郭の石垣の維持管理と崩壊の防止のため、その原因解明を目的として探査の機器を開発し、試験的な探査を行った。
(5)発掘調査記録の標準化と効率化を主眼として、簡易な方法による遺構断面の土色や遺物の色彩計測を試み、その成果を学会にて発表した。
(6)考古学の方法論である型式論や流通論の向上に資するための基礎研究として、窯業生産資料、特に古代土器生産・流通の研究方法を検討した。識別子による分類や製作技術の検討、情報収集と分析を試行した。
(7)平城京、東大寺、薬師寺、興福寺、岩屋山古墳、大和郡山城（以上奈良県)、金沢城（石川県)、大阪城真田丸推定地（大阪府)、五塚原古墳、井ノ内車塚古墳（京都府)、船塚古墳（千葉県）などの遺構、鳥取県出土銅鐸、平城宮・京出土土器などの遺物の計測を行い、三次元データ等を収集した。

薬師寺東塔探査風景

【実績値】
文化財探査件数：10 件
三次元計測件数：約 100 件（遺構 24 ヵ所、遺物 80 点以上)
発表件数　　：14 件（①～③)
論文等件数　　：9 件（④・⑤)
(参考値)
色彩計測試験　：10 回以上

【備考】
発表
①金田明大 八尾純子　石松智子「遺構および遺物の簡易色彩計測に関する初歩的検討」『日本文化財科学会第 32 回大会研究発表要旨集』360-361　27.7.11
②金田明大 ナワビ矢麻　西口和彦　石松智子　長江真和 「複数探査手法を用いた可児市大萱古窯跡弥七田窯の検討」『日本文化財科学会第 32 回大会研究発表要旨集』296-297　27.7.11
③金田明大「SfM/MVS による遺構の計測」第１回文化財方法論研究会　28.1.16 他 11 件
論文等
④Akihiro Kaneda, Kazuhiko Nishiguchi, Yama Nawabi, Yoshiro Watanabe. Archaeological prospection of kiln sites in the Samurai era Archaeologia Polona 53: 299-303、2015 .2015.09
⑤Akihiro Kaneda, Yama Nawabi, Hiroshi Yamaguchi. APPLICATION OF STRUCTURE FROM MORTION IN JAPANESE ARCHAEOLOGY. The International Archives of the Photogrammetry, Remote Sensing and Spatial Information Sciences.2015.09　他 7 件

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4221
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	A	B	B	B

判定理由
適時性：計測・探査は文化財研究及び保護において基礎的な分野であり、必要性も高いため、各方面からの需要が極めて多く、予定外の突発的な調査要請も少なくない。それらに即応して成果を上げた。
独創性：機器等を改良して文化財に特化した手法を確立し、新しい手法として普及を図る段階にまで押し上げた。
発展性：既存の調査・研究の蓄積との連携に配慮しながら、地方公共団体等で簡便かつ廉価に導入可能な方法を開発しており、今後これらの手法が基礎的な記録手段として広範に普及していくと考えられる。
効率性：遺跡・遺物の詳細なデータを従来の数十分の一の時間と労力で計測・記録し、なおかつ低コストで実現できる方法の完成をほぼ達成しつつある。
継続性：独法化以前からの研究資産・研究水準を引き継ぎつつ、不断の技術改良と現在の文化財研究及び保護に要求される水準に沿った研究を進め、成果を上げている。
正確性:レーザースキャナーやSfM/MVSを利用した計測技術は精度が高く、得られる三次元データの信頼性にも優れる。

２．定量的評価

観点	文化財探査件数	三次元計測件数	発表件数	論文等件数		
評定	A	A	A	A		

判定理由
文化財探査件数：遺跡保存に関する探査要請への緊急対応等で、目標の5件を大きく上回った。
三次元計測件数：依頼件数が急増するなかで極めて多数の案件に対応しており、目標の5件を大きく上回った。
発表件数：目標件数2件を大きく上回った。
論文等数：目標件数2件を大きく上回った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計測等件数では目標を大きく上回り、計測技術としては、より廉価な計測技術を確立した上でＳｆＭの研究会を開催し、多数の参加者へ研究成果の紹介と実際の使用法のレクチャーを行うなど、予想以上の成果を上げている。28年度は、研究会で構築した研究者ネットワークを中心に、新たな技術の普及に努めたい。 探査件数は目標を大きく上回り、探査技術のより高精度で迅速な手法の確立と複数の手法を確立する可能性への道筋をつけることができた。文化財の分野では、計測、探査とも今後の発展が期待される分野であり、28年度以降、現在普及の壁となっている課題を解決しながら各方面への技術移転を進めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新技術を導入し対象となる文化財の種類に即した独自の改良を加えることにより、計測、探査を始めとする発掘調査及び遺物調査技術について、導入ならびに利用コストの低い方法を開発し、地方公共団体等に広範な普及を図る可能性を示したことで、27年度の目標以上の成果を達成していると評価できる。また、連携研究等により人材育成や技術の移転を進め、他機関における研究の活性化と人材の育成に貢献することで、高まりつつある技術に対する注目と期待に応えることができ、今次中期計画について所期の目標を十二分に達成できたと言える。 一方、研究体制や研究環境は十分に整備されているとは言い難い。特に、本来の目的であり、調査研究の根幹をなす基礎研究の比重が相対的に低下する傾向にある。27年度でデータ収集等の大半を終了する予定であった事業について、外的要因により28年度も継続するものがある。また、文化財の記録は文化財研究の基礎であり、今後もその重要性に変わりはない。従って、28年度以降は研究体制・環境の整備が図られるよう要望を強めるとともに、文化財保護行政に資する研究を推進するという観点から、これまでに達成し得られた技術成果を、地方公共団体等へ移転し普及させる方向性に重点を置いていきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4231

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究（(2)－③）

【事業概要】

出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資する。とりわけ、奈良文化財研究所で開発、実用化したマイクロＸ線ＣＴを用いた調査手法は貴重な文化財の非破壊調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長　難波洋三

【スタッフ】

大河内隆之(埋蔵文化財センター主任研究員)、星野安治(年代学研究室研究員)、伊東隆夫(京都大学名誉教授、客員研究員)、光谷拓実(客員研究員)、藤井裕之(奈良県教育委員会日々雇用職員、客員研究員)、児島大輔(大阪市立美術館学芸員、客員研究員)

【主な成果】

出土遺物、建造物、美術工芸品といった多分野にわたる 26 件の木造文化財を対象とした年輪年代調査及び樹種同定調査を行った。また、デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いて、同装置による調査対象拡大に向けた非破壊検査を行った。そして、これらの調査・研究成果の一部を論文等、学会等において発表した。

【年度実績概要】

・12 件の出土木製遺物、7 件の木造建造物、6 件の木造美術工芸品、1 件の自然木について、年輪年代調査と樹種同定調査を実施した。
・このうち国宝薬師寺東塔の解体修理に伴う調査では、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができる 250 点以上の部材を悉皆的に調査した。当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、薬師寺東塔の建立年代、及び建立後の修理の経過を推定する資料を得た。
・標準年輪曲線の年代的・地域的拡充を行うため、全国各地の基礎データの蓄積を継続したが、27 年度は特に山陰・北陸地方のデータを充実させることができた。
・デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いて、既存の装置では不得手であった保存処理済出土木製遺物への応用を行うとともに、漆塗りの櫛等の非破壊での三次元構造把握などに一定の成果を得た。
・マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いた非破壊での樹種識別を目指し、現生木での基礎的な検討を行った。
・継続的におこなっている年輪年代標本の調査では、収蔵標本の現状把握とリスト作成をおこなった。
・以上の調査・研究成果の一部を、論文等、及び学会等において発表した。日本文化財科学会における発表では、日本文化財科学会第 9 回ポスター賞を 2 件受賞している。

年輪年代学用大型木材標本収蔵状況

【実績値】

調査件数：26 件
論文等：3 件（①～③）
発表等：3 件（④～⑥）

【備考】

論文等

①大河内隆之「年輪年代学的視点から見た黎明期国産ヴァイオリンの木材利用について－鈴木政吉工場製作品を中心に－」『奈良文化財研究所紀要 2015』27.6
②星野安治「木の年輪で作った年代を測るものさし－年輪年代学の成果－」『遺跡の年代を測るものさしと奈文研』27.7
③星野安治、児島大輔、光谷拓実「木造二天王立像（国〈文化庁保管〉）の年輪年代調査」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』(査読有) 27.8

学会等発表

④大河内隆之「虫糞や虫粉を用いた放射性炭素年代測定に関する新たな試み」日本文化財科学会第 32 回大会、2015.7
⑤大河内隆之、安江恒「年輪年代学の視点から見た鈴木政吉工場製ヴァイオリンの年代測定と産地推定」日本文化財科学会第 32 回大会、2015.7（日本文化財科学会第 9 回ポスター賞受賞）
⑥鈴木伸哉、大山幹成、星野安治「X 線 CT を用いた東北地方民家所蔵漆器の非破壊年輪計測と産地推定」日本文化財科学会第 32 回大会、2015.7（日本文化財科学会第 9 回ポスター賞受賞）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4231
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	A	A	B

判定理由
適時性：出土木製遺物の年代決定、あるいは建造物や木彫像の解体修理等、各地方自治体の文化財担当部署の要請に迅速に対応することができたほか、全国各地の様々な分野からの要望に時機を逃さず的確に応え、年輪年代情報を提供することができた。
独創性：デバイスを更新したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いた出土漆塗り櫛の三次元構造解析などは、製作技術解明などの上でこれまでにない、文化財科学分野での最先端をいく独創性の高いものである。
発展性：標準年輪曲線の地域的な拡充を行うことにより、暦年代測定と同時に年輪年代学的な手法を用いた木材の産地推定を可能にすべく、データを蓄積している。
効率性：デジタル画像による調査手法の活用により、従来に比較して、きわめて多くの点数を効率よく調査できている。
継続性：標準年輪曲線の拡充を行うため、全国各地の年輪データを収集しているが、27 年度は収蔵標本の再整理をおこなうとともに、26 年度から継続している中国地方のうち特に山陰と、それに加えてさらに北陸地方におけるデータについても充実させることができた。
正確性：年輪年代測定で得られる１年単位の年代は、他の多くの自然科学的年代測定の中でも際立って精度が高く、正確性の高いものである。

２．定量的評価

観点	調査件数	論文等数	発表等数			
評定	B	A	A			

判定理由
調査件数：考古・建築・美術など、多岐にわたる分野において 26 件の文化財調査を実施した。
論文等数：目標の2件を上回った。
発表等数：目標の2件を上回った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	全国の文化財担当者から寄せられる様々な分野の調査要請に的確に対応するとともに、マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の多角的活用により新たな構造解析手法を生み出すなどし、目標を上回る論文数等や学会から一定の評価を得た発表等、所期の目標を上回る成果が得られているため。 28年度以降は調査・研究の一層の効率化を図ることで、さらに増加すると予想される要望に適切に応えられる体制を整えたい。また、能力の向上したマイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の多角的活用をさらに進めることで、より一層充実した調査・研究成果に繋げたい。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査･研究事業を順調に遂行できているうえに､所期の目標を上回る成果を挙げることができたため。中期計画の当初に想定していた以上の要請に対応するとともに､構造解析において独創的な分野を開拓するなど、めざましい研究成果が得られている。 28 年度以降は、年輪データの蓄積、マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置の多角的活用といった継続的かつ発展性のある調査・研究事業をこれまで以上に推進するとともに、発掘調査や建造物・美術工芸品の修理事業等にも即応できる体制をさらに充実することで研究に適時性をもたせ､従前の正確性を高めることで、質的にも量的にも豊かな成果を上げていきたい。また、そうした成果を論文等で公表することで、年輪年代学による文化財の調査の必要性と重要性について認知度を高めていく予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4241

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究（(2)－④）

【事業概要】

遺跡から出土する動植物遺体の調査を実施して、古環境や動植物資源利用の歴史を明らかにする。また、環境考古学研究の基礎となる現生標本を継続的に収集して、公開する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長　難波洋三

【スタッフ】

山崎　健(環境考古学研究室研究員)、松崎哲也（アソシエイトフェロー)、松井　章(客員研究員)、菊地大樹(京都大学人文科学研究所特別研究員 PD、客員研究員)、丸山真史(東海大学海洋学部講師、京都市埋蔵文化財研究所、客員研究員)、上中央子(客員研究員)

【主な成果】

震災復興事業に対する支援を行うとともに、各地の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を学会で発表した。また、研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製するとともに、３次元計測による骨格図譜を公開した。

【年度実績概要】

・磯草貝塚（宮城県)、金井東裏遺跡（群馬県)、保美貝塚（愛知県)、藤原宮跡、興福寺（以上、奈良県)、和歌山城跡（和歌山県)、東名遺跡（佐賀県）などの遺跡から出土した動物遺体や骨角製品を分析して、発掘調査報告書を作成した。

・藤原宮跡大極殿院、平城宮東院地区、平城京跡右京一条二坊四坪、西大寺旧境内で、古環境復原の調査を行った。

・東日本大震災の復興事業に伴う調査を支援し、有機質遺物の現場マニュアルとして『現場のための環境考古学（携帯版)』を作成して、配布した。

・現生標本の収集と公開では、ウシサワラといった貴重な標本を作製するとともに、貝類目録を作成して刊行した。また、遺跡から出土することの多い哺乳類（ヒト、イヌ、イノシシ、ニホンジカ、ウシ、ウマ）の主要骨格部位について、三次元計測による立体的な骨格図譜を奈良文化財研究所のウェブページで公開した。

・研究成果の発信として、日本動物考古学会、日本人類学会、生き物文化誌学会などの学会で研究発表を行った。

・研究成果の社会還元や普及事業として、海外研究者を招いた環境考古学の講演会を開催した。

３次元骨格図譜の Web ページ

【実績値】

論文等数：８件（①・②)

発表件数：７件（③・④)

【備考】

論文

①山崎健「埋蔵文化財における動植物標本の現状と課題」『学術の動向』20-5、27.5

②山崎健「農耕開始期における漁撈活動の変化―伊勢湾奥部を事例として―」『日本考古学』39、27.5　ほか６件

発表

③山崎健「動物遺体から見た文化誌」生き物文化誌学会第 13 回学術大会、27.6

④山崎健・松崎哲也「宮城県波怒棄館遺跡から出土した動物遺存体」日本動物考古学第３回大会、27.7　ほか５件

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4241
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	B	B	B	B

判定理由
適時性：地方公共団体からの要請を受け、発掘調査や整理作業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。また、現場マニュアルを配布して、緊急性の高い震災復興事業に伴う発掘調査を支援した。
独創性：非接触三次元レーザースキャナーによる現生骨格標本のデジタルアーカイブ化を実施した。とくに、遺跡から出土することの多い哺乳類の主要骨格部位について、三次元計測による立体的な骨格図譜を奈文研 Web ページで公開し、これまで行われていなかった標本活用方法を広く提供した。
発展性：幅広い時代や地域の動植物遺存体の調査研究を進めて、動植物利用の歴史を明らかにした。
効率性：一定の精度を確保しながら分析方法を工夫することで、緊急性を要する復興支援に対応しながら、全国からの調査研究の要請にも対応した。
継続性：研究の基礎となる現生標本を、継続的に収集・作製・管理した。
正確性：復興調査支援を含む地方公共団体からの多数の要請にもかかわらず、いずれの調査においても精度を確保して対応した。

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評定	A	A				

判定理由
論文等数：当初の目標 2 件を大きく上回る論文等を、査読誌を含む刊行物上で発表した。
発表件数：当初の目標 2 件を大きく上回る発表を、学会や研究会において行った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	緊急性を要する復興支援に従事しながら他の地方公共団体からの要請にも応えつつ、幅広い地域や時代の動物遺存体の調査研究を進め、研究の基礎となる標本の収集を継続的に実施し、さらに、遺跡から出土することの多い哺乳類の立体的な骨格図譜を公開し、新たな標本活用方法を提供したことと、論文や発表の件数が目標を大きく上回っていることによる。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間の最終年度にあたる 27 年度も、復興事業に対する支援を継続しながら、多くの学会や研究会などで講演や研究発表を行って、所期の目標を十分に達成している。また、これまで継続してきた三次元計測による立体的な骨格図譜を奈文研 Web ページで広く公開して、新たな標本活用方法を提供することで、一部、目標以上の成果も得られた。従って、所期の目標を十二分に達成しているといえる。以上のことを踏まえて、28 年度以降も現生標本の収集を進めるとともに、Web ページの更新・拡充を図る予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4311

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究((3)－①)

【事業概要】

博物館、美術館、図書館などの屋内環境におけるカビの予防、対策のみならず、寺社等の歴史的建造物や古墳環境などの屋外に近い、環境管理が難しい場所での制御方法についても検討を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室研究員　佐藤嘉則

【スタッフ】

犬塚将英（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、吉田直人（保存科学研究室長）、佐野千絵（副センター長）、岡田健（センター長）、小野寺裕子（研究補佐員）、藤井義久（京都大学教授・客員研究員）、間渕創（三重県立博物館学芸員・客員研究員）、木川りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室長）

【主な成果】

(1) 環境制御が難しい古墳環境において、浮遊菌の継続モニタリング調査をもとに設定した管理基準値を基に運用し、その効果や課題についての評価を行った。
(2) 博物館、美術館、図書館などの屋内環境において、保存環境の浮遊菌、付着菌、害虫生息状況を調査し、対策に関する基礎研究を実施した。
(3) 微生物の即時的なモニタリング手法として、新たな浮遊微生物分析機器を用いた評価手法の開発や ATP 測定法を応用した付着微生物量の評価手法の開発のための調査研究を実施した。
(4) 歴史的木造建造物を対象とした新しい殺虫処置である温風処理法についての基礎研究を実施した。
(5) フォーラムの開催、研修講師、寄稿を通じて、普及・教育活動を行った。

【年度実績概要】

(1) ある装飾古墳の観察室において、浮遊菌数で 1,000 生菌数/m^3 という数値を設定し、基準を超過した際に除菌清掃作業を行うといった、モニタリングと IPM に基づく対策とを連動させた管理体制を実践的に試行し、微生物制御が機能するかを調査したところ、これまでの曖昧な判断基準がより的確にかつ学術的に根拠のあるものとなり、管理手法に関する新しい考え方の一例を示すことができた。
(2) 博物館、美術館、図書館において、実際に虫菌害があった保存環境を調査対象とし、微生物及び文化財害虫の分布調査及びその対策についての検討を行い、近年の虫菌害被害の傾向と対策についての研究を進めた。被害事例の多くは、誤った IPM に基づく管理への変更（薬剤使用のみ中止）が発生原因であったことから、正しい文化財 IPM の教育普及が今後の継続的な課題として認識できた。
(3) これまでの培養に時間を要する微生物モニタリングでは、すぐに現状を把握することが不可能であったため、近年開発された即時性のある浮遊微生物分析機器を導入し、従来法との比較検討や適応可能性についての基礎研究を実施した。同様に、即時性のある ATP 測定法を応用した付着微生物量の評価手法の開発に向けた基礎研究を実施し、研究成果を学会や学術誌等で報告した。
(4) 虫害を受けた歴史的木造建造物において、化学薬剤を用いない環境低負荷型の温風殺虫処理法についての基礎研究を実施した。特に、処理が木材や彩色塗装に与える影響等について、試験用の試行装置を用いて基礎データを集積した。
(5) 臭化メチルの使用全廃 10 年に際して、文化財等の総合的有害生物管理（IPM）に関するフォーラムの開催（27 年 7 月）、文化庁主催の研修での講演（27 年 10 月、27 年 11 月の２回）、専門向け報告書（臭化メチル全廃から 10 年：文化財のＩＰＭの現在）や一般向け雑誌（機関紙『CLEAN LIFE』環境文化創造研究所）への寄稿を通じて、文化財 IPM の取り組みに関する教育普及を行った。
(6) 5 年計画の最終年度として、上記の成果を含む、これまでの調査研究成果を総括した報告書を刊行した。

古墳環境における微生物モニタリング調査

【実績値】

論文等　1 件（①）ほか 2 件、研究発表等　2 件（②、③）ほか 2 件、報告書等：2 件（④、⑤）、研究会：1 回

【備考】

① 間渕創、佐藤嘉則：博物館施設におけるバイオエアロゾル測定の活用について、「保存科学」55、pp.103-113　28 年 3 月
② 佐藤嘉則、犬塚将英、森井順之、矢島國雄、木川りか：虎塚古墳公開保存施設の管理方法変更による微生物汚染状況の推移、文化財保存修復学会 37 回大会、27 年 6 月 27 日、28 日
③ 小野寺裕子、小峰幸夫、木川りか：低酸素濃度殺虫法―25℃、27.5℃、30℃における処理期間の検討―、文化財保存修復学会 37 回大会、27 年 6 月 27 日、28 日
④ 「臭化メチル全廃から 10 年：文化財のＩＰＭの現在」、東京文化財研究所、27 年 12 月
⑤ 「文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究」、東京文化財研究所、28 年 3 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4311
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	A	A	A

判定理由
適時性：臭化メチルの使用全廃 10 年に際して、文化財 IPM に関するフォーラムの開催と研修での講演と専門向け報告書や一般向け雑誌への寄稿は、教育普及の点において、適時性があるといえる。
独創性：浮遊菌数で一定の基準値を設定し、基準を超過した際に除菌清掃作業を行うといった、モニタリングと IPM に基づく対策とを連動させた管理体制は、従来のリスク評価に用いられてきた基準値の概念を変えるものであり、独創性のある成果の発信ができたといえる。
発展性：大型の木造建造物への温風殺虫処理法は国内でも例がなく、化学薬剤を用いないため環境低負荷型の殺虫処理法であり、昨今の地球環境問題への適応を鑑みると、その基礎研究は今後の発展性が高い研究課題といえる。実際の建造物で適応可能な段階まで、基礎研究成果が集積されており、今後の展開が期待される。
効率性：年度内の業務計画を綿密に立てたこと、反復的な作業を外部に委託し新規性の高い研究に時間的投資をしたこと、科研費など外部予算と連動させながら、客員研究員他の大きな協力を得る枠組みを構築したことで、少ない人員で効率よく成果をあげることができたといえる。
継続性：幅広い研究課題を展開しつつも、プロトタイプとなりうる事例や課題については、定期・継続的な調査等を行うことができた。ある古墳環境のモニタリング調査は、５ヵ年に渡り継続したことで一定の成果を得ることができたことから、継続性のある調査研究を遂行したといえる。
正確性：実験データや成果の取りまとめに際しては、単独で行うことはなく、複数のスタッフ間で十分に審議し、議論を経たものを公表することで、正確性と客観性が担保されるように努めた。

２．定量的評価

観点	論文等	研究発表等	報告書等	研究会		
評定	B	B	A	S		

判定理由
論　文　等　：所期の目標の通り、成果を報告することができた。
研究発表等：所期の目標の通り、成果を十分に発表することができた。
報 告 書 等　：研究会参加者のニーズに応じる形で、2冊の報告書を刊行することができた。これまでの調査研究成果を総括する上で、質及び量的に充分であり、所内外の関係者に有益な情報を提供することができた。
研　究　会　：博物館・美術館・資料館等関係者、大学関係者等200名の参加があり、所期の目標130人を遙かに上回り、有意義な研究会を開催することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	屋内環境におけるカビの予防・対策では、保存環境の浮遊菌、付着菌、害虫生息状況を調査し、対策に関する基礎研究を実施することができ、寺社等の歴史的建造物については、新しい殺虫処置である温風処理法についての基礎研究を実施し、今後の展開につなげた。古墳環境では、浮遊菌の継続モニタリング調査をもとに設定した管理基準値を運用し、その効果や課題についての評価を行うと同時に、即時的なモニタリング手法として、浮遊菌分析機器を用いた方法やATP測定法を応用した方法の開発のための調査研究を実施した。教育普及においても、フォーラムの開催、研修講師、寄稿を通じて活動を行った。以上から、所期の計画以上の成果をあげ、業務を遂行することができたといえる。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化について、中期計画初年度の東日本大震災に伴う津波被災文化財等のカビ被害の基礎研究や初期対応の在り方について、国内外への論文成果の発信や国際シンポジウム等の開催などの成果をあげた。この間、継続して古墳環境における長期的なモニタリング調査を実施し、最終年度に合理的な対策を提案することができた点において、計画的に研究を遂行することができたといえる。また、教育普及においても、中期計画の最終年度に適時性のあるテーマでフォーラムを開催し報告書を刊行するなど、５ヵ年の研究成果などを計画的に発信することができたといえる。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4321

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究（(3)－②）

【事業概要】

高温・低温など最近の異常気象は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与え、様々な問題を生じている。環境データや材料の水分特性など基本的なデータを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。また、展示ケース等から放散する汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。総合的に文化財の保存環境の向上に資する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長　吉田直人

【スタッフ】

佐野千絵（副センター長）、呂俊民（客員研究員）、石崎武志（東北芸術工科大学教授・客員研究員）、北原博幸（トータルシステム研究所長・客員研究員）、間渕創（三重県総合博物館学芸員・客員研究員）、古田嶋智子（客員研究員）、石井恭子（研究補佐員）

【主な成果】

(1)　ファン付テスト用展示ケースを用いて多チャンネル温湿度測定を実施し、シミュレーションとの整合性を検討した。

(2)　ファン付清浄化ユニットを付けたテスト用展示ケースを用いて、吸着剤を利用した場合と、換気による場合の清浄化試験を行い、ガス濃度実測結果とシミュレーションから清浄化手法を比較検討し、検討手法を確立した。

(3)　展示ケースの空気環境清浄化に関する研究会を開催した。

(4)　本研究で得られた成果を国内の博物館・美術館等施設における環境改善に活用した。

(5)　中長期計画最終年度にあたり、報告書を作成した。

【年度実績概要】

(1) ファン付テスト用展示ケースによる多チャンネル温湿度測定とシミュレーションの整合性検討

・ファン付テスト用展示ケースを恒温恒湿室に設置し相対湿度に内外差を設けて、換気率を変えた場合、調湿剤を設置した場合のケース内の温湿度分布を実測した。またテスト用展示ケース内の気流を可視化し、解析し、シミュレーションとの整合性について検討した。

・換気率が上昇すると予想通りにケース外周の影響を受ける結果を得た。一方、予想を超えて、木質展示床の乾燥程度が、ケース内の相対湿度推移に影響を及ぼし、調湿剤の能力を定量的に検証する必要があることが新たにわかった。気流は設計したとおりに生じており、文化財周辺の流速を設計通りに抑えることができた。

ファン付展示ケース

・展示ケースにファン付ユニットを付設することで湿度調整、空気清浄化が行えることが明確になり、博物館等の文化財保存に有効な手段であることが実測とシミュレーションから判断できた。

(2) ファン付清浄化ユニットを付けたテスト用展示ケース試験とシミュレーションの整合性

・木質展示床をガス発生源とするテスト用展示ケース内で、ファン付清浄化ユニットに吸着剤を設置しケース内で空気を循環させ吸着剤により汚染物質を除去する清浄化方法と、ファンを利用して室内大気と交換し換気による清浄化を図る方法について、ケース内ガス濃度推移を実測した。また展示床を放散源に設定して、ケース内濃度推移についてシミュレーションを実施した。

・ケース内で空気を循環させ吸着剤により汚染物質を除去する方法が有効であることが分かった。また、室内大気が清浄であれば、換気による清浄化も有効であることが分かった。

・展示ケースの清浄化手法について定量的に検討でき、博物館等における文化財の保存に有益な成果が得られた。

(3) 研究会の開催

・「実験用実大展示ケースを用いた濃度予測と清浄化技術の評価」の研究会を開催し、放散ガスの種類と量、設置したファンによる気流性状、清浄化手法とケース内の濃度予測、清浄化事例と手法の提案について検討した結果を報告した(28 年 2 月 15 日、発表者：4 名、参加者数：135 名)。

(4) 本研究で得られた成果を速やかに国指定文化財公開のための環境調査や環境改善のための助言に生かした。

(5) 27 年度は中長期計画の最終年度にあたるため、23～27 年度の研究成果報告書を作成した。

【実績値】

学会発表　3 件（①、②、③）、論文発表　2 件（④、⑤）、研究会　1 回（⑥）、（参考値）報告書 1 件（⑦）

【備考】

① Tomoko Kotajima,Toshitami Ro,Chie Sano “Changing Gas Concentration in a Display Case using Low Emission Materials” 12th International Conference-Indoor Air Quality in Heritage and Historic Environments, 28 年 3 月 3-4 日,バーミンガム

② 古田嶋智子、呂俊民、林良典、須賀政晴、佐野千絵：美術館博物館展示ケースの空気環境に関する研究　その 2：実験用展示ケースの温湿度推移と分布、日本建築学会大会[関東]、27 年 9 月 4-6 日、平塚

③ 佐野、古田嶋、呂：展示台からの有機酸放散と遮蔽シートによる対策事例の評価、文化財保存修復学会大会、27 年 6 月 27 日、京都

④ 呂、古田嶋、林、須賀、佐野：試験用実大展示ケースを用いたケース内のガス清浄化と濃度予測、『保存科学』、28 年 3 月

⑤ 佐野、古田嶋、呂：展示ケース内有機酸濃度への展示台の寄与、『保存科学』、28 年 3 月

⑥ 研究会　「実験用実大展示ケースを用いた濃度予測と清浄化技術の評価」、28 年 2 月 15 日、東京文化財研究所

⑦ 「文化財の保存環境の研究」23～27 年度研究成果報告書、28 年 3 月

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4321

（様式2）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	A	B	A

判定理由

適時性：重要な文化財は展示ケース内での保管が推奨されるが、相対湿度安定のために気密性が高くなるように作られた展示ケース内には文化財に影響を与える汚染ガスも滞留する。清浄化技術の提案と各手法の評価は博物館等からのニーズも高く、正確性の高い研究を実施できた。

独創性：これまでケース内で空気を循環させる目的で設置されたファンを、換気にも利用できるように提案し清浄化を試みた点で、新規性の高い研究を実施できた。

発展性：得られた成果は、改築・改修、設備更新等、文化財を守る建物や設備に幅広く応用可能で、成果は速やかに公開されており、国内全体の保存の状況を改善する研究成果とすることができる。

効率性：研究協力について公示して応募してきた展示ケース製作会社と共同し作った実験用展示ケースを用いて、製作会社の各種試験機器や設備も利用しつつ研究を実施した点で、時間的投資、人的投資、設備的投資いずれも効率が良く研究を実施できた。

継続性：展示ケース製作会社と共同で研究を進めることで、シミュレーションでネックとなっていたCADが利用でき、さまざまな条件設定でシミュレーションを行って、研究を継続した。

正確性：校正された機器、センサー等を用いて測定を行った。展示ケース内の濃度推移についてはサンプリングによる影響も補正しており、計測値の正確性は高い。

２．定量的評価

観点	学会発表	論文発表	研究会			
評定	A	B	A			

判定理由

学会発表：26年度までの研究成果及び27年度の研究成果を、内容に応じて選択した学会でいずれのテーマも１本以上を速やかに発表した。これまでの研究成果を総括する上で有意義な学会発表を行うことができた。

論文発表：27年度の研究成果をすみやかに公開しており、研究が効率的に実施された。

研 究 会：展示ケース製作会社との共同研究の内容を検討協議して研究会を実施した。博物館・美術館の学芸員への参加に加えて、公開性を重視し、建築会社、展示デザイン会社、吸着剤メーカー、展示ケース製作会社等の参加も多く、研究機関及び各社の専門家と質の高い有益な研究交流が達成できた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	博物館・美術館や文化財を保管する展示ケース等の保存上の問題点を、根拠となる測定データを実測から得るとともに、コンピュータシミュレーションも活用し、展示ケース内の濃度予測や清浄化技術の評価を確立し、段階的な清浄化手法の提案を行った。博物館等からの要求の高い清浄化技術について、正確に、かつ効率良く実施できた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画の最終年度として、温熱シミュレーション、展示ケース内汚染ガス濃度推移シミュレーション、気流解析を行い、整合性を確認し、提案した清浄化技術のバックデータを正確に収集できた。これらの成果は美術館・博物館の環境改善に役立てることができるため、研究成果をすみやかに、国内外の学会や研究会で公開し、当所の技術力を国内外にアピールするとともに、充実した基礎研究ができた。 次期中期計画では、照明の大転換を主題とした研究を進めるが、空気清浄化手法についてプロジェクト成果をまとめた「空気清浄化マニュアル」（仮）を提案し、研究会や研修等で成果普及を図る予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4331

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究（(3)－③－ア）

【事業概要】

小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長　早川泰弘

【スタッフ】

犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（保存科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、三浦定俊（文化財虫菌害研究所・客員研究員）、城野誠治（企画情報部専門職員）、佐野千絵（副センター長）、岡田健（センター長）、木川りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室長）

【主な成果】

(1) 新たな小型可搬型調査機器の導入を図り、分析対象資料を拡大したその場分析を実施した。
(2) その場分析で得られた分析結果の信頼性を担保する目的で、分析精度向上に関する検討を実施した。機器の改良を図るとともに、分析用標準試料の整備、定量計算のための条件設定などを検討した。
(3) 科学的調査データの蓄積と解析を目的に、これまでに実施した絵画や工芸品等に関するデータ解析を進め、論文投稿・学会発表を行うとともに、調査報告書 2 冊を刊行した。

【年度実績概要】

5 年計画の最終年度として、以下に示す成果を得た。

(1) 小型可搬型機器によるその場分析
- 可搬型の蛍光Ｘ線分析装置、Ｘ線透過撮影装置、可視分光分析装置、デジタルマイクロスコープなど複数の機器を活用し、四季花鳥図屏風（サントリー美術館）、万国絵図屏風（宮内庁三の丸尚蔵館）、平等院鳳凰堂内彩色（平等院）、等の彩色・構造調査を実施した。
- 新たに導入した可搬型 FT-IR と他の可搬型機器を併用して、染織品（五島美術館、金沢能楽美術館など）の金属糸の材料・構造調査を行った。
- 新たに導入した可搬型イメージングプレート現像機を活用し、伊豆長八美術館、サントリー美術館等でＸ線透過撮影による構造調査を行った。

サントリー美術館でのＸ線透過撮影調査

(2) その場分析の高精度化
- 可搬型蛍光Ｘ線分析装置の安定性・安全性を向上させるために機器・架台の改良を行うともに、染織品の金属糸分析のための標準試料の整備と高精度定量計算の検討を行った。
- 有機質材料のその場分析のために、可搬型 FT-IR 分析装置による標準試料データの蓄積を図った。
- 可搬型イメージングプレート現像機を用いて、高解像度Ｘ線透過撮影の検討を行った。

(3) 調査研究成果に関する報告書
- これまでに実施した絵画や工芸品等の調査結果に対し、論文 2 件、学会発表 2 件の公表を行った。また、これまでに光学調査を実施した重要文化財四季花鳥図屏風（サントリー美術館）、及び平等院鳳凰堂内彩色に関する光学調査報告書を刊行した。

【実績値】

論文等　　2 件（①、②）
学会発表等　2 件（③、④）
報告書等　　2 件（⑤、⑥）

【備考】

論文等

① 武田裕子、早川泰弘：国宝「阿弥陀聖衆来迎図」の彩色材料に関する調査、保存科学 55、28 年 3 月
② 犬塚将英、早川泰弘：Ｘ線透過撮影による伊豆長八の作品の調査、保存科学 55、28 年 3 月

発表

③ 早川泰弘　城野誠治、三宅秀和：永青文庫所蔵　洋人奏楽図屏風の彩色材料調査、日本文化財科学会第 32 回大会、27 年 7 月 11 日、12 日
④ 神居文彰、早川泰弘、荒木恵信：国宝平等院鳳凰堂内　西面扉の押縁に施された文様及び色彩の想定復元，文化財保存修復学会第 37 回大会、27 年 6 月 27 日、28 日

報告書

⑤「四季花鳥図屏風　光学調査報告書」、28 年 3 月
⑥「平等院鳳凰堂内　光学調査報告書」、28 年 3 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4331
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	A	B	A	A

判定理由
適時性：最先端の小型可搬型機器を的確に導入し、安全性向上への改善を加えながら作品調査へ適用した。
独創性：複数の小型可搬型機器を駆使した多面的な情報による作品の評価を行った。
発展性：美術史学・金属学・染織史学等における新たな研究展開が見込める。
効率性：少人数の研究体制でありながら、数多くの調査を実施し、目標値を超える研究成果を挙げた。
継続性：同一手法による調査を継続することで、多くの作品を同一の基準に基づいて比較検討できる。
正確性：複数の調査手法を取り入れ、機器のトレーサビリティーを確保することで科学的客観性を担保している。

２．定量的評価

観点	論文等	学会発表等	報告書等			
評定	B	B	B			

判定理由
論文等：研究成果が 2 件掲載され（保存科学誌）、目標値を達成した。
学会発表等：研究発表を 2 件行い（日本文化財科学会、保存修復学会）、目標値を達成した。
報告書等：研究調査報告書（非売品）を 2 冊刊行し、目標値を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査研究の質・量ともに所期の目標を達成した。基礎的研究から応用的研究に至るまでの幅広い研究を少人員で効率的に進めている。27 年度は中期計画の最終年度として、科学調査データの一層の蓄積を進めるとともに、研究成果の公開（論文投稿・学会発表及び調査報告書の刊行）を積極的に推進した。より高精度な調査を実現するために、調査機器や分析条件等についてさまざまな検討や改善を行い、作品を所蔵する博物館・美術館、社寺等からの信頼も高まっている。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本中期計画では、その場分析の高度化と研究成果の蓄積・公開に努め、他機関にはない小型可搬型機器の充実を図るとともに、調査報告書については 27 年度 2 冊、本中期計画では全 8 冊を刊行することができた。小型可搬型機器によるその場分析と、研究室内での精密機器による高精度分析の両者を高いレベルで実践している機関は他になく、当所の技術力・信頼性を向上することができ大きな成果があった。一方で、調査データや画像等の蓄積が着実に進んでいる反面、未公表の調査データも膨大に存在する。今後は所有する調査結果をできる限り公開することに努めるとともに、美術史学・金属学・染織史学等関連分野の研究者との連携を一層深め、科学的調査に立脚した新たな研究展開を模索していきたい。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4332

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等（(3)－③－イ）

【事業概要】

ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要となるデータを収集するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長　高妻洋成

【スタッフ】

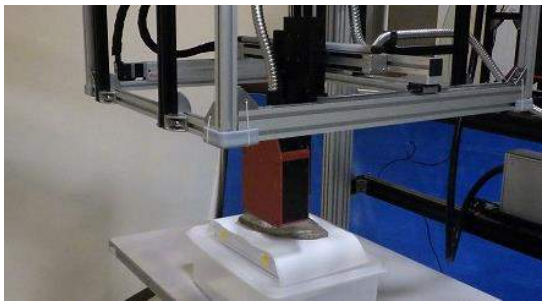
脇谷草一郎、田村朋美(以上、保存修復科学研究室研究員)、降幡順子(都城発掘調査部主任研究員)

【主な成果】

新規に導入されたテラヘルツ波イメージング装置の試験測定を行い、文化財資料の測定を実施し画像を取得した。26年度より引き続き収集した染料のテラヘルツ標準スペクトルの収集を行った。

【年度実績概要】

・国内で初めて生産されたテラヘルツ波イメージング装置に文化財の測定に使用できるよう改良を施した。
・　新規に導入し改良を施したテラヘルツ波イメージング装置を用いて、木材、漆喰、漆などの標準サンプルに対する試験測定を行い、性能の確認を行った。
・テラヘルツ波イメージング装置を用いて、中国内モンゴル自治区大召寺壁画片（フフホト市立博物館蔵）の測定を実施し、イメージング画像を取得した。
・26 年度より継続して収集していた染料の標準試料を用いて、染料のテラヘルツ標準スペクトルを収集した。



新規導入のテラヘルツ波イメージング装置
(ケーブルの取り回し、プローブの固定など文化財を測定するために改良を加えている。)

【実績値】

発表件数：4 件（①～④）
論文件数：4 件（⑤～⑧）

【備考】

発表

①犬塚将英・高妻洋成・杉岡奈穂子・福永香・碇智之「テラヘルツ波イメージング技術による高松塚古墳壁画の層構造調査」、文化財保存修復学会第 37 回大会発表要旨集、27.6.27-28

②金旻貞・高妻洋成「マイクロＸ線ＣＴを用いた絵画の層構造調査－層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技法の基礎調査－、日本文化財科学会第 32 回大会、27.7.11-12

③高妻洋成「テラヘルツイメージング技術の文化財非破壊診断技術への応用」、2015 International Symposium on Consevation of East Asian Cultural Heritage in Nara、27.8.27-28

④高妻洋成・杉岡奈穂子・犬塚将英・福永香・建石徹「文化財・美術品への THz 波イメージング技術の応用」、一般社団法人レーザー学会学術講演会第 36 回年次大会、27.1.9-11

論文

⑤犬塚将英・高妻洋成・杉岡奈穂子・福永香・碇智之「テラヘルツ波イメージング技術による高松塚古墳壁画の層構造調査」、文化財保存修復学会第 37 回大会発表要旨集、27.6.

⑥金旻貞・高妻洋成「マイクロＸ線ＣＴを用いた絵画の層構造調査－層構造調査へのテラヘルツ波イメージング技法の基礎調査－、日本文化財科学会第 32 回大会発表要旨集、27.7.

⑦高妻洋成「テラヘルツイメージング技術の文化財非破壊診断技術への応用」、2015 International Symposium on Consevation of East Asian Cultural Heritage in Nara、27.8.

⑧高妻洋成・杉岡奈穂子・犬塚将英・福永香・建石徹「文化財・美術品への THz 波イメージング技術の応用」、一般社団法人レーザー学会学術講演会第 36 回年次大会資料集、28.1.

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4332
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由

適時性：絵画等の支持体および下地の層構造を有する文化財に対する非破壊調査法として開発され、劣化の進む壁画等の調査に有効な手段となりつつある。
独創性：漆喰壁画の下地および壁体表面の構造調査に適用し、画像の取得に成功した。
発展性：新規に導入した国産初のテラヘルツ波イメージング装置を用いることで、より安全で精度の高い計測とデータ解析が可能となり、さらなる解析手法の開発と可視化技術の向上が期待できる。
効率性：国産の装置を導入したことで、装置の維持管理が容易になり、細かな改良等の迅速な展開が可能となった。
継続性：テラヘルツ波イメージングの解析手法を改善したことで、壁画等の絵画の層構造に関するデータの蓄積が可能となり、継続的にデータを集積することが可能となった。
正確性：テラヘルツ波を利用することで、絵画等の支持体および下地の層構造を正確に可視化することができた。

２．定量的評価

観点	発表件数	論文件数				
評定	A	A				

判定理由
発表件数：目標値である発表件数2件を上回った。
論文件数：目標値である論文件数2件を上回った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新規に導入した国産初のテラヘルツ波イメージング装置を用い、さらに装置に改良を加えたことにより、壁画や絵画の下地などの層構造を正確に可視化し、それらのデータを継続的に蓄積することができるようになり、文化財の調査技術・解析手法のさらなる発展・効率化を図ることができ、さらに、26年度に目標として掲げていた、染料の標準スペクトル収集についても27年度に実施できた。また、発表・論文件数は目標を上回ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26 年度策定した事業計画を予定通りに実施して、テラヘルツ波イメージング装置の改良と文化財への適用を実現できた。また、26 年度予定を変更した染料のテラヘルツ分光標準スペクトル収集も、27 年度は予定通り行った。以上のことから、今中期計画期間の事業は所期の目標を達成しているといえる。この様な成果を踏まえて、28 年度以降さらなる解析手法の開発と可視化技術の向上を図り、データの継続的な集積を進めていく予定である。

【書式Ｂ/研・セ】　施設名　東京文化財研究所　処理番号　4341
（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究（(3)－④）

【事業概要】
屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長　朽津信明

【スタッフ】
早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）

【主な成果】
(1) 石造文化財では、祇園橋（天草市）において天草砂岩製の石材の残存状況と周辺環境の影響に関する調査、大湯環状列石（鹿角市）など北東北の石造遺構のうち、既に保存処理された石材の保存状態に関する追跡調査などを実施した。
(2) 木造建造物では加賀市内神社（中嶋神社、稲荷神社）において材質の違いによる覆屋内環境と本体の保存状態の違いについて調査を終了した。
(3) 26 年度までに得られた成果について論文及び学会発表を行った。

【年度実績概要】
(1)石造文化財の調査研究
・砂岩の劣化機構解明と周辺環境影響に関する調査（祇園橋）（調査日：27 年 6 月 24 日）
祇園橋で見られる天草砂岩の劣化には、長崎出島でも見られた板状剥離に加えて蜂の巣状風化が主に視られる。周辺にある石切場でも調査を進めたところ、雨水が直接かからず蒸発が盛んな場所で石膏の析出が確認されるとともに、モース硬度やエコーチップ硬度計による硬度が低下するなど表面脆弱化がおきていることが確認できた。
・既修理物件の保存状態に関する追跡調査（寒冷地の石造遺構）
（調査日：27 年 5 月 26～28 日）
石造文化財の修復事例として 27 年度は寒冷地の石造遺構をとりあげ、過去の保存修理およびメンテナンス手法、現況に関する調査を行った。調査地：大湯環状列石（鹿角市）、伊勢堂岱遺跡（北秋田市）、御所野遺跡（一戸町）。
(2)木造建造物の調査研究
・材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査（中嶋神社、稲荷神社）
（調査期間：24 年 10 月～27 年 12 月）
ガラス張りの透明な覆屋（稲荷神社）と従来からある木板の雪囲い（中嶋神社）で、覆屋内の温湿度・照度・紫外線強度の調査を、約 1 年分の比較可能なデータを取ることができ 27 年 12 月で終了した。

国指定史跡・伊勢堂岱遺跡で保存処理された後に露出展示が続けられている、環状列石を構成する石材

【実績値】
論文等：3 件（①～③）
発表件数：4 件（④～⑦）

【備考】
論文等
① 朽津信明、渡邉尚恵、佐多麻美、森井順之：屋外石造文化財における金箔の保存条件に関する研究　『保存科学』55　pp.1-10　28 年 3 月
② 朽津信明、久住有生、前川佳文、早川典子：漆喰表面の劣化形態に関する実験的考察　『保存科学』55　pp.27-36　28 年 3 月
③ Masayuki MORII: Monitoring system for preservation of the Usuki stone Buddha by volunteer and scientific supports　ISSM2015　pp.39-44　National Science Museum, Korea　27 年 10 月
発表
④ 朽津信明、森井順之、犬塚将英、佐藤嘉則、日高翠、木川りか、尾崎源太郎、岡田健：石人山古墳における石棺装飾の保存に関する調査　文化財保存修復学会第 37 回大会　京都工芸繊維大学　27 年 6 月 27 日
⑤ 朽津信明、森井順之、西山賢一：砂岩製文化財の表面風化形態について　日本応用地質学会平成 27 年度研究発表会　京都大学宇治キャンパス　27 年 9 月 24、25 日
⑥ 森井順之：磨崖仏の覆屋内温度環境制御による保存について 2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム専門家会議　奈良春日野国際フォーラム甍～I・RA・KA～　27 年 8 月 26 日
⑦ Masayuki Morii, Shinobu Yamaji, Hironobu Ito, Takeo Yamamura and Tetsushi Toyoda：Reconstruction of the shelter for Buddhist image carved on tuff cliff　23rd ISCS Meeting, Edhinburgh　The British Geological Survey　27 年 5 月 20 日

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4341
（様式2）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
評定	A	A	B	A	B	

判定理由
適時性：既に樹脂等で強化された石造文化財は、次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高く、劣化要因及び保存環境に関する調査研究は常に求められる。
独創性：砂岩の剥離現象に対して周辺環境、特に水分移動に着目して劣化機構を解明しようとしているところに独創性が認められる。
発展性：材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査は、近年オリジナルを保存することが多い建造物の内外に描かれた壁画について、より良い保存環境条件の提案に役立つなどの応用性が期待できる。
継続性：屋外文化財の劣化状態と周辺環境の相関については、問題点の把握がより正確に行えるよう１年以上の調査期間を確保している。
正確性：覆屋内の環境については温度・湿度・照度・紫外線強度データロガーを用いた計測、剥離片の状態についてはエコーチップ、モース硬度、色差など規格化された手法により正確性を担保している。

２．定量的評価

観点	論文数	発表件数				
評定	A	A				

判定理由
論文数：26 年度までの研究成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。
発表件数：各種学会発表において屋外文化財の風化現象の解明やその対策について研究結果を発表し、当初の目標を十分に達成できたと言える。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	次期修理において何をすべきかについて所有者・管理者の関心が高い屋外文化財について、劣化要因及び保存環境に関する調査研究成果を出すことができた。特に出島旧石倉や祇園橋など、天草砂岩で見られる表面劣化機構の解明については高い独創性を有するとともに、材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査については、近年オリジナルを保存することが多い建造物壁画についてより良い保存環境条件の提案に役立つなど、応用性が期待できる研究を進めることができた。また、学会発表や論文等により、今まで得られた成果の公表も十分に行えた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5 年計画の 5 年目として、まとめとなる研究成果を得ることができた。石造文化財については、天草砂岩の劣化機構の解明を行うことができ、とくに雨水と蒸発のバランスに関する考察については、類似した劣化現象が見られる他の文化財に研究を発展させていくことができた。材質の違いによる神社覆屋内の保存環境調査では、今後の保存対策に役立てるために十分なデータを得ることができた。また、今後につながる課題も多く見つけられた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名　東京文化財研究所　　処理番号　4342

（様式１）

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する研究（(3)－④）

【事業概要】

自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長　朽津信明

【スタッフ】

森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）

【主な成果】

(1) 宝積寺九重石塔（大山崎町）の修理に併せて、現在の三次元形状を解析するなかで、過去の倒壊や積み直しに関する様々な情報が得られた。

(2) 震災の痕跡を伝える震災遺構に関して、既存の事例として根尾谷断層（本巣市）や野島断層（淡路市）における取り組みに関して調査を行った。

(3) 26 年度に実施した石灯籠の振動台実験結果について発表し、成果の公表に努めた。

【年度実績概要】

(1) 宝積寺九重石塔（大山崎町）の修理にあわせた調査（調査日：27 年 4 月 21 日、6 月 5 日）

京都府指定有形文化財・宝積寺九重石塔は阪神淡路大震災のあと塔の傾きが大きくなったことから、周辺の立入規制をかけて安全対策を行っていた。保存修復科学センターでは以前に三次元形状計測を実施していたが、27 年度石塔が解体修理されることとなり、三次元形状計測データの拡充及び解体後の部材の調査を行うことができた。その結果、積み直しが複数回あったことや積み直し時に石材を当初と違う向きで設置していたことなど、傾きが生じた原因について明らかとなった。

(2) 震災痕跡の保存状態に関する調査（実施日：27 年 12 月 16 日、28 年 1 月 15 日）

東日本大震災の震災遺構について議論されているいま、保存方法に関して将来問い合わせがある可能性があるため、既に指定を受けている震災遺構の保存に関する調査を開始した。27 年 12 月は特別天然記念物根尾谷断層（本巣市）の断層崖トレンチ展示施設、28 年 1 月は天然記念物野島断層（淡路市）の断層保存館において調査を行った。根尾谷断層の断層崖トレンチ展示施設では施設完成後水害で水没しており、その後の水害対策などについて多くの知見を得た。また、野島断層保存館では断層崖を覆屋内で保存しているが、外光が入る場所でも現在では植物の発生が見られないなど、保存管理の効果を確認した。

(3) 26 年度研究成果の公表

26 年度実施した石灯籠実物大模型の振動台実験結果をまとめ、「石灯籠の地震対策に関する評価」として日韓共同研究報告書に掲載した。

宝積寺九重石塔の解体作業

【実績値】

論文等数　１件（①）、発表件数　１件（②）

【備考】

論文等

① 森井順之、近藤希美、新津靖、御子柴正、花里利一：石灯籠の地震対策に関する評価　『日韓共同研究報告書 2015』pp. 59-70　東京文化財研究所／大韓民国国立文化財研究所　27 年 6 月

発表

② 安井佑佳、森井順之、中川貴文、花里利一：仏像の耐震対策に関する研究　EDEM を用いた実物大実験の解析　2015 年度日本建築学会大会学術講演会　東海大学　27 年 9 月 4 日

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4342

（様式2）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
評定	B	B	B	B		

判定理由

適時性：東日本大震災における南三陸町防災庁舎などの震災遺構について、将来保存方法に関する問い合わせの可能性を見据え、既存の震災遺構の保存に関して理念や方法に関する調査を開始した。

独創性：石灯籠の地震対策については研究例が無く、本研究成果が今後の地震対策に与える影響は大きい。

発展性：石塔の解体修理で得られたデータは、五輪塔や層塔等多くの石造文化財に応用可能である。

継続性：東日本大震災において震災遺構の問題は長期化が予想されるなか、慎重に調査研究を進めた。

２．定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
評定	B	B				

判定理由

論文等数：26 年度実施した実物大石灯籠の振動台実験の成果を中心に論文にまとめられ、十分な成果公表ができたと言える。

発表件数：以前に実施した乾漆像模型の振動台実験の結果について、数値解析による評価を行った結果について発表を行うことができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	阪神淡路大震災で傾きが大きくなったと言われる宝積寺九重石塔の調査から、石塔の構造安定性に関する様々なデータが得られ、他の石造文化財についても役立つ結果を得ることができた。また、東日本大震災関連では、2031 年まで宮城県が県有化をすすめている南三陸町防災庁舎など震災遺構の問題が出てきたことに対応し、既にある震災痕跡について保存の理念や展示方法について多くの情報を得ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究では、中期計画策定時に想定していなかった東日本大震災の発生を受け、災害発生時の対応とその結果への検証を経て、具体的な事例をもって将来にわたる防災対策の構築を行うことになった。その中で、被災地復興が長期化する中で、被災文化財一時保管施設の保存環境について有効な情報提供を行うことができた。また、これから問い合わせが予想される震災遺構についても、既にある震災遺構の保存理念や方法に関する系統立てた調査を開始した。石造文化財の構造安全性に関する調査では、26年度の実物大石灯籠を使った実験に加えて実際の石塔の解体修理で得られたデータなど、最終年のまとめとして多くの情報を得ることができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4351

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究((3)－⑤)

【事業概要】我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆、顔料などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これら文化財に使用される伝統技術及び材料や保存修理で使用する合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長　北野信彦

【スタッフ】朽津信明（修復材料研究室長）、吉田直人（保存科学研究室長）、早川典子（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（生物科学研究室研究員）、佐野千絵（副センター長）、本多貴之（明治大学理工学部専任講師・客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）

【主な成果】

27 年度は中期計画の５年目の最終年度にあたり、表装裂資料のデータベース化を終了させるとともに、文化財建造物の塗装彩色調査と修理に関する基礎資料の蓄積を図り、その調査実績を各所における塗装修理作業に役立てた。これまでの塗装彩色に関する調査報告の英文翻訳版を作成した。27 年度の研究テーマとして、建造物塗装修理材料としての日本産漆に関する研究会を開催した。また、本プロジェクトの取り組みと同じ理念と方法で実践している韓国国立文化財研究所の復元技術研究室の研究員の来訪を受け、それぞれの取り組みを報告する研究交流会を開催した。

【年度実績概要】

(1)平成 21 年度から継続して進めた表装裂資料のデータベース化を終了させ、広く利用できるような目録を完成させた。

(2)文化財建造物に使用する漆塗料の劣化状態の調査に関する悉皆調査を進めるとともに、Py-GC/MS 分析による塗装材料の性質の調査を行った。このような調査実績を日光東照宮陽明門、輪王寺三仏堂、旧鶴岡警察署庁舎などで実施されている塗装彩色修理の施工作業に役立てた。

(3)研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積して作業を完了させた。

(4)本プロジェクトが取り組んできた文化財建造物の旧塗装彩色の調査と修理協力に関する研究会内容を纏めた和文ブックレット刊行物『建築 文化財における塗装材料の調査と修理』『文化財建造物における塗装彩色材料の調査・修理・活用』の英語版の完全原稿を作成し、作業を完了させた。

(5)「文化財建造物の塗装修理に対する日本産漆使用の現状と課題」として、28 年１月 26 日（火)に「第９回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会」を開催した（於当研究所)。報告：1.文化財建造物の塗装彩色修理と漆塗装：北野信彦（東京文化財研究所)、2.文化財建造物への日本産漆 100%使用に向けて：清永洋平(文化庁)、3.岩手県浄法寺における漆生産の現状と課題：中村裕（日本うるし掻き技術保存会)、4.日光東照宮修復の歴史と日本産漆の使用：佐藤則武（日光社寺文化財保存会）5.総合討論

(6)「日韓における文化財建造物の塗装彩色研究の動向」として、27 年 10 月 20 日（火）に日韓文化財研究交流協議会を開催した（於当研究所)。報告：1.日本における塗装彩色の歴史と修理に向けた取り組み：北野信彦（東京文化財研究所)、2.韓国における丹青の研究動向：鄭 惠泳（韓国文化財研究所)、3.韓国の漆の研究現状：張 誠允〔韓国文化財研究所〕：4.総合討論

文化財建造物における漆塗装の劣化状態調査

【実績値】

発表数：報告書１冊　(①)、論文数２件（②、③)、研究発表件数　２件（④、⑤)

研究会数：２回　(参加者数：日韓文化財研究交流協議会 24 名、文化財における伝統技術及び材料に関する研究会：36 名)

【備考】

① 『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書 2015 年度』東京文化財研究所、28 年３月 24 日

② 北野信彦：陽明門西側漆箔板壁面に描かれた「大和松岩笹と巣籠鶴」の科学調査、大日光 85、p.20-27、日光東照宮、27 年８月 31 日

③ 北野信彦：当世具足の塗装技術に関する科学調査、甲冑武具研究 191、p.2-24、日本甲冑武具研究保存会、27 年８月 31 日

④ 北野信彦、佐藤則武、松村謙一、市川篤、北川和夫：日光社寺文化財の江戸期修理で用いられた金箔復元に関する調査、第 37 回文化財保存修復学会、京都工芸繊維大学、27 年６月 27 日

⑤ 北野信彦、犬塚将英、本多貴之、中右恵理子、武田恵理、何思縁、佐藤則武、浅尾和年：日光東照宮陽明門西壁面の唐油蒔絵の調査と修理、第 37 回文化財保存修復学会、京都工芸繊維大学、27 年６月 28 日

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4351
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	B	A

判定理由
適時性：日光東照宮陽明門、旧鶴岡警察署庁舎などの文化財建造物で実施されている塗装彩色修理施工、27 年 2 月 24 日の文化庁文化財部による「国宝・重要文化財（建造物）の塗装修理における漆の使用方針について（通知）」に関連した漆塗装の劣化悉皆調査を実施し、文化庁の施策に貢献した。
独創性：過去の塗装材料や彩色材料の調査方法として、Py-GC/MS 分析法をさらに応用して、日光東照宮陽明門東壁壁画の油彩画修理への協力、近代建造物塗料に関する調査を進め、当該分野に寄与することができた。
発展性：本プロジェクトでは特に風雨に晒されて劣化が著しい文化財建造物の塗装彩色の修理や、脆弱な漆塗料や有機質材料を伴う複合材料の資料を研究対象としている。これらの材質・技法に関する分析調査やその結果を考慮した手板試料の劣化促進実験を伴う基礎調査結果の蓄積は、今後国内のみならず、韓国などの海外においても同様の劣化が著しい文化財の保存修復方法の策定処に応用できるものと考える。
効率性：これまで開発した分析手法は、基本的には現有施設と人員を使用することで比較的多くの分析試料について短期間に結果を導き出すこと、この結果を実際の保存修復作業の現場にも生かせることを確認した。
継続性：実際の文化財建造物における塗装彩色修理は、タイトな期間内に比較的安価で効率よく、最大の効果を持って実施することが求められる。本プロジェクトの成果は幾つかの修復の現場の作業に効率よく反映させており、このアプローチ法を広く定着させる人材育成プログラム策定に寄与することが可能である。また、表装裂資料のデータベース化を７年間継続して進め、完了することができた。
正確性：本プロジェクト研究については、多方面の分野の研究者や技術者が係わっており、絶えず意見交換を行って正確性を高める努力をしている。特に調査結果を実際の国指定文化財である文化財建造物の塗装彩色修理などの施工に反映させる場合には、各種専門委員会に諮問した上で施工に適応されるシステムが構築されている。

２．定量的評価

観点	発表数	研究会				
評定	A	B				

判定理由
発表数：報告書１冊刊行、論文２件、研究発表２回を実施し、中期計画最終年度に、これまでの研究を総括的に公開する場として、所内外の関係者に非常に有用な発表を数多く実施できた。
研究会：2 回開催し、当初計画の通り達成することができた。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財建造物に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性･耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。さらにこの成果の一部を研究会や通じて公表するとともに今後広く当該取り組みを海外にも伝える英文翻訳も実施して目標値を満たしたのでＢと判断した。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本プロジェクトで実施している手法や調査結果が修理現場で応用される事例が増加している。そのため、中期計画で実施した取り組みは有効性があることが明らかになった。すなわち、中期計画の目標を達成したといえる。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4352

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財修復材料の適用に関する調査研究((3)－⑤)

【事業概要】文化財修復においては、使用する材料及び手法の適切な適用が修復後の作品の状態を大きく左右する。本プロジェクトでは、文化財の種類を問わず修復に用いられる材料について、修復現場での具体的な使用を念頭に材料の分析及び評価を行い、個々の材料について分野にとらわれず横断的な研究を行うことで、最適な使用方法や使用条件の確立を目指す。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長　朽津信明

【スタッフ】早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、佐藤嘉則（生物科学研究室研究員）、佐野千絵（副センター長）、岡田健（センター長）、本多貴之（明治大学講師・客員研究員）、酒井清文（客員研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、山下好彦（任期付研究員）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）、木川りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室長）

【主な成果】
(1) 絵画修復材料に関する化学分析、クリーニング方法の検討実験を行った。
(2) 建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価を行った。
(3) 工芸品の調査として、染織品及び漆芸品についての調査・分析をし、評価方法について検討した。

【年度実績概要】
(1)　絵画修復材料に関する科学分析及びクリーニング方法の検討実験
・ 過去に文化財に使用されたセロテープの除去を目的として、強制劣化試験及び各種溶媒による除去方法の検討を行った。また、酵素による合成樹脂の除去について、現場適用と同時に従来の材料との併用方法についても検討した。
・ 日本画で見られる緑青焼けについて、裏打ち紙の分析を行うことで劣化の状態を確認した。緑青焼け部分からは対照試料よりも有意に銅イオンが検出され、紙のセルロースへの関与が明示された。
・ 文化財修復に用いられるフノリについて調製条件による物性の差異を科学的に評価し、特に水の硬度による影響について重点的に研究を行った。
(2)　建造物等修理材料の現地曝露試験とその評価
・ 厳島神社において、大鳥居修理材料について現地曝露試験を行い、28 年度における修復に使用するために適切な材料の選択を行った。さらにそれら材料の改良及び評価試験を継続中である。
・ 臼杵磨崖仏で現地に設置している石材の修理材料について、剥離強度試験を乾燥条件及び湿潤条件下で行い、適切な使用方法の検討を行った。
(3)　工芸品の評価方法についての検討
・ 染織文化財について、地入れに使用されたタンパク質の存在の有無を非破壊分析できることを確認した。また、各種染料の可視光スペクトルの基礎測定を行った。

染織品の分析

・ 漆文化財については、硬化性の改良を検討した。銅触媒を用いることで、硬化性を失った漆を同じ反応機構で硬化させることに成功した。また、温湿度条件に関しても、従来よりも低温や低湿度などの環境で硬化することを確認した。

【実績値】
論文　1 件（①）、発表　11 件（②-⑫）、報告書 1 件

【備考】
論文
① 小川歩、早川典子：テトラクロロ銅（Ⅱ)酸カリウム二水和物添加による漆硬化の温湿度条件緩和の検討、保存科学 55 号、pp.11-26、28 年 3 月

発表
② Noriko Hayakawa: Scientific Approaches for Adhesives in the Conservation of Japanese Paintings, The Institute of Conservation, University of London, 27 年 4 月 9 日
③ 早川典子、大村卓也、原由宇稀、楠京子、貴田啓子、本多貴之：フノリ抽出物の物性に及ぼす抽出条件の影響 -温度・種・水の硬度-、文化財保存修復学会第 37 回大会、京都工芸繊維大学、27 年 6 月 28 日
④ 酒井清文、楠京子、早川典子、山中勇人、川野辺渉：ポリビニルアルコール分解酵素におよぼす接着剤および顔料の影響、文化財保存修復学会第 37 回大会、京都工芸繊維大学、27 年 6 月 28 日
⑤ 小川歩、山下好彦、早川典子：麦漆の接着強度評価と銅触媒添加によるミャンマー産漆への応用、日本文化財科学会第 32 回大会、東京学芸大学、27 年 7 月 11 日-12 日
⑥～⑫Keiko Kida, Yasuhiro Oka, Masamitsu Inaba, Noriko Hayakawa: Effect of malachite corrosion on the moleculer weight distribution of cellulose in lining paper used for color painting on silk, 10th International Symposium on Weatherability, 27 年 7 月 2 日　　ほか 6 件

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4352
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	A	B	B	A

判定理由
適時性：現在実際に修復されている作品に即し、即時性・緊急性の高いテーマ設定をしており、必要性・公共性が高い研究を行った。また、国際学会においても成果を報告し、かつ国内材料と海外の材料の比較についても現地調査をし、国際性の高い成果を得ている。
独創性：修復材料に関しての科学分析を現地調査と常に緊密に関連付けながら遂行しており、従来にはない視点で研究を進めることができている。
発展性：文化財の修復材料を横断的に扱うことで、俯瞰的・網羅的に研究を遂行できており、材料同士の相関のみならず文化財修復全体を視野に入れて発展させていくことが可能になる。
効率性：所内の横断的なメンバーにより研究を分担し、他機関からの調査派遣依頼等に基づき研究を推進しており、効率よく推進することを可能とした。
継続性：文化財修復材料に関する基礎的研究と現場への適用研究との両者を連携づけ、十分な成果を得られている。
正確性：複数の分析手法、多岐にわたる修復材料を網羅し、科学的客観性を確保している。

２．定量的評価

観点	論文件数	発表件数				
評定	B	B				

判定理由
論文件数：雑誌『保存科学』に、修理技術者の技術と材料に関する報告を掲載し、目標の件数を達成した。
発表件数：膠、豆糊、和紙、クリーニング方法について文化財修復学会で報告し、さらにイギリスIconやマテリアルライフ学会等において発表し、目標の件数をクリアした。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財修復に使用されている材料について、広範囲に網羅した研究を行い、それぞれについて科学的な分析評価を行うことで現場での問題点を具体的に解明し、かつ改善方法について提示することができた。実際の修復現場で、これらの成果が具体的に活用され始めており、基礎研究を遂行しながら、具体性、発展性の高い研究を行うことができており、今後は、さらに修復現場における適用性の高い研究へと発展することが可能である。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、文化財修復現場での適用を念頭に材料の精査を遂行できている。また、27 年度は材料のみならず修復現場で材料に関連した技術や、材料の劣化現象の解明等まで含めて成果を得ており、26 年度よりも研究を深めることができている。 中期計画最終年度である 27 年度において、その成果についての報告書も刊行した。

【書式Ｂ/研・セ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 4361

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究((3)－⑥)

【事業概要】

近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物等従来の文化財とは、規模、材質、製造方法等に大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両等の保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長　中山俊介

【スタッフ】

朽津信明（修復材料研究室長）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、石田真弥（アソシエイトフェロー）、佐野千絵（副センター長）、小林芳妃（研究補佐員）、山府木碧（研究補佐員）、小堀信幸（船の科学館・客員研究員）、横山晋太郎（客員研究員）、長島宏行（日本航空協会・客員研究員）、堤一郎（中央大学非常勤講師・客員研究員）

【主な成果】

(1) 産業遺産の保存と修復：産業遺産の保存理念と修復理念に関して、海外事例も含めた各種産業遺産の現地調査を行い、その結果をもとに研究会を実施した。

(2) 屋外展示物：屋外展示されている大型構造物、鉄道車両や航空機等の文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外曝露試験を行い、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。

(3) 建造物・構造物：佐渡金銀山遺跡、長崎県端島（軍艦島）、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉、原爆ドーム、足尾銅山遺跡等、史跡指定地内に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行った。

(4) 報告書：26 年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。

【年度実績概要】

(1)産業遺産の保存と修復：

・産業遺産の保存と修復に関する理念の研究を目的として専門家と共同で調査研究を行った。また、海外の専門家を招き、28 年 1 月 15 日に産業遺産の保護に関する保存・修復理念についての研究会を開催した（於東文研）。国内の専門家を交え、報告と討論を実施し、成果を挙げることができた。

・フランス及びイギリスにおいて、産業遺産の保存と修復に関する現地調査を実施した。

(2)屋外展示物：

・屋外展示されている鉄道車両や航空機などの、金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し、日本国内の 6 ヵ所において曝露実験を実施し、塗装の劣化と屋外環境との相関について調査を実施した。

(3)建造物・構造物：新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市韮山反射炉、山口県萩市の反射炉や長崎県長崎市端島(軍艦島)、原爆ドーム、更には足尾銅山跡の各施設等、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する現地調査を実施し、現状を把握するとともに、具体的な修復手法に関する討論を実施した。

(4)報告書：26 年度実施した研究会『洋紙の保存と修復』をまとめた報告書及び 25 年度発行した『テキスタイルに関する保存と修復』の英語版を制作し配布した。

(5)その他：航空機関連の設計図面、明治後期から大正期・昭和初期にかけて記録された関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法の研究を実施した。また、無形文化遺産部と共同で技術の伝承に必要となる道具の保存に関する調査研究を実施し研究会にて発表した。

【実績値】

論文等　3 件（①～③）、発表件数　5 件（④～⑧）、報告書刊行数　2 件（⑨、⑩）

【備考】

論文等

①中山俊介：洋紙の保存と修復、洋紙の保存と修復、pp. 5-10、28 年 3 月

②中山俊介：近代文化遺産としての道具の保存、無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究報告書、pp. 47-52、27 年 9 月

③中山俊介：道具の保存と活用、無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会Ⅱ（染色技術の伝承と地域の関わり）報告書、 pp. 7-13、28 年 3 月

発表

④中山俊介：近代文化遺産の保存理念と修復理念、近代文化遺産の保存理念と修復理念に関する研究会、東京文化財研究所、28 年 1 月 15 日

⑤中山俊介：近代文化遺産の保存と修復について、シンポジウム「国産旅客機の開発とその意義」、東京大学安田講堂、27 年 7 月 28 日

⑥中山俊介：(基調報告)近代文化遺産の保存と修復-産業遺産を中心に-、全国近代化遺産活用連絡協議会鉄道遺産部会 2015 愛知研修大会、勝川パレッタ会議室、27 年 11 月 6 日

⑦中山俊介：道具の保存と活用、無形文化遺産（伝統技術）の伝承に関する研究会Ⅱ（染色技術の伝承と地域の関わり）、東文研セミナー室、27 年 11 月 11 日

⑧中山俊介：「韮山反射炉本体の修復に向けて」、第 5 回伊豆の国市世界遺産シンポジウム、韮山時代劇場大ホール、28 年 3 月 5 日

報告書

⑨『洋紙の保存と修復』、東京文化財研究所、28 年 3 月

⑩『Conservation and restoration of modern textile』、東京文化財研究所、28 年 3 月

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4361
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	独創性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：産業遺産が続けて世界遺産登録される中、保存や修復の理念がきちんと確立していない現状を踏まえ、保存や修復理念の確立及び手法や材料の研究を積極的に行った。
独創性：これまで確立されていない産業遺産の保存や修復に関する理念について、国内外の産業遺産についてその保存と修復手法に関する調査研究を実施することができた。
発展性：産業遺産の保存と修復はこれからますます事例が増えることが予想され、保存及び修復理念を早期に確立し、現場における適要が期待される。
効率性：テーマを絞ることで高い専門性を持った研究者や技術者との交流も生まれ今後の情報収集にも大いに寄与する体制が構築できた。
継続性：屋外保存された金属製文化財の維持に最も必要である塗装の耐久性及び防錆効果に関する研究のために行っている曝露実験は長期にわたる金属製文化財保存の維持に貢献する。
正確性：これまでに実施した現地調査の結果、現場にて劣化状態を観察し、これまでに得た知見・知識をもとにそれに適した修復手法の選択を行った。

２．定量的評価

観点	論文等	発表件数	報告書刊行数			
評定	B	B	B			

判定理由
論文等：洋紙の保存と修復に関する論文と無形文化遺産部と共同で研究を実施した技術の伝承に関する道具の保存に関する調査の論文などを発表し、当初計画の目標を達成した。
発表件数：27年度調査した産業遺産の保存と修復理念に関する調査結果、また、技術伝承に必要となる道具の保存に関する調査、航空機の保存に関する調査結果などの成果を4件発表し当初計画の目標を達成した。
報告書刊行数：洋紙の保存と修復に関する調査研究成果をまとめた報告書及び26年度に刊行したテキスタイルの保存と修復に関する報告書の英語版の2冊刊行し当初計画の目標を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することができた。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点等も新たに把握することができた。世界遺産登録された国宝富岡製糸場、史跡高島炭坑跡等産業遺産の保存と修復に関してその理念に注目しながら現地を調査研究し、その結果に基づいて研究会を開催し多くの貴重な知見を得ることができ、また新たなる研究者との連携も可能となった。また、無形文化遺産部と共同で実施した技術伝承に必要となる道具の保存と活用に関しての調査研究では、必要とされる道具の製造を取り巻く環境が非常に厳しい時代となっていることが明らかになり、何らかの手だてを講じる必要があることが確認されたのと同時に、既に文化遺産と位置付けられるような道具に関して、保存していく手法の模索が必要であることも確認された。更に今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得ることができた。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	産業遺産の保存理念と修復理念に関する調査研究及び研究会を通じて今中期計画の５年目として当初の計画とおり調査研究を順調に遂行することができた。それに加えて屋外保存されている金属製文化財の保存手法の調査研究、技術伝承に必要となる道具の保存と活用に関する調査研究を実施し現状を把握することができた。28 年度から始まる新たな中期計画に向けて、産業遺産の保存と修復理念等の調査研究をさらに深めていく必要がある。それとともに、近代文化遺産の特徴である、多種多様な材料に関する基礎的な調査研究も続けていく必要がある。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4411

(様式１)

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)

【事業概要】我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　岡田健

【スタッフ】
佐野千絵（副センター長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、吉田直人（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、酒井清文（客員研究員）、宇高健太郎（日本学術振興会特別研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、加藤雅人（国際情報研究室長）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（鎌倉女子大学講師・客員研究員）、前川佳文（絵画保存修復士・客員研究員）、木川りか（九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室長）

【主な成果】
クリーニング効果の期待できる酵素群の利用に関する研究を継続実施し、キトラ古墳壁画では漆喰の再構成のための修復材料の検討を行った。修理施設の生物・温湿度環境モニタリングを行ない、安全な保存環境の維持を図った。劣化原因調査で採取された両壁画由来の微生物株について整理と公的機関への寄託についての準備を行った。高松塚古墳壁画の色料について、奈良文化財研究所と共同で調査を行った。

【年度実績概要】
○高松塚古墳壁画
・生物・環境調査：修理施設内での害虫等生息調査、浮遊菌・付着菌量、また温湿度推移のモニタリングを継続し、安定した保存環境の維持に努めた。また、適切な空調制御方法を検討するための、現状のプロセス解析を行うシステムを構築した。
・高松塚古墳の微生物分離株を保存していくため、菌株のデータ集、基本台帳やシークエンスデータファイルの作成を進め、公的機関への寄託を開始した。
・修復研究：壁画のクリーニング方法として、酵素の使用方法に関して、現場での作業性の向上を検討し、適用した。また、表面の再結晶部分についての継続的な確認も行っている。
・材料技法調査：色料の分析調査を継続的に実施している。奈良文化財研究所との共同によって可視反射スペクトル測定等を行った。
○キトラ古墳壁画
・生物・環境調査：キトラ古墳に由来する微生物株についても、高松塚古墳由来の微生物株と並行して、基本台帳と DNA シークエンスデータファイルの作成を進め、公的機関への寄託を開始した。
・修復研究：漆喰の再構成を行うために、修復材料の検討を行った。28 年度の展示公開に向けて、最終的な色や再構成手法の確認を行った。また、表面のクリーニングのために酵素の使用を検討し、汚れの状態によって異なるクリーニング手法を適用することを確認し、現場適用をした。
・材料技法調査：これまでに取得した可視反射スペクトルデータ等の整理、解析を行った。
○その他
・27 年 10 月 31 日～11 月 8 日に実施された文化庁による国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して研究員（4 人）を派遣し協力した。
・福岡県うきは市所在の装飾古墳群での環境観測を継続した。
・古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、27 年 5 月 14 日、9 月 17 日、11 月 30 日、28 年 2 月 23 日の 4 回にわたり、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を開催した。

【実績値】
研究報告 1 件

【備考】
学会発表 1 件
木川りか、喜友名朝彦、立里臨、佐藤嘉則、佐野千絵、杉山純多、宇田川滋正、建石徹：キトラ古墳の微生物調査結果：発掘直後から埋戻しに至る期間（16 年～25 年）の微生物相と考察、日本文化財科学会第 32 回大会（H27.7.11-12 東京学芸大学）

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 4411
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	適時性
評定	B	B	A	B	B	B

判定理由
適時性：石室が発掘された 16 年度から埋め戻しされた 25 年度までのキトラ古墳内微生物相の推移について取りまとめた結果を学会発表するなど、作業の進展状況の精査、記録、公表を適切に行った。
独創性：両古墳の石室等から採取された微生物株は、今後の古墳環境における生物劣化研究に資する重要な資源であり、将来に残し、活用するために公的機関への寄託を開始した。
発展性：酵素によるクリーニング手法の開発など、他の文化財への応用が期待できる。
効率性：害虫、微生物、温湿度のモニタリングを継続することにより、問題点の迅速な発見と対処を行うことができ、安定した環境の維持を実現した。
正確性：客観的な調査データをもとに適切な材料選択を行い、修復作業に反映させることができた。

２．定量的評価

観点	研究報告					
評定	B					

判定理由
微生物調査結果に関する重要な成果の公表を1件行った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	両古墳壁画の文化財としての価値を守り続けるために必要な調査研究を継続して行ない、またその成果を適宜公表してきた。 材料調査と修復作業との連携、修理施設の環境改善に関する文化庁・奈良文化財研究所との連携、将来における高松塚古墳壁画の保存活用に向けての奈良文化財研究所の考古学調査との連携も適切に図られている。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高松塚古墳壁画は「将来的には、カビ等の影響を受けない環境を確保した上で現地に戻す」という保存方針のもと、またキトラ古墳壁画は展示施設の完成を控え、着実に修復やそのための材料の検討が進んでいる。両壁画が保管されている高松塚古墳壁画修理施設において生物被害を防ぎ、また適切な温湿度を維持するためのモニタリングも継続し、安定した保存環境の実現に大きく寄与している。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4412

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)

【事業概要】我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施し、文化庁が行う高松塚・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行う。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 玉田芳英

【スタッフ】

廣瀬覚、降幡順子、青木敬、林正憲(以上、都城発掘調査部主任研究員)、大谷育恵(考古第一研究室アソシエイトフェロー)、金宇大（考古第二研究室アソシエイトフェロー)、前川歩(遺構研究室研究員)、内田和伸（文化遺産部遺跡整備研究室長)、中島義晴（文化的景観研究室主任研究員)、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員)、高妻洋成(埋文センター保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、同研究員)、杉岡奈穂子(同アソシエイトフェロー)、辻本与志一(同客員研究員)、石橋茂登（企画調整部飛鳥資料館学芸室長）若杉智宏(同研究員)、井上直夫(同写真室再雇用職員)、栗山雅夫(同技術職員)

【主な成果】文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、仮設保護覆屋解体作業の立会調査や解体後の記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討にするにあたり、技術的な支援・協力を行った。

【年度実績概要】

○高松塚古墳

・石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、石室解体作業の選択型三次元動画作成を行った。また、目地漆喰の保管兼展示用の台座を作成は、①南壁石－東壁石 1 間、②北壁石－東壁石 3 間、③北壁石－西壁石 3 間の 3 点について、三次元レーザー計測で形状を記録し、同データを用いて作成した。また台座作成とともに、保管する際に漆喰の剥落および粉状化を防ぐため、漆喰表面に樹脂を塗布し仮強化処置を行った。

・壁画の保存修復（劣化原因）について、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査、試験板を用いた紫外線蛍光スキャニングの安全性評価などを実施した。

・石室解体に伴う発掘調査時の埋戻し、及び仮整備工事の状況に関する図面類、写真の整理・収集を行い、壁画修理後における整備の基本方針検討のための基礎資料を作成した。

・27 年 10 月・11 月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際し、解説員として研究員（のべ 10 人）を派遣した。

○キトラ古墳

・発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、発掘調査の三次元動画作成準備を行った。

・墳丘整備前に墳丘部分、整備後には周辺地形も含め、三次元レーザー測量を実施し、記録化した。

・墳丘および周辺の整備工事に伴う立会調査を実施し、完成後に写真撮影を行った。

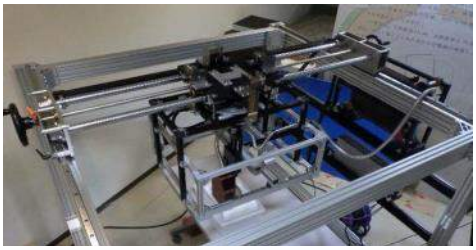
・墳丘および周辺の整備内容につき、助言を行った。

・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に建設予定の体験学習館の展示内容につき、会議に 14 回出席し、資料提供と助言を行った。

・キトラ古墳天文図につき、国立天文台の研究者と共同研究を実施し、観測年代等につき、新たな分析結果を得た。その成果を基に飛鳥資料館で展示を行い、『キトラ古墳天文図星座写真資料』を作成、刊行した。

・報告書未掲載の出土遺物である骨片 19 箱分について、クリーニング、強化処置、接合などの保存処理を実施した。

・出土遺物の定期的な点検作業、環境モニタリングを実施した。



壁画保存修復のためのテラヘルツ測定予備実験

【実績値】発表件数：7 件（論文等 4 件①～③⑦、講演会等 2 件④⑤、展示 1 件⑥)

【備考】

①廣瀬覚「高松塚古墳の墳丘調査の意義－今後の調査・整備にむけて－」『第 26 回考古学研究会東海例会資料集』(28 年 2 月)

②犬塚将英・高妻洋成・杉岡奈穂子・福永香・碇智文「テラヘルツ波イメージング技術による高松塚古墳壁画の層構造」『文化財保存修復学会第 37 回大会研究発表要旨集』pp.332-333（27 年 6 月)

③Junko Furihata、「Conservation Project for the mural paintings of Takamatsuzuka tumulus in Japan」『UNESCO Expert Workshop on Conservation of Mural Paintings』(27 年 6 月)

④石橋茂登、齋藤正晴「古代人が見た星宙～キトラ古墳に学ぶ天文学のすすめ」中之島フェスティバルタワー12F アサコムホール（27 年 10 月 18 日)

⑤石橋茂登、井上直夫、髙柳雄一「プラネタリウムで考古学～キトラ古墳の星空が語るもの～」多摩六都科学館サイエンスエッグ（27 年 11 月 8 日)

⑥飛鳥資料館『キトラ古墳と天の科学』(27 年 10 月)

⑦『キトラ古墳天文図星座写真資料』(28 年 3 月)

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4412
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	B	A	A

判定理由
適時性：キトラ古墳の整備・体験学習館の開館を 28 年度に控え、27 年度は立会調査および記録作業や展示内容に関する指導助言の実施等において、質量ともに従来を大きく上回った。
独創性：当研究所の独自性を活かし、保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・整備・活用に助言を行った。また、キトラ古墳に関する調査研究の蓄積を活かし、飛鳥資料館における展示公開（特別展「キトラ古墳と天の科学」（27 年 10 月 9 日～11 月 29 日）を開催し、写真資料集を刊行した。
発展性：壁画・装飾古墳や緊急性を有する文化財の保存・活用に対する新たな方向性を示すことができた。
効率性：立会調査での指示等により、キトラ古墳周辺の整備作業を迅速に実施することができた。
継続性：整理作業・分析調査を継続的に遂行し、今後の高松塚古墳・キトラ古墳の保存・活用にむけ、貴重な成果を得た。
正確性：発掘調査の成果を再現動画の作成や古墳整備に正確に反映させることができた。特に 27 年度は、調査研究成果の蓄積を活かし、国立天文台と共同でこれまでとは異なる角度からキトラ古墳天文図の検討を行うなど、さらに正確な調査研究を進めた。

２．定量的評価

観点	論文数					
評定	B					

判定理由
発表件数：当初予定の 7 件を達成した。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化庁の要請に基づき、随時、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用について、適切な技術的協力を行った。特に、キトラ古墳の整備・体験学習館の開館を28年度に控え、27年度はキトラ古墳周辺の整備活用に向け、質量ともに従来を大きく上回る立会調査、記録作業、専門的知識・技術に基づく協力等を実施した。また、調査研究の成果を講演会、展示、刊行物等によって積極的に公表した。27年度は特に、キトラ古墳天文図についての調査研究およびその成果の公表を国立天文台と共同で実施するなど、これまでの調査研究成果の蓄積に異なる角度から検討を加え、予想を上回る貴重な調査研究成果を得ることができ、その成果の公開活用も特に積極的に行った。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画の 5 年間における調査および技術的協力により、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用事業に迅速かつ適切に対応し、中期計画の目的を達成することができた。今次中期計画では、古墳の整備・公開・活用面に資する調査研究、技術協力、指導助言等を特に積極的に実施し、大きな成果を得た。高松塚古墳・キトラ古墳等の装飾古墳の保存・活用について、保存科学、考古学等の多方面から長年にわたり調査研究を実施してきた当研究所ならではの経験・蓄積を活かし、今後も引き続き次期中期計画を実施するための見通しを得ることができた。

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4421

(様式 1)

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－②)

【事業概要】国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の整備工事にともなう調査

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 玉田芳英

【スタッフ】

廣瀬覚、降幡順子、青木敬、林正憲、西山和宏(都城発掘調査部主任研究員)、和田一之輔（考古第一研究室研究員)、川畑純、清野陽一（以上、考古第三研究室研究員)、前川歩（遺構研究室研究員)、金宇大（考古第二研究室アソシエイトフェロー)、福嶋啓人(遺構研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(企画調整部写真室再雇用職員)、飯田ゆりあ(同アソシエイトフェロー)、高妻洋成(埋文センター保存修復科学研究室長)、脇谷草一郎、田村朋美(以上、同研究員)、杉岡奈穂子(同アソシエイトフェロー)、辻本与志一(株式会社文化財保存・埋文センター客員研究員)、中島義晴（文化遺産部主任研究員)、内田和伸（文化遺産部遺跡整備研究室長)、高橋知奈津（同研究員)、石橋茂登（企画調整部飛鳥資料館学芸室長)、若杉智宏(同研究員)

【主な成果】

国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の整備にともない、パネル内容や体験学習館の展示内容につき助言等を行った。また、整備工事に伴い発掘調査と工事立会を実施した。発掘調査地は 26 年度の飛鳥藤原 184 次調査区の南側にあたり、平安時代以降と推定される遺構を確認した。

【年度実績概要】

・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に設置予定の解説パネルの内容につき、資料提供と助言を行った。

・国営飛鳥歴史公園(キトラ周辺地区)内に建設予定の体験学習館の展示内容につき、国土交通省飛鳥歴史公園事務所が行う会議に 14 回出席し（定例会 5 回、分科会 6 回、実行委員会等 3 回)、資料提供と助言を行った。

・公園予定地の整備事業にともなう発掘調査と工事立会を行った。

調査地は明日香村南西部の檜隈寺跡が所在する丘陵上に位置する。27 年度は、①飛鳥藤原第 184 次発掘調査区の南側にあたる檜隈寺周辺の発掘調査、②檜隈寺東方の雨水排水溝設置、檜隈寺北方の「情報案内施設」へいたる園路の設置、檜隈寺東南の「体験工房」周辺の舗装に伴う掘削、公園予定地内の植栽、電灯とベンチ設置、境界杭設置、以上の工事に伴い立会を実施した。

調査地：①(発掘調査)檜隈寺回廊の東南方。26 年度の飛鳥藤原第 184 次調査区の南側。
②立会檜隈寺東方の雨水排水溝、「情報案内施設」周辺の園路、「体験工房」周辺の舗装、公園予定地内の植栽箇所、電灯設置場所ならびに配電経路、ベンチ設置場所、境界杭設置場所

調査期間：27 年 6 月 15 日～28 年 3 月 18 日

調査面積：①18 ㎡　②4,527 ㎡

調査成果：発掘調査で調査区の北東部分で原位置から移動した礎石 1 点、平安時代以降の柵の柱穴 2 基を確認した。また、礎石が位置する調査区南壁際で礫と瓦を多量に包含する溝を確認した。

出土遺物：瓦、土器、礎石

発掘調査区全景 遺構検出状況(南西から)

【実績値】

調査日数　51 日

(参考値)

出土遺物　軒丸瓦 3 点、軒平瓦 2 点、丸平瓦 コンテナ 5 箱、礎石 1 点

記録作成数　遺構実測図 4 枚、写真(4×5)12 枚、デジタル写真 18 枚、デジタルメモ写真 632 枚

【備考】

【書式Ｂ/研・セ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 4421
（様式２）

自己点検評価調書

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B

判定理由
適時性：28 年度開館予定の公園整備のパネルや展示施設に対し専門的な助言等を行った。また、発掘調査等により国営公園整備事業の事前調査として迅速に対応した。
独創性：公園整備・展示施設設置のために協力を行った。また発掘調査等により文献資料に乏しい檜隈寺について、発掘調査により新たな知見を得た。
発展性：今後の檜隈寺周辺の実態解明に対し、貴重な資料を得た。
効率性：緊急性の高い開発事業の事前調査として迅速に対応するため、最小限の人数と期間で必要な調査成果を得られるよう、入念な準備を行うとともに適切かつ効率的に調査を実施した。
継続性：公園整備に対する資料提供や助言を継続的に行った。檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査を実施した。
正確性：今後の調査研究に資するよう、遺構・遺物の地域的・年代的特性を踏まえ、正確かつ的確な記録を作成した。

２．定量的評価

観点	調査日数					
評定	B					

判定理由
当初の計画通り、緊急性の高い開発事業に随時、適切に対応し、のべ51日間の発掘調査及び立会調査を行った。

３．総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に対し、随時・適切な技術的協力を行った。奈良・平安時代における檜隈寺の歴史、檜隈寺周辺の実態解明について重要な資料を得た。

４．中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の５年間における、国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に対し、随時・適切に資料提供、専門的助言、技術的協力を行い、檜隈寺の全体像復元、歴史の解明に向けて貴重な資料を得るなど、中期計画の目標を着実に達成することができた。文献資料に乏しい檜隈寺周辺の研究の蓄積を加えることができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、併せて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田沢裕賀
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後・収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を学会・研究会・学術雑誌・ 書籍等に発表・公開した。			
【備考】 ・学会研究等発表件数：88 件 ・論文等掲載数： 103 件 ・小山弓弦葉工芸室長が、『「辻が花」の誕生―〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』（東京大学出版会、24 年 3 月刊行）により、第 12 回(27 年度)日本学術振興会賞と、第 12 回（27 年度）日本学士院学術奨励賞を受賞した。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費の獲得により、調査研究を基礎とした研究成果を特集展示など社会的な関心に対応しつつ順次公開し、所蔵品の管理や展示・外部への貸出等研究以外の業務に多くの時間を割きながらも研究成果の蓄積を果たしており、過去に比べて遜色のない成果をあげている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画に基づき、順調に進捗している。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-2

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）特別調査「法隆寺献納宝物」（第 37 次）（(5)-①）

【事業概要】東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和 54 年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田沢裕賀

【主な成果】

(1)前年に引き続き、古今目録抄の調査を実施し、報告書を刊行した。

・古今目録抄（聖徳太子伝私記）の翻刻のための調査を行った（27 年 8 月 25・26 日、12 月 10 日）
（客員研究員・奈良大学文学部教授　東野治之、早稲田大学文学学術院教授　新川登亀男）
報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報 37　古今目録抄下表・裏』を刊行した。

(2)通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査を行い、本格修理のための事前準備をすることができた。
（25 件）法隆寺宝物館で保管する上代裂のうち、「I-337-1　白地朝顔文描絵布襪残欠」（正倉院伝来）ほか 25 件について調査を行い、これに基づいて本格修理を行った。

「I-337-1　白地朝顔文描絵布襪残欠」修理前

修理後

【備考】

(1) 古今目録抄（聖徳太子伝私記）調査日数　3 日
報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報 37　古今目録抄下表・裏』（28 年 3 月 31 日発行）

(2) 染織品調査「白地朝顔文描絵布襪残欠」（正倉院伝来）ほか調査件数 25 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査を実施することができた。また、古今目録抄については、計画どおり概報を刊行できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間中、法隆寺献納宝物の絵画、書跡、金工の各種作品を様々な観点から調査し、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画における「有形文化財の保存と活用を促進するため、所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査を行う」という観点を達成することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)　特別調査「書跡」第 13 回（(5)－①）

【事業概要】当館の収蔵品・寄託品の中で、奈良時代から江戸時代におよぶ書跡・典籍、古文書などを調査する。その成果は、総合文化展の展示や目録の刊行等によって公開しており、図版目録として『日本書跡篇和様 I』、『古写経篇』などを刊行している。27 年度は、法隆寺宝物館の未整理品調査で新たに見つかった 150 点余りの幡の芯板の中で、木簡を転用したとみられるもの、及び古写経などを対象とした。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　髙橋裕次

【主な成果】

(1) 新たに見つかった幡の芯板は、幡本体の上部に芯として入れられた板である。調査では、形状と大きさによって全てを分類し、墨書の有無などを確認した。その結果、10 点ほどに墨書が確認され、他にも切り込みなどから木簡状の木製品と考えられるもの、墨書がどうか要検討のものが数点あった。そこで、名称、制作年代、形状、形式、寸法、材質、文字等について調書を作成した。

(2) これらの木簡は、法隆寺献納宝物中に伝来する幡との関係や、その書風などにより、飛鳥時代末から奈良時代の前半にかけて制作されたと考えられる。したがって、伝来品としては、最古の部類に属する木簡として、古代の法隆寺の歴史を検討する上で、極めて貴重な資料であるといえる。

調査研究の様子

(3) 古写経は名称、制作年代、形状、寸法、奥書等、出典、料紙などの調査を行った。固着してほとんど開披ができない状態の 5 巻については、経文の書風などより、いずれも奈良時代 8 世紀の写経とみられるため、今後の本格修理によって、全貌を明らかにし、研究を進めて、展示・公開の向上に寄与する予定である。

【備考】
調査件数：幡の芯板 150 件、古写経 8 件
調査日数：3 日間
調査人員：のべ 24 名（東京国立博物館、九州国立博物館、奈良文化財研究所）
調書作成：37 枚

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究成果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究の推進及び展示・公開に寄与するところが大きい。27年度は未整理の資料を対象として、詳細な調査を行い、所期の目標を達成できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って、計画どおり作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示・公開の向上に寄与するという所期の目標を達成している。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)　特別調査「工芸」第７回（(5)－①）

【事業概要】東京国立博物館における文化財のうち、金工・陶磁・漆工・染織・刀剣・甲冑等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館 3 館及び文化庁・東京文化財研究所の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の体調や他業務を鑑み、27 年度は陶磁・染織の調査会を行うこととなった。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長　小山弓弦葉

【主な成果】

(1) 陶磁（27 年 8 月 7 日（金）～8 日（土）　2 日間）

京都国立博物館にて、文化庁が所蔵する日本・中国の陶磁器を含めて、3 館（東京国立博物館・京都国立博物館・九州国立博物館）が所蔵する作品の相互活用に関する調整・意見交換を行った。また、京都国立博物館所蔵の中国陶磁、及び近年寄贈となった松井コレクションの中国陶磁の調査を行った。調査点数は 2 日間でおよそ 50 点余り。参加者は、伊藤嘉章京都国立博物館副館長、降矢哲男研究員（京都国立博物館）、酒井田千明アソシエイトフェロー（九州国立博物館）、今井敦文化庁主任文化財調査官、三笠景子研究員（当館）　以上 5 名

(2) 染織（28 年 3 月 22 日（月）、30 日（水）、31 日（木）　3 日間）

東京国立博物館には、大倉集古館が所蔵する能装束・能道具が 217 件寄託されている。その多くは江戸時代中期から江戸時代後期の製作で、一部、安土桃山時代から江戸時代初期のものも含まれている。備前藩池田家がかつて所蔵されていた大名家の能装束として資料価値の高いこれらの資料の悉皆調査を 27 年度より 3 ヵ年行うこととした。27 年については、3 日間で 35 件を調査した。参加者は、遠山記念館学芸員・水上嘉代子氏（客員研究員）、共立女子大学教授・田中淑江氏（客員研究員）、東京文化財研究所・菊池理予研究員、工芸室長・小山弓弦葉、同研究員・三田覚之、同非常勤職員・宮本いづみ　以上 6 名

大倉集古館所蔵能装束の調査

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各機関の陶磁・染織の専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁及び京都国立博物館が所蔵する陶磁の各種作品を様々な観点から調査した。また、平成27年度に寄託を受けた大倉集古館所蔵の能装束調査を通して、大名家における能装束の実態についてさまざまな知見を得た。それらの調査成果を工芸史研究ならびに当館の展示に反映させるべく、中期計画の「有形文化財の保存と活用を促進するため、所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）特別調査「彫刻」第５回((5)-①)

【事業概要】

社寺等所蔵の仏像、 神像彫刻を調査し研究報告論文活動に結び付け、あるいは寄託増加や特別展等の企画につなげて展示の質の向上を図った。

27 年度は、東京国立博物館所蔵の法隆寺献納宝物のうち伎楽面（33 点）の新規撮影を行うとともに、作品調査による研究会を開催し、宮内庁正倉院事務所及び文化庁の職員と意見交換を行い、活用の道を探った。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長　丸山士郎

【主な成果】

(1)27 年 10 月 27 日～29 日、28 年 1 月 25 日～26 日の 2 度にわたり、伎楽面の新規撮影を行った（撮影：列品管理課登録室主任・藤瀬雄輔)。通常、法隆寺宝物館の展示室に保管・展示されるため、展示ケースの改修をしている 27 年度は、カラーフィルムの乏しかった伎楽面の新規撮影が実施可能で、破損の甚だしい 3 点を除く、全ての伎楽面についてデジタル撮影データが得られた。

(2)28 年 1 月 29 日、独立行政法人国立文化財機構所属の彫刻担当者を中心に、作品調査による研究会を開催し、伎楽面の表現、技法、保存・管理についての調査研究を行った。参加者は、丸山士郎（企画課特別展室長)、淺湫毅（学芸企画部博物館教育課講座室長)、竹内奈美子（列品管理課貸与・特別観覧室長)、三田覚之（学芸企画部博物館教育課教育普及室研究員)、西木政統（学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー)、津田徹英（東京文化財研究所企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)、皿井舞（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）のほか、西川明彦（宮内庁正倉院事務所保存課長)、奥健夫（文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官)、川瀬由照（文化庁文化財調査官)、井上大樹（文化庁文化財調査官）である。

(3)研究成果は、今後の展示計画に活かすとともに、論文や執筆や図録等の作成をしていく予定である。

伎楽面調査風景

【備考】

撮影回数：2 回（5 日間）
研究会回数：1 回
研究会参加者数：11 名
調査作品数：33 点

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	伎楽面の新規撮影は、展示ケースの改修を行っている27年度しか行えず、破損の甚だしいものを除いて全点のデジタル撮影データが得られたことに加え、伎楽面の取り扱いにおける有識者を交えての意見交換が行えたことで、今後の調査研究及び展示・活用の可能性がひろがったことにより、おおむね所期の目的は達成できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通り順調に進行している。次期中期計画以降、論文の執筆や図録等を作成し成果を公表する必要がある。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-6

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)油彩画の材料・技法に関する共同調査（(5)－①）

【事業概要】
本研究は東京藝術大学との共同研究で 20 年度から開始し、24 年度に継続の手続きを行い、続行しているものである。東京国立博物館所蔵の油彩画約 150 件の中から、明治期を中心とした約 50 件を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルＸ線写真、蛍光Ｘ線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで藝大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。28 年度に再び継続の手続きを予定している。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室長　土屋裕子

【主な成果】
(1)A-11305「興津富士」、A-11308「森」、A-11306「海景」、A-11307「上野大仏」、A-11306「海景」、A-11250「西村茂樹像」のＸ線透過撮影（28 年 2 月 16 日）
A-11306「海景」、A-11250「西村茂樹像」の調書作成（28 年 3 月 11 日）
A-11306「海景」、A-11250「西村茂樹像」の調書作成（28 年 3 月 18 日）
(2)高橋源吉の一連の作品を調査することにより、当該作家の作画技法や材料についてより詳しい情報を得ることができた。また、「上野大仏」については、作品の詳細な観察などにより、「鎌倉大仏」というこれまでの名称には誤りがあることが判明した。プロトデータなどへの反映を行なう予定である。
(3)光学調査を基にした作品のデータおよび新知見などの所見は今後『MUSEUM』で発表の予定である。また、今回の調査で名称の変更が必要となったものについては、手続きを行なうこととする。

「西村茂樹像」の状態調査作業

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は、博物館側担当者のスケジューリングに困難があったこと、藝大の研究室においても、請負の修理作業で時間がとりにくかったという理由などがあり、調査回数及び点数が限定されたが、館内の光学機器での調査も進め、確実にデータ蓄積を行なっている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一連の調査によって徐々に東京藝術大学の同時期の作品群及び他館が収蔵する作品との比較研究が可能になってきている。特にＸ線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータ間の比較によって、作品の特性のみならず、関係性などについても新たな検討ができるデータが整いつつある。また、作品の高精細画像は、展示の際に使用するパネルや、館内職員が執筆する『MUSEUM』の図表に利用されるなど、中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。課題となるのは、研究の公開部分であるため、引き続き、契約を更新し、28年度からはこれまでの結果を積極的に発表していきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-7

業務実績書

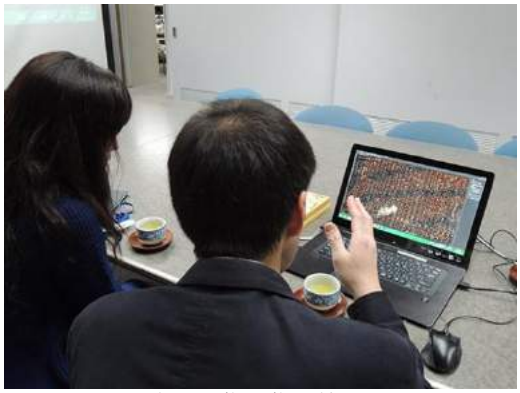
中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7）東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査（(5) －①）		
【事業概要】東京国立博物館所蔵の仏教絵画を対象として、東京文化財研究所が持つ高精度のデジタル画像調査技術による共同調査を行い、仏教絵画の価値認識を深め、劣化しない長期保存可能な最高レベルの記録を作成し、作品の保護に寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長　田沢裕賀

【主な成果】

(1) 26 年度に東京文化財研究所が高精細デジタル画像撮影を行った「孔雀明王像 A-11529」について、TIFF 高精細画像を受け入れ、調査成果の共有化を図った。また、当館・東京文化財研究所両施設研究員による検討会を開催し、撮影画像をもとに用いられた技法を詳細に観察、検討し、今後の平安仏画の美的表現の研究・公開に資するに足る重要な資料を得た。

(2) 当プロジェクトによって既に調査を行った物件のうち、「普賢菩薩像 A-1」について、得られたデータと検討に基づいて、論文（小林達朗（東京文化財研究所）「東京国立博物館蔵国宝・普賢菩薩像の表現および平安仏画における「荘厳」」『美術研究』416 号）を発表した。

(3) 来年度以降出版物で調査成果を公開する準備を行った。



孔雀明王像画像の検討

【備考】

検討会回数　1 回（28 年 1 月 29 日　於東京文化財研究所）

論文発表　1 件　小林達朗（東京文化財研究所）「東京国立博物館蔵国宝・普賢菩薩像の表現および平安仏画における「荘厳」」『美術研究』416 号、27 年 8 月、pp. 1-15

作成データ量　TIFF 高精細画像　50 点（全図・分割 22 点、部分図 28 点）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	共同研究に関しては、高精細画像をもとに細緻な装飾表現に関して検討を行い、小林達朗（東京文化財研究所）「東京国立博物館蔵国宝・普賢菩薩像の表現および平安仏画における「荘厳」」『美術研究』416号研究に示されるように論文として発表できる段階まで研究精度が高まった。一方これまで、年度末に行ってきた次年度調査作品の高精細デジタル画像撮影に関しては、次年度の早い時期での撮影として調整中である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「有形文化財の保存と活用を促進するため、所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って東京国立博物館所蔵の平安仏画を対象として高精細デジタル画像撮影技術を用いた調査と研究が行われ、研究成果が論文により公開された。また次年度以降、一般向けに公表される準備もなされている。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8）創立150周年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究((5)－①)

【事業概要】34年度の東京国立博物館創立150年へ向けて、『東京国立博物館150年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。27年度は館内から収集した文書類の目録作成に加え、館内各所で保管されている文書類の確認と目録化を進め、保存措置を講じる。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長 井上洋一

【主な成果】

(1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（27年4月7日～28年3月29日：週に1～2日）

資料保管室（資料館3階）に収集した約8,500件の館史関係文書類について調査し、目録(仮)を完成した。混在する刊行物の抜き出しを行い、目録と対応するための付箋挿入をするなど整理を進めた。また、ダンボール箱に入っていた文書類を一部中性紙箱へ入れ替えするなど、保存措置を講じた。以上は、資料整理アルバイト1名を雇用し、東京国立博物館百五十年史編纂室員とともに作業を行った。

(2)東京国立博物館百五十年史編纂ワーキング打合せの実施(27年6月12日ほか)

『150年史』編纂のためのワーキング打合せを実施した。編纂物の内容の方針を決定した。

(3)館史の内容に即した文書類の整理・確認

a)臨時全国宝物取調局関係資料（27年6月2・3日ほか）

明治20年代に実施した臨時全国宝物取調に関する資料の調査を行った。古写真紙焼き約4,000枚、ガラス原版約1,400枚の現状確認と目録化を進めた。また、館内各所に保管される関係資料の確認を行った。

b)東京国立博物館平常展（総合文化展）展示室構成資料（27年11月13日ほか）

歴代の平常展の展示室構成資料を収集し、変遷表を作成するとともに、関連調査を進めた。変遷表については、平常展(総合文化展)のリニューアルに向けた参考資料として提出した。

(4)文書類のデジタル撮影・デジタル化（27年4月13日～30日ほか）

館史資料のデジタル撮影を進めるとともに、『東京国立博物館百年史』編纂の際に用いられた資料・原稿等のPDF化を進めた。

(5)目録の館内公開（27年7月22日）

目録化の終わった文書類の目録(資料保管室分約8,500件、資料館地下収蔵庫保管分約2,500件)と、これまで公開していなかった館史資料（2,431件）とあわせて、同一エクセルファイルの目録を作成した。その目録を東京国立博物館内部ガルーン上にて公開しはじめた。

(6)問い合わせへの対応（27年7月24日ほか）

館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。

【備考】(1)収集した文書類の整理：55日間実施
(2)編纂ワーキング打合せ：6回実施
(3) a)臨時全国宝物取調局関係資料の整理・確認：16日間実施
b)東京国立博物館平常展（総合文化展）展示室構成資料の整理・確認：10日間実施
(4)文書類のデジタル撮影：13日間実施550カット撮影、資料・原稿等デジタル化：31件約500点
(5)目録の館内公開：約13,431件の目録公開
(6)問い合わせ対応：5件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度より継続的に収集した文書類の整理・目録化・保存措置について進めることができた。また、作成した目録を館内で公開し、個別の調査にも発展的に利用可能となった。展示構成の変遷表作成においては、収集・整理した文書類のデータを活用することができた。引き続き、館内各所に所在する文書類の収集整理を課題とするとともに、それらの文書類を『150年史』編纂に有効に活用できるようにするとともに、ほかの事業にも役立つようなデータ作成を行っていく。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	目録を館内公開したことにより文書類の活用が可能となり、館史に関わるさまざまな作業に対応できるようになったことから、中期計画に対する進捗状況は順調である。次年度以降も引き続き文書類の整理を進めるとともに、さらなる活用を図っていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-9

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9）板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】21 年度東京国立博物館に一括寄贈された約 1 万件に及ぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行い、データベース作成・公開への準備を進める。また、各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田沢裕賀

【主な成果】

(1) 作品調査

東京国立博物館所蔵の板谷家伝来資料について、約 480 点（5,000 カット）の撮影を終了するとともに、並行して新たな知見の整理、絵画資料の調査を行った。また板谷家関連の作品調査として、27 年 8 月 17 日に埼玉・個人宅にて、板谷家歴代の作品 37 点の調査を行った。8 月 18 日には、東京・根津美術館で、板谷家が画流のもとと考えていた南都・春日関連の作品調査を、紙の博物館にて板谷絵所が模写したと伝えられる『若一王子縁起絵巻』模本の調査を行った。28 年 1 月 28 日には、祐天寺調査を行った。

また、週 1 回を原則として整理した作品の画題等を検討する研究会を開催した。

これによって、板谷家伝来資料中に今まで確認されていなかった江戸城障壁画下絵や、オランダ国王に贈られた屏風の下絵などが含まれていることが確認され、資料としての重要性が明らかとなった。

(2) 展覧会開催

28 年 1 月 2 日～2 月 14 日東京国立博物館平成館企画展示室を会場として、板谷家における絵画の制作活動と関わりのある下絵類を合わせ、屏風一双を含んだ 15 件によって、特集「江戸幕府御用絵師板谷家の仕事」を開催し、これらの成果を一般向けに紹介した。

(3) 報告書刊行

23 年度から 27 年度までの調査成果をまとめた報告書「板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究」を作成・刊行した。

(4) データベース公開

23 年から調査した板谷家伝来資料 172 件を試行としてデータベース公開し、その利用性と内容を検討して 28 年 6 月、約 2,000 件を公開する準備を行った。

根津美術館での調査

【備考】

科学研究費補助金事業 5 年計画の 5 年目
館外調査 3 回
研究会 35 回
平成 23～27 年度科学研究費補助金研究成果報告書「板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究」刊行（28 年 3 月 31 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	板谷家は幕府御用絵師でありながら、作品の存在や活動状況はあまり明らかとなっていなかったが、板谷家作品の所在や、板谷家伝来資料に作品制作の状況を示す資料が多く含まれていることが確認されるなど、本調査によって新たな知見が多く得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿った調査を実施し、板谷家伝来資料の重要性を示す多くの資料を確認し、それらをもとに、御用絵師の実態を報告書の刊行、当初の予定を上回る2回の展示を通して広く示すことができた。 一方で、作品の保存状況から、調査撮影できなかった資料もあった。この中には正本としての作品が現存するものの下絵の可能性があるものも含まれている。今後これらを修理し継続的に調査することでより多くの成果が期待できる。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-10

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10)中世聖徳太子絵伝の図像展開に関する調査研究(科学研究費補助金)（(5)－①）

【事業概要】本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものであり、あわせてデジタル画像による最新版の画像資料データベースを作成することを目指している。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室主任研究員　沖松健次郎

【主な成果】

(1)　27 年 11 月 6 日及び 28 年 1 月 21 日、茨城県坂東市の妙安寺にて重文　聖徳太子絵伝 4 幅　鎌倉時代・14 世紀の調査及び撮影を行った。

(2)　当館カメラマンによる高精細デジタル撮影を行うことで、妙安寺本の資料画像を整備することができた。

(3)　他の説話画研究の一環として、当館に寄託されている志度寺縁起が修理に入るのを機会に、寄託の 2 幅分に加え、その他の 5 幅についても蛍光Ｘ線による顔料分析を行い、特に白色顔料について鉛系とカルシウム系の顔料の使用傾向に、幅によって違いのあることが分かり、中世の説話画制作における顔料使用の状況を知る上で貴重な情報を得ることができた。(27 年 10 月 27 日～29 日、12 月 14 日～16 日)

妙安寺での調査・撮影

【備考】
科学研究費補助金事業の 5 年計画の 4 年目
現地調査：2 箇所（各箇所 2 回）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初は35ミリ判相当のデジタル1眼レフカメラのみでの撮影を行っていたが、今回から館の映像作製室で使用している中判相当の8千万画素のデジタルカメラによる撮影を行うことにした。そのことにより、画像精度や色調整精度が向上し、画像資料としての質をより向上させることができた。また、関連説話画研究として、志度寺縁起の顔料分析を詳細に行い、貴重な情報を得られるなど重要な成果があった。このことは、説話画研究のみならず、中世絵画の顔料の使用に関する実情を知る上で、今後の研究の進展に結びつく端緒を開くことができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査を実施し、撮影や作品情報の収集について、精度を高めることができ、その要領をつかむことができた。また、当館に寄託されている縁で、修理に際し、志度寺縁起全６幅の顔料分析を実施でき、白色顔料の使用傾向に関するまとまった情報を得られたことは、太子絵伝のみでなく広く説話画、中世絵画の表現・技法を考える上で、当初計画を超える収穫であった。28年度の調査でも可能な限り反映していく計画である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-11

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11)模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)－①)

【事業概要】本研究は模写資料を調査することによって、書の受容や鑑賞の歴史を明らかにしようとするものである。東京国立博物館の蔵する模写資料の調査を実施し、写真撮影をして、ホームページ上で画像を公開する。また関連作品の調査、関連資料のデータ収集を行なうことから、個別研究も進めていく。東京国立博物館においては、模写資料に関する展示を企画し、模写を通じた鑑賞を提示するとともに、多様な鑑賞のあり方を示す。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室・主任研究員　恵美千鶴子

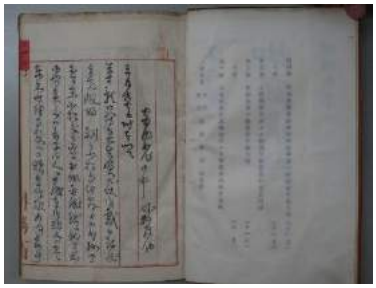
【主な成果】

(1) 東山御文庫(御物)の原本調査(27 年 10 月 28 日)
勅封御物である書跡の原本調査を実施した。近衛家に代々伝わった書跡で、近衛家熙ほか様々な模本が残されているものである。当館に伝わる関連の模本を前もって調査した。この原本調査では、透き写しの有無や原装丁の検討などできたが、特に表具は、当館所蔵作品との関連性が確認できた。

(2) 九州国立博物館での調査(27 年 10 月 17 日)
九州国立博物館において模写資料の調査を実施した。

(3) 大阪歴史博物館にて調査(28 年 3 月 11 日)伝藤原行成筆の書跡を調査。
藤原行成の筆跡の受容史を検討するために新たな知見を得ることができた。

(4) 厳島神社との調整(27 年 9 月 1 日)
厳島神社には国宝「平家納経」の模本作成に関わる文書類が保管されている。その文書類の調査のための事前調整を厳島神社担当者と行なった。



関連データ収集のための
宮内庁公文書の撮影

(5)模写資料のデジタル撮影と画像公開(27 年 8 月 10 日ほか)
東京国立博物館が所蔵する模写資料のデジタル撮影を行ない、画像管理システムに登録、ホームページ上で公開をし始めた。また、大阪歴史博物館の調査においてもデジタル画像での撮影を実施した。

(6)成果の公開
学術雑誌『ビオ・シティ』において、模写資料を中心に研究した書の受容や鑑賞の歴史に関する小論文を発表した。また、藤原行成の筆跡の受容史については、その研究成果を、28 年度の東京国立博物館の展示（特集「藤原行成の書　その流行と伝称」28 年 8 月～9 月）で広く公開する予定である。

【備考】
・学術研究助成基金助成金の 3 年計画の 3 年目
・調査回数 17 回
・デジタル画像撮影点数 156 点、ホームページ上画像公開点数 524 点
・関連データ入力点数 2,316 点
・論文発表件数
「藤原行成の尊重　直筆の記録『敦康親王初覲関係文書』」ほか計 4 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度も継続的に模写資料の調査と撮影を進めることができ、これまでに撮影したデジタル画像をホームページ上で公開しはじめることができた。研究成果は、学術雑誌にて定期的に発表することができ、その集大成を28年度の展示（特集）として予定することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査を実施することができた。また、27年度は研究内容の集約に努め、日々の業務の中で随時調査研究を進めるということが効率的・継続的に進められ、着実に成果を得られることができた。引き続き研究を進めるとともに、研究成果の公開を実施していきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-12

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12）博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)-①）

【事業概要】
本研究は、幕末期における西欧の博物館との接触から、維新後における博物館の創設を経て、帝室博物館の成立に至る明治期を中心とした博物館史を、世界史的な視野で再構成するための基礎的な資料調査と研究を、特に所蔵品の流通に着目して行おうとするものである。
対象地域としてドイツ、イギリス、オーストラリアを選び、三ヵ年にわたって当時の文書や交換・寄贈された文化財を調査する。　あわせて、館史資料の撮影を進め、館史資料の公開・共有を目指す。

【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	考古室長　白井克也

【主な成果】
(1) 館史資料の調査
過去２ヵ年で撮影した『列品録』『重要雑録』『動物録』の高精細デジタル画像を、元の冊子別に整理するとともに、『重要雑録』『動物録』について項目一覧表を作成した。
主に『列品録』の英国・ドイツ等の関係記事の釈読を進め、実物の『列品録』の調査も実施して内容を確認した。
(2) 目録類、『例規録』の高精細デジタル撮影を行った。
(3) 列品調査
ライプツィヒ民族学博物館からの寄贈品について 27 年 6 月 3 日（水）に調査した。
グラスゴー博物館寄贈品と、クリストファー・ドレッサー寄贈品について、グラスゴー博物館ユーピン・チュン氏と共同で 28 年 1 月 29 日（金）に調査した。
(4) 聞き取り調査
27 年 5 月 26 日（火）にスコットランド国立博物館のロジーナ・バックランド氏に、同館所蔵の日本関係作品の由来についてインタビューした。
27 年 6 月 10 日（水）に東京大学の梶野絵奈氏に、明治時代の日本における西洋楽器や、当時の欧米における楽器産業と万博のかかわりについてインタビューした。
(5) 現地調査
国内調査として 27 年 6 月 22 日（月）に九州国立博物館で、同館に管理換された旧列品（ドイツのライプツィヒ民族学博物館寄贈品ほか）を調査した。
国内調査として 28 年 2 月 10 日（月）に北海道大学で、ウィーン万博出品写真帳を調査した。
海外調査として 27 年 7 月 19 日（日）～25 日（土）に英国のスコットランド国立博物館、ポロックハウス、バレルコレクション、グラスゴー博物館で、東博との交流にかかわる文書調査と作品調査を実施した。
海外調査として 27 年 12 月 14 日（月）に韓国・国立中央博物館で、総督府博物館当時の資料を調査した。
海外調査として 28 年 2 月 22 日（土）～27 日（土）にオランダのアムステルダム国立美術館で、明治期の日本美術の入手経緯と現在の展示状況を調査した。
(6)　メンバーと研究協力者による勉強会，公開研究会を開催し、館史資料を釈読し、調査成果や今後の方針を確認した。公開研究会については成果を報告書としてまとめた。

【備考】科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目
勉強会回数　9 回　　聞き取り調査回数　4 回
現地調査回数　5 回
デジタル撮影枚数　7,000 コマ
公開研究会実施　28 年 3 月 17 日「明治期博物館の国際的な文化財交換」（報告書『平成二十七年度成果報告　公開研究会「明治期博物館の国際的な文化財交換」』として刊行）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	27 年度予定していた現地調査、館史資料のデジタル撮影・釈読などを滞りなく終えることができたうえ、国内外の関連分野の研究者との意見交換などにより、今後の研究の展望をひらくことができた。特に、館史資料の記述を補う海外の文書を得ることができ、交換の経緯を解明できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	27 年度は予定していた調査・撮影を滞りなく終えるとともに日本の西洋音楽史などとの連携にも成功した。さらに、研究成果の公開も行うことができ、これらの成果は東京国立博物館百五十年史の編纂にも資するものであり、中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を着実に実施することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-13

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	13）能狂言面の美術史的アプローチによる基礎的調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－①）

【事業概要】能狂言面は能楽の道具として芸能史研究の中で注目されてきた。一方、美術史ではその卓越した造形は認知されているものの、美術史研究に必要な基礎データ、多角度からの写真、制作年代や作者、伝来を特定できる基準作例が乏しいため、美術史的手法を用いた研究はほとんどされていない。本研究では多くの優れた能狂言面を調査し、基礎データの収集、多角的、総合的な分析・検討から制作年代・作者等の客観的判断基準を見出し、その美術史的研究方法を確立することを目指す。研究成果をもとに、能狂言面を美術史、特に日本彫刻史の中に位置付けることを最終目標とする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部付　浅見龍介

【主な成果】

(1)調査

27 年 4 月 23 日三井記念美術館、27 年 4 月 24 日東京国立博物館
27 年 5 月 26・27 日東京国立博物館、27 年 5 月 28 日三井記念美術館
27 年 6 月 24 日東京国立博物館
27 年 7 月 13 日京都国立博物館、27 年 7 月 14 日京都・北村美術館所蔵、27 年 7 月 22 日東京国立博物館
27 年 8 月 23 日東京国立博物館　関係資料調査
27 年 9 月 12 日東京国立博物館、27 年 9 月 25 日東京国立博物館
27 年 10 月 8 日奈良・天河弁財天社（京都国立博物館内修理工房にて）、27 年 10 月 22・23 日三井記念美術館
27 年 12 月 18 日奈良・奈良豆比古神社、奈良・正福寺、奈良・柳生八坂神社（奈良国立博物館にて）
28 年 1 月 23・24 日宮城・瑞巌寺
28 年 2 月 21・22 日京都国立博物館　壬生寺所蔵能・狂言面調査　個人所蔵（京都国立博物館寄託）能面調査
関係資料調査で京都・金戒光明寺にある面打井関十郎（河内）一族の墓を調査し、そこに記された伝記を記録した。また、東京国立博物館では所蔵面について蛍光Ｘ線調査に着手した。

(2)調査の結果得られた知見

写真、データを蓄積し、18 世紀の代表的な面打大野出目家の洞白・洞水についてその面裏の彫りの特色から作者の特定がおおよそ可能であることがわかってきた。

(3)調査研究の成果の公表

・展示
27 年 6 月 9 日～7 月 20 日　特集陳列「日本の仮面　人と神仏、鬼の多彩な表情」　京都国立博物館
27 年 7 月 7 日～10 月 4 日　特集陳列「能面　女面の表情」　東京国立博物館
・講演会
27 年 6 月 20 日　土曜講座「京都周辺の古面」浅見龍介
・講座
27 年 5～7 月　3 回　江東区古石場文化センター講座「能面―刻み込まれた日本人の美意識」　浅見龍介

【備考】

科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 2 年目
調査回数：19 回
リーフレット：特集陳列「日本の仮面　人と神仏、鬼の多彩な表情」４ページ

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ほぼ毎月調査を実施し、データ、写真を大量に蓄積できた。調査体制、調書作成、撮影について記述内容、調査手順等が安定してきたので、今後の出張調査を順調に行なう見込みがついた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術史分野で能狂言面の調査研究を中核に据えることは極めて少ない。28年度は東京国立博物館所蔵の金春家伝来面全点を展示する特集陳列を開催し、図録を制作する予定である。調査の成果を公表し、研究の活性化、一般の関心を集めることも期待でき、中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-14

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	14)　博物館における文化財の情報資源化に関する研究（科学研究費補助金）((5)－①)

【事業概要】本研究は、博物館が収集した文化財と関連する資料（図書・文書など）の分析と整理、データ化を行い、文化財との相互の関連付けを行うことで、これらを一元的に管理し、必要なときに引き出して活用できる博物館アーカイブズを構築する。さらに他の研究機関と情報の共有化を図るため、情報資源を新しい枠組みでとらえ直し、相互利用を可能とする資料の情報資源化の方法論を、実践をとおして研究する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　高橋裕次

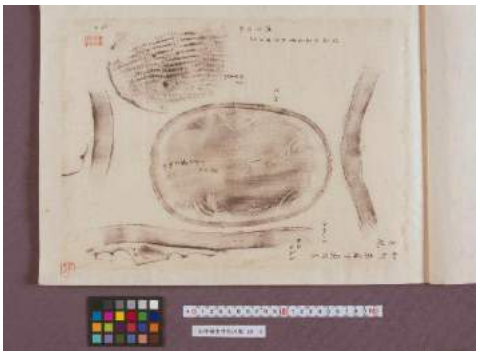
【主な成果】

(1) 文化財に関連する目録類、図書、各種文書など基礎資料をまとめた総合リストについて、各資料の作成時期、保管の状況を考慮した上で、資料群としてのまとまりを尊重しながら、分類を行った。

(2) 文化財とそれを取り巻く資料との相互の関連付けを行う際に、博物館の機能との関わりのなかで作成された資料を、文化財の活用という観点からとらえ直すという具体的な方針を打ち出した。

(3) 博物館の収蔵品の基礎となった草創期における「壬申検査」、「博覧会」などの目録類を分析して、文化財がどのように利用されていたかを検討した。また、所轄官庁の変更などにともない移管された文化財や図書の変遷を伝える公文書の分析を行い、それぞれの文化財や図書、公文書が相互に関連していることを明らかにした。

(4) 研究の成果を統合データベースに反映させる過程で、文化財の情報資源化の方法論を研究するための基礎作業をさらに進めることができた。



壬申検査宝物図集

【備考】

科学研究費補助金の４年計画の２年目

調査件数	約 5,000 件
デジタル撮影件数	82 件
公文書テキストデータ化	約 800 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京国立博物館百五十年史の編纂に向けた作業のなかで、文化財の情報資源化という観点から、MLA 連携（ミュージアム（Museum）・図書館（Library）・文書館（Archives）が連携して、情報資源のアーカイブ化等の課題を共有すること）を見据えた統合データベースの構築を目指している。計画的に調査・研究を行い、所期の目標を達成した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って調査研究を実施することができた。また本プロジェクトは、科学研究費補助金として実施している事業であり、4ヵ年計画の2年度目として、計画に従って着実に進め、所期の目標を達成している。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-15

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15）古代東アジア世界における染織品の伝播と使用に関する考古学および美術史学的研究（科学研究費補助金）（(5)-①）

【事業概要】本研究は我が国において伝来、また出土した染織作品を通じ、広く古代東アジア世界における染織文化の実像を明らかにしようとする試みである。これまで日本染織史の分野で研究されてきた作品を国際的な文化交流の枠組みで捕らえなおし、我が国に伝来した染織作品がもつ意義の大きさを明らかにしたい。また、考古遺物に付着した繊維を詳細に検討することで、現在では形の失われた作品の遺存状態や織物などの種類や仕様等を通して現存作品と比較検討し、古代東アジアにおける染織品の使用法についても、その実態の解明を目指すものである。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	客員研究員　澤田むつ代

【主な成果】

(1)主な調査

・群馬県埋蔵文化財センターにおける金井東裏遺跡出土品調査。同遺跡より出土した甲冑に付着する繊維の詳細な観察に基づく調査を行なった。この甲冑は榛名山の火山噴火の火砕流により被災した人物の遺体が着装した状態で出土したものであり、古墳時代における甲冑着用の実態を知るうえで極めて貴重な遺物である。

・法隆寺献納宝物を含む法隆寺伝来の染織品調査(本格修理作品 25 件に対する事前調査)、通年。

(2)主な調査成果

・冑の錣と頬当に付着した繊維の分析から、織物の用途について考察した。その結果、錣と頬当には内貼裂として平絹(平組織の絹織物)が使われていることがわかった。さらに錣と頬当の周囲の縁にも、縁裂として織目の細かい平絹(経糸は緯糸に比べてかなり細い)が使われていることがわかった。

甲(よろい・挂甲)については、内側に三種類の平絹と組紐が付着していることがわかった。以上の付着状況を検討した結果、1 種類は挂甲の内貼裂、他の 2 種類は衣服の可能性が高いと判断された。古墳出土の短甲や挂甲には表面にワタガミ緒の平絹が付着する例はあっても、内貼裂を施している例はこれまで確認されたことがなく、はじめての例として、大きな調査成果であった。また、挂甲には綴じ糸として二間組の組紐が用いられていることがわかった。

上代裂の調査及び修理風景

(3)主な調査成果の発表

・28 年度に刊行を予定する金井東裏遺跡の発掘調調査報告書刊行のため、遺物に付着する織物や組紐等の調査結果と考察等について執筆した。

・法隆寺献納宝物を含む法隆寺伝来の染織品修理の成果については『MUSEUM』で 2 回の報告を行なった。

【備考】

科学研究費補助金事業の 3 年計画の 2 年目

(1)調査回数：金井東裏遺跡ほか 8 件

(2)論文等の成果物：沢田むつ代「法隆寺伝来・上代裂―平成二十三年度修理の成果」、『MUSEUM』658、東京国立博物館、27 年 10 月。沢田むつ代「古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例」（『文化財と技術』第 7 号、27 年 12 月。ほか 7 件

(3)講演会等の回数：2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画していた国内調査は概ね遂行することができ、金井東裏遺跡出土品調査に於いては新発見があった。ただし、海外調査は１件のみであったため、28年度は国内外について調査の機会を拡充させたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。28年度は報告書の刊行も視野にいれ、より調査研究の機会を拡充させたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-16

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	16）法隆寺献納宝物と正倉院宝物における上代染織作品の研究(学術研究助成基金助成金)((5)－①)

【事業概要】法隆寺献納宝物として東京国立博物館が所蔵する法隆寺伝来の上代裂（じょうだいぎれ　古代の織物）を中心に、献納宝物及び正倉院宝物の歴史的・文化的背景を造形の側から明らかにするとともに、現在バラバラの状態で保管されている上代裂について、本来作品として仕立てられていた当時の組み合わせを作品調査に基づいて明らかにする。また未解明な部分が多い法隆寺裂の全体像（数量・技法・文様）についても作品調査と写真撮影によってテータベース化を図る。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課研究員　三田覚之

【主な成果】

(1)学会発表実績

・東京国立博物館研究員・三田覚之、「百済の舎利荘厳美術を通じてみた法隆寺伝来の工芸作品」、27 年 10 月 16 日、国際シンポジウム「古代仏塔舎利荘厳と東アジア仏教文化」、於ソウル古宮博物館

(2)論文発表実績

・東京国立博物館研究員・三田覚之（沢田むつ代氏と共著)、「法隆寺伝来・上代裂　綾幡足と錦残欠等―平成 22 年度修理の成果―」、27 年 4 月、MUSEUM 第 655 号、東京国立博物館、査読あり

・東京国立博物館研究員・三田覚之、「法隆寺伝来　描絵綾天蓋垂飾」、27 年 6 月、MUSEUM 第 656 号、東京国立博物館、査読あり

・東京国立博物館研究員・三田覚之、「百済の舎利荘厳美術を通じてみた法隆寺伝来の工芸作品―法隆寺献納宝物の脚付鉢と法隆寺五重塔の舎利瓶を中心に―」、27 年 10 月、MUSEUM 第 658 号、東京国立博物館、査読あり

・東京国立博物館研究員・三田覚之、「多武峯伝来　十一面観音菩薩立像について」、28 年 2 月、MUSEUM 第 660 号、東京国立博物館、査読あり

(3)公私立博物館等に対する援助・助言

・東京国立博物館研究員・三田覚之、「古代仏教彫刻展」における光背断片の復元図作成協力、27 年 9 月 24 日～11 月 15 日、韓国　国立中央博物館

(4)国内調査実績

法隆寺献納宝物の染織品調査（本格修理作品 25 件に対する事前調査)、通年

上代裂の調査及び修理作業風景

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の　3 年計画の 2 年目

(1)学会発表回数：1 回(2)論文発表回数：4 回

(3)公私立博物館等に対する援助・助言回数：1 回(4)調査回数：1 回（25 件）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	学会発表と論文発表については年度計画を上回る成果を出すことができた。ただし、本務に専念する時間が予想より多く、国内及び海外における調査を十分に行なうことができなかった。28年度では調査にあたる機会を拡充し、研究成果を高めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って、調査並びに学会発表及び論文発表を通じての研究成果公表を継続的に実施することができた。次期中期計画期間では調査にあたる機会を拡充し、研究成果を高めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-17

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	17）多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究－図像的典拠と分担製作の視点から－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）((5)-①)

【事業概要】
多数尊から構成される仏教尊像とは、複数の像から構成される一群の像で、例えば四天王、六観音、八部衆（二十八部衆）、十大弟子、十二神将、十六羅漢などをここでは指す。これらは、同時代の作品でも作品間での変化をつけるためか、その形姿や持物などには様々なバリエーションがある。しかしそれらがどのような典拠（古典作品、図像、儀軌等）に基づき、どのように組み合わされているのかなどに関しては不明確といえる。また一群の作例の場合、工房における分担製作の実態も不明な点が多い。本研究では、上記のごとく不明な点が多くのこされている多数尊より構成される尊像群について、図像的典拠と工房における分担製作の視点から、あらためて調査研究し、分析を行おうというものである。本年度は４年計画の最終年次である。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 淺湫　毅

【主な成果】
(1)神奈川県立金沢文庫調査（27 年 7 月 3 日～5 日）
三重県伊賀上野市・仏勝寺調査（27 年 11 月 23 日）
イタリア・ベネチア東洋美術館調査（27 年 12 月 11 日～18 日）
(2)金沢文庫では宝城坊（日向薬師）所蔵の十二神将立像 12 躯の調査を行い、新たな知見を得ることができた。
仏勝寺調査では同寺所蔵の十二神将立像 12 躯の調査を行い、新たな知見を得ることができた。
ベネチア調査では同館所蔵の十二神将立像 2 躯の調査を行い、新たな知見を得ることができた。
(3)宝城坊十二神将、仏勝寺十二神将、ベネチア十二神将の調査で得られた写真資料と新たな知見は、過去３ヵ年に行った調査の成果とともに、28 年 3 月末日発行の本科研報告書において公表した。
また、26 年度までに行った調査の成果をもとに以下の論考・口頭発表を行った。
［論考］
・淺湫毅「明恵上人と仏師湛慶をめぐる物語」『鳥獣戯画　京都高山寺の至宝』展図録（27 年 4 月発行）
・淺湫毅「大倉集古館蔵「伝法蓮房坐像」の像主について」『ＭＵＳＥＵＭ　659 号』(27 年 12 月発行)
［口頭発表］
・淺湫毅「寒河江の仏像の先進性」『寒河江市市民大学（さくらんぼ大学)』(27 年 10 月 17 日）
・淺湫毅「よろいをまとった仏たち」『東京国立博物館月例講演会』(28 年 1 月 23 日）
［報告書］
・『科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）報告書　多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究－図像的典拠と分担製作の視点から-』(28 年 3 月発行)

【備考】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 4 年目
調査 3 回
論考 2 編
口頭発表 2 回
報告書 1 冊

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ほぼ予定どおりに調査および資料の収集を行うことができた。またその結果を順調に公表することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査」に沿った調査研究を実施することができた。また、東京国立博物館で開催した特別展、総合文化展等において、その成果を順調に反映することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-18

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18）海外日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究（科学研究費補助金）((5)－①)

【事業概要】1939 年以降海外で開催された日本古美術展について一覧化を進めるとともに、文化庁所蔵資料のデータ化及び主要な展覧会の資料を収集・整理することにより、海外における日本観とその変遷を考察・研究する基礎資料を整備する。

【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	国際交流室長　鬼頭智美

【主な成果】

(1)米国ニューヨーク公立図書館、メトロポリタン美術館アーカイブ、ジャパン・ソサエティにて、図書・文献写真資料を調査、一部複写・収集し、関係展示を視察した。(27 年 4 月 19 日～21 日)

・米国ナショナル・ギャラリー、スミソニアン・アーカイヴ、フリア美術館及びフィラデルフィア美術館にて、文献・写真資料調査を行い、戦後の「日本古美術展」について詳細資料を収集、日本美術担当学芸員に面談調査を行った。(27 年 9 月 8 日～14 日)

・スイス・チューリヒ美術館、リートベルク美術館にて、関係文献資料及び写真資料の閲覧調査・複写を行った。

・京都・国際日本文化センターにて、関係展覧会図録を調査、主要なものを複写した (27 年 11 月 30 日～12 月 2 日)。

・京都国際日本文化センターにて、当該展覧会図録を閲覧・調査、一部複写を行った。(27 年 10 月 8 日)

・米国・サンフランシスコアジア美術館より研究者を招へい、同館日本美術展についての発表と関係資料の提供を受けた。(28 年 1 月 31 日～2 月 5 日)

・米国シアトル美術館・ワシントン大学附属図書館にて、図書・文研写真資料を調査、必要分を複写・収集し、関係展示を視察した。(28 年 2 月 15 日～21 日)

・東博内文化庁分室所在資料の調査・複写を進めるとともに、関係者への面談調査を実施した。

・26 年度収集した資料を含め、展覧会ごとに整理分類を進めた。

(2)米国での調査により、メトロポリタン美術館、ナショナル・ギャラリー、フリア美術館、シアトル美術館等が主催した戦後の巡回展や各館で開催された日本古美術展の原資料にあたることができ、各展覧会について詳細を知ることができた。さらに各展覧会関係資料の所在が明らかになり、今度の研究に役立つ情報と人脈を得ることができた。

・スイスでの調査により、1969 年チューリヒ美術館開催の「日本美術」展について、関係写真・図面を複写、カタログを入手したが、書簡から開催経緯と 1970 年大阪万博との関係が明らかになった。また、リートベルグ美術館での調査で、「日本彫刻展」図録を入手する一方、1993 年の「能」展の関係資料により、開催経緯及び出品作品修復の経緯と国内所蔵品との関係が明らかになり、今後も現地の学芸員から引き続き協力を得ることとなった。

(3)調査資料を基に、展覧会一覧表を加筆・修正し、より充実した内容に更新、Web 公開データとして整理を進めた。

・東京国立博物館総合文化展英文解説及び国際シンポジウムの企画・構成に成果を反映した。

【備考】

科学研究費補助金事業の 3 年計画の 2 年目

展覧会図録 34 タイトルのデジタル撮影、展覧会の作品リスト 20 件程度のデータ整理、既存資料目録作成

学会研究会等発表数 2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京オリンピックを控え、わが国の文化への理解促進と普及の必要性が高まる中、海外における日本美術発信の一形態としての日本美術展覧会について概観することは適時性があり、また当館150年史編纂に向けて関係資料入手と関係先とのネットワーク形成を確実にした。これまで海外日本古美術展覧会を全て網羅した一覧表はなかったため、リスト作成・更新ができたことは意義深い。本調査により、概ね関係資料の所在が明らかになり、主要な展覧会については概要を把握する一方、調査先各館で開催地ならではの原資料を収集し、当該資料ひいては日本美術関係資料全体への関心を高め、各機関とより密接な協力関係を築くことができた。既存資料のデータ化・複写も確実に進んでおり、28年度はリストの完成と主要美術展関係資料所蔵先の把握と、それらの情報の公開の見通しが立った。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	所期の目標であったアメリカ、スイスでの資料収集が順調に進み、また 26 年度来収集した資料のデジタル化も予定通り進み、全体展覧会リスト及び資料所蔵情報の公開に向けて着実に成果が上がっており、中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-19

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19）日本染織コレクションの形成とその美術史的価値観の確立に関する研究（科学研究費補助金）（(5)-①）

【事業概要】本研究は、日本国内外の機関や個人コレクターが所蔵する日本染織コレクション蒐集の経緯や来歴、構成内容を網羅的に調査し、近代以前は蒐集されることがなかった日本染織が古美術品としての価値観を形成していく過程を考察するものである。染織史研究者の間では研究対象とならなかった江戸時代以降の袈裟類・裂類を中心に各所蔵先において染織コレクションの全容が分かる調査を行い、近代における日本内外の日本染織の動向を追跡する。本調査研究によって日本染織の価値が理解されないままに離散する危機のある日本内外のコレクションに価値付けがなされ、現在、美術史の１分野として位置付けられる染織文化史研究が、どのような価値観を基盤として確立されたのかが実証される。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長　小山弓弦葉

【主な成果】

(1) 調査概要

・ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアムにて、同機関に所蔵・寄託される日本東洋染織 176 件を調査（27 年 8 月 17 日～26 日）

・女子美術大学美術館にて、同館に所蔵される日本染織 27 件を調査（27 年 10 月 8 日～9 日）

・ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアムにて、同機関に所蔵される野村正治郎関連染織 16 件を調査（27 年 12 月 1 日）

・サンフランシスコのデ・ヤング美術館にて、同館に所蔵される野村正治郎関連染織 25 件を調査（27 年 12 月 3 日～4 日）

・ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館にて、同館に所蔵される日本染織 2 件を調査（27 年 12 月 28 日）

・女子美術大学美術館にて、同館に所蔵される日本染織 18 件を調査（28 年 3 月 28 日～29 日）

(2) 調査の結果得られた知見

・ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム及びサンフランシスコのデ・ヤング美術館の調査を行い、これまでの調査と合わせて見ることにより、両機関における日本染織コレクションの全貌がほぼ把握できた。

・ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館については、26 年度行った調査と合わせて見ることにより、同館に所蔵される日本仏教染織については全貌を把握することができた。

・女子美術大学美術館に所蔵される日本染織については、事前に研究会を行い、数年度にまたがって順次調査を行うこととなった。27 年度においては、長尾美術館旧蔵品についてその来歴に関する知見を得た。

(3) 調査研究の成果

26 年度までの東京国立博物館所蔵「大彦」小袖コレクションの悉皆調査を元に得られた知見を特集陳列「呉服商「大彦」の小袖コレクション（27 年 6 月 2 日～8 月 2 日）で展示、情報公開した。

女子美術大学美術館での調査風景（27 年 10 月 8 日）

【備考】科学研究費補助金事業の 5 年計画の 1 年目
調査実施機関：4 機関　調査日数：15 日　調査作品数：264 件　関連展覧会：1 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	初年度ということで、その方法論や進め方などを研究分担者と確認しながら、慎重に調査を進めることができた。26年度まで自主的に進めてきた当館所蔵日本染織コレクションの調査研究については、その成果を特集陳列という形で発表することができた。28年度以降は、27年度の調査方法に改善を加えつつ、多岐多数にわたる日本染織の調査を精力的に進めることが必至であると確認した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。 28年度以降は、調査団を2～3チームに分けて、調査の進行を加速させ、さらなる調査データの集積に努めたい。また、27年度の調査結果は、28年度中に『MUSEUM』など、研究誌に発表の予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-20

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	20）絵巻を中心とした古代・中世絵画の伝来に関する研究（科学研究費補助金）（(5)－①）

【事業概要】
本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕

【主な成果】
(1) 古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化
本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博捜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、27 年度はおよそ 15 タイトルの文献資料から約 3,000 件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。
(2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査
絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理を行った。27 年度は幕末の狩野派、及び復古やまと絵師による模本など約 20 件の調査を行うことができた。
(3) 調査・研究の展示での公開
上記の調査・研究を踏まえ、以下の展示として成果の一部を公開した。
・特集「鳥獣戯画と高山寺の近代－明治時代の宝物調査と文化財の記録－」東京国立博物館特別 1 室　27 年 4 月 28 日 ～ 6 月 7 日
・特集「春日権現験記絵模本Ⅱ―神々の姿―」東京国立博物館特別 1 室　27 年 9 月 1 日 ～ 10 月 12 日

特集「鳥獣戯画と高山寺の近代－
明治時代の宝物調査と文化財の記録－」
展示風景

【備考】
科学研究費補助金事業の 4 年計画の 1 年目
(1) 絵巻伝来関係資料の抜き出し件数　約 3,000 件
(2) 絵巻模本の調査件数　約 20 件
(3) 展示への反映　2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、調査・分析を展覧会という形で一般向けに行うことができたのは大きな成果と言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画にのっとった研究を遂行し、成果を展示に反映させることができた。28年度も引き続き、継続的に研究を進めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-21

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21）東京国立博物館所蔵写真資料データベース（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】東京国立博物館所蔵写真資料データベースは、東京国立博物館が所蔵する幕末から昭和初期にかけて撮影された紙焼き写真をデジタル化し、広く一般に公開することを目的とする。現在「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」としてホームページ上で公開しているデータは、18～21 年度の科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付によって作成された。 本事業では、上記のデータベース作成事業を引き継ぎ、従来の紙焼き写真に加え、東京国立博物館が所蔵するガラス乾板を含めた全写真資料について調査とデジタル化を行い、データベースの充実を計る。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長　富田　淳

【主な成果】

(1)ガラス乾板の調査及び紙焼き写真のデータ整理

①ガラス乾板については、四切写真約 3,600 枚とキャビネ写真の約 5,000 枚の法量（縦、横、厚さ、重さ)、墨書等文字の項目について、27 年 6 月～12 月に東京国立博物館にて調査した。

②紙焼き写真について、約 2,000 枚について既成画像を元に公開用データを作成した。

(2)ガラス乾板について、膜面返しやレタッチ、オペーク、マスキングなど加工処置が施された乾板が多いことがわかった。

(3)27 年度調査したガラス乾板と、焼付け写真は「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」において公開する。

ガラス乾板の調査風景

【備考】

科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目

・「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/kaken/oldphotos.html)　において年度内に約 5,500 件を公開した。

・調査回数：56 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	紙焼き写真については予定していた件数を公開用データ化することができたが、ガラス乾板については予定していた調査件数を達成しなかった。今後は調査項目を検討し、さらに多分野に寄与できるデータを構築できるよう努めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査」に沿った調査を継続的に実施することができた。今後は作業手順を見直し、さらなる効率化を計りたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-22

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	22）中世社寺縁起絵・高僧伝絵の成立と近世的受容（学術研究助成基金助成金）（(5)-①）

【事業概要】社寺縁起絵は、神社仏閣の由来や霊験を描き出した説話画で、日本仏教興隆の祖である聖徳太子の絵伝を淵源とする祖師高僧伝絵とともに、鎌倉時代に盛んに制作された。本研究では社寺縁起絵、高僧伝絵の最盛期とも言える鎌倉時代の作例と、その構造を権力基盤の強化に利用した近世初期公武権力による作例を比較し、中世から近世へ至る絵画制作の「場」の実態と歴史的位置付けを明らかにする。そのため、東京国立博物館収蔵品の調査、関連資料のデータ化、社寺縁起絵や高僧伝絵に登場する聖地の現地踏査を行ない、これらの成果発表として特集展示を開催する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員　瀬谷愛

【主な成果】

(1) 初年度となる 27 年度は、館蔵品・寄託品を主たる調査対象とした。特に「一遍聖絵」を中心に取り上げ、関連する「遊行上人縁起絵」「因幡堂縁起絵巻」「石清水八幡曼荼羅図」（東京・大倉集古館）、「融通念仏縁起絵」（京都・清涼寺）、「熊野曼荼羅図」（クリーブランド美術館）などの作品調査、善光寺（27 年 5 月 28 日）熊野（27 年 10 月 3 日～6 日）、菅生岩屋・大山祇神社（27 年 10 月 31 日～11 月 1 日）などの現地踏査を行なった。一遍が遊行した重要聖地を実際に踏査することにより、作品制作の背景となる信仰と人のネットワークの広がりを実感し、新知見を得ることができた。

(2) 27 年度の研究成果発表としての特集「一遍と歩く－一遍聖絵にみる聖地と信仰」（本館 2 階特別 1・2 室、27 年 11 月 3 日～12 月 13 日）では、当館が所蔵する国宝「一遍聖絵」巻第 7 と近世木挽町狩野絵師による模本、善光寺、熊野、石清水八幡宮など関連する聖地、信仰の絵画、彫刻、考古遺物を展示した。会期中、月例講演会（27 年 11 月 7 日）には責任者とともに薄井和男氏（神奈川県立歴史博物館館長、時宗文化財調査団）を招聘し、300 人の来場者があった。また責任者が行なったギャラリートーク（27 年 12 月 1 日）には 200 人の来場者があった。いずれも総合文化展に関する事業としては異例の来場者を達成し、研究成果を広く伝えることができた。

(3) (2) とほぼ同時期に遊行寺宝物館、神奈川県立歴史博物館、神奈川県立金沢文庫で開催された特別展「一遍聖絵」と連携し、会期中、「一遍と歩こう」スタンプラリーを開催し、のべ 5,699 人が参加した。台紙は一般向け解説書の意味合いを持たせ、「一遍聖絵」に関する平易な解説、一遍の遊行年表を掲載し、作品と背景への理解、普及を促進できた。

(4) (2) 開催期間中に、上記 3 館と連携してシンポジウム「一遍聖絵の全貌」を東京国立博物館平成館大講堂で開催し、研究報告者、パネリストとして研究成果を発表した。本シンポジウムは日本史、美術史、建築史など学際的に「一遍聖絵」を読み解くもので、その成果は、28 年度に高志書院より刊行を予定。

ギャラリートーク風景
（12 月 1 日）

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 1 年目

作品調査：31 件、現地踏査：5 回、学会研究会展覧会等発表数：3 件、論文解説等印刷物：「ふたつの第七巻」（「国宝一遍聖絵」展図録、遊行寺宝物館、27 年 10 月 9 日）、他 2 件。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度の主たるテーマとして取り上げた「一遍聖絵」は、時宗開祖一遍の生涯を綴った絵巻であるが、二祖他阿真教の伝記とあわせて語られる「遊行上人縁起絵」に比べて同系の絵巻、模本が圧倒的に少なく、これまで当館所蔵の木挽町模本についても一般に知られてこなかった。本研究では聖絵から木挽町模本への流れ、聖絵の圧倒的独自性、その制作背景について、作品比較と現地踏査によって新知見を得ることができた。論文形式の成果発表としては28年度に刊行を予定している。31年に時宗は他阿遠忌を迎えることから、今後数年にわたり時宗関連文化財の研究は一層の進展が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査」に沿った調査研究を実施し、その成果を特集等に反映させることができた。初年度は「一遍聖絵」をテーマとしたが、28年度はこれに加えて密教系縁起絵伝と八幡縁起へと対象を広げていく予定である。初年度の成果をもとにより積極的な調査研究を進めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-23

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	23)「月次祭礼図摸本」総合復元研究（科学研究費補助金　研究代表者：愛知県立芸術大学　岩永てるみ）((5)-①)

【事業概要】「月次祭礼図模本」（東京国立博物館）は室町時代（15 世紀頃）に描かれた屏風絵を江戸時代に写したもので、原本はすでに失われている。本図は祇園会などの祭礼描写が丁寧で、洛中洛外図との関連性への関心から美術史的注目も一段と高いが、模本という制約によって本来の絵画表現は不明な点が多かった。本研究は、技法、歴史、美術史、材料の各分野からの専門知識や研究成果を総合して、原本の図像復元を目標に絵画分析を行う学際研究である。失われた原本図像を復元し、その過程で得られる各分野の研究成果を集約することで、中世と近世の狭間にある本図の表現や成立背景について解明を試みる。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員　瀬谷愛

【主な成果】

(1) 初年度となる 27 年度は、2 度の研究会（27 年 6 月 8 日、12 月 17 日）が行われた。本プロジェクトには製作技術者の他に歴史・美術史の各分野から研究者が参加しており、画材、画風の検討が重ねられた。

(2) 東京国立博物館において作品調査（27 年 11 月 17 日）が行われた。「月次祭礼図模本」6 幅（A-2425、江戸時代・19 世紀）の他、同時代の屏風として参照すべきと考えられる「浜松図屏風」6 曲 1 双（A-11533、室町時代・16 世紀）の調査も行われ、比較検討をすることができた。複数名の異なる視点からみた作品調査により、「浜松図屏風」の金雲が金のほか青や茶などで彩色を施した「瑞雲」であることが確認され、雲霞表現の広がりについて新たな検討課題が見つかるなどの収穫があった。

「月次祭礼図模本」6 幅のうち第 4～6 幅

【備考】
科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目
研究会：2 回、作品調査：2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「月次祭礼図模本」は、多くの現存作例がある「洛中洛外図屏風」の原初的な作品として知られ、模本でありながら極めて価値の高い文化財である。「洛中洛外図屏風」には時節を問わず歴史・美術史各分野の研究対象として注目度が高い。本プロジェクトはその淵源となる作品の復元を学際的に試みており、その基礎となる作品調査と意見交換により多くの知見を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3ヵ年のプロジェクトのうち基礎的な考察を行う初年度が終わり、中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査」に沿った調査研究を実施することができた。28年度は具体的な復元図案の制作に入る。プロジェクト本体が愛知県立芸術大学にあって研究会の日程が合わず参加できないことがあるため、28年度以降は独自の研究を進めて情報提供するなど、プロジェクトへの貢献度を高めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-24

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	24）工芸の展開―金属工芸鋳金における真土型鋳造法の研究―（科学研究費補助金　研究代表者：東京藝術大学　赤沼潔）（⑤－①）

【事業概要】
日本各地及び中国など東アジアに残る鋳型の遺物と鋳造製品を調査分析し、そこから得られた情報に基づいて実際に製作を試みることによって、我国に伝わる真土型鋳造法の歴史的変遷と地域あるいは時代による技術材料的な特性を明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	神庭信幸

【主な成果】
(1) 第１回調査会：27 年 6 月 19 日、東京芸術大学において、真土鋳造技術の現状確認、日本及び中国各地に残る鋳型に関する遺跡についてその所在地と遺物、先行研究について検討を実施した。

(2) 第２回調査会：28 年 1 月 18 日から 23 日まで中国北京市において保利芸術博物館、安陽市において中国社会科学院考古研究所及び殷墟遺跡、西安市において周原博物館及び周原遺跡、兵馬俑博物館を訪ね、遺跡・博物館・研究所などに保管されている関連遺物の調査を実施した。

鋳型焼成工程の一例

安陽市中国社会科学院考古研究所での調査

【備考】
科学研究費補助金事業の３年計画の１年目
調査会：２回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	第2回調査により中国における鋳造技術研究の進捗状況を確認できた。特に内型の文様の形成法について西周青銅器において貼り付け技術などが確認できた点は大きな成果である。調査結果の分析によって他にも同類の事例が確認できる可能性がある。出土した鋳型の科学分析が必要であり、我が国の遺物の実検を行うことも今後の課題であり、28年度以降はその結果との比較研究を進める必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。また、我が国で出土した鋳型の遺物に関する報告書を精査して、本研究の推進に必要な先行研究を抽出し、実物遺跡の調査結果と合わせて、再現実験の準備を進めている。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-25

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	25）武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質（科学研究費補助金　代表者：国立歴史民俗博物館　上野祥史）（(5)－①）

【事業概要】古墳時代は、象徴的な器物の授受を通じて、王権中枢が地域社会との関係を構築した時代である。5 世紀の古墳時代中期には、武器と武具とを組み合わせた武装具が王権から地域社会（首長）へと配布される象徴的器物であった。本研究は、武装具が古墳に集積する現象に注目し、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。典型的な事例として、奈良県円照寺墓山 1 号墳の出土資料を取り上げ、出土した武装具の調査・実測を経て全体像を分析し、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という 3 つの視座から検討する。

【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員　古谷　毅

【主な成果】

古墳時代中期における武装具集積の典型資料の調査及び研究会を実施し、27 年度は次のような研究成果があった。

1　東京国立博物館所蔵資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。

2　調査情報を基礎として、「武装具の集積現象」を比較検討し、研究を推進した。

3　27 年 10 月の平成館考古展示室リニューアル公開に伴う展示室計画に反映させた。

①　実施概要

1）　27 年 5 月 20 日～23 日、7 月 29 日～8 月 1 日、8 月 12 日～15 日、9 月 9 日～12 日、11 月 18 日～21 日、12 月 24 日～27 日、28 年 2 月 3 日～7 日、3 月 2 日～4 日に東京国立博物館において、調査及び研究会を開催し、円照寺墓山 1 号墳出土資料の整理・実測調査を進めた。

2）　調査資料の際はアルバイトを雇用して、実測図の作成等の資料化を推進した。

②　成果・知見等　：東京国立博物館における研究会で、分析結果の研究報告を行い、論点の整理とその共有化を図り、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。

③　成果の公開等　：28 年 3 月 5 日に、国立歴史民俗博物館と共同研究会を開催し、研究成果の発表・公開を行い、問題点を議論した。

調査(左）及び研究会(右）風景（26 年 12 月 25・27 日）

【備考】科学研究費補助金事業の 4 年計画の 3 年目

○調査･研究会回数（日数）：8 回（29 日間)、3 回（3 日間）

・調査対象･件数　：　奈良県円照寺墓山 1 号墳出土資料（約 80 件）

○主な学会等発表等　：　国立歴史民俗博物館国際シンポジウム『古代日韓交渉の実態-朝鮮半島の倭系甲冑からみた日韓相互交渉-』国立歴史民俗博物館、28 年 3 月 5 日

○論文等公開　：　上記他 1 件

○共同公開研究会　：　1 件（国立歴史民俗博物館国際シンポジウム:「古代日韓交渉の実態（朝鮮半島の倭系甲冑からみた日韓相互交渉)」28 年 3 月 5 日、国立歴史民俗博物館）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究計画の達成度については、調査回数は十分であり、東京国立博物館所蔵資料の列品整理としても顕著な成果が挙がっている。27年度はさらに国立歴史民俗博物館との共同研究会の開催し、26年度に引き続き国際性を加えることができた。28年度は、より研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会をさらに充実して研究精度の向上を図り、さらに発展性・独創性の拡充と確立を図り、公開に向けた準備を進める所存である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報の整理・資料化、また論文発表・講演等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、十分な蓄積を行ったと考えられる。改良・改善点は、より高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次期中期計画期間の成果へ反映させる予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4511-26

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	26)三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獣鏡の総合的研究（科学研究費補助金代表者：奈良県立橿原考古学研究所　水野敏典）（(5)-②）

【事業概要】古墳時代前期を代表する遺物である「三角縁神獣鏡とは何か」について三次元計測技術を応用して製作技法から考えることを目的とする。舶載三角縁神獣鏡と仿製三角縁神獣鏡の対比を中心に、それを取り巻く倭鏡、中国鏡、銅鐸の同一文様をもつ青銅器を分析対象として、量産技法から相互関係を分析する。そのための手段として精密三次元計測データによる客観的で詳細な分析を用いる。

そして、肉眼観察では扱うことが不可能であった青銅器表面の微細な鋳型の傷や、面的な変形、収縮についての新しい情報を得ることで、これまでにない製作技法の解明を進める。さらに、青銅器製作技術から「舶載」と「仿製」三角縁神獣鏡の技術的系譜を明らかにすることも目的とする。

【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員　古谷　毅

【主な成果】

１　既存データを用いた研究成果を発表・公開した。

２　今後の活用に向けて、X 線 CT 画像データ等の利用方法等を検討した。

３　27 年 10 月の平成館考古展示室リニューアル公開に伴うハンズオン用模型作成に反映させた。

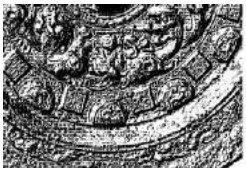
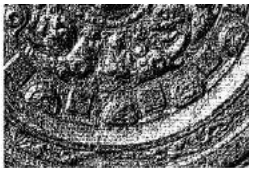
①　実施概要

１）　東京国立博物館所蔵資料の既存調査データ・写真の整理・分析、及びデータ利用方法の開発を行った。

２）　新規に古代出雲歴史博物館・八尾市所蔵資料などの三次元計測を行った。

②　成果・知見等　：既存データ（東京国立博物館所蔵主要古墳出土銅鏡：科学研究費補助金 基盤研究(A)課題番号 25284161･平成 18 年度～平成 21 年度、基盤研究(A)課題番号 25284161･平成 14 年度～平成 16 年度）の分析・写真の整理を行い、今後の研究資料の整備を図った。

②　成果の公開等　：第 32 回日本文化財科学会で、同型鏡技法における研究成果を発表した。

○三次元計測データの画像分析、及び X 線 CT データを併用した正射投影図作成用画像

（左：奈良県久度３号墳・大阪府和泉黄金塚古墳[J-36931-25]出土画文帯神獣鏡、右：埴輪 犬[J-20711]）

【備考】科学研究費補助金事業の 4 年計画の 3 年目

○調査回数（日数）　:3 回(3 日間)

・調査件数　：約 5 件

・主な調査･分析資料　：三角縁神獣鏡・日本列島製漢式鏡、埴輪 犬（東京国立博物館蔵）

○研究会回数（日数）　:1 回（1 日間）

○主な学会等発表等　：古谷 毅･水野敏典･奥山誠義･北井利幸･柳田明進「三次元計測からみた上牧久渡 3 号墳出土の画文帯神獣鏡」『日本文化財科学会第 32 回大会　研究発表要旨集』日本文化財科学会、27 年 7 月 11 日

○論文当公開　：上記他 2 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の達成度については、調査・データ分析の質をさらに高める必要がある。28年度からは研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会で分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図り、さらに調査と分析手法の開発を進める所存である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報の発表等を通じて、当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として蓄積は実施できたと思われる。改良・改善点は今後の計画遂行とより高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次期中期計画期間の成果に反映させる予定である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4511-27

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	27）木彫像の樹種識別技術の高度化（科学研究費補助金　研究代表者：森林総合研究所　安部久）（(5)-①）

【事業概要】
木彫像の樹種判別に非破壊分析手法、顕微手法を応用した精密分析手法を導入することにより、種レベルでの正確な樹種を特定する研究。

【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長　　和田浩

【主な成果】
(1)これまでの調査成果を一般向けに分かりやすくまとめ、シンポジウム「仏像と木の交流-古代一木彫像の樹種をめぐって-」として開催し、成果の公開を行った(27 年 5 月 16 日)。
(2)The 22nd International Wood Machining Seminar(第 22 回国際木工機械セミナー(開催地：カナダケベック))にて成果発表を実施した(27 年 6 月 14 日～17 日)。
(3)近赤外分光法による樹種識別についての研究成果を論文にまとめて発表した(27 年 7 月)。
(4)山梨県南アルプス市に所在する円通院(27 年 9 月 14 日)、慈眼寺(27 年 9 月 15 日)、上宮八幡神社(27 年 9 月 16 日)、若宮八幡神社(27 年 9 月 16 日)が所蔵する木彫像の写真撮影、採寸、調書作成、木片採取を行い、近赤外分光法による計測を実施した。
(5)ラトゲン文化財研究所(ドイツ)において Stefan Rohrs 副所長と協議を行い、文化財に対する光学的調査技術に関する最新に知見を得ることができた(27 年 9 月 30 日)
(6)岩手大学が所蔵する木彫像の写真撮影、採寸、調書作成、木片採取を行い、近赤外分光法による計測を実施した(27 年 10 月 28 日)。
(7)第 31 回近赤外フォーラム(開催地：つくば市)にて成果発表を実施した(27 年 11 月 25～27 日)。
(8)第 66 回日本木材学会大会(開催地：名古屋市)にて成果発表を実施した(28 年 3 月 27～29 日)。

南アルプス市における木彫像の調査

【備考】
科学研究費補助金事業の 3 年計画の 3 年目
・論文：安部久、渡辺憲、石川敦子、能城修一、藤井智之、岩佐光晴、金子啓明、和田浩「近赤外分光法を用いた木彫像用材の非破壊的な樹種識別 -木材標本を用いた分析-」（『木材保存』41(4)pp.162-170、27 年 7 月）　他 1 件
・シンポジウム開催と発表：1 回
・学会発表：3 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は特に成果発表に関して充実した内容と回数を実現できた。また、南アルプス市においては木彫像を直接近赤外分光計測できた実例を充実させることができた。調査回数及び成果発表回数の双方を考慮すると研究の結果としては高い評価を与えられるべきと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って調査研究を実施することができた。なお、国内外で近赤外分光分析法を用いて木彫像の樹種判別に挑み、成功した実例はこれまで存在しない。本研究は特に、カヤ、ヒノキの判別を非破壊的に実施できる手法をほぼ確立している。多くの木彫像は、そこからの木片採取が不可能であり、本研究の成果は今後の計測事例を飛躍的に向上させる可能性を持つものと考える。同手法をさらに発展的に応用して東アジア地域全体における木彫像の用材に関する研究へと将来的には進展させていきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-1

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)

【事業概要】
館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となり得る文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　伊藤嘉章

【主な成果】

館蔵品、寄託品、それらの関連品及び今後収集・展示の対象となり得る文化財と、その周辺領域に関して、美術史、歴史学、考古学、博物館学、保存科学等の各見地から調査研究を実施し、各種学会等・学術誌等でその成果を発表した。特別展覧会、特別展観、特集陳列等でもそれらの成果を示し、図録等での発表を行い、シンポジウム、講演会によりその成果を公開した。

琳派 400 年記念国際シンポジウム

文化遺産防災国際シンポジウム

【備考】
・研究会等の発表
呉孟晋「中国近現代絵画於日本的情況」（香港中文大学文物館「万象神采：二義草堂蔵近代中国書画」展専題講座 27 年 5 月 9 日）ほか
・学術雑誌他出版物に論文等を掲載
山本英男「桃山画壇を生きる―狩野派絵師の攻防」（特別展覧会図録「桃山時代の狩野派」総論　27 年 4 月ほか）

・学会、研究会等発表件数：16 件

・論文等掲載件数：34 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品・寄託品を中心に京都の伝統文化に関わる文化財に重点を置き研究を進めた。 特別展覧会・平常展との関連を重視しつつ、学会等の動向に留意しつつ研究を進めた。 Ｘ線ＣＴ、３Ｄプリンターなどの博物館科学機器を活用した新たな研究を進め、その成果を展示等にも反映させた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来の成果を活かし、広く一般への還元を図るなど、研究計画にも基づき、順調に推移している。新たに導入された博物館科学機器の活用なども積極的に進めており、より総合的な調査研究となるよう進めている。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）訓点資料としての典籍に関する調査研究（(5)－①）

【事業概要】

漢文を訓読するために施された、「訓点」とよばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があることが指摘されており、その大半は仏典である。主に平安時代から鎌倉時代を中心とした仏典に付された訓点により、当時の日本人がどのように本文を訓読していたか、あるいは日本語の有り様が判明する。当館では、「守屋コレクション」に代表される、国内でもトップレベルの典籍を数多く収蔵することから、専門の学識者を客員研究員に迎え、それらの調査研究を行うことにより、得ることのできた成果を展示や講演、あるいは論文など、博物館における事業へと還元する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室主任研究員　羽田　聡

【主な成果】

(1)調査のスタッフに大阪大谷大学教授の宇都宮啓吾氏（日本語学）を客員研究員として迎え、27 年９月１日をはじめ、28 年３月 26 日までに計 10 回の調査を行い、重要な部分は写真撮影を行った。調査作品は、「宋版華厳疏巻第三十二」「宋版清凉国師礼賛文」（以上、いずれも館蔵品）、国宝「漢書楊雄伝第五十七」（寄託品、国宝）など、およそ 20 件におよんだ。

(2)とくに、「漢書楊雄伝第五十七」は、天暦２年（948）の藤原良佐による加点奥書がしめすように、文中の随所に訓点が施されており、詳細な調査を行った結果、朱点・墨点・白点・黄点・角点による３種類の訓点が確認された。これらの訓点は加点時期をほぼ同じくし、ごく初期の訓点は固定化されておらず、我が国での漢文訓読が試行錯誤の様相を呈していたことが明らかとなった。

(3)こうした研究の結果として、資料としての重要性が可視的に示されたため、27 年度、「漢書楊雄伝第五十七」を当館において購入することができた。また、26 年度より継続して調査を進めていた国宝「玉篇　巻第二十七前半」（寄託品）は、解題を付した書籍を 28 年度、勉誠出版より刊行する予定である。

「漢書楊雄伝第五十七」（国宝）巻末部分

【備考】

・調査回数　10 回
・調査件数　約 20 件
・撮影コマ数　約 100 カット
・研究成果の公開（出版）　１回（予定）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査回数10回は、平均すればおよそ月１回のペースで行われていたことになる。また、件数20件は、調査対象がいずれも巻子や本といった時間を要するものである点を勘案し、当初の目標は十分に達成していると判断した。調査結果の作品購入への反映や、予定ではあるが成果の公開など、ほかの博物館事業との連携を図ることができた点も加味している。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続実施している本事業において、調査回数及び件数ともに、例年とほぼ同じ数値であるため、中期計画に対する進捗状況は順調であると判断した。当該分野は、非常に高い専門性を必要とするため、後進の育成が大きな課題となっている。28年度以降は、博物館資料を活用する意味でも、若手の研究者たちを交えた調査、意見交換なども視野に入れるべきかと考える。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4512-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)特別調査「彫刻」((5)-①)		
【事業概要】京都国立博物館収蔵の彫刻作品及び京都周辺社寺の仏像の調査研究、撮影			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	浅見龍介

【主な成果】

(1)調査

4 月 17 日　河内長野市・金剛寺　大黒天立像　ＣＴ調査、ファイバースコープによる像内墨書銘調査（博物館内）
4 月 27・28 日　京都市・上徳寺　阿弥陀如来立像　調査、撮影（現地）
6 月 16 日　京都市・上徳寺　阿弥陀如来立像　ＣＴ調査（博物館内）
8 月 27 日　木津川市・鷲瀧寺　薬師如来坐像及び両脇侍像、地蔵菩薩立像　調査、撮影（現地）
8 月 31 日　京丹後市・縁城寺　千手観音立像、大日如来坐像、阿弥陀如来立像、持国天立像（現地）
9 月 10 日　京都市・西来院　蘭渓道隆坐像　ＣＴ調査（博物館内）
10 月 29 日　京都市・市川車僧保存会　深山正虎坐像　ＣＴ調査、ファイバースコープによる像内墨書銘調査（博物館内）
12 月 1～4 日　河内長野市・金剛寺　大日如来坐像　光背附属小仏 34 躯のうち 16 躯　調査、撮影　（博物館内）
1 月 8 日　八幡市・円福寺　達磨坐像　調査、撮影（現地）
1 月 28 日　京都市・知恩寺　阿弥陀如来立像　ＣＴ調査

(2)成果

金剛寺の大黒天立像は、本体に建武三年の銘記、台座に延元元年の銘記を発見した。ともに 1336 年。
上徳寺の阿弥陀如来立像は唇に水晶を嵌めた稀少な作で、新発見である。
市川車僧保存会の深山正虎坐像は、ファイバースコープ調査により仏師清水隆慶の作であることが初めてわかった。

(3)展示

金剛寺の大黒天立像、市川車僧保存会の深山正虎坐像を展示し、解説に新知見を盛り込んだ。
円福寺の達磨坐像、縁城寺の諸像は 28 年度に展示する予定。ＣＴ調査で得た映像を始めとする成果は、論文として公表する予定である。

上徳寺　阿弥陀如来立像　唇（水晶製）

【備考】

(1)調査回数：13 回

(2)

・知恩寺・阿弥陀如来立像の調査成果は、京都国立博物館編『社寺調査報告書　知恩寺』（28 年 3 月刊）に収録した。
・ＣＴ及びファイバースコープ調査の成果は、京都国立博物館土曜講座「科学機器による仏像の調査研究」（28 年 2 月 20 日）で公表した。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新発見が多く、調査の成果は著しい。特にＣＴ調査は現状では九州・東京の国立博物館と当館にほぼ限られており、学界に寄与するところは大きい。ただし、27年度は論文、報告として公表することがやや少なかった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品の調査・研究」は順調に行われた。調査件数は着実に積み上げ、館の資料を蓄積することができた。今後ＣＴ映像の解析、文献との突き合せなどを行い報告、論文としてまとめたい。 28年度は調査件数を維持しつつ、成果の公表をなるべく迅速に行うようにする。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4512-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)出土伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①)

【事業概要】
日本国内で出土・伝世した陶磁器について、総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室研究員　降矢　哲男

【主な成果】
(1) 調査
・福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵品調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。
・近畿地方の江戸時代から続く旧家の所蔵品の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。
(詳細は処理番号 4532-4 参照)。
・15 世紀から 16 世紀を中心とした日本海交易で用いられた陶磁器について、特に中国地方や北陸地方の当該時期の遺跡から出土した貿易陶磁器を中心に、出土傾向を調べるために数量カウントや写真撮影等を行った。
・京都市内や兵庫県内（3 件約 500 点）などの個人コレクションの陶磁器を調査し、その内容把握や写真撮影を行った。
(2) 成果内容
・福井市愛宕坂茶道美術館において、近年寄贈された陶磁器、特に茶道具を中心とした作品の調査を実施した。いずれも近代になって、福井県内のコレクターによって収集されたものが寄贈された。器形や年代、産地等についても多岐に及んでいるが、茶道具として用いるために集められたものであり、収集家の個性や地域性などを探る上で、一つのその傾向や蒐集経路などについての知見を得ることができた。そして、個人コレクションの調査により、一部寄贈を含む、数十点から百点ほどの作品の寄託を受ける予定であり、館蔵品で網羅されていない時期や産地の作品の展示が可能となり、平常展の内容をより充実したものとすることができる。
また、研究会を企画、運営し、その成果を多くの研究者に問うことにより、研究成果をより精緻なものにすることができると同時に、日々の研究成果を広く一般に公開できた。

愛宕坂茶道美術館調査風景

【備考】
(1) 調査回数 15 回
・主な研究発表
①「茶の湯と考古学」、企画展「まちを掘る」講演会、さかい利昌の杜、27 年 10 月 4 日
②「中世の喫茶文化－出土する茶道具の様相とその価値観－」、2015 発掘徳島講演会、レキシルとくしま、27 年 12 月 19 日　ほか 1 件
・主な論文執筆
①「茶の湯と朝鮮陶磁」『高麗美術館館報』第 101 号、高麗美術館、27 年 5 月 1 日
②「新たな発想と創造－桃山陶－」『目の眼』8 月号（通巻 467 号)、目の眼、27 年 8 月 1 日ほか 5 件
・研究成果の公表など
①第 36 回日本貿易陶磁研究集会「中世山陰と東アジア－貿易陶磁からみる日本海交易－」(米子市文化ホール、27 年 9 月 26・27 日）の開催企画、運営及びシンポジウム司会

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎データを蓄積していくことが本プロジェクトの根本である。27年度は複数の事例の調査を行うことができ、調査回数についても15回行うことができた。こうした基礎データの蓄積とともに、研究成果の公表を研究者のみならず、一般に向けた講演会等で公表できたことは、26年度と比べても非常に有意義であったといえる。27年は調査成果を蓄積し、その成果を公表していくだけでなく、調査の過程で展示を大幅に拡充できるだけの寄託品を受け入れられることとなったことは、大きな成果といえる。このことにより、大規模な展覧会や講演会などの博物館事業の内容を充実させていくことに繋がることが期待できる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画においては、着実に調査を進め、多くの基礎データの蓄積を行い、研究発表や展示を通じて、研究成果を着実に還元してきている。また、基礎データの収集を通じて、館蔵品や寄託品を充実させることもできた。 28年度以降も、基礎データの蓄積を継続して進めていくとともに、従来の蓄積データを照らし合わせながら研究を行い、さらなる成果の結実に結び付けていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4512-5

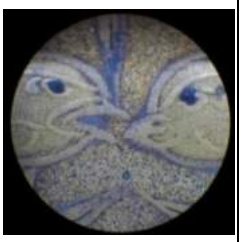
業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）特別調査「漆工」((5)- ①)

【事業概要】
寺院、博物館、美術館、個人宅で収蔵されている漆器について、熟覧のうえ、採寸や調書作成を行い、デジタルカメラによる簡易記録写真撮影を行った。この基本作業を通じて作品を評価し、調査した作品のうちの少なからぬ点数を、特別展覧会への出品や当館への寄託、寄贈に結びつけることができた。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員　永島　明子

【主な成果】
①27 年 4 月 24 日、京都市内の個人宅で、日本製、中国製、琉球製の漆器の調査を行った結果、戦前の京都で流通していた古物としての漆器の傾向を知ることができた（唐物の改造など）。
②27 年 4 月 28 日、神戸市内の個人宅で、日本製、朝鮮製の漆器の調査を行った結果、南蛮漆器の優品の発見があり、この作品を含め、14 件の漆器を寄託品として受け入れることができた。
③27 年 5 月 15 日、個人蔵の茶道具を調査し、唐物 2 件を寄託品として受け入れることができた。
④27 年 6 月 19 日、午前、個人所蔵者が当館へ持参した漆器の調査を行い、このうち 3 件を寄託品として受け入れることができた。
⑤27 年 6 月 19 日、午後、大和文華館で、笛筒の調査を行い、秋の琳派展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。
⑥27 年 7 月 16 日、東京国立博物館にて、硯箱の調査を行い、秋の琳派展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。
⑦27 年 9 月 17 日、個人所蔵者が当館へ持参した漆器の調査を行い、このうち 4 件を寄託品として受け入れることができた。
⑧27 年 10 月 13 日、琳派展の展示作業の過程で、畠山美術館の硯箱を熟覧する機会を得て、光琳蒔絵と言われる蒔絵の特徴の一端を把握することができた。
⑨27 年 10 月 26 日、琳派展の展示作業の過程で、藤田美術館の硯箱を熟覧する機会を得て、光琳蒔絵と言われる蒔絵の特徴の一端を把握することができ、また鉛板象嵌部分の保存状況についても学ぶことができた。
⑩27 年 11 月 4 日、妙心寺の僧堂、天授院の飯塚桃葉作の厨子などを調査し、このうち 1 点を寄託品として受け入れることができた。
⑪27 年 11 月 10 日、知恩寺にて、日本製、中国製の漆器を調査し、社寺調査報告書に掲載する情報を集めることができた。
⑫28 年 1 月 20 日、相国寺塔頭・大明光寺蔵の食籠を調査し、28 年度の禅展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。
⑬28 年 1 月 22 日、大徳寺にて重書箱（経箱）を調査し、28 年度の禅展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。
⑭28 年 1 月 25 日、萬福寺にて、隠元隆琦所用と伝わる漆器類を調査し、次年度の禅展のために、東京国立博物館のみに出陳さる品（当館には出陳されない品）も含めて、より充実した作品解説を執筆することができた。
⑮28 年 1 月 31 日、鎌倉国宝館にて円覚寺蔵の香合を調査し、28 年度の禅展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。
⑯28 年 2 月 12 日、大阪市立美術館にて、大仙院蔵の中国製の盆の調査を行い、28 年度の禅展のためにより充実した作品解説を執筆することができた。



萬福寺蔵、伝隠元隆琦所用の蒔絵衣桁とその部分
（東京国立博物館の臨済禅展に出陳予定）

【備考】
上記以外の調査を含め、1314 カットの撮影を行い、寄託品 22 件、寄贈品 3 件を受け入れることができた。また 27 年度の刊行物では、琳派展図録、社寺調査報告書などに成果を発表した。
上記のほか、大阪の旧家にて、延べ 36 日間で 389 件の漆器等を調査し、3020 カットの撮影を行い、寄贈品 127 件を受け入れたが、これについては別途「近畿旧家伝世文化財の総合調査(科学研究費補助金)」として報告する。
27 年度は海外調査費を取得しなかったため、国内調査のみである。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立博物館への信頼を基に調査の機会を与えられ、これを最大限に活かし、収蔵品の拡充や特別展覧会でのより分かりやすい効果的な展示に結びつけることができた。28年度以降も引き続き責任をもって取り組んでいきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査の結果を収蔵品や展覧会に結びつけることこそ、博物館の根源的な業務であり、本プロジェクトも中期計画に則って順調に進捗している。海外からの依頼もあるが、これについては予算と時間の確保が課題である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査・研究（(5)－①）

【事業概要】収蔵品、寄託品、それらの関連品、今後に収集・展示の対象となりうる文化財を調査し、併せて保存、展示、公開に関する研究を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　内藤栄

【主な成果】収蔵品、寄託品、それらの関連品、今後に収集・展示の対象となる可能性がある文化財について、研究員がそれぞれの専門分野の立場から調査を実施した。その調査に基づく研究の成果は、展示会場に掲示したパネル解説や、各種刊行物に掲載の論文、館内外での講座等に反映された。以下に 27 年度の調査と研究成果の一部を挙げる。

(1) 購入 4 件、寄贈 2 件、寄託 7 件を受け入れるにあたり、綿密な調査に基づく調書を各担当研究員が作成した。

(2) 客員研究員及び調査員の助言を仰ぐための文化財調査会を、26 回実施した。
- 薬師寺所蔵の渤海国書写ともいわれる華厳経の調査（27 年 4 月 9 日）
- 当館所蔵の善光朱印経と呼ばれる一切経の零巻を調査（28 年 3 月 4 日）　など

27 年 10 月 3 日、館蔵の正倉院文書、東寺文書、額安寺文書等の調査

(3) (2)以外の外部の識者を交えた文化財調査を、適時に実施した。
- 金剛峯寺所蔵の雑阿含経（五月十一日経）を調査（27 年 9 月 2 日）
- 国内外の研究者からなるグループとともに、「神聖ローマ帝国期古文書と日本古代中世文書の比較史的研究」を調査（27 年 10 月 3 日）
- 園城寺所蔵の金光明経文句を調査（27 年 10 月 27 日、28 年 3 月 8 日）
- 当館寄託品の隅寺心経を総合的に調査（27 年 12 月 11 日）　など

(4) 館外における文化財（収蔵品、寄託品、それらの関連品等）の調査を、43 回実施した。
- 個人コレクターの邸にて、奈良時代の写経や中世の仏画を中心とした多数の文化財を調査（27 年 9 月 4 日）
- 東大寺での経巻聖教調査に参加（27 年 6 月 3 日、9 月 17 日・18 日、28 年 1 月 20 日・21 日）　など

(5) 外部機関が主宰する研究プロジェクト 7 件に、当館から延べ 9 名の研究員が参画した。
- 大阪大学「5～9 世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」
- 九州大学「作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究」　など

(6) 各研究員の研究成果の一端を、当館の季刊誌「奈良国立博物館だより」、特別展会期中の新聞連載での展示品解説に発表した。

【備考】
論文等：湯山賢一「『摂関家旧記目録』の筆者は藤原忠実か―摂関家再興の象徴―」（田島公編『近衛家名宝からたどる宮廷文化史　陽明文庫が伝える千年のみやび』、笠間書院、28 年 3 月 31 日）　他 30 件
口頭発表：57 件　　文化財調書作成数：13 件　　奈良国立博物館だより掲載記事：10 件　　新聞寄稿件数：11 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品、寄託品、それの関連品の調査と研究は、博物館研究員の根幹をなす事業である。27年度も、各研究員がそれぞれの専門の立場から、館内での各自の文化財調査と外部識者を交えての調査を数多く実施し、また必要に応じて（多くは先方からの要請により）館外の文化財を調査する機会もあった。調査件数、調査結果を反映させた研究発表件数とも、数値は例年から大幅な増加とはなっていないため、この評定とする。今後、文化財調査の質と研究内容を向上させていくためには、研究員各自のスキルアップが欠かせず、そのためにも文化財に触れる時間を多く確保しなければならないため、他の業務の効率化が求められる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に掲げられた「文化財に関する調査及び研究の推進」は、日常的な文化財調査に基づき、その成果を研究論文、口頭発表等で堅実に公表しており、順調に達成されていると言える。今後も、現状に満足することなく、新たな研究手法の模索等を継続していく必要がある。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4513-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 復元模写制作に伴う仏教絵画の光学的調査と研究((5)-①)

【事業概要】仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剝落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光 X 線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 当館と東京文化財研究所との共同研究による光学的調査の成果データに基づいて制作が進められてきた国宝信貴山縁起絵巻の復元模写（文化庁蔵）について調査及び研究会を実施した。
- 信貴山縁起絵巻の復元模写について高精細デジタルカメラを用いたカラー画像撮影及び蛍光 X 線を用いた顔料分析を実施し、その成果に基づいて国宝原本との詳細な比較検討を行う研究会を開催した（28 年 1 月 7 日）。
- 復元模写及びその調査・研究会の成果を 28 年 4 月から開催予定の特別展「国宝　信貴山縁起絵巻」の展示並びに図録上等において公表するための準備を進めた。

(2) 愛知県立芸術大学が進める重要文化財大仏頂曼荼羅（当館蔵）の復元模写制作の基礎資料を提供するために、同作品に対する光学的調査及び検討会を行った。
- 当館光学調査室において蛍光 X 線分析器を用いた大仏頂曼荼羅の顔料調査を実施（27 年 6 月 4 日）。
- 高精細デジタルカメラを用いた大仏頂曼荼羅のカラー画像・近赤外線画像撮影を実施（27 年 9 月 28 日）。
- 愛知県立芸術大学において制作途中の大仏頂曼荼羅復元模写を実査し、光学的調査で得られたデータに基づく顔料等の復元について詳細な検討を行った（28 年 1 月 22 日）。

蛍光 X 線分析器を用いた大仏頂曼荼羅（当館蔵）の顔料調査風景

【備考】
調査回数：3 回（信貴山縁起絵巻復元模写調査 1 回、大仏頂曼荼羅調査 2 回）
調査作品数：2 件（信貴山縁起絵巻復元模写 3 巻、大仏頂曼荼羅 1 幅）
研究会開催件数：2 件（信貴山縁起絵巻復元模写研究会 1 回、大仏頂曼荼羅研究会 1 回）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平安絵巻の代表的な国宝信貴山縁起絵巻の復元模写制作というまたとない機会に、当館と東京文化財研究所の共同研究という形で最新の光学機器を用いた調査を実施した結果、そこで得られた精度の高い調査データをもとに当初の彩色復元が可能となり、復元模写の完成につなげることができた。ここで得られた光学的調査の成果及び復元模写の実物については、28年度に当館で開催予定の特別展「国宝　信貴山縁起絵巻」の展示及び展覧会図録において公開する予定である。さらに平安仏画の名品である重要文化財大仏頂曼荼羅（当館蔵）を愛知県立芸術大学が復元模写制作するにあたり、同大学と共同で精度の高い各種の光学的調査を実施し、そこで得られた成果に基づいて制作当初の顔料を復元的に考察し、復元模写制作につなげることができた。28年度も、現在継続中の復元模写制作に寄与するデータが得られるよう、引き続き同作品に対する追加の光学的調査を実施する計画である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	信貴山縁起絵巻と大仏頂曼荼羅という当館を代表する館蔵・寄託品について復元模写を制作するにあたり、過去に継続的に共同研究を実施してきた東京文化財研究所及び愛知県立芸術大学とともに精度の高い光学的調査を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。27年度は中期計画の最終年度に当たるが、次期中期計画においても現在制作途中の大仏頂曼荼羅復元模写、さらに新たに当館の寄託品である滋賀・観音正寺蔵絹本著色千手観音像の復元模写制作が愛知県立芸術大学によって行われることから、これに寄与するデータが得られるよう引き続きこれまでと同様の光学的調査を実施する計画である。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4513-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）平安時代の大般若経の総合的調査と、歴史資料としての情報資源化に関する研究(学術研究助成基金助成金）（(5)－①）

【事業概要】平安時代に日本で書写された『大般若波羅蜜多経』（略して「大般若経」とも）の網羅的な調査を通じて、当該期における写経の形態的特徴を明らかにするとともに、写経遺品から得られる情報を歴史学の研究資料として利用するための基盤を構築しようとするものである。平安時代のなかでも 9～11 世紀のものは情報の共有が不足しているため、本研究ではその時代に書写された『大般若波羅蜜多経』の基礎データの蓄積に重点を置く。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長　野尻忠

【主な成果】

(1)「安倍小水麻呂願経」（貞観 13 年〈871〉願文）の研究

26 年度に引き続き、「安倍小水麻呂願経」と呼ばれる大般若経を調査し、写真撮影した。特に 27 年度は、慈光寺以外に所在する僚巻に重点を置いて調査を進め、また外部の研究者に依頼して同経の国語学的な分析を実施した。以上の成果を受け、本経が発願された背景、書写の場（地域)、書写に参加した人々の階層や人数などについて考察を深めた。

・27 年 4 月 16 日、台東区立書道博物館において、巻第百七十を調査した。同館では、あわせて奈良時代末の大般若経と時代不詳の般若心経を調査した。

・4 月 17 日、「安倍小水麻呂願経」を今に伝えた慈光寺（埼玉県ときがわ町）の現地踏査を実施した。

・5 月 15 日、埼玉県立歴史と民俗の博物館が所蔵する「安倍小水麻呂願経」の僚巻 2 巻を調査、写真撮影した。また、同日、慈光寺所蔵「安倍小水麻呂願経」152 巻のうち、未調査だった 10 巻を調査、写真撮影した。

・5 月 16 日、大東急記念文庫（東京都世田谷区）において、巻第四百五十二と巻第六百を調査した。同文庫では、あわせて奈良時代末の大般若経と時代不詳の般若心経を調査した。

・6 月 12 日、調書の整理時に問題となった箇所につき、原本の追加調査を実施した。

・9 月 14 日・15 日と 10 月 26 日の 3 日間にわたり、外部の研究者（国語学）とともに全巻の訓点を調査した。

・11 月 6 日、根津美術館（東京都港区）において、巻第四百を調査した。

・11 月 20 日・27 日、調書の整理、及び原本の追加調査

(2)（1)以外の平安時代古写経・大般若経関連遺品の研究

・4 月 13 日、安楽寿院所蔵の仁寿 3 年（853）発願の大般若経を調査、写真撮影した。

・4 月 16 日、サントリー美術館において、奈良時代から江戸時代までの多数の経巻・聖教を調査した。

・5 月 1 日、大般若経（長屋王願経／和銅経）を外部の研究者 2 名とともに調査した。

・10 月 30 日、大宝院（三重県津市）において、平安時代の紺紙経巻を調査した。

(3) 研究成果に基づく講演等

・4 月 7 日～9 日、大般若経を含む平安時代の古写経について、一般の来館者向けに解説した。

・4 月 25 日、公開講座「平安時代の大般若経書写―安倍小水麻呂願経を中心に―」にて講演した。

・11 月 8 日、埼玉県立歴史と民俗の博物館において、「慈光寺伝来の法華経と大般若経について」と題して講演した。

・5 月 13 日、大般若経を含む平安時代の古写経について、大学院生向けに解説した。

【備考】

論文等：「概論　まぼろしの久能寺経に出会う　平安古経展」(『まぼろしの久能寺経に出会う　平安古経展』、奈良国立博物館、27 年 4 月 7 日）　他 4 件　　調査及び研究の回数：15 回　　講演会等：6 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は当初の計画どおり、慈光寺以外に所在する「安倍小水麻呂願経」の調査を順調に実施し、総合的な研究へと進む基盤ができた点が評価できる。しかし、各方面への調査及び外部識者との合同調査によって予想以上に多くのデータが採取され、その整理が追いついておらず、報告書のとりまとめに時間を要している。順調に進んだ点と進んでいない点を勘案し、27年度は左の評定とする。28年度は調査とデータ整理とのバランスを取りながら、歴史学研究の資料として耐えうる報告書の作成を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、前回の中期計画期間に実施した奈良時代の『大般若波羅蜜多経』に関する総合的研究を踏まえ、そのノウハウを生かして平安時代の『大般若波羅蜜多経』を調査し、研究を推進しようとするものである。研究の性格上、世間に注目され新聞記事に取り上げられるような成果は出にくいが、当館の仏教美術研究の蓄積の上に立ってこそ成し遂げられるものであり、中期計画は着実に達成できていると言える。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 仏教工芸の総合的調査((5)-①)

【事業概要】　仏教工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品に及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館の所在する奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長　清水　健

【主な成果】

(1)展覧会に関する調査

・特別展「国宝信貴山縁起絵巻―朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝―」の事前調査を実施し、朝護孫子寺所蔵の仏教工芸品、及び関連資料を調査・熟覧した（27 年 7 月 24 日、12 月 1 日、28 年 1 月 29 日、2 月 13 日)。

・特別陳列「伊豆山神社の歴史と美術」の事前調査を実施し、同社所蔵の仏教工芸品を調査・熟覧した(27 年 8 月 6 日、11 月 27 日)。

・特別展「白鳳―花ひらく仏教美術―」にて借用した文化財について、光学調査を含む調査を実施し、法隆寺所蔵・伝橘夫人念持仏厨子の扉絵等の鮮明な近赤外線画像を撮影し（27 年 9 月 9 日)、会期末に公表した。

・特別展「白鳳―花ひらく仏教美術―」にて借用した文化財（薬師寺東塔水煙）について、鋳造技法等を検討する研究会を行った(27 年 9 月 7 日)。

(2) 経常調査、その他の調査

・科学研究費　基盤研究（A)「春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究」（研究代表者・湯山賢一）による文化財の調査を実施した(27 年 4 月 5 日、28 年 1 月 17 日、2 月 16 日)。

・中国・上海博物館にて同館所蔵の唐鏡を調査・熟覧をした(27 年 12 月 10 日)。

・収蔵する仏教工芸品について調査を実施した。

朝護孫子寺調査(扁額)

朝護孫子寺調査(湯釜)

【備考】

・調査　　25 回（うち客員研究員・調査員による調査は 9 回、海外調査 1 回)

・研究会　　1 回

・清水　健「秋田県の鏡像」、平成 27 年度後三年合戦沼柵公開講座「清原氏と平安のかがみ―秋田県の鏡像と後三年合戦―」（於・雄物川コミュニティセンター）資料集、27 年 8 月 2 日

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画に基づき、概ね予定通りの成果を上げている。一層調査の機会や対象を増加させ、調査手法を多様化させる必要性があると考えられる。28年度以降は奈良周辺の寺社の調査を引き続き重点的に行うとともに、奈良周辺の仏教工芸を相対的に捉えるためにも、国内外の諸地域に対象を広げていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づいて、着実に調査を実施し、順調に成果を上げている。調査成果は、展覧会図録を筆頭に、紀要、その他の刊行物、講演等によって随時公表しており、展覧会内容の充実や研究資源の蓄積にも繋がっている。今後は一層量的、質的に調査研究を充実させることによって、仏教工芸に関する資料・情報の充実に努め、国内外に成果を発信していきたい。 28年度以降は、30年度に展覧会を控える春日信仰に関する工芸品の調査、神仏習合に関する工芸品、及び上代工芸の調査研究に力を入れていきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4513-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)古墳・古墓出土品の調査と研究（(5)-①）

【事業概要】当館所蔵の五條猫塚古墳（奈良県五條市）出土品の再整理作業を通じて五世紀の大陸・列島間の文化交流の考究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長　吉澤　悟

【主な成果】

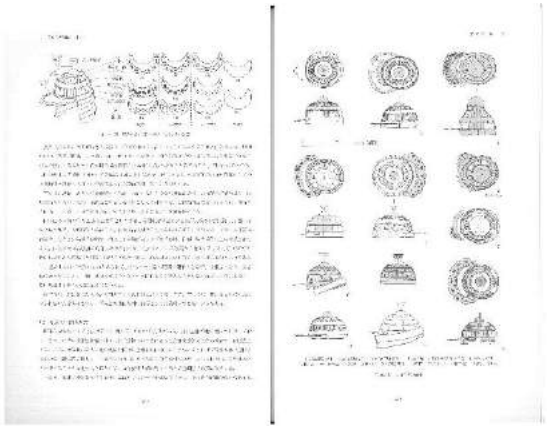
これまで継続的に進めてきた五條猫塚古墳出土品の再整理報告書の作成を行った。全体で三分冊の構成を計画しており、すでに「写真図版編」（25 年）、「報告編」（26 年）が完成し印刷が終了している。

今回はその最後の考察と総括にあたる「総括編」（当初計画の名称は「考察編」）の製作を行った。これまでの整理作業で当館内に蓄積・保管したデータをもとに、外部の研究者を交えて研究会を組織し、各遺物の考察論考と総括的評価の論考を編集し、発行した。

【備考】

成果品：「五條猫塚古墳の研究・総括編」奈良国立博物館発行　27 年 12 月 28 日

※「五條猫塚古墳の研究・写真図版編」、「同・報告編」はすでに印刷済みであるが、三冊揃っての頒布とするために未公表である。今般の「総括編」をもって頒布を開始する。



『五條猫塚古墳の研究　総括編』

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	古墳出土品の調査と研究に関する精度の高い論考を集めて「総括編」を発行することができた。 今回の発行をもって『五條猫塚古墳の研究』は三分冊が揃い、報告書の発行事業を完遂することができた。報告書発行によってこれまで蓄積・保管されたデータを総括し、広く発信することができた意義は大きいと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査・研究の成果を報告書のかたちで公開でき、中期計画における「有形文化財の保存・活用を促進する」ことが達成できたと考える。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)

【事業概要】
収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　小泉惠英

【主な成果】
収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学・保存科学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を様々な展示に反映させ、また学会・研究会ならびに学術雑誌・書籍等でも発表・公開した。

【備考】
様々な研究成果を以下のような展覧会に反映させた。
・開館10周年記念特別展「戦国大名-九州の群雄とアジアの波涛-」
・開館10周年記念特別展「大英博物館展-100のモノが語る世界の歴史-」
・開館10周年記念特別展「美の国　日本」
・開館 10 周年記念特別展「黄金のアフガニスタン 守りぬかれたシルクロードの秘宝」
・トピック展示「柿右衛門―受け継がれる技と美―」
・トピック展示「新羅王子がみた大宰府」
・トピック展示「祈りのかたち 八幡」

トピック展示「祈りのかたち八幡」
大分県立歴史博物館での「法華経絵」の調査の様子

トピック展示「祈りのかたち八幡」
フィールドワーク（撮影作業）の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究員の様々な調査研究を通し、博物館活動としての資料収集、調査・研究、公開が一体となり、極めて充実したものとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財の調査研究に基づき館蔵品・寄託品の計画的収集や魅力ある展示活動を展開するなど、計画は順調に進捗している。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4514-2

業務実績書

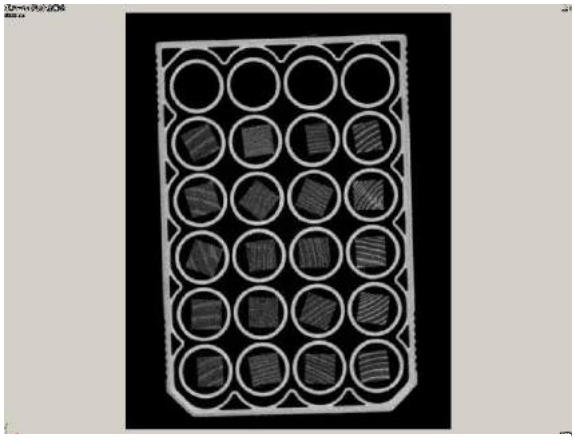
中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）Ｘ線ＣＴスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析に関する調査研究（(5)－①）

【事業概要】
Ｘ線ＣＴスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　今津節生

【主な成果】
　ＣＴを使った研究は“文化財の内部構造を探る”ことから“材質を推定する”方向へ研究を進めた。ＣＴ撮影の立方体の最小単位であるボクセル（デジタルデータの単位）の輝度情報や断面画像のパターンを使い、木材の樹種を推定する研究を進めた。その結果、仏像に使用される代表的な10種類の木口断面パターンから、99.9%の確率で樹種を推定することができた。

公開シンポジウム「Ｘ線ＣＴを用いた文化財の研究と活用」を開催し、成果集として報告書を発行した。（27年12月19日）



木材標準資料のＸ線ＣＴ像

【備考】
調査件数　　10 件
調査回数　　100 回
学会研究会等発表数　6 件　うち、日本文化財科学会　4 件
論文掲載数　　2 件　Ｘ線ＣＴを核にした文化財研究の新基盤
シンポジウム口頭発表：5 件、ポスターセッション：34 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示品・収蔵品と標準資料を比較しながら多くの資料を調査することができた。また、ＣＴ調査の結果から非接触・非破壊で樹種などの材質推定できることが判明した。 ＣＴデータを用いたパターン分析による樹種同定はこれまでになく、その上、高い確率で樹種を推定することが可能になった等、非常に高い効果が得られた。 28年度もさらに、多くの調査を実施しながら非接触・非破壊による材質推定を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に調査研究を遂行できた。また、研究をまとめたシンポジウムを開催することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4514-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 日本中近世の工芸、特に茶道具に関する調査研究((5)－①)

【事業概要】
茶の湯を彩るさまざまな道具の世界を館蔵品を中心に紹介するトピック展示「茶の湯を楽しむ」は、文化交流展における重要テーマのひとつとして位置づけ、20 年度以来これまでに 6 回開催してきた。このトピック展示は今後もさまざまな観点から展開を行う予定である。今後のテーマ立案のため、日本の中世から近世にかけて制作された茶道具（とくに陶磁器、漆器、金工、染織など）の基礎的な調査を実施する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　酒井田千明

【主な成果】

(1) 27 年度の茶の湯をテーマとした文化交流展のトピック展示として「田中丸コレクションの茶陶」を 27 年 10 月 14 日～12 月 20 日にかけて開催した。本展覧会は、国内屈指の陶磁コレクションの一つである（一財）田中丸コレクションのなかから、江戸時代に九州各地の窯で生産された茶道具に着目したものである。本展覧会に先立ち、同コレクションが所蔵する唐津焼、高取焼、上野焼、伊万里焼、鍋島焼、薩摩焼の茶陶器の調査研究を実施し、近世の九州において誕生し、発展した茶道具の様相を明らかにした。

「田中丸コレクションの茶陶」展より

(2) 27 年度は上記以外にも、特別展及び文化交流展において茶の湯をテーマとした展示に注力した。
開館 10 周年記念特別展「戦国大名―九州の群雄とアジアの波涛―」では、近世の九州・山口の大名家における茶の湯の受容について調査研究を行い、各大名家に伝来する茶道具を紹介した。

文化交流展においては、27 年 10 月 14 日～11 月 23 日まで「唐物と室町水墨画」展を開催し、室町将軍家において受容された、中国から請来された唐物の茶道具と水墨画を紹介した。
28 年 1 月 19 日～4 月 17 日まで「芦屋鋳物師の世界」を開催し、室町時代に活躍した芦屋鋳物師の活動に着目し、芦屋釜や鐘等貴重な作品を紹介した。
文化交流展の基本展示室においても、年間を通じて、唐物の茶碗や茶入、高麗茶碗など多岐に亘る茶道具を紹介した。
これらの展示に先立ち、東京国立博物館が所蔵する茶道具の調査研究を行い、各時代における茶道具の受容について認識を改める機会となった。

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館において、対外交流の窓口として九州を経て輸入された唐物の茶道具や高麗茶碗の調査研究は必須である。また、中近世に九州で誕生し、展開した芦屋釜や唐津焼を始めとする九州陶磁の茶道具の調査研究も重要である。27年度はこれらの調査を進め、開館10周年記念としてその成果を広く紹介する機会に恵まれた。28年度は、中近世の大名家における茶の湯の受容についてさらなる調査を進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	前述のとおり、27年度は、特別展と文化交流展共に、茶の湯をテーマとした展示を充実させることができた。特に、トピック展示「田中丸コレクションの茶陶」においては、国内屈指の陶磁コレクションである（一財）田中丸コレクションのなかから、九州各地の窯で作られた茶陶の名品に着目し、公開した。近世の九州陶磁の調査研究及び展示は、九州の地にある当館において取り組むべき重要な課題の一つである。27年度の成果を踏まえて、今後も継続的に調査研究を進めていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 特別展「コルカタ・インド博物館所蔵　インドの仏―仏教美術の源流」に関する調査研究（(5)-②）

【事業概要】特別展「コルカタ・インド博物館所蔵　インドの仏―仏教美術の源流」（27年3月17日～27年5月17日）はインド、コルカタのインド博物館が所蔵する仏教美術の名品を通して、仏教美術の誕生からその後の展開までをたどる展覧会である。本事業は展覧会開催に向けた出品作品に関する基礎的な調査・研究と、会期中に実施した展示作品の細部の検討を含む。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長　　丸山　士郎

【主な成果】

(1)作品調査

・展示期間中には、展示作品の詳細な観察を行い、事前調査において課題となっていた点（人物表現の変遷、地域的特徴、石材選択と加工技術など）を再検討した。
・展覧会終了後の撤収作業に際しては、事前調査で課題となっていた浮彫や石彫の製作技法などについて、若干の検討を行った。
・新たに得られた知見を、来日したインド博物館学芸員を交えて検討した。

(2)主な成果

・人物表現の技法等について、特にガンダーラ美術におけるロリアン・タンガイの位置づけを明確にすることができた。
・石彫の製作技法の詳細を確認するとともに、いくつかの作品については製作時の状況を詳しく考察することができた（例えば、小塔の石材を転用し仏足石を作り出すプロセスの復元など）。
・成果をインド博物館の学芸員と共有し、新たな調査・研究活動への枠組みをつくることができた。

弥勒菩薩坐像
（コルカタ・インド博物館所蔵）

【備考】

・上記３件の調査を実施。
・成果の一部は、４月 11 日（土）に実施した記念講演会「インドの仏―古代初期から密教まで」　（講師：小泉惠英）において紹介した。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会開幕前の事前調査に加え、会期中に展示作品の追加調査と検討を行ったことで、初期の仏教美術とその後の展開について、より実証的な知見を得ることができた。またその成果を記念講演会やギャラリートークに反映することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿った調査研究を実施することができた。特に出品作品の調査・研究成果をふまえて、適切かつ分かりやすい展示を実現することができ、「インドの仏」展は目標人数を大きく上回る来館者を得た。また今回得られた知見は、東洋館での平常展示にも活かせるものと見込まれる。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2「クレオパトラとエジプトの王妃展」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】特別展「クレオパトラとエジプトの王妃展」　(27 年 7 月 11 日～ 9 月 23 日) に関する調査研究			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室 主任研究員・品川欣也

【主な成果】

(1) 調査

・特別展出品作品の所蔵機関などに対する作品情報の聞き取り、作品の展示方法や保存状況などについて調査を行った。ルーブル美術館（27 年 5 月 14 日）など。

・特別展出品作品については、展示および撤収に際して各所蔵機関のクーリエらと、また会期中は日本のエジプト学者と研究動向などについて情報交換を行なった。

(2) 調査の結果得られた知見・発見等

・出品された個人コレクション（アル・タニコレクション）はこれまで未周知の作品であり、青色彩文土器の成立と展開を考えるうえで新たな知見を深めることができた。

・出品作品の裏面や底面など普段観察できない箇所や細部について知見を深めることができた。

(3) 調査・研究の成果をどように展示、講演会出版物等に反映させたか

・記念講演会「遺跡に見る古代エジプトの女王・王妃たち：発掘調査の現場から」近藤二郎(早稲田大学文学学術院教授、本展監修)、図録「クレオパトラとエジプトの王妃展」および展示・ブログなどで成果を反映させた。

作品調査(ルーブル美術館)

作品点検風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの調査成果を特別展に伴う各事業に反映させることができただけではなく、当館とエジプト学ならびに各博物館・美術館関係者との人的交流も深めることができた。その結果、未周知の作品について新たな知見を得ることができたと同時に最新のエジプト学の知見を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿った調査研究を実施することができた。とくに出品作品の研究成果をふまえて、従来のエジプト展とは異なる最新の研究成果に基づいた特別展を開催することができた。また今回の特別展で得られた知見は、当館の所蔵資料の調査研究ならびに総合文化展にも活用することができると考える。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-3 特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究
27 年 10 月 27 日～28 年 2 月 21 日に開催された特別展「始皇帝と大兵馬俑」の展示を充実させるための調査研究。20 世紀最大の考古学発見ともいわれる兵馬俑の魅力、および兵馬俑に象徴される秦・始皇帝のなしとげた歴史的大事業の数々を適切に示すため、展示品および関連展示の調査を通して、より安全かつ効果的な展示手法・構成の検討を行う。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員　川村佳男

【主な成果】
(1)秦始皇帝陵博物院など中国陝西省にある展覧会出品候補作品の所蔵館において、作品状態の詳細とともに、どのような支持具があればさらに魅力的な展示が実現可能かを調査して、より安全かつ効果的な展示手法を検討した。

(2)報告書の写真・図版・記載だけではわからない作品の詳細を実査することで、形態・製作技法などに関する実態を確認するとともに、新知見を得ることができた。これにより、作品解説などの執筆にかかる、より確実で詳細なデータを入手できた。

(3)作品の保存状態と展示状況を把握することで、特別展会場において適切な作品配置や安全対策を検討することができた。

借用する土器の実測調査

兵馬俑レプリカのサンプル視察

【備考】
調査回数：2 回、関連原稿の発表件数：16 件、関連講演回数：20 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示予定作品の調査機会を得たことで、作品の形状・材質だけでなく、保存状態や所蔵館における現在の展示状況なども調査を実施したことで、作品のより良い展示手法を検討できることとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。また、ワーキンググループのメンバーのみならず、環境保存担当者や外部の関係者とともに役割分担を明確にしつつ、ともに調査することで、展覧会準備を学術・安全・展示効果などのさまざまな面から多角的に効率よく進めることができた。 調査の成果は、展示会場における作品展示・図録・音声ガイド・広報など幅広い範囲でたいへん有効に活用することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-4

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-4 特別展「生誕 150 年　黒田清輝－日本近代絵画の巨匠」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】特別展「生誕 150 年 黒田清輝―日本近代絵画の巨匠」に関する調査研究
28 年 3 月 23 日～5 月 15 日に開催した特別展特別展「生誕 150 年 黒田清輝―日本近代絵画の巨匠」の展示を充実させるための調査研究。近代美術史において極めて大きな位置を占める黒田清輝の画業を適切に示すため、展示作品の作品調査により、照明効果を勘案した展示手法、展示構成の検討を行う。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長　松嶋　雅人

【主な成果】
(1)作品調査
展覧会出品作品の所蔵機関、所蔵者への出品交渉を兼ねた作品調査を実施し、作品に関わる情報の聞り取り調査、作品の保存状況、展示状況などの調査を行った。
前田育徳会（27 年 6 月 3 日）
三菱一号館美術館（27 年 6 月 29 日）
鹿児島県歴史資料センター黎明館（27 年 8 月 18 日）
早稲田大学 會津八一記念博物館（27 年 9 月 8 日）
宮城県・個人宅（27 年 11 月 7 日）

(2)主な成果
・作品の所蔵展示施設における展示状況を調査し、作品の画面詳細を調査することで、展示における効果的な配置、照明設計を検討する必要な情報を得ることができた。
・作品調査ならびに作品情報収集の結果を受けて、展覧会会場における効果的な作品配置や照明効果の検討を行い、十全な展示の想定が可能となった。

特別展「黒田清輝」展示風景

【備考】
27 年度は 5 回の調査を行なった。
28 年 3 月に発行する特別展の図録に研究成果を発表する予定である。
実績値　記者発表会 1 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に作品調査を行い、作品の現状における展示状況も把握できたことで、作品の詳細情報を得ることとともに、その成果を取り入れた黒田清輝の画業と作品に対する鑑賞者の理解を深める展示を想定することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展の開催に向け、中期計画に沿った調査研究を実施することができた。特に当館担当者だけでなく、本展ワーキンググループの共同により、作品調査ならびにその内容の検討の成果によって、本展覧会において、より適切な展示を可能とする材料を得ることができたため、調査内容を元に、特別展開催に向けて、鑑賞者の理解を深める展示を十全に検討、準備することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-5　特別展「黄金のアフガニスタン－守りぬかれたシルクロードの秘宝－」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】
特別展「黄金のアフガニスタン－守りぬかれたシルクロードの秘宝－」（28 年 4 月 12 日～28 年 6 月 19 日）で出品される文化財は、アフガニスタン国内の 4 つの遺跡で発掘され、かつてバクトリアと呼ばれた同国北部の古代文化を代表する貴重な考古資料である。本事業は展覧会開催に向けて実施するバクトリアの歴史と出品作品に関する基礎的な調査・研究である。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長　丸山　士郎

【主な成果】
①調査・研究の内容
・同展は 18 年に始まった国際巡回展であり、各国で製作されてきた展覧会図録では、特にこの十年間に出版された研究成果が反映されていない。そこで、バクトリアの文化の基礎となったヘレニズム文化に関する人類学的研究や、ベグラムの出土物に関する編年研究など、近年に出版された成果を収集したうえで、展示作品とそれらが示す前 3 世紀～3 世紀頃のバクトリアの歴史について検討を加えた。
・九州国立博物館での開催（28 年 1 月 1 日～28 年 2 月 14 日）にともなう展示作業および撤収作業に合わせて、出品作品の詳細な観察と、九博・東博の担当者による検討を実施した。
・バクトリアに展開したヘレニズム文化の特徴を把握するため、大英博物館等に展示されているヘレニズム期の資料を比較資料として見学した。
②主な成果
・最新の研究成果を部分的にではあるが、図録や展覧会場での解説に反映させることができた。
・金細工やガラス器、石製品などを詳細に観察できたことで、特に製作技法について新たな知見を得ることができた。
・調査研究の成果をアフガニスタン国立博物館の学芸員と共有し、新たな調査・研究活動への枠組みをつくることができた。

エピダウロス（ギリシア）の劇場。アイ・ハヌムと同時期の建築をとどめる同遺跡は、重要な比較材料

裏面の観察から、金製留金の製作技法をさぐる

削りとられた碑文の痕跡。壺の使用状況とその背景について物語る資料

【備考】・上記 3 件の調査を実施。
・成果の一部は、展覧会図録等のほかに、28 年度に開催予定の記念講演会やギャラリートークでも紹介する。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会開幕前の事前調査によって最新の研究成果を把握し、また展示作品の詳細な観察と検討を実施できた。その結果、特に展示作品の製作技法についての新しい知見を得ることができた。調査・研究の成果を展覧会図録や会場での展示・解説パネル等に反映することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展開催に向けて、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究」に沿った調査研究を実施することができた。特別展「黄金のアフガニスタン－守りぬかれたシルクロードの秘宝」では、適切かつ分かりやすい展示と、日本や東アジアも視野に入れた解説を準備することができている。また今回の調査で得られた知見は、東洋館での関連作品の展示にも活かすことができる。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-6 特別展「古代ギリシャ展―時空を超えた旅―」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】
特別展「古代ギリシャ展―時空を超えた旅―」(28 年 6 月 21 日～9 月 19 日開催予定）に関する調査研究。
出品候補作品を調査し、調査の成果を特別展の展示等の運営に生かす。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室長　白井克也

【主な成果】
(1) 調査先・調査日
ギリシャ各地の展覧会出品機関（キクラデス博物館，古代アゴラ博物館，アクロポリス博物館，ミュケナイ考古学博物館，パトラ考古学博物館，オリンピア考古学博物館，オリンピック歴史博物館，イラクリオン考古学博物館，レムノス考古学博物館，テッサロニキ考古学博物館，ペラ考古学博物館，テラ先史博物館，ピレウス考古学博物館，アテネ碑文博物館，アテネ国立考古学博物館）で、出品予定作品の形状・材質・法量・保存状態・現地での展示方法を調査するとともに，先方の担当者と意見交換を行った。
あわせてミュケナイ遺跡，オリンピア遺跡，クノッソス宮殿，アクロポリスの丘などの遺跡を視察し，出品作品の本来置かれた状況を確認した。
ギリシャ政府の文化スポーツ省において，東京における展示の方針を伝えるとともに，ギリシャ政府の委員と展示の方法や作品の意義，留意点などについて意見交換を行った。
（28 年 2 月 25 日～3 月 6 日）

(2) 主な成果
実物の細部形状や保存状態を確認し、展示方法や、必要な支持具等について材質・大きさ・強度などの仕様について、必要な知見を得た。
現地の担当者と意見交換し、作品の製作背景に関して理解を深めるとともに、作品の輸送・展示・保存に関する知見を得た。

古代アゴラ博物館での調査風景

【備考】
現地調査 1 回
報道発表会 1 回
28 年度に実施する特別展において成果を公表する予定。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	現地において作品を調査することができ、新石器時代からヘレニズム・ローマ時代に至るギリシャ美術の製作について知見を深めることができ、また作品の輸送・展示等に必要な知見を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展の開催に向け、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-7 特別展「平安の秘仏－滋賀・櫟野寺の大観音とみほとけたち」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】
28 年 9 月 13 日～12 月 11 日に開催予定の特別展「平安の秘仏－滋賀・櫟野寺の大観音とみほとけたち」の展示を充実させるための調査研究。滋賀県甲賀市の櫟野寺に伝わる 3m を超す大観音を含めた 20 躯を安全に輸送し、効果的な展示をするための検討を行う。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長　丸山　士郎

【主な成果】
(1) 事前調査
　展覧会出品作品の選定と、それらの保存状態の確認のための調査を実施した。また、作品修理担当の美術院、輸送担当の日本通運および共催者の読売新聞社の担当者とともに、櫟野寺にて作品の事前修理と安全に輸送するための検討を行った。

(2) 主な成果
　作品の保存状態を確認し、輸送・展示に必要な修理について検討した。28 年 5 月に 7 日程度かけて表面彩色の剥落止めを中心に修理を実施することを決めた。狭い厨子に入った像高が 3 メートルを超す十一面観音菩薩坐像は、厨子内で木枠に固定する方法を検討し、次回調査までに木枠のおおよその図面を作成することにした。
　展覧会図録の作品解説等に執筆するための観察も行い、作品調書や写真の作成を行い、記者発表資料や一般の雑誌等に展覧会や作品の紹介文を執筆した。

櫟野寺調査風景

【備考】
・27 年度は 2 回の調査を行なった。
・28 年度に発行する特別展の図録に研究成果を発表する予定である。
・実績値　記者発表会 1 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	事前に作品調査を行い、作品の保存状態や輸送方法を検討することによって安全に作品を展示することができる。また、出品作品の全てについて新規写真撮影を終えたので、作品解説や図録作製を効率的に行うことができる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展の開催に向け、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-1-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-8 臨済禅師 1150 年、白隠禅師 250 年違諱記念「禅―心をかたちに」に関する調査研究((5)-②)

【事業概要】
臨済禅師 1150 年、白隠禅師 250 年違諱記念「禅―心をかたちに」(28 年 10 月～11 月開催予定)に関する調査研究出品候補作品を中心に、各所有者の所有する作品を調査し、出品作品の選定・解説執筆に役立てる。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長　救仁郷秀明

【主な成果】
(1)調査先・調査日
・高知県立歴史民俗博物館にて絵画分野の作品 1 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 4 月 14 日)
・広島・佛通寺にて絵画彫刻書跡分野の作品 15 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 5 月 28 日)
・大阪・南宗寺にて絵画分野の作品 3 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 6 月 11 日)
・静岡・方広寺にて絵画彫刻書跡分野の作品 7 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 8 月 19 日)
・大分・見星寺にて絵画分野の作品 3 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 8 月 26 日)
・大分・月桂寺にて絵画分野の作品 3 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 8 月 26 日)
・浜松・方広寺にて絵画分野の作品 1 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 10 月 21 日)
・静岡・成道寺にて絵画分野の作品 1 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 11 月 17 日)
・東京・祥雲寺にて絵画分野の作品 3 件を調査、未見の作品に関する知見を得た（27 年 11 月 27 日）
・富山・国泰寺にて彫刻分野の作品 1 件を調査、未見の作品に関する知見を得た(27 年 12 月 21 日)

広島・佛通寺での調査

(2)　主な成果
・大分・見星寺ではこれまで未紹介の白隠作品が見つかり、出品候補作品に追加することができた。
・従来、借用困難とみられていた大分・月桂寺の所蔵品を調査することができ、借用への道筋をつけることができた。
・東京・祥雲寺では出品候補作品以外の作品も調査し、未紹介の近世肖像画に関する知見を得た。

【備考】
・27 年度は 10 回の調査を行なった。
・28 年度に作成する特別展の図録に研究成果を発表する予定である。
・実績値　記者発表会 1 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査を行なうことにより、未知の作品を発見し、出品候補作品の幅を広げることができた。 出品依頼と調査をなるべく同時に進めることに努め、効率化を図ることができた。 未見の作品を調査することにより、画像などでは得られない作品の細部や、色調・技法の詳細、保存状態についての知見を得ることができ、作品解説の執筆に役立てることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展の開催に向け、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に、普段はほとんど一般に公開されない寺院所蔵の文化財に調査の光をあて、特別展に出品作品として取り込むことができた。日本の文化として海外でよく知られられている禅、茶の湯、水墨画、禅画を主要テーマとする本展の準備を通じて、全国の臨済宗・黄檗宗各派の寺院との良好な協力関係を築く拠点を確保し、文化財の調査研究、それらの借用・展示に資する所蔵者との信頼関係を醸成することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-1-9

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-9 特別展「春日大社－千年の至宝」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「春日大社－千年の至宝」(29 年 1 月～3 月開催予定)に関する調査研究 出品候補作品を中心に、各所有者の所有する作品を調査し、出品作品の選定・解説執筆に役立てる。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室・貸与特別観覧室長 竹内奈美子
【主な成果】 (1)　調査先・調査日 春日大社にて、本殿特別公開を視察し、絵画・工芸分野の作品調査を行なった。(27 年 4 月 16～17 日) 春日大社にて、勧進宝物特別公開を視察し、工芸分野の作品調査を行なった。(5 月 30 日) 絵画分野の新出作品を発見し、東京国立博物館にて調査を行なった。(7 月 27 日) 九州国立博物館にて、絵画分野の出品予定作品の調査を行なった。(10 月 22 日) 春日大社にて春日若宮おん祭を視察し、奈良国立博物館にて絵画分野の作品調査を行なった。 (12 月 16 日～17 日) (2)　主な成果 実見調査により保存状態の詳細を確認し、展示方法の検討に必要な情報を得た。 細部観察を行なうことにより、作品の細部表現の差異などについて知見を深め、展示構成の検討に活かされた。 実見調査により形状・制作技法の詳細を確認し、作品についての理解を深め、解説執筆に必要な情報を得た。 今まで紹介されていない春日権現験記絵模本を発見できた。 春日大社主催のシンポジウムにて、ワーキンググループメンバーが講演し、調査研究の成果の一部を発表した。			
【備考】 28 年度に作成する特別展図録に研究成果を発表する予定である。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実見調査を行うことにより、出品作品の選定や、展示構成、展示方法の検討に大いに資する情報を得た。特に27年度は出品作品の選定がはかどり、展示構成が具体的に固まった。また実見調査によって得られた作品情報は、28年度に作品解説等展覧会図録原稿を執筆する際にも、必要不可欠のものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度の特別展の開催に向け、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-2

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究（(5)－②）		
【事業概要】東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群より形成されている。漢籍には医学館が旧蔵していた医学書、本草書などで、主に明、清版からなっている。また洋書は、蕃書調所、開成所、長崎東衙官許等の旧蔵書で、医学、地質学、植物学、辞書などがまとまっている。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　髙橋裕次
【主な成果】 漢籍には、経年によって劣化や綴じ糸の欠失しているものが多く、必要に応じて糸綴じなどの手当を行った。調査では、図書館システムに入力したデータをもとに書誌学的情報を確認した上で、デジタル撮影を実施した。 調査対象のうち、「太平聖恵方」は、宋の太宗が勅命によって天下の有効な処方を集め、分類編纂した著作である。尾張藩所蔵の中世の写本を、医学館の多紀元悳が書写し、さらに再度校訂を加えながら写したもので、医学館の考証学的事業の成果がうかがえる資料の一つである。			
【備考】 漢籍　修理　84 冊 　　デジタル撮影　51 冊（3,353 カット）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	効率的に漢籍の調査を行い、その現状と活用に向けた状況の把握ができた。詳細な情報をもとに、今後、資料館での閲覧業務及び本館での展示において、利用者や鑑賞者の理解を深めることができるようにつとめたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「所蔵品・寄託品に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って、漢籍の調査並びにその内容の検討を行い、修理とデジタル撮影によって、利用者へのサービス向上を図ることができた。28 年度は、洋書の調査を充実させ、計画に従って着実に進行し、所期の目標を達成したい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3)東洋民族資料に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】東京国立博物館が所蔵する約 3,500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究を行う。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男

【主な成果】

(1)東京国立博物館で 27 年 4 月 14 日に台湾のパイワン族の民族資料を、11 月 17 日にオセアニア及び台湾全般の民族資料を、11 月 24 日にクリスを始めとするインドネシアの武器を調査し、28 年 2 月 1 日～4 日にかけて台湾の民族資料全般の調査を台湾の中央歴史語言研究所の陳光祖氏とともに実施した。また、28 年 2 月 6 日から 13 日にかけてパプアニューギニアで現地の民族資料の調査を行った。

(2)オセアニア・インドネシア・台湾の民族資料調査で得られた新知見や基本情報は、東京国立博物館のデータベースとともに、東洋館 13 室における展示の題箋やキャプションに反映させることで、展示内容をさらに充実させることができた。

(3)これまでの調査成果に基づいて、28 年 1 月 13 日～4 月 10 日まで東洋館 13 室で「台湾　パイワン族の木彫」を展示することができた。また、28 年度の 28 年 7 月 5 日～10 月 10 日にかけて東洋館 13 室で開催予定である特集「クリス　神秘なるインドネシアの武器」の展示案及び 11 月 15 日～12 月 25 日まで平成館企画室で開催予定である特集「南太平洋の生活文化」の展示案を猪熊研究員とともに作成した。

「台湾　パイワン族の木彫」の展示

パプアニューギニアにおける現地調査の様子

【備考】

調査回数：5 回（うち海外調査 1 回)。作品調査件数：225 件。関連展示回数：4 回。撮影点数：約 350 カット。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館内における調査に加えて、館外での調査は26年度も実施したが、27年度は初めてパプアニューギニアで現地調査を猪熊研究員・井出研究員とともに実施した。これにより28年度に予定されている展示では100年近く前に当館へ将来された展示品が、現地で現在どのように使われているのか画像パネルなどで示すことが可能となる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画全体を通して、台湾のパイワン族及びインドネシアのクリスといった個別のテーマで調査を進め展示に結びつけるとともに、特集「南太平洋の生活文化」といった台湾とオセアニアを含む地域横断的な展示案を作成することができた。28年度以降も「東洋民族資料に関する調査研究」を継続して、当館における調査の成果と館外、なかでも現地での調査の成果を融合させることで、展示の内容をさらに充実させることが期待される。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究((5)-②)

【事業概要】2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって津波被害に遭った文化財の保存修復についての保存環境、安定化処理、本格修理に関する調査研究を行い、被災資料の保全を図るとともに今後想定される自然災害に対する有効な手立てを開発することを目的として実施する。

【担当部課】	保存修復課	【プロジェクト責任者】	神庭信幸

【主な成果】

(1)陸前高田市立博物館内の環境を調査し、問題点については環境改善を実施した。

27 年 7 月 27 日～28 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
27 年 9 月 7 日～8 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
27 年 10 月 21 日～22 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
27 年 11 月 29 日～30 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
27 年 12 月 16 日～17 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
28 年 1 月 18 日～19 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施
28 年 2 月 25 日～27 日　陸前高田市立博物館にて環境調査・改善を実施

漆工品の CT 調査

(2)陸前高田市立博物館が所蔵する工芸資料及び美術資料の安定化処理を実施した。

陸前高田市立博物館所蔵の工芸資料(10 件)の安定化処理を実施
陸前高田市立博物館所蔵の美術資料(1 件)の安定化処理を実施

(3)成果を学会で発表し、刊行した出版物に掲載した。

27 年 4 月 14 日　International Symposium on Advances of Protection Devices for Museum Exhibits（北京）にて研究発表
27 年 6 月 27 日　文化財保存修復学会にて研究発表(3 件)
27 年 9 月 20 日　日本文化財科学会公開講演会シリーズ『文化遺産と科学』にて研究発表
27 年 11 月 25 日　中韓日連携災害地研修会にて研究発表（2 件）
28 年 1 月 4 日～2 月 21 日　文部科学省エントランスにて被災文化財のレスキューについて展示発表

(4)出版物

28 年 3 月　研究成果物として「安定化処理」を出版し、一時保管環境を担当。

【備考】

(1)環境調査及び改善：7 回
(2)安定化処理：11 件
(3)学会発表：8 件
(4)出版物: 1 冊（28 年 3 月刊行）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	環境調査回数：7 回(14 日間)、工芸資料の安定化処理件数：10 件、美術資料の安定化処理件数：1 件、学会発表件数：8 件、出版物数：1 冊など、安定化処理件数あるいは研究発表は当初の目標を超え、十分に達成している。なお、安定化処理及び一時保管環境にはまだ多くの克服すべき課題があり、今後はそれらの課題に対して集中的な研究を実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画における「有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究」の中でも被災文化財の保存修復、文化財防災に関する調査研究を着実に実施することができた。特に油彩画、水彩画、漆工品など美術工芸品に対する安定化処理、及び仮設の施設を利用した被災資料の一時保管環境の改善に関して、当初の予定通りに進行し、成果の公表を積極的に行うことができた。次期中期では油彩画、革製品、漆工品に関して安定化処理技術の確立を目指す。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)神像表現における物語性の調査研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-②）		
【事業概要】本研究は、多くの神像は固有の物語（伝承・信仰）を背景に製作されたという視点に立つもので、表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探ることを目的にする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室長　丸山士郎

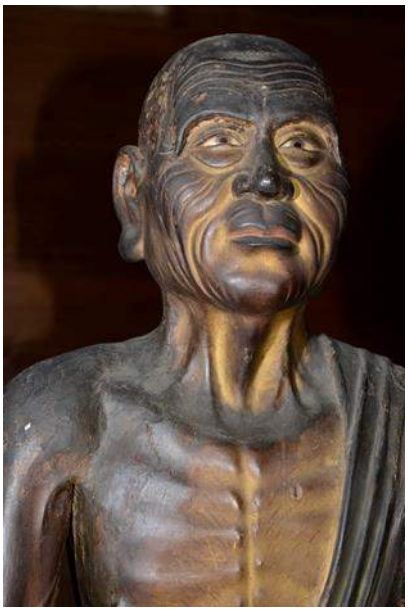
【主な成果】

(1)島根・赤穴八幡宮の八幡三神像
調査日　28 年 1 月 29 日
鎌倉時代の写実的作品である本像についての調査を行った。

(2)和歌山・金剛峰寺の八大童子立像の調査を行った。
調査日　28 年 3 月 11 日
鎌倉時代の人物表現の最高傑作である運慶作の本像についての調査を行った。

(3)奈良・大報恩寺の快慶作の十大弟子立像
調査日　28 年 3 月 6 日
同様に鎌倉時代の人物表現の最高傑作である快慶作の本像についての調査を行った。

(4)広島・南宮神社神像群
調査日　28 年 1 月 26 日
26 年度論文を執筆した南宮神社神像群についても追加の調査を実施した。鎌倉時代の神像とそれに表現的につうじる人物像についての調査を実施し、神を造形化する上での表現上の工夫についての知見を得ることができた。



大報恩寺所蔵
十大弟子立像

【備考】
学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 4 年目
調査回数：4 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は各地の鎌倉時代の神像に関連する彫刻について広く調査を実施することができた。鎌倉時代の神像は、仏教彫刻における人物像の表現と似るところが多く、27年度の調査でも多くの資料を得ることができた。今後、鎌倉時代における神像表現の特質について検討を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	25年度は広島・南宮神社の神像群、26年度は静岡・南禅寺の神像群や東北地方の仏像、26年度は鎌倉時代の神像群についての調査を行い、その成果を論文の発表や展示に反映するなど、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-6

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－②）

【事業概要】自然観察によって自然の原理や根源を求めていこうとする動向は、我が国においては博物学として江戸時代にすでにその兆しがみられた。江戸幕府による本草学や博物学の興隆は、江戸中期、特に享保年間（1716～36)以降と考えられてきたが、本事業ではその萌芽の時期を江戸初期すなわち 17 世紀に求めるべく、狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」「鳥写生図」などを調査するものである。これら膨大な写生図を検証することで、江戸初期に幕臣や御用絵師らによって、自然観察や諸産物の集成といった科学的視点が牽引されたことを示し、享保年間以降の本草学や博物学の興隆の導入期の様相を明らかとする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	貸与特別観覧室主任研究員 小野真由美

【主な成果】

(1)27 年 9 月 9 日・10 日・16・17 日、東京国立博物館にて狩野常信筆「鳥写生図」8 巻の調査を行い、撮影・注記の判読を完了した。また 4 月 25 日、6 月 22 日・23 日、国文学研究資料館にて稲葉家文書『永代日記』のマイクロフィルム閲覧し、狩野探幽と幕府大老・稲葉正則の交友に関する記事を調査した。その他、根津美術館にて江戸時代の諸派の作品調査を行った。

(2)常信筆「鳥写生図」の調査によって、江戸初期に鳥類への関心がきわめて高かったことが被写体の人脈から明らかになった。また絵師が優れた写生を行うとともに、鳥類の特徴を豊かな語彙によって注記していることを確認し、当時の色彩や形態についての語彙を画論にみる彩色法とを照合し、絵師の精緻な記述と描写を確認できた。そして、稲葉家文書『永代日記』の記事から、江戸時代にもっとも早く写生図を手がけた絵師・探幽が、オランダ文化を摂取し得た背景を見出した。

(3)常信筆「鳥写生図」の注記翻刻をふくむ目録は、情報は国立情報学研究所の Researchmap における資料公開に公開した。探幽の写生図を含む 25 年度からの研究成果については、東京国立博物館において特集展示「江戸の写生図―可憐なる花卉図の源泉」を開催し、広く一般に公開し、リーフレット・研究論文・月例講演会・ギャラリートークを行った。

特集展示「江戸の写生図」展示風景

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目
作品調査：5 件、研究会：2 回、論文:3 件、講演会：1 回、展示：1 回
刊行物：「江戸の写生図―可憐なる花卉図の源泉」(9 月 29 日、東京国立博物館・精興社)
雑誌取材：1 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	江戸初期の写生図には、日本ではじめて描かれた動植物がふくまれており、本事業で初めてその全容が明らかとなった。また特集展示として広く作品を公開し、講演会やギャラリートークを行ったことは、研究成果を一般に普及するための効率性の観点からも評価に値する。27年度は最終年度にあたるが、3年間にわたり継続して調査した成果を広く公開したことで、美術のみならず諸分野、特に薬学史や園芸史からの関心が高かった。これは適時性や独創性のみならず、本事業の正確性を証左するものと言える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年にわたる調査研究の最終年として、探幽・常信の写生図制作の全体像を示すことができた。まとめの年となったため、調査回数は少なかったが、写生図の美術品として価値とともに、自然史における重要性を示すことができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)東京藝術大学付属図書館蔵後藤家文書の調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-②)

【事業概要】本プロジェクトは、「刀装具一派後藤家の鑑定　極帳（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察」と題し、東京藝術大学附属図書館所蔵の「後藤家文書」の調査などによって、近世において最大の刀装飾具流派であった後藤家の鑑定活動と、同家の作品の価値付けの様相を具体的に捉えることを研究目的にする。同家は室町幕府に仕えたとされる後藤祐乗を祖とし、その子孫は豊臣秀吉、江戸幕府に仕え、宗家は幕末の十七代の典乗（光則）までに及んだ。後藤家は刀装具の制作とともに祖先の作品の鑑定も行い、その結果は後藤家文書の「極帳」という鑑定控に記録していた。本プロジェクトでは、極帳の撮影及びその内容の検討を行い、現存作品との照合を可能な限り進め、近世における工芸品の価値付けの実際を考察する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室研究員 酒井元樹

【主な成果】

本プロジェクトは、研究期間が 24 年度から 27 年度であり、27 年度はその最終年度にあたるため、元禄 17 年（1704）正月から元治元年（1864）12 月までの 160 年間に、11 代通乗（光寿）から 17 代典乗（光則）が書き記した極帳 365 冊（約 20,000 丁。表紙・裏表紙を除く。）について、26 年度までに蓄積した鑑定記録のデータなどをもとに極帳全体の歴史的位置付けと後藤家における鑑定の様相について考察を行った。主な成果は以下のとおりである。

(1) 後藤家による折紙の発行は慶長 12 年（1607）の 6 代栄乗（正光、正房）によるものを最古として、その発行件数が寛永 10 年代の後半から急速に増加し、13 代延乗（光孝）が当主の時代であった 18 世紀後半には年間の発行枚数が最も多く、140 通程の折紙が発行されていたことが分かった。また、鑑定された作者の名などを刀装具に直接銘を切る「極銘」も 13 代延乗の頃より急増していることが分かった。
(2) 大量、かつ多種の回答形式をもつ鑑定活動を正確に記録するため、極帳の記録は極めて高度かつ理論的に編纂されていることが分かった。
(3) 極帳には鑑定された作品の情報とともに依頼者も併記されており、刀装具を売買していたと思われる商人のほか、高家、奏者番など高位の武士が多数を占めるなどの一定の傾向が認められた。
(4) 当館収蔵の刀装具のうち 28 件について極帳との照合を行うことができ、その刀装具の記録は極めて克明になされていることが分かった。

こうした成果を踏まえ、同家の鑑定活動の歴史的位置付けを図るならば、折紙の発行が急増した寛永 10 年代後半は江戸幕府では殿中儀礼や格式が規定されつつあった時期にあたり、鑑定依頼者が幕府の儀礼に関与する高家・奏者番の武士が多く、後藤家の刀装具が刀剣の献上や下賜の際に刀装に付随し、あるいは正式な場で身につけられる性格のものであったことを考慮すると、同家の鑑定は美術品としての評価であるとともに武家儀礼・格式の影響を強く受けていたことが推測され、これは近世独特の価値付けの様相を呈しているとの結論に至った。

【備考】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 4 年目
古伝書の調査のため、島根・和鋼博物館で調査を行った。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	後藤家の鑑定活動の概要がおおむね正確に把握でき、極帳の記載に符合する刀装具を多数発見し、同家の鑑定活動を日本史全体の動向と僅かながら結びつけることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に後藤家の刀装具の鑑定活動に理解が得られ、その様相について歴史的位置付けを行えた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8）中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察に関する調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-②)

【事業概要】中世から近代までの日本絵画を照らす照明の状況を大きな指標と捉え、まず＜現代の展示空間における光＞が、どのような状況にあるのかを把握する。そして制作された当時、絵画がどのように受容されていたのかを考察しながら、＜歴史的な光＞を先進的照明機器によって復元することで、絵画の展示の手法を拡張しようとするものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 松嶋雅人

【主な成果】

(1)下記の調査、実験を行った。

・鳥獣戯画展での輝度分布計測 11 箇所を実施し、照明設計を客観的に評価することができた(27 年 4 月 23 日)

・ルーブル美術館ランス分館の現地調査により画像では確認しにくい室内の照明設計の観察を行なうことができた(27 年 7 月 8 日)

・ベルリンラトゲン文化財研究所にて博物館照明の評価手法に関する協議を行ない、最新情報を収集することができた(27 年 9 月 30 日)

・法隆寺宝物館の展示ケース改修に伴う照明器具の調査として輝度分布計測 7 箇所、分光分布計測 5 箇所を実施し、照明設計を客観的に評価することができた(27 年 10 月 15 日)

・京都国立博物館平成知新館の展示照明について輝度分布計測 22 箇所を実施し、照明設計に関する客観的な情報を収集することができた(27 年 11 月 16 日)

(2)文化財照明における諸データを収集したことで、先進的 LED 照明、有機 EL 照明等の照明機器の効果的な仕様作製に関連付けすることができた。(27 年 4 月～12 月)

(3)展示、出版物等への反映。

・上記調査結果の知見をもとに、有機 EL 照明による文化財照明について学会発表を行い、論文を発表した。

・平成館特別展展示室、考古展示室、及び法隆寺宝物館の照明器具改修に上記調査結果を反映させた。(27 年 4 月～28 年 3 月)

特別展「鳥獣戯画―京都 高山寺の至宝―」における有機 EL 照明（OLED）実験

【備考】

科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目

(1)調査回数　5 回

・論文　和田浩、矢野賀一、松嶋雅人、土屋貴裕「博物館展示に用いる OLED 照明器具の開発」(『2015 東アジア文化遺産保存シンポジウム in 奈良　要旨集』、pp.66-67)、他 2 件

(3)展示への反映

特別展「鳥獣戯画―京都 高山寺の至宝―」特別展「始皇帝と大兵馬俑」特別展「黒田清輝―近代日本絵画の巨匠」、及び考古展示室リニューアル、宝物館リニューアルにおける調査研究成果を踏まえた照明器具の導入。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	27 年度は、既存展示環境の現状把握を行い、先進的照明器具を有効に利用し、美術史、展示デザイン、保存科学の各分野を統合した調査研究を行い、各観点における種々の実験、計測を実施できたことで、実証的で、より先進的な展示環境を構築する諸資料を収集することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画における「アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に、本調査研究により、現状における展示室等の展示環境の調査を十全に行うことができ、さらに各種の先進照明器具の検討を実施したことで、諸出版物に研究成果を公表し、特別展、展示室リニューアルなど、さまざまな展示への反映も行うことができ、広く調査研究の成果を示すことができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-9

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9）東アジアにおける繍仏の基礎的調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－②）

【事業概要】
本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主題を表した「繍仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査に基づいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史及び染織史の観点から同時代繍仏を総合的・体系的に捉えることを目的とするものである。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	広報室長　伊藤信二

【主な成果】
(1)　国内所在の繍仏作品の実見調査を実施した。主な作品は以下のとおり
・27 年 6 月 4 日　　刺繍釈迦三尊図　（山梨・久遠寺所蔵）
・27 年 6 月 5 日　　刺繍阿弥陀三尊来迎図（山梨・九品寺）
・27 年 8 月 8 日　　刺繍十羅漢図（福岡・個人蔵）
・27 年 8 月 9 日　　刺繍釈迦誕生図（長崎・最教寺）
・27 年 11 月 21 日　刺繍両界曼荼羅図（福井・西福寺）
・27 年 11 月 22 日　刺繍釈迦涅槃図（石川・弘願院）、刺繍阿弥陀三尊図（西福寺）

(2)　山梨・久遠寺所蔵の刺繍釈迦三尊図は、中尊釈迦如来、及び脇侍の騎獅文殊菩薩、騎象普賢菩薩のいわゆる釈迦三尊図が刺繍であらわされた作品であり、本調査とは別にプロジェクト責任者が調査に係わった結果、25 年に山梨県指定文化財に指定された。今回改めてより詳細な事件調査と写真撮影を実施し、本件の刺繍技法が極めて緻密であり、また使用される色糸の数も多彩であり、また仏教絵画の画像としてみても、画風が整っていることから、現存する中世繍仏の中でも初期に属すると判断されることなどが確認された。

刺繍釈迦三尊図
山梨・久遠寺

【備考】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 3 年目
作品実見調査 12 箇所、15 点

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本中世～近世期の繍仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義は大きい。27 年度は日本国内の繍仏作品を多く調査し、中世繍仏としては極めて稀少な作例である山梨・久遠寺の作品についてその重要性を確認した。その他涅槃図など近世の大型作品についても調査を実施した。調査の過程でまだ広く存在が知られている繍仏作品の情報にも接することができたため、28 年度ではそうした未発掘の作品も精力的に調査したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に研究開始から 3 年度目にあたる 27 年度は、国内の現存作例について極力調査を実施することに努めたが、重要作例についての作品調査もあわせて着実に進めることができた。本研究は当初の研究計画に則り概ね順調であり、基本的な研究基盤を整えつつある。また、調査によって得た詳細情報を整理し作成した基礎データ及びデジタル画像は、繍仏を東アジア仏教美術史に体系的に位置づける本研究にとって極めて重要な情報と考える。28 年度以降も引き続き繍仏に関する作品実験調査及びデータ集積を進め、最終年度としてそのまとめを行う予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-10

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10)極薄青銅器の製作技術解明　－中国金属工芸史を再構築するための基礎的研究－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）((5)-②)

【事業概要】
厚さ１㎜に満たない青銅製容器が、戦国時代（前５世紀）以降の中国で急速に普及していった。その製作技術を 3D スキャン、蛍光Ｘ線元素分析装置などの光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明することで、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を実施する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男

【主な成果】
当館及び泉屋美術館・和泉市久保惣記念美術館が所蔵する中国考古の極薄青銅器について、26 年度までに計測した蛍光Ｘ線分析データ・3 次元計測データ・ＣＴスキャンの画像をそれぞれ解析するとともに、新たな知見の整理を行った。蛍光Ｘ線分析器で得られたデータの定量分析を実施したに際しては、26 年度までに東京藝術大學で実験的に鋳造した銅・錫・鉛の比率が既知のサンプルをあらかじめ測定することで、誤差を最小限まで抑えることに成功した。成果の一部は日本考古学協会 27 年度大会において「古代中国の極薄青銅器にみる製作痕分析－３次元計測、蛍光Ｘ線分析を踏まえて－」というタイトルで発表した。
また、27 年 6 月 9 日から 13 日にかけて、陝西歴史博物館、岐山県博物館、宝鶏青銅器博物館、陝西省考古研究院、西安市文物保護研究院、浙江省嘉興博物館において、28 年 1 月 21 日には上海博物館において、極薄青銅器の熟覧調査を行った。28 年 2 月 17 日から 18 日にかけて、西安市文物保護研究院と秦始皇帝陵博物院において、製作痕跡の熟覧調査を実施する。

岐山県博物館での調査

西安市文物保護研究院での調査

【備考】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目
調査回数：3 回（すべて海外調査）。作品調査件数：25 件。学会発表回数：1 回。撮影点数：約 200 カット。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本考古学協会の大会で調査の成果を発表するとともに、予定していた中国における極薄青銅器の現地調査を実施することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	春秋・戦国時代から漢時代にかけての極薄青銅器を対象にして、日本国内の博物館・美術館のみならず中国でも製作技法の調査を実施することができた。28年度以降は魏晋南北朝時代から宋時代にかけての響銅と極薄青銅器を対象にして、製作技法の比較研究を実施する計画である。25年から継続してきた本研究により、28年度以降の新たな研究計画を実施する重要なデータを得ることができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-11

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11）高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相に関する調査研究（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－②）

【事業概要】本研究では高雄曼荼羅（京都・神護寺所蔵）の重要性を考え、その研究推進を図るために、最先端の撮影技術を用いた高精細デジタル画像及び赤外線画像の撮影を全面的に行う。さらに新たな高雄曼荼羅研究の端緒と成せるよう、研究者それぞれが絵画・彫刻・工芸等の専門性を生かし、空海と彼を取りまく仏教美術を考察するのに重要と思われる観点を取り上げて調査・研究を行うものである。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	副館長　松本伸之

【主な成果】

(1)京都・東寺講堂諸像の調査
調査日　27 年 12 月 10 日
空海が造像に直接関わり、密教の世界観を立体で表した東寺講堂諸像 21 体について須弥壇上での調査を実施し、高雄曼荼羅の表現との関連を調査し、写真撮影も行った。

(2)京都・醍醐寺の密教美術の調査
調査日　27 年 12 月 21 日～22 日
空海の孫弟子にあたる聖宝が京都郊外に開いた醍醐寺の密教美術の調査を実施し、絵画・彫刻・書跡・工芸についての作品調書、写真撮影を行った。

(3)その他
調査日　28 年 2 月 1 日～7 日
インドのサールナート、ラージギル、パトナ博物館、ニューデリー国立博物館、マトゥラー博物館で、仏教を開いた釈迦に関する遺跡や、密教美術についての調査を実施した。

上記の調査により高雄曼荼羅の原点であるインドの作品、高雄曼荼羅同様に空海が製作に関わった作品（東寺講堂）、そして空海以降の作品の調査を実施することが出来た。今後は、それらの中で高雄曼荼羅がどのように位置づけられるかを検討していく必要がある。

ニューデリー国立博物館所蔵　菩薩像

【備考】
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 2 年目
海外調査：1件
国内調査：2 箇寺

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	高雄曼荼羅を起点とした時間的、空間的な広がりを持った作品の調査を実施することができた。特に東寺講堂諸像は高雄曼荼羅ときわめて関係が深い作品で、研究遂行上重要な資料となる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。28年度はこれまでの成果を踏まえつつ報告書を作成する。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-12

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)ディルムン文明の起源－バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究((5)-②)（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）

【事業概要】科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金により全５年度にわたって実施される調査研究の第２年度。26 年度に引き続き、バハレーン王国において、初期ディルムン時代の墳墓を発掘調査した。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　後藤　健

【主な成果】

27 年度の調査研究は 28 年 1 月より 2 月半ばまでバハレーン王国において実施された。

(1) バハレーン本島内陸部にあるワーディー・アッ=サイル古墳群において、初期ディルムン時代の高塚式古墳大小２基を考古学的に発掘調査し、墳丘・主体部の構築方法を明らかにするとともに、被葬者の遺体等を回収した。
(2) 26 年度の発掘で出土した被葬者遺骨１体を精査した結果、おおよその身長と性別等が判明した。
(3) 本遺跡の南方に位置するバハレーン本島南部のジャブリー山の踏査において、同国では初めての鍾乳洞を発見し、内部の計測を行なった。歴史的文化財としての意義を 28 年度以降に検討する予定である。
(4) 以上の成果を取りまとめ、バハレーン王国文化庁に提出した。
(5) 26 年度に引き続き日本西アジア考古学会、日本オリエント学会等の国内学会で成果を報告するとともに、27 年度は Seminar for Arabian Studies など国外の専門学会で報告し、また 28 年度以降に *Arabian Archaeology and Epigraphy* などの専門誌に概報を寄稿予定。

古墳の発掘調査風景(2/16)

古墳主体部における埋葬人骨の精査(2/16)

日本人会を対象とした現地見学会(2/12)

【備考】

科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の５年計画の２年目

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度の調査研究では、26年度に引き続き調査対象である古代遺跡の詳細が明らかにされつつあるので、所期の目的は概ね達成されつつあると考えられる。28年度にはより多くの古墳を発掘調査し、データの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿って継続的に調査研究を実施することができた。特に、調査研究の対象であるワーディー・アッ=サイル古墳群はバハレーンで最古の古墳群（前2200～前2050年頃）であるが、デンマークによる小規模な調査以外、本格調査が実施されたことはない。本調査研究により、空白の時代を埋める知識が新たに得られる可能性が極めて高い。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-13

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	13）清朝末期における中国踏査写真資料に関する発展的研究（科学研究費補助金）（(5)－②）

【事業概要】東京国立博物館が収蔵する写真資料のうち、清朝末期に文物、史跡の撮影を行った岡倉天心・早崎梗吉、塚本靖の写真資料に焦点をあて、文献資料の調査及び実地調査によって、現状との比較、写真が撮影された行程、未詳な被写体、被写体が選択された背景を明らかにし、当時における写真撮影の実態を解明する。その成果は、博物館のウェブ上で公開中の「東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」に反映させるとともに、特集陳列によって写真資料を一般に公開する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイト・フェロー　関紀子

【主な成果】

(1)岡倉天心・早崎梗吉、塚本靖の中国調査のうち、北京から趙州及び北京から太原までの道程を実地調査し、写真が撮影された場所を特定した。

①大同から北京までの行程を調査（27 年 6 月 21 日～25 日）

大同：平城故城城壁、後魏永固陵遺跡、天鎮県：慈雲寺、懐安県：昭化寺

張家口：大境門長城、張家口堡、北京：居庸関、八達嶺、明十三陵

②大同から太原・文水・交城・平遥までの行程を調査（27 年 9 月 14 日～22 日）

太原：崇禅寺、双塔寺（永祚寺）、寿寧寺、恵明寺、華塔寺、晋祠、天龍山石窟、文水県：寿寧寺

交城県：天寧寺、永寧寺、離相寺、平遥県：清虚観、双林寺、鎮国寺、慈相寺、代県：雁門関

朔州市：仏宮寺、渾源県：懸空寺、大同：雲岡石窟、華厳寺、善化寺

③趙州から保定までの行程を調査（27 年 11 月 12 日～19 日）

正定県：隆興寺、天寧寺、広恵寺、臨済寺、開元寺、崇因寺、大唐清河郡王紀功載政之頌碑、南城門、滹沱河

趙州：柏林寺、安済橋、陀羅尼経幢、永通橋、

定州：開元寺（料敵塔）、漢中山王墓、行唐県：封崇寺

曲陽県：北嶽廟、修徳塔、文昌塔、保定府

：蓮池書院、大慈閣

(2)実地調査により、現在では失われた史蹟や姿を変えた被写体を確認することができた。

白塔寺塔
（明治 26 年）

現在の白塔寺塔
（27 年 11 月）

【備考】

科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目

(1)調査回数：3 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度計画をほぼ達成した。今後は、28年度計画の特集展示「清国踏査游記―関野貞・塚本靖が撮影した史跡写真」の開催にむけて、調査で得られた知見や画像の整理を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予定していた調査地をほぼ踏査し、中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。28年度も計画を達成できるよう、実地調査の効率化を図りたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-14

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	14)古墳時代武装具研究の総合化と古代東アジアにおける政治史・文化史的意義の基盤的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-②）

【事業概要】古墳時代は前方後円墳を中心とした葬送儀礼に、武器・武具･馬具(以下､武装具)が大きな比重を占める時代である。古墳文化は日本古代国家形成期における社会の安定と成長に重要な役割を果たしたとみられる。一方、日本列島の武装具は古代北東アジア諸地域の影響下に成立し、刀剣や装飾の主体性・卓越性などに特色がある。

本研究は、副葬品・形象埴輪を中心に古墳文化武装具の古代東アジア諸地域相互における位置を明確化する。また、武装具形埴輪や古代武装具との比較・検討から、日本列島の武装具と東アジア武装具の性格と政治･文化史的意義を分析して、日本列島における原始･古代武装具研究の総合化と歴史的意義を解明するための研究基盤を確立する。

【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員　古谷　毅

【主な成果】

1　各地方の主要古墳出土埴輪及び武装具資料を調査し、基礎的情報の整備を進めた。

2　調査情報を基礎に｢古墳時代武装具関係資料｣を比較検討し、政治･文化史的意義の研究を推進した。

3　27 年 10 月の平成館考古展示室リニューアル公開に伴う展示室計画に反映させた。

①　実施概要　：27 年 5 月 23 日、6 月 13 日～14 日、9 月 19 日～21 日、11 月 13 日～15 日、28 年 1 月 9 日～11 日、28 年 2 月 11 日～14 日、3 月 19 日～21 日に、東京国立博物館、韓国国立慶州博物館、同大邱博物館、及び福岡県嘉麻市、大分県大分市、兵庫県西宮市、大阪府高槻市、群馬県伊勢崎市において、資料調査及び研究会･会議を実施･開催した。

②　成果・知見等　：研究会で調査成果の分析・研究報告を行い、調査成果の確認と問題点を検討・分析した。

③　成果の公開等　：韓国・慶北大學校における公開共同研究会で、研究成果を発表した。

資料調査(左･中) 及び共同研究会(右) 風景〔左:大分市、中：伊勢崎市、右：慶北大學校〕

【備考】学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 1 年目

○調査･研究会回数(日数) ： 6 回(延べ 15 日間)・7 回 (延べ 4 日間)

・主な調査･分析資料　：福岡県沖出古墳出土埴輪(嘉麻市教育委員会蔵)、大分県亀塚古墳出土埴輪(大分市教育委員会蔵)、大阪府今城塚古墳出土埴輪(高槻市立今城塚古代歴史館蔵)、群馬県赤堀茶臼山古墳出土埴輪(伊勢崎市赤堀歴史民俗資料館蔵)、慶北大學校所蔵武装具資料など

○主な学会等発表等　：　古谷 毅「武装具形埴輪のモデルと伝統性」『古代韓日古墳研究交流會』韓国･慶北大學校、28 年 2 月 13 日

○論文等公開　：　上記他 2 件

○共同公開研究会　：　1 件（慶北大學校共同研究会:「古代韓日古墳研究交流會」28 年 2 月 13 日、韓国・慶北大學校）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	研究計画の達成度・公開性については、調査・研究会開催回数はほぼ目標を達成し、韓国･慶北大學校との共同研究会の開催で国際性を加えることができた。28年度はより研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会をさらに充実を図ると共に、東京国立博物館所蔵資料(列品)整理を進め、本研究精度の向上と発展性・独創性及び公開性の拡充・確立を図る所存である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報の整理・資料化と、研究会等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として、十分な蓄積を行ったと考えられる。また、中期計画における「所蔵品・寄託品の基礎的かつ総合的な調査」に沿った調査研究を実施し、その成果を東洋館における展示及び解説に反映させることもできた。改良・改善点は、より高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることと、東京国立博物館所蔵資料の列品整備を目標として、次期中期計画へ反映させる予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-15

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	15）古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究(科学研究費補助金)（(5)-②）

【事業概要】本研究は、後のユダヤ教、キリスト教に引き継がれるヤハウェ一神教を確立させた古代イスラエルの民間における宗教実態を実証的に解明し、旧約聖書に基づく古代イスラエル宗教史の理解の盲点を補うことを目的とする。具体的には、中期青銅器時代第 II 期（前二千年紀中葉）から鉄器時代第 IIA 期（前一千年紀中葉）にいたるパレスチナ諸遺跡で発見されている墓の遺構及び副葬品を調査研究の対象とし、それらを地域別、時代別に分類しつつ、古代イスラエルにおける葬制とそこに表れる他界観、さらには旧約聖書が禁じた死者儀礼の実態の解明を目指す。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室アソシエイトフェロー　小野塚 拓造

【主な成果】

○海外での調査・研究（イスラエルでの現地調査、27 年 8 月 5 日～23 日）

・ゼロール遺跡の埋葬遺構や関連遺物に関する現地調査を 26 年度内に終えることができたため、27 年度はレヘシュ遺跡の発掘調査から、本研究に関連する各時代の社会的背景を探ることに焦点を当てた。

・発掘調査で出土した建築遺構が新バビロニア帝国の海外拠点であった可能性を導き出し、帝国支配化の社会についての新たな知見を得ることができた。

・調査成果や得られたデータの検討会を現地で実施した。グンナー・レーマン教授（ベングリオン大学）など、現地の著名な研究者とともに出土遺構の解釈について検討を加えた。

○国内での調査・研究（天理大学考古学・民俗学専攻、天理大学付属天理参考館での資料調査、27 年 12 月 26 日～28 日）

・26 度に引き続き、1960 年代に実施されたゼロール遺跡の発掘調査記録（調査日誌、写真、図面）を整理しデジタル化した。

○調査・研究の成果

・旧約聖書が成立し古代イスラエルの「オフィシャルな」宗教が確立する時代の居住地を発掘したことで、文献史料からはうかがい知ることのできなかった社会の側面を復元することができた。

・ゼロール遺跡の石棺墓出土状況等について、あらたな情報を得ることができた。

○調査・研究成果の発信

・調査研究の成果は Tel Rekhesh Project のウェブサイトで　公表しているほか、学会発表や講演を通して、学会と社会の双方に発信している。

バビロニア時代の大型建築の一部の建築と考えられる遺構

【備考】

科学研究費補助金事業の 3 年計画の 3 年目

調査件数：2 件、学会研究会等発表数：2 件、論文 2 件、新聞取材：1 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	レヘシュ遺跡の発掘調査によって鉄器時代末期（おそらく新バビロニア時代）の居住地を確認したこと、ゼロール遺跡の墓地に関する新たな情報を得たこと、この2つの成果により、古代イスラエル人の他界観に大きな影響を与えたと考えられる鉄器時代の社会について、その一端を解明するという当初の目的を達成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度に引き続き、ゼロール遺跡とレヘシュ遺跡の考古資料を収集、検討し、中期計画における「日本及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。また、当時の宗教実態を出土資料から実証的に探り、旧約聖書に基づく古代イスラエル宗教史の理解の盲点を補うという学術的な目的も達成することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-16

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	16）5～9 世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究(科学研究費補助金　研究代表者：大阪大学　藤岡穣)((5)-②)

【事業概要】

本プロジェクトは大阪大学教授の藤岡穣氏が研究代表者の科学研究費補助金による研究である。5～9 世紀の中国・韓国・日本の金銅仏について、蛍光Ｘ線、マイクロスコープ撮影、Ｘ線ＣＴスキャン等の科学的調査によって製作技法を検討し、様式と技法の両面からその製作地、さらには製作年代の推定を導き出すことを目的としている。これら東アジアの金銅仏、とりわけ小金銅仏は、その可動性ゆえに製作地を離れて伝来しているものが少なくない。本プロジェクトの前段階として、大阪大学では「科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究」という科学研究費補助金による調査を行い、淺湫も研究分担者として参加した。同研究は半跏思惟像を中心に 6～7 世紀の東アジアの小金銅仏について調査するものであった。その結果、これらの中に本来の製作地を再検討すべき作例が多くあることが判明したが、本研究はこれを継承発展させ、5～9 世紀の東アジア金銅仏研究において新たな基盤を築くことを目的としている。27 年度は 4 年計画の第 3 年次である。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 淺湫　毅

【主な成果】

(1)東京国立博物館法隆寺献納宝物金銅仏調査（27 年 7 月 7 日～9 日）

韓国国立中央博物館「大仏像展」出品作品調査（27 年 11 月 1 日～3 日）

国際シンポジウム「金銅仏の制作技法の謎にせまる」(於：大阪大学)への参加（27 年 12 月 12 日）

(2)献納宝物調査においては蛍光 X 線分析による、古代金銅仏の金属成分比に関する新たな知見を得ることができた。

中央博調査では韓国の金銅仏に関して、新たな知見をえるともに、韓国の研究者と情報交換することができた。

シンポジウムでは、国内外の研究者と、古代東アジアの金銅仏に関する議論をおこなうことができた。

(3)上記の研究において得られた成果は、東京国立博物館東洋館における中国・朝鮮金銅仏の展示および解説、ギャラリートーク等に反映している。

韓国国立中央博物館における調査風景

【備考】

科学研究費補助金事業の 4 年計画の 3 年目

調査２回

シンポジウム参加１回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	大阪大学藤岡穣氏を中心とする全体的な計画としては、順調に計画通り行われている。 個人的にも、調査・シンポジウム等順調に参加することができた。また、東京国立博物館東洋館で行っている「博物館でアジアの旅」をはじめとする、アジアの金銅仏の展示に、その成果を反映することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施し、その成果を東洋館における展示及び解説に反映させることもできた。なお、全体的な計画、研究分担者としての個人的な計画ともに順調に遂行している。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-17

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	17)東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金　研究代表者：成城大学　岩佐光晴)((5)-②)

【事業概要】日本に於ける木彫技法の変革や鎌倉時代新様式の確立に伴う用材観の変化及び形成に関する調査研究、及びその用材観に東アジア世界が及ぼした影響に関する調査研究を行う事業である。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長　和田浩

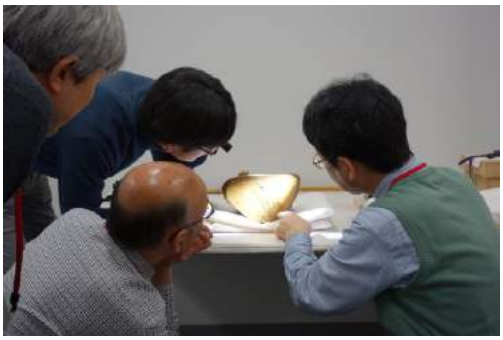
【主な成果】

(1)これまでの調査成果を一般向けに分かりやすくまとめ、シンポジウム「仏像と木の交流-古代一木彫像の樹種をめぐって-」として開催し、成果の公開を行った(27 年 5 月 16 日)。

(2)山梨県南アルプス市に所在する円通院(27 年 9 月 14 日)、慈眼寺(27 年 9 月 15 日)、上宮八幡神社(27 年 9 月 16 日)、若宮八幡神社(27 年 9 月 16 日)が所蔵する木彫像の写真撮影、採寸、調書作成、木片採取を行うことができた。

(3)島根県立石見美術館にて企画展「祈りの仏像-石見の地より-」に陳列中である新発見の木彫像「観音菩薩立像」(奈良時代、島根・圓福寺蔵)について、画像だけでは確認しにくい細部の観察を行うことができた(27 年 10 月 18 日)。

(4)京都国立博物館にて保管中の木彫像を調査し、28 年度以降の調査作品の選定を行った(28 年 1 月 6 日)。



京都国立博物館における木彫像の調査

【備考】

・科学研究費補助金事業の 4 年計画の 4 年目
・論文：安部久、渡辺憲、石川敦子、能城修一、藤井智之、岩佐光晴、金子啓明、和田浩「近赤外分光法を用いた木彫像用材の非破壊的な樹種識別 -木材標本を用いた分析-」(『木材保存』41(4)pp.162-170、27 年 7 月)、他 3 件
・調査回数：6 回
・シンポジウム開催：1 回
・シンポジウム来場者：約 200 名

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一木彫像が集中して伝来する寺社に注目し、現地調査を実施したが、一木彫像制作における地方と中央との関係を考察する上でも重要な視点となりうることを認識した。さらに、非破壊による樹種同定の確立に向けて、関連するデータ収集を推進した。これまでの調査研究を幅広く国民に還元することを目的として一般向けの公開シンポジウム「仏像と木の交流」を27年5月に成城大学で開催し、200 名に及ぶ参加者を得た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を継続的に実施することができた。特に24年度においては、中国での実地調査により、「柏」のみならず「楠」においても、中国と日本とでは漢字表記と実際の樹木とで認識の違いがあること27年度においては一木彫像制作における地方と中央との関係を考察する上でも重要な視点となりうること等の認識が得られ、公開シンポジウム「仏像と木の交流」においてそれらの成果を広く公表することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-18

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18)東アジア文化の基層としての儒教の視覚イメージに関する研究（科学研究費補助金　研究代表者：筑波大学　守屋正彦）（(5)-②）

【事業概要】
東アジアの人々の間には、儒教に基づく礼拝空間における形象が共通の視覚イメージの一つとなっており、またそれに関わる漢詩文も思想の背景として今日まで共有されている。儀式のあり方、礼拝の諸像の形式や配置、また唱道する詩文や作法などの視点から、東アジアに遍在する礼拝の「かたち」の表象を解釈することによって、地域間や民族間の文化の多様性を明らかにする。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	出版企画室長　勝木言一郎

【主な成果】
27 年度は、儒教の影響を受けた仏教経典、そしてそれに基づいてつくられた図像に関する調査研究に重点を置いた。

(1)敦煌文書に記された父母恩重経の研究
父母恩重経は父母に対する孝道を説く仏教経典であるが、近年の学説では唐代に中国で撰述された偽経とする見方が有力である。そこで敦煌文書に関する文献に徴し、父母恩重経や父母恩重経講経文について調査を進め、敦煌地区における父母恩重経の受容を考察した。

(2)敦煌における父母恩重経変相の図像学的研究
敦煌画に関する文献および画像の資料に徴し、父母恩重経変相の図像を分析した。また敦煌文書の父母恩重経による図像の解釈を行なった。その成果の一部として、「敦煌における父母恩重経変相の図像に関する一考察―「孝」の受容と展開―」と題する論文を『東アジア文化の基層としての儒教イメージに関する研究論文集』に発表した。

(3)中国における父母恩重経変相の比較考察
父母恩重経変相について敦煌と重慶大足の作例をそれぞれ比較し、中国の西北部と西南部における父母恩重経の受容の相違を明らかにした。

【備考】
科学研究費補助金事業の 4 年計画の 2 年目

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は敦煌文書の中にも儒教との関連の深い文献がかなり多く認められ、中国の仏教石窟への儒教美術の受容にまで考察が進んだ。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に 26 年度は中国儒教美術に関するデータベースの構築、27 年度は中国の儒教文化が西域にまで浸透していた形跡を確認するなどの成果が得られた。28 年度は日々の業務との連携を図りながら、研究を継続していく予定である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-19

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19）唐・宋時代の陶磁器に関する絵画資料の収集と分析（西田記念東洋陶磁史研究助成金）((5)－②)

【事業概要】本研究は、中国・唐（618～907）及び宋時代（960～1279）の陶磁器の展開を再考するにあたり、器物に関連する絵画資料の集成を目的とするものである。器物が描かれた絵画資料を網羅的に集め、唐磁・宋磁再考の一助としたい。各時代によって、描くテーマによって、さらに描き手個人の思想が映し出されることによって、描かれた器物の姿はそれぞれに異なり、多くはフィクションとしてとらえるべきであるが、紙や布、壁画など媒体・形式を問わず、またそのテーマが唐・宋時代に関連するものについては制作年代、制作地域を問わず、広く収集することにより、その時代にしかありえない器物のあり方及び人々の器物に対する意識の変遷を検証する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員　三笠景子

【主な成果】

(1)特集「描かれた器物」　東洋館８室　27 年６月 30 日～８月２日

東京国立博物館には器物を描く絵画と描かれた器物の両方を豊富に所蔵しており、それらを対比的に展示することができる数少ない博物館の一つである。このコレクションの特性を生かし、絵画とそこに描かれた器物を同時に展示し、新しい視点によって絵画、器物それぞれを展観した。主要展示作品のうち、中国・元の任仁発筆と伝わる琴棋書画図には豊富な器物が登場するが、それらの造形的特徴から器物は主に宋時代に流行したかたち、元～明初にみとめられるかたちが混在している。このように器物作品を通じて、絵画の制作背景を再考するという契機を示した。

東洋館８室　特集「描かれた器物」展示風景

(2)國華作品紹介「東京国立博物館所蔵唐三彩倚坐女子俑」執筆（28 年度刊行予定）

東京国立博物館所蔵の唐三彩倚坐女子俑は 1983 年に個人より寄贈されたものであるが、これまで博物館以外では主立って紹介される機会が少なかった。世界的にも比較的数多く現存する三彩女子俑のなかで、実は本作品は極めて精緻な作行きをみせる。本稿では近年中国国内において発掘調査及び研究が進む壁画墓の資料等に基づいてその位置づけについて再考を試みた。

【備考】

論文１本

調査２件（28 年２・３月）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで中国陶磁研究の視点だけで捉えてきた作品の造形的特徴やその年代観について、絵画資料及び金銀器、漆器等他材料の工芸作品を検討材料に加えることにより、考察の幅が大きく広がり、器物の変遷を捉えるうえで貴重な機会となった。引き続き研究、考察を続け、28年度につなげたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に特集「描かれた器物」をきっかけに、日本伝世の中国陶磁、茶の湯という特殊な文化的背景によって伝えられてきた中国陶磁、また近代の「鑑賞陶器」という視点で集められた中国陶磁について、あらためて考え直す機会を得たことは今後の研究において改善すべき大きなポイントとなった。また、28年2月及び3月に行った作品調査の成果を含め、次の考察に活かしたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4521-20

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	20）七仏薬師信仰とその造像に関する研究（メトロポリタン研究助成金）（(5)-②）

【事業概要】本研究は、七仏薬師信仰とその造像について、主に図像及び宗教的機能の観点から改めて検討を行い、古代から中世への変容を明らかにするものである。七仏薬師は薬師経典の諸訳にみえ、造像例は奈良時代から史料に確認されるが、平安時代、天台宗を中心に一般化するといわれている。しかし、従来の研究は光背の化仏としてあらわれることが多い古代の事例に集中しており、平安時代以降、とりわけ天台系の七仏薬師造像についてはほとんど言及されておらず、成立背景についても不明な点が多い。そこで、古代・奈良時代末から平安時代前期における動向の理解に立ちつつ、中世・平安時代から鎌倉時代にかけての実態と比較検討を行い、七仏薬師の信仰及び造像の特質と変容について考察を試みる。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室アソシエイトフェロー　西木政統

【主な成果】

(1)27 年 6 月 7 日～8 日、七仏薬師如来像の代表的な遺例である滋賀・鶏足寺像について実地調査を行った。同像は現存作例のなかでも本格調査に恵まれておらず、複数の専門家を交えた実査によって貴重な基礎データが得られた。

(2)七仏薬師の造像例に関する文献史料を収集した。とりわけ、天台宗(青蓮院流)における七仏薬師修法の記録として重要な『七仏薬師法代々日記』(曼殊院本）の複写を東京大学史料編纂所から入手し、データベースとして整理できたことは今後の研究を進めるうえでも必要になるものである。

(3)研究成果は、随時論文執筆や講演会などで発表したが、鶏足寺像の考察についても今後発表予定である。

滋賀・鶏足寺での調査

滋賀・鶏足寺所蔵七仏薬師如来像

【備考】

調査回数：2 回

論文等：西木政統「岩手・黒石寺薬師如来坐像と像内銘記」(『ＭＵＳＥＵＭ』659、27 年 12 月)、他 1 件

講演会：第 634 回れきはく講座「比叡山延暦寺根本中堂の薬師如来像とその模刻」(大津市歴史博物館、27 年 10 月 31 日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究において、もっとも期待された滋賀・鶏足寺像の実査が行えたことに加え、文献史料の収集及び整理も順調に進んでいるため、おおむね所期の目的は達成できた。現存作例のうち、千葉・松虫寺及び岩手・赤沢薬師堂では諸般の事情から詳細な調査が行えなかったが、既刊の研究書や展覧会出陳時のデータを入手・参照することでその欠を補うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施し、論文執筆や講演会等の発表によりその成果を公開することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4521-21

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	21）仁寿舎利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究（科学研究費補助金　研究代表者：大正大学　加島勝）（(5)－②）

【事業概要】隋文帝が仁寿元年（601）から３度にわたり中国全土に起塔した仁寿舎利塔の起塔地と関係遺物に関する現地調査を実施し、これにより得られた基礎資料を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究者が協働で、(1)起塔地の隋時代以前の歴史、(2)舎利荘厳における儒仏道の習合的意味、(3)仁寿舎利塔の受容史、という新しい観点から総合的に分析し、従来不明な点が多かった仁寿舎利塔の信仰と荘厳の全体像の具体的な解明を目的としている。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長　和田浩

【主な成果】

(1) ギメ東洋美術館（フランス）、ベルリン国立博物館アジア美術館（ドイツ）が所蔵する舎利容器の調査を行い、実測、撮影などを通じて画像だけでは得ることのできない重要な情報を収集することができた（27 年 8 月 9 日～16 日）。

(2) 京都大学小椋大輔准教授の研究室が管理する擬似石室を京都大学桂キャンパスにて現地調査し、遺物が埋蔵されていたと想定される環境や周辺情況に関しての協議を実施した。通常は地中に埋蔵された施設であり内部を観察できるのは非常に貴重な機会であるところ、調査を実現することができ、その結果発掘される前の遺物の状況に関する貴重な情報も収集することができた（27 年 11 月 2 日）。

(3) 東大寺ミュージアムにおいて東大寺金堂鎮壇具を中心に関連作品を調査し、画像だけでは確認しにくい細部の観察を行なうことができた（28 年 1 月 11 日）。

(4) 奈良国立博物館において開催中の「春日若宮おん祭り」展に出品された「春日神鹿舎利厨子」「四方殿舎利厨子」等を中心に関連作品を調査し、画像だけでは確認しにくい細部の観察を行うことができた（28 年 1 月 11 日）。

(5) 湖北省、河南省、安徽省において、仁寿舎利塔の起塔地についての調査を行い、詳細な位置情報を収集することができた（28 年 2 月 16 日～25 日）。

京都大学における擬似石室の調査

【備考】
科学研究費補助金事業の４年計画の４年目
調査回数：５回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は調査回数も充実したものとなり、その結果、仁寿舎利塔の信仰と荘厳が美術史、考古学、歴史学的見地からどのように意味付けられるのかについて、研究分担者及び調査先の研究者との十分な協議を重ねることができた。外部への情報公開という点については年度内に報告書をまとめ、28年度以降に機会を見つけて出版物等の形態で一般的にも公開できるよう準備を始めている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「日本の文化財及び日本の文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。特に隋文帝が中国全土に起塔した仁寿舎利塔の起塔地と関係遺物に関する研究についてはこれまで中国国内でも系統立った調査報告が存在せず、本研究のような規模での調査は他に類をみない。現在、中国各所での規制が厳しくなる中で、これまでに集積できた起塔地に関する情報群は非常に大きな価値を持つものとなった。将来的に、古代中世中国の舎利容器に関する総合的調査研究として発展させていくための基盤研究を実施できたものと考える。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4532-1-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-1 特別展覧会琳派誕生 400 年記念「琳派　京を彩る」に関する調査研究((5)-③)

【事業概要】
特別展覧会「琳派　京を彩る」(10 月 10 日～11 月 23 日）に関わる調査研究

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　山川　曉

【主な成果】

(1)26 年度より引き続き、当館研究員・非常勤研究員・調査員とともに琳派関連文献及び作品の調査・研究を行い、展覧会の企画趣旨を　1. 時系列に沿った琳派の展開と代表的な芸術家の紹介　2. 絵画のみにとどまらない諸工芸へと広がる琳派のデザイン的特質の紹介　の二点に絞り、その成果を展示及び展覧会図録として発表した。京都文化研究を掲げる京都国立博物館において琳派は重要な研究分野であり、本展覧会の準備によって基礎資料の集成が図られた。

(2)27 年は本阿弥光悦が徳川家康から鷹峯に土地を拝領して 400 年にあたることを記念し、京都全域において「琳派 400 年祭」が挙行された。本展はその中核となる展覧会として、京都府・京都市・京都博物館連絡協議会・社寺・学校教育機関とも連携協力し、京都の地で誕生した琳派という芸術様式の再認識の機会として機能した。関西地方での大規模な琳派展は初めてであったこともあり、広く関心を喚起することができた。その成果は 32 万を超える来館者数からもうかがえる。

(3)会期中毎日、琳派デザインの特質を体験的に理解できる、スタンプを用いて扇面画を作成するワークショップ「琳派デザインに挑戦！」を、京博ナビゲーター（当館教育普及ボランティア）による教育事業として行い、1 万 5 千人を超える来館者が参加した。アンケートには、来館者の琳派理解に大きく寄与したことがうかがえるコメントが散見された。

(4)作品調査の中で琳派の重要作家である尾形光琳・乾山の合作になる「銹絵寒山拾得図角皿　二枚」の購入の可能性が浮上し、展覧会に先だって収蔵品に加えることができた。

【備考】

・他機関での作品調査・写真撮影　35 回
・論文等　福士雄也「『琳派』になりたがった画家たち―画風の継承とその意味」(27 年 10 月　ほか 3 本)
・学会発表等　福士雄也「琳派―『継承』と『変奏』の諸相」(27 年 7 月ジャポニスム学会例会　ほか 1 回)
・講演等　京都ミュージアムズ・フォー連携連携フォーラム「琳派を飾る―展覧会から見えるもの―」(27 年 10 月ほか 44 回)
・テレビ・ラジオ取材・放送　24 件
・新聞・雑誌など紙媒体掲載　444 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	琳派作品に関する調査及び研究の成果をとりまとめ、特別展覧会の展示及び図録等の諸解説によって、琳派の系譜とその特質を分かりやすく紹介するとともに、琳派のもつデザイン的な特徴が体験的に理解できるよう、教育プログラムを作成しワークショップを開催した。また、調査の成果を作品購入に結び付け、琳派を生み出した京都にとって重要な作品を収蔵品に加えた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	四百年前に京都で誕生した琳派について、数多くの作品情報及び関連資料を蓄積することができた。近世の京都文化研究の基礎作業の一環として中期計画の観点を達成することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-1-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-2 臨済禅師 1150 年、白隠禅師 250 年違諱記念「禅-こころをかたちに-」に関する調査研究((5)-③)

【事業概要】
臨済禅師 1150 年、白隠禅師 250 年違諱記念「禅―心をかたちに―」(28 年 4 月 12 日～5 月 22 日開催、東京国立博物館・日本経済新聞社との共催）の調査研究

臨済宗及び黄檗宗の源流に位置づけられる臨済義玄、日本における臨済宗中興の祖である白隠慧覚の遠諱にちなみ開催される展覧会として、

(1)臨済宗・黄檗宗の十五派本山の所蔵する文化財を中心に、可能な限り、調査と写真撮影を行う。
(2)共催館である東京国立博物館とともに、合同会議を行い、各分野における出品作品の候補を絞り込む。
(3)調査を通じ、得ることのできた知見を刊行する図録に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室主任研究員　羽田　聡

【主な成果】
(1)臨済宗・黄檗宗の十五派本山とその塔頭や末寺を含め、大分県の見星寺や京都府の大徳寺など、およそ 30 箇所で 90 点ほどの作品調査と写真撮影を行った。特に見星寺の調査では、新出となる白隠慧覚の「慧可断臂図」、仙厓義凡の「龍図」が発見された。
(2)東京国立博物館及び京都国立博物館の展覧会担当者による合同会議を 8 回行い、各分野の担当研究員より集約された出品希望作品を基に、展示リストの確定を行った。これにより、両館のキャパシティーをはるかに上回る 500 点にのぼる当初の候補作品を、最終的に 307 点まで絞り込んだ。
(3)展覧会にあわせ刊行される図版目録では、全 307 点のカラー図版、これらの詳細な作品解説に加え、各分野の担当研究員による各論 9 篇を掲載する予定である。

白隠慧覚筆
「慧可断臂図」

仙厓義凡筆「龍図」

【備考】
・調査件数　約 90 点
・撮影コマ数　約 200 カット
・会議の開催　8 回
・成果の公表　1 件（図版目録『禅―心をかたちに―』、28 年 4 月刊行予定）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本文化で重要な位置を占める禅というものを、「心をかたちに」という副題のもと、臨済宗・黄檗宗の寺院に伝わる仏教美術を広く調査し、特別展覧会として構築した。そのための調査、あるいは会議を積み重ねた。調査による撮影はアーカイブの充実や成果を含めた図書の刊行など、ほかの博物館事業に及ぼす効果も大きいことが期待できるなど、当初の目的を十分に達成している。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究」を順調に達成している。調査撮影のみならず、リストの確定や出品交渉など、展覧会の開催にいたる諸作業を滞ることなく実施できたため、中期計画に対する進捗状況は順調であると判断した。特に今回のような寺院関連の展覧会の場合、文化財所有者との関係を、借用のみで終わらせてしまうのではなく、保存や修理も視野に入れた包括的で継続性のあるものにする必要があると感じる。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究((5)-③)

【事業概要】京都国立博物館では長年にわたり京都とその周辺の古社寺伝来の文化財の調査（悉皆調査）を継続的に行っているが、27 年度は左京区百万遍の知恩寺の文化財調査の追加調査とその整理作業を行った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室長　宮川　禎一

【主な成果】

京都市・知恩寺の調査

(1) 知恩寺調査は、同寺の意向と協力もあり、精度の高い調査を完遂することができた。同寺の宝物台帳を基礎としながらも、悉皆調査を行うことで寄進状等それ以外の文化財も発見し、補完することができた。本調査の成果は、『社寺調査報告書　27』(28 年 3 月 31 日）として刊行した。

(2) 本調査の最大の成果として、阿弥陀堂阿弥陀如来立像の総合的調査が挙げられ、その概要は下記の通りとなる。
27 年 5 月 12、13 日にファイバースコープによる像内調査及び像内納入品取り出しを行った。
像内の内刳り面のほぼ全体に紺紙金泥種子陀羅尼を貼り付けていることがわかった。また、像底部にあった納入品（巻子 5 巻、遺骨、歯、毛抜き、摺仏など）を取り出した。摺仏は鎌倉時代のもの、毛抜きは鉄地銀象嵌を施したものであった。

阿弥陀堂阿弥陀如来立像の像内納入品を取り出す様子

27 年 7 月 31 日　取り出した納入品のうち巻子の展開を光影堂に依頼。虫喰が甚大なため展開は一巻の二紙にとどまった。紙本金泥の『阿弥陀経』であった。
27 年 11 月 10～11 日の 2 日間、知恩寺方丈で漆工・染織作品の追加調査と撮影を行った。
28 年 1 月 28 日　大殿阿弥陀如来立像　Ｘ線ＣＴによる像内調査。頭部と体部に巻子状の納入品のあることがわかった。また、玉眼のおさえ方に特色が見られた。快慶作という説があるが、その検証の手掛かりになり得る発見である。

【備考】

社寺調査報告 27(知恩寺)1 冊（28 年 3 月 31 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業については、継続性を重視しており、補完調査を行うことで正確性についても従来以上のものになったと考えている。特に、知恩寺阿弥陀堂阿弥陀如来立像の総合調査に関しては、本格調査に入るのは当館が初めてであり、京都大学大学院人間・環境学研究科協力講座研究経費等の外部資金を活用して万全の調査態勢で調査を行い、それが画期的な発見に繋がった点は評価される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「文化財に関する調査及び研究の推進」を達成している。京都国立博物館の社寺調査は法人化以前から継続してきた事業である。従来、調査を行った寺院が他にもあり、時間の不足等で報告書刊行に至っていないものがあったが、27年度の知恩寺の文化財調査と報告書の作成はその責任を果たすためのものであった。28年度以降も、新規調査先の検討を行うと同時に、残余の報告書未刊行寺院の追加調査を実施し、報告刊行を行うことで、速やかに成果の社会への還元を図ることとする。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4532-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)京都の幕末史料に関する調査研究（(5)-③）

【事業概要】京都国立博物館の収蔵資料のうち坂本龍馬関係資料は特別に注目度の高い作品といえる。この研究は 28 年秋に予定している特別展覧会「没後 150 年　坂本龍馬」に関する事前調査である。京都国立博物館では約 10 年前の 17 年に「龍馬の翔けた時代」という特別展覧会を開催したが、その後にも龍馬に関わる新たな資料の発見が続いている。この研究は京都関連の坂本龍馬関係資料の調査を通じて新たな展覧会の企画を充実させることを目的とした調査研究である。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室　宮川禎一

【主な成果】

(1)　京都国立博物館が所蔵する龍馬の刀として有名な「陸奥守吉行」に関しては最新のスキャナーによってデジタル画像化した結果、直刃ではなくその下に丁子乱れの本来の刃紋があることが明らかとなり、龍馬が兄にあてた手紙のなかで「粟田口忠綱くらいに褒められた」との記述と合致することが明白となった。よって諸説のあった本当に龍馬の刀か否かの問題に結論がでたとしてよい。

(2)　札幌の坂本本家の引き払いに際して高知県立坂本龍馬記念館が坂本家伝来龍馬関係資料を受けとったのだが、それに同行して作品調査を行った。昭和前半の坂本弥太郎書付などから京都国立博物館の所蔵する刀銘埋忠明寿が伝えられていた島村衛吉（龍馬の親戚）の刀ではなく、本来坂本龍馬が所蔵していた刀であることが明白となった。

(3)　近年発見の龍馬書簡草稿として知られている「越行の記」（個人蔵）の裏書にある「林市郎右衛門」なる人物が滋賀県の近江塩津の林家の先祖であることが判明し、京都龍馬会との共同調査によってその林家から土佐藩士北添佶馬など龍馬に関わる人物の書状などが新たに発見された。また龍馬が福井からどの経路で京都に帰ってきたのかも明らかとなった。

(4)　高知県の展示施設で坂本龍馬の江戸修行時代を示す「北辰一刀流長刀兵法目録」が収蔵されていることが明らかになり、その内容を精査検討し、さらに他の剣術免状と比較した結果、道場主であった千葉定吉の手になる免状であることが明らかとなった。この発見については京都国立博物館を会場に所蔵者主催で記者発表を行い、宮川が作品説明を行った。その結果、広く報道されて国民の興味を集めた。

(5)　札幌市在住の坂本家子孫宅から坂本龍馬所用の脇差一口が高知県立坂本龍馬記念館との共同調査によって見出すことができた。これまで 80 年以上行方不明であった資料であるので貴重な発見となった。

札幌で再発見された龍馬の脇差

【備考】
・(4)の「北辰一刀流長刀兵法目録」については 27 年 11 月 7 日(土)に京都国立博物館 4 階大会議室において記者発表を行い、翌日の新聞紙面や TV によって広く報道された。
・特別展覧会「没後 150 年　坂本龍馬」の開催が 28 年 10 月 15 日～11 月 27 日で開催することが決まった（読売新聞社共催）。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度に予定している特別展覧会「坂本龍馬」についてその準備としての資料調査を行って展示内容を充実させたとともに、話題性ある資料の掘り起こしが進んだことによって、展覧会の集客の向上に資する調査が行えた。その成果はまた図録の充実にも反映できるものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「京都文化を中心とした有形文化財の調査・研究」を順調に達成している。文化財の調査研究の推進に関して、特別展覧会の作品調査を兼ねて行い、新たな資料の掘り起こしが着実に進んでおり、展覧会の内容充実に反映できる。28年度は特別展覧会の年度となるのでより一層の作品の精査が進められる予定である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)近畿旧家伝世文化財の総合調査(科学研究費補助金)（(5)-③)

【事業概要】科学研究費補助金（基盤研究(B)）「幕末近代の商家が伝えた文化財の総合調査：貝塚廣海惣太郎家コレクション」の一環として、大阪府貝塚市の旧家へ赴き、江戸時代の家屋と5つの土蔵に伝えられた大量の文化財を、清掃、調査し、所蔵者の意志のもと寄贈先を検討し、当館への寄贈分は、当館搬入後、燻蒸をしたうえで本格清掃を施し、受贈手続きを経て、収蔵品として整備した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員　永島　明子

【主な成果】

大阪府貝塚市の廣海惣太郎家は、江戸時代後期に米穀や肥料の問屋として身を起こし、幕末には大型和船を所有する廻船問屋として活躍した後、仲買、株式投資、銀行経営などに転じて、その資本により近代産業の発展に寄与した商家のひとつである。

当館では 24 年度に当家での調査を開始し、26 年度までに、書画、陶磁、金工、漆工、木竹工、人形、考古作品について、すでに 364 件の収蔵品と 124 件の備品の寄贈を受けてきた。しかし、当家に伝わる大量の文化財の全容を把握するには至らず、効率のよい調査や清掃と安全な運搬を目指して科学研究費補助金を申請し、27 年度より採用された。

この研究費を用い、27 年度は述べ 109 日間、学生アルバイトや美術輸送会社の作業員を含めた述べ 393 人を動員し、絵画 3 件、陶磁 201 件（前年度調査分も含む)、漆工・木竹工 127 件、考古 5 件、歴史資料 8 件の計 344 件の収蔵品と、当館の教育事業や茶会等のイベントで用いる 147 件の備品の受贈を実現した。

これまでの調査を通じ、当家の歴代当主が、同時代の画家や工芸家のパトロンの役割を担ったようすが窺われ、特に四代惣太郎は、明治時代後半から大正期に、表千家を支える地方数寄者のひとりとして大量の茶道具を蓄積したことがわかった。また、当時の実業家の常として、ほかの大商人や華族（京都の公家を含む）と親戚づきあいがあり、贈答や形見分けなどで品物が行き来した形跡も見受けられた。科学研究費補助金の支給は 29 年度まで予定されており、今後の調査においても美術品を巡る人的ネットワークがより具体的に解き明かされることが期待される。全ての調査を終え、寄贈希望の品が博物館の収蔵品として整備された暁には、寄贈顕彰を兼ねた展覧会を企画し、本プロジェクトの成果を広く一般市民に公開する予定である（29 年度中の実現を目標とする)。

土蔵内における作品探索

現地での簡易清掃作業

陶磁調査風景

寄贈予定品の梱包

博物館での燻蒸

燻蒸後の本格清掃

洗濯した包み布のアイロンかけ

寄贈者へお披露目

【備考】科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目
27 年度は、陶磁器 110 件の調査と約 1100 カットのメモ撮影が実施され、漆工、木竹工 389 件の調査と 3020 カットのメモ撮影が実施された。絵画、書跡、歴史資料、考古の調査も行われたが、染織、金工の調査については、28 年度以降に実施予定である。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	科学研究費補助金申請時の研究計画に沿っておおむね順調に進捗している。ただし、限られた研究員で複数のプロジェクトを回している関係上、調査が行われなかった分野もあり、28年度以降に確実に進められるよう担当研究員と協力していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	近畿圏の旧家に伝わった有形文化財の基礎的かつ総合的な調査を通じて、当該地域の歴史のみならず、京都文化の広がりをもとらえられたことで、中期計画における「京都文化を中心とした有形文化財の調査研究」を順調に達成している。この成果を展覧会に仕立てるべく、およそ計画通りにプロジェクトが進められており、28年度は当館での図録用撮影も行う予定である。29年度中に展覧会を実現することが目標である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4532-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)実作例に基づく日本の宮廷および調度の基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)-③)

【事業概要】一般には目に触れる機会がほとんどない日本の伝統的な宮廷装束及び調度について所蔵調査を行い、基礎的な情報を記載した調書を作成する作業により、宮廷の物質文化の実像に可能な限り迫る。その成果を報告書や展示として紹介し、日本民族が培った美意識を広く伝える。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　山川　曉

【主な成果】

研究開始年度である 27 年はまず、京都国立博物館が所蔵する歴史に分類される作品群のうち、宮廷装束及び調度の悉皆調査に手をつけ、調書を作成するともにその位置づけの有職関係文献からの考察を行った。併せて、明治時代の台帳など、劣化が懸念される資料のデジタル化を行うとともに、現存する宮廷関係作品のデジタル・データベースを作成すべく、諸文献から他機関所蔵作品のリスト化を開始した。

研究成果を盛り込み、染織展示室において「宮廷の装束」と題したテーマ展示を行った。

宮廷の装束　展示風景

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 1 年目

・京都国立博物館所蔵する歴史分野作品の調査（調書作成・デジタル画像の撮影）

第一回　27 年 8 月 24 日～26 日　調査件数　53 件

第二回　28 年 3 月 8 日～9 日　調査件数　98 件

・関係紙資料のデジタル化：822 データ

・他機関所蔵作品のリスト：2 機関　34 件

・平成知新館名品ギャラリー染織展示室　宮廷の装束（28 年 2 月 3 日～3 月 13 日）：展示作品数　22 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料のデジタルデータ化は確実に進んでいる。27年度の調査成果を一部反映し、展示という形で公開することができた。28年度は調査回数を増やしていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京都文化の根幹を成す宮廷に関わる研究であり、中期計画における趣旨に即した調査研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4532-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6)長尾雨山の中国書画受容に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)-③)

【事業概要】科学研究費補助金の若手研究（Ｂ）による事業。大正から昭和にかけて数多く中国書画が日本に将来された背景を、「京都学派」の漢学者にして書画鑑定に秀でた長尾雨山（1864～1942）の業績を再検証することにより明らかにする。膨大な書簡や詩文稿、書画作品など雨山に関する一次資料の整理と調査を核とし、断片的な紹介にとどまっていた雨山の業績と思想を総合的に理解するための基礎的研究とする。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員　呉　孟晋

【主な成果】

27 年度は 3 ヵ年計画のうちの初年度にあたるため、京都近郊に在住する長尾雨山の遺族が所蔵する、未整理文献資料や書画作品の全容を把握することに努めた。これらの資料は、この時機を逃すと散逸の可能性があった。

(1) 資料、作品の一部を京都国立博物館に適宜搬入して、目録を作成した。作成にあたっては、京都国立博物館調査員と職員、及び大学院美術史学系の博士課程満期修了者 2 名の協力を得て、全体量がおおよそ見えてきた段階に至った。資料数は 27 年 12 月末時点で約 4,400 点に上った。

(2) 資料の主な内訳は、雨山の手元に知人から届いた書簡や、雨山が漢詩や作品に附す跋文作成のための草稿であったことが判明した。雨山の著書は、子息の正和氏が雨山の講演原稿を編集した『中国書画話』(筑摩書房、1965 年)のみであり、これらの資料のなかには、雨山の文芸活動を明らかにする内容のものも多数含まれている。

(3) 京都国立博物館では昭和 60 年度に長尾雨山コレクションの一部を受託しており、その作品群のなかに今回整理の資料と関連する作品もあった。たとえば、「寿蘇会」関連資料について。大正年間に雨山は富岡鉄斎たちと複数回、中国文人の代表格である北宋の蘇軾の誕生日を祝う雅宴である「寿蘇会」を開催したが、そのときに配布されたと思われる蘇軾の肖像が、雨山が所蔵していた作品から複製されていたことがわかった（図 1、2)。今回の資料群は、大正から昭和初期にかけて、これまで不明な部分が多かった日本における中国文化を愛好する知識人の活動を解明する手がかりとして、重要な価値を有するといえる。

「寿蘇会」記念色紙（今回調査の資料のうち）

伝陳洪綬筆蘇軾像（京都国立博物館短期寄託品）

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 1 年目

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまで不明であった長尾雨山関連資料の全体量が明らかになった。また、一部の資料についてはその資料的価値についての研究を進めつつある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	長尾雨山の中国絵画受容における業績の再検証は、中期計画における所蔵品・寄託品並びに京都文化に関する調査研究を展開する内容であり、着実に調査研究の成果を蓄積することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-1-1

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展「白鳳」に関する調査研究（(5)-④）		
【事業概要】特別展「白鳳」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　内藤　栄

【主な成果】

(1)薬師寺金堂において月光菩薩立像（国宝）の調査を行い、安全な輸送方法を検討した。文化財の３Ｄ計測に実績のある株式会社アコードのスタッフに同席を願い、身体の突起部をかわす梱包部材の作成方法を検討した。(27 年 4 月 3 日、同 8 日)　この調査を通して脆弱な箇所を把握し、輸送方法の具体策を得ることができた。

(2)奈良文化財研究所において、薬師寺金堂基壇及び周辺から出土した遺物を調査した。詳細な寸法を計測し、このうちのガラス製品が薬師三尊像の月光菩薩像と日光菩薩像の瓔珞の寸法と一致することを確認し、当初この部分がガラスや貴石によって荘厳されていたことを推測した。

(3)以上の調査は特別展『白鳳―花ひらく仏教美術―』図録の総論、各論、コラム、作品解説等で反映させた。

(4)『白鳳』展の会期中、法隆寺の橘夫人念持仏厨子の赤外線撮影を行い、従来にはない鮮明な映像を入手することができた。(9 月 9 日)　その映像は館内のパネルで紹介したほか、新聞各紙にも紹介された。

(5)『白鳳』展の会期中、金銅仏、薬師寺東塔水煙の相輪部材などの材質調査を順次行った。

(6)公開講座の講師に特別観覧の機会を設け、それを講演会に反映させた。

白鳳展の輸送のための調査
（国宝・月光菩薩立像〔奈良・薬師寺金堂〕）

【備考】

・調査回数　５回

・調査・研究の成果を反映させた刊行物

内藤栄「総論　白鳳の美術」（特別展『白鳳―花ひらく仏教美術―』総論、27 年 7 月 18 日）

岩井共二「中国彫刻と白鳳仏」（特別展『白鳳―花ひらく仏教美術―』各論、27 年 7 月 18 日）

吉澤悟「古墳の終焉と火葬のはざま」（特別展『白鳳―花ひらく仏教美術―』各論、27 年 7 月 18 日）

野尻忠「古代律令法と七世紀の展開」（特別展『白鳳―花ひらく仏教美術―』各論、27 年 7 月 18 日）

・調査・研究の成果を反映させた講演会、講座等

パネルディスカッション「白鳳文化の時代背景～激動の時代と仏教～」（白鳳フォーラム、於：東大寺総合文化センター、27 年 7 月 25 日）

夏季講座（於：奈良県文化センター、27 年 8 月 18 日～20 日）

公開講座（於：奈良国立博物館講堂、27 年 8 月 8 日、22 日、9 月 5 日、19 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	仏教美術及び奈良を中心とした文化財について展示、調査研究を行う当館にとって、白鳳文化を紹介する本展覧会はそれにふさわしい内容である。 また、展覧会に関する調査研究により得られた知見を展示や刊行物、公開講座等に反映することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧会に関する調査研究を通じて、当館の中期計画である仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の基礎的かつ総合的な調査・研究を実施することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-1-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-2 特別展「第 67 回正倉院展」に関する調査研究（(5)-④）		
【事業概要】　特別展「第 67 回正倉院展」に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸考古室長　清水　健

【主な成果】

(1) 宝物についての調査・研究

・展覧会に先立ち、宮内庁正倉院事務所の協力により、宝物に関する正確かつ最新の情報を、宝物調書の閲覧、宝物の詳細な写真の提供などによって入手し、展覧会図録や会場の題箋、パネル等に反映させた。

・正倉院、正倉院宝物についての研究成果を、展覧会図録所収の解説、コラム(「宝物寸描」)、3 回の公開講座、及び学術シンポジウムを通じて公表した。また新聞紙面等を通じて、研究員の日頃の研究成果を反映した最新の知見等をコラム、コメントのかたちで披瀝した。

・研究員全員による宝物についての研究会を実施した。

・作業の合間等に、宝物の実見に努めた。

(2) 展示環境についての調査・研究

・文化財の適切な展示環境を考究するため、展覧会の会期中及び前後の詳細な温湿度データ、塵埃のデータを収集し、分析した。

・観覧者の多数集まる展覧会における適切な観覧者への情報提供について考究するため題箋やパネルの大きさ、設置位置、言語、情報の内容等について検討し、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。

・作品の照明について外部専門家と意見を交換して、効果的な照明を会場にて試み、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。

・観覧者の多数集まる展覧会における適切な動線の設定について考究するため、展示品やパネル等の配置、展示品への誘導方法について検討し、有識者の意見や、アンケート等を通じて観覧者の発する情報を収集した。

(3) その他、検討会等

・文化財の安全な梱包・輸送のための検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。

・文化財の安全かつ魅力的な展示についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。

・文化財の展示環境についての検討会を、宮内庁正倉院事務所とともに行った。

【備考】

・宝物に関する事前調査　5 回

・内部研究会　2 回

・公開講座　3 回　清水　健「正倉院の仏具とその収納箱」(27 年 11 月 3 日)ほか

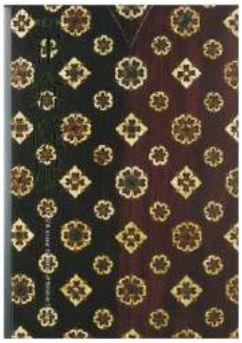
・正倉院学術シンポジウム　1 回

・出前授業（京都美術工芸大学）　1 回

・新聞連載(宝物紹介・読売新聞)　5 回

・『平成 27 年　正倉院展目録』(日・英)
奈良国立博物館　27 年 10 月 23 日
日本語篇所収／北澤菜月「撥鏤尺をめぐって」、田澤　梓「海と山の鏡に関する一考察」ほか

正倉院学術シンポジウム 2015
(奈良県新公会堂)



『正倉院展目録』
(日本語篇)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初の計画に基づき、概ね順調に成果を上げている。研究員各自が高い意識をもって宝物の研究に取り組み、展覧会図録等を通じて成果を公表している。27年度より始まった宮内庁正倉院事務所との文化財の安全な梱包・輸送のための検討会、及び文化財の安全かつ魅力的な展示についての検討会は今後継続し、各課題について一層の追究に努めてゆきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき着実に成果を上げている。宝物に関する調査研究は、日々更新される成果を踏まえて着実に前進しており、最新の成果を広く一般に伝えることが達成されている。また宝物の展示環境等に関する研究も進展しており、宝物への負荷や観覧者の不満は年を追って解消されていっている。今後は一層のデータ・情報の収集や、質の高い学術情報の普及が望まれる。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-1-3

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-3 特別展「国宝 信貴山縁起絵巻－朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝－」に関する調査研究（(5)-④）

【事業概要】28 年 4 月 9 日～5 月 22 日を会期として開催を計画している特別展「国宝 信貴山縁起絵巻－朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝」に出陳予定の文化財について、高精細デジタルカメラによるカラー画像・近赤外線画像の撮影を伴う予備調査を実施し、その成果に考察を加えつつ展示内容や展覧会図録に反映できるように準備を進める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 信貴山境内において霊宝館・千手院・護摩堂を中心に彫刻・絵画・書跡・工芸･考古部門に分かれて信貴山展出陳候補文化財の予備調査を 5 回実施した。
(2) 彫刻部門を中心に大阪・意満寺所蔵毘沙門天立像について基礎調査及び展覧会図録掲載用の写真撮影を実施。
(3) 絵画部門を中心に信貴山展出陳予定の奈良・安楽寺所蔵融通念仏縁起絵の基礎的調査を実施。
(4) 工芸部門を中心に、彦根城博物館、奈良・談山神社において信貴山展出陳文化財の基礎的調査を実施。
(5) 書跡部門を中心に、国立公文書館、宮内庁書陵部、七ツ寺、叡山文庫、陽明文庫、大覚寺の文書･聖教調査を実施。
(6) 信貴山朝護孫子寺の祭事「毘沙門天王二十八使者守護善神練り行列」の視察とともに信貴山境内の調査を行い、展覧会図録掲載用の写真撮影を行った。
(7) 信貴山縁起絵巻について、高精細デジタルカメラを用いたカラー画像・近赤外線画像の分割撮影、蛍光Ｘ線分析器を用いた顔料調査、透過光による近赤外線写真・顕微鏡写真撮影を伴う詞書文字修正箇所の調査を実施した。

信貴山縁起絵巻詞書の透過光による近赤外線写真撮影風景

【備考】
信貴山展出陳文化財の予備調査　合計 19 回実施
刊行物　特別展図録『国宝　信貴山縁起絵巻－朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝－』(28 年 4 月 9 日刊行予定)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「国宝 信貴山縁起絵巻－朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝」に出陳予定の文化財について基礎調査を実施し、写真撮影を実施することができた。調査成果を当館客員研究員・調査員とともに学芸部内で検討を重ね、展示及び展覧会図録への掲載に向けて着実に準備を進めた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別展「国宝 信貴山縁起絵巻－朝護孫子寺と毘沙門天王信仰の至宝」に出陳予定の国宝信貴山縁起絵巻について着実に基礎的調査を進めた。特に信貴山縁起絵巻について高精細デジタルカメラを用いたカラー画像・近赤外線画像の分割撮影、蛍光Ｘ線分析器を用いた顔料調査、透過光による近赤外線写真・顕微鏡写真撮影を伴う詞書文字修正箇所の調査等、最新の光学機器を用いた調査を実施し、平安絵巻の名品に関する全く新しい知見を得ることできた。その成果は信貴山展の展示及び展覧会図録において公表する予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4543-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究（(5)-④）

【事業概要】
展覧会への借用品及び館蔵・寄託品、また館外の寺社等において所蔵される作品のなかから、南都に伝来した古代・中世の彫刻作品につき、調書を作成し、詳細な記録写真を撮影し、データの収集・蓄積に努める。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　岩田茂樹

【主な成果】
(1) 館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は以下のとおり。
(2) いずれの作品についても、調査の結果、学術的に重要な知見が得られた。
(3) 特別展や名品展における図録の解説や題箋執筆、また公開講座での報告等に新知見を反映させることができ、新たな解説を行うことができた。

［調査対象作品］
法華寺文殊菩薩坐像（27 年 6 月 11・12 日／12 月 2 日）／春光寺薬師如来立像（6 月 17 日）／法隆寺橘夫人念持仏（7 月 9 日）／薬師寺聖観世音菩薩立像（7 月 21 日）／法隆寺観音菩薩立像（8 月 17 日）／法隆寺文殊普賢菩薩立像（8 月 31 日）／信貴山朝護孫子寺毘沙門天立像ほか（8 月 7 日）／興福寺仏頭（8 月 24 日）／薬師寺月光菩薩立像（9 月 9 日）／法輪寺虚空蔵菩薩立像（9 月 14 日）／室生寺二天王立像（10 月 22 日）／室生寺帝釈天坐像（10 月 30 日）／意満寺毘沙門天立像（28 年 1 月 8 日）

［調査の成果］
法華寺文殊菩薩像については、Ｘ線透過撮影の結果、像内納入品の存在が初めて知られた。薬師寺聖観世音菩薩立像・月光菩薩立像は、蛍光Ｘ線調査の結果、現状では肉眼で見えない鍍金の存在が確認された。法隆寺観音菩薩像については、製作工房を同じくする作品の同定が行えた。法隆寺文殊普賢菩薩像については、造像当初の一具の組み合わせにつき、新たな知見が得られた。室生寺二天王立像は、これまで全く知られていなかった平安時代初期（9 世紀）の作であることがわかった。信貴山朝護孫子寺及び意満寺の仏像調査によって、優れた作品の所在が確認され、28 年 4 月開催予定の特別展「信貴山縁起絵巻」に出陳し、公開する。

奈良・法華寺文殊菩薩像 調査風景

【備考】
(1) 調査回数　15 回
(2) 刊行物等　岩田茂樹他「作品研究　法華寺・文殊菩薩坐像」（『鹿園雑集』18 号、28 年 3 月 31 日発行：、同論考において法華寺文殊菩薩坐像の形状・構造・像内納入品の状況等につき詳しく報告し、同像の彫刻史上の意義について論じた。他 1 件
(3) 特別展「開館 120 年記念　白鳳　―花ひらく仏教美術―」の図録解説や題箋解説に成果を反映させた。
(4) 公開講座　岩田茂樹「白鳳の童形仏とその周辺」（27 年 9 月 19 日、於．奈良国立博物館）において、法隆寺観音菩薩像及び文殊普賢菩薩像についての新知見を紹介した。他 1 件
(5) 「室生寺に持国天・増長天像」（日本経済新聞社、27 年 10 月 1 日）など、新聞報道は多数（『白鳳』展会期中に連載など）。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査回数、その成果反映の回数のいずれをとっても26年度を凌駕し、かつその成果を28年度の展覧会へも反映させることができた。Ｘ線透過撮影によって確認された法華寺文殊菩薩坐像の像内納入品や、調査によって新たに発見された室生寺二天王立像など、27年度の調査で得られた知見は、彫刻史上でも大きな意義を持つものである。なお改善点としては、調査の成果を、複数の研究員が学術論文発表できることがより望ましいかと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	南都に伝来した古代・中世の彫刻作品について、継続して調書の作成、記録写真の撮影を行ったことにより、データの収集・蓄積が十分にできた。また、調査・研究から学術的に重要な知見が得られる等、中期計画期間内に大きな成果を得ることができた。なお、改善点は年度計画に対する総合評価の欄に記したものと同様。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4543-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究（(5)-④）

【事業概要】東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵および保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光 X 線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、合わせてデジタルコンテンツの作成をおこなうものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 東京文化財研究所で国宝聖徳太子及び天台高僧像の光学的調査成に関する研究会を実施し、その成果報告書の編集方針の確認及び追加調査計画を協議した（27 年 5 月 14 日）。
(2) 聖徳太子及び天台高僧像の奈良博寄託分 7 幅について高精細デジタルカメラを用いたカラー画像・近赤外線画像の追加撮影を実施（27 年 8 月 24～27 日）。調査データに基づく研究会を実施し、報告書の内容について協議を行った。
(3) 透過Ｘ線によるデジタル画像撮影用のアクリルパネルを当館光学調査室に設置し、聖徳太子及び天台高僧像の当館寄託分について透過Ｘ線撮影を実施した（27 年 12 月 24 日）。
(4) 上記の調査で得られた画像データの分析を行い、その成果を盛り込んだ調査報告書第 1 冊（全 3 分冊のうち）を年度内に刊行した。

高精細デジタルカメラを用いた聖徳太子及び天台高僧像の近赤外線画像撮影風景

【備考】
調査回数 2 回（27 年 8 月 24 日～27 日、 12 月 24 日）、調査作品数　1 件（聖徳太子及び天台高僧像 7 幅）
研究会開催件数　2 件(27 年 5 月 14 日、 8 月 26 日)、刊行物　報告書『聖徳太子及び天台高僧像 第 1 冊』28 年 3 月刊行

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から継続的に実施してきた東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づき、平安仏画を代表する名品である国宝聖徳太子及び天台高僧像について光学的調査の実施及び成果報告書の年度内刊行に向けた編集作業を計画どおり進めることができた。本作品に対する調査で得られた近赤外線画像及び透過Ｘ線画像については28年度において刊行予定の第2冊・第3冊報告書において公表する計画である。これら精度の高い調査データは美術史研究や現在計画中の保存修理に際して重要な基礎資料となることが期待される。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所との共同研究に基づき、着実に成果を挙げることができた。27年度は平安仏画を代表する聖徳太子及び天台高僧像の調査報告書刊行に向けて追加の光学的調査及び編集作業を着実に進めることができ、報告書を中期計画最終年度の本年度内に第1冊を刊行した。続く第2冊・第3冊を28年度に刊行予定で編集作業を進めている。東京文化財研究所との共同研究は次期中期計画においても引き続き継続する計画であり、すでに光学的調査を実施した国宝信貴山縁起絵巻について顕微鏡写真撮影等の追加調査を実施し、29～30年度にかけて各年度に1冊ずつ分冊の形で合計3冊の調査成果報告書を刊行する計画である。また今後は、これまでの個々の作品調査や研究から一歩踏み込んで、彩色の施された文化財に関する総合的な研究と情報の共有という広い枠組みの中で検討を重ねることで、更なる進展を図りたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4543-4

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)伊豆山権現立像（静岡・伊豆山神社蔵）の自然科学的及び美術史学的研究（(5)-④）

【事業概要】

仏教美術に関する文化財の調査及び研究の一環として、奈良文化財研究所の協力のもと静岡・伊豆山神社所蔵の銅造伊豆山権現立像に関する自然科学的及び美術史学的研究を行い、その成果を特別陳列「銅造伊豆山権現像修理記念 伊豆山神社の歴史と美術」に反映させる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室員　山口隆介

【主な成果】

(1)25 年度から２箇年にわたって、銅造伊豆山権現立像のＸ線ＣＴスキャン・蛍光Ｘ線分析・Ｘ線回折による材質調査及び劣化調査と、その後のクリーニング及び安定化処置を実施した。また、上記の調査と保存処置を踏まえた検討会を、奈良文化財研究所の担当研究員と実施した(年５回)。

(2)静岡・伊豆山神社にて所蔵品の調査撮影を実施した(27 年８月５日～6 日)
所蔵品の全体像を把握することができ、また実査にもとづく調書の作成及び高精細デジタルカメラによる写真撮影を行うことができた。

(3)大磯町郷土資料館にて神奈川・高来神社所蔵の神像群の調査撮影を実施した(27 年９月４日)
伊豆山権現像の関連作品として重要な高来神社所蔵の神像群について、実査にもとづく調書の作成及び高精細デジタルカメラによる写真撮影を行うことができた。

(4)以上の成果をもとに、特別陳列「銅造伊豆山権現像修理記念 伊豆山神社の歴史と美術」を企画立案し、実施した。また、同展の展覧会図録において、銅造伊豆山権現像の自然科学的及び美術史学的な調査の結果とそこから得られた知見を報告した。さらに、展覧会に出陳した個々の作品について、未紹介の像内銘記を翻刻し、従来の年代観を一部修正するなど、より充実した作品解説と展示題箋を執筆することができた。なお、奈良文化財研究所の協力により、展覧会会場の特設スペースにおいて銅造伊豆山権現像の像内構造を明らかにした３Ｄ映像を放映し、あわせて３Ｄプリンターで作製した模型の展示を行ったことも大変有益であった。

展覧会にかかる事前調査と写真撮影
(27 年８月５日 於熱海市立伊豆山郷土資料館)

【備考】

(1) 27 年度実施した調査の回数：5 回
(2) 論文等：山口隆介「伊豆山をめぐる信仰と美術」(特別陳列図録『銅造伊豆山権現像修理記念 伊豆山神社の歴史と美術』総論　28 年２月５日)、他１件
(3) その他調査・研究の実績等：公開講座「伊豆山権現像の成立と展開－保存修理の知見を踏まえて－」(於奈良国立博物館講堂　28 年２月 13 日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術に関する文化財の展示活動の中核に据えている当館にとって、これに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会的要請がもっとも多い業務のひとつである。こうした認識のもと、過去の特別展で銅造伊豆山権現立像(静岡・伊豆山神社蔵)を拝借したのを契機として、奈良文化財研究所との連携研究で当該作品の保存修理を実施し、その成果を展覧会に結びつけた本プロジェクトは、博物館における調査研究とその成果の公表の理想的なかたちといえる。また、当館内での美術史学的な研究にとどまらず、奈良文化財研究所との連携研究によって自然科学的な視点も踏まえた多角的な調査研究を実現したことにより、最新の成果が広く内外に提示できた点も大変有益であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別陳列「銅造伊豆山権現像修理記念 伊豆山神社の歴史と美術」の企画立案から実施に至るまでの過程における調査研究は、「文化財に関する調査及び研究の推進」という中期計画に沿うものであり、その点において順調に実績を積み重ねている。28年度以降も将来の企画展示の充実を図るべく、他機関とも積極的に連携しながら、調査研究を継続し、着実な成果を挙げていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4543-5

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)春日信仰を中心とした南都における神祇信仰の展開とその遺品に関する総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－④）

【事業概要】当館はこれまでに「春日社」や「春日信仰」をテーマにした数々の展覧会を開催してきたが、春日大社の式年造替（27～28 年）及び春日大社創建 1250 年（平成 30 年）を目前に控えたこの時期に、改めてこれを総合的に研究する事業である。各分野の研究員がそれぞれの専門的立場からプロジェクトに参画し、展示に向けた個別遺品の調査に留まらず、類似の遺品全体を系統的に調べ上げ、丹念に情報収集する形で研究を進める。本研究による成果は、近年当館で毎年開催している特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」や、平成 30 年に予定している特別展「創建 1250 年記念　春日大社展（仮）」に反映する計画である。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長　内藤　栄

【主な成果】27 年度は、以下に掲げるいくつかのテーマから春日信仰にアプローチした。その成果の一部は、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術―特集 御旅所―」（27 年 12 月 8 日～28 年 1 月 17 日）や、各研究員が関わった刊行物、あるいは口頭発表等に反映された。

(1) 春日曼荼羅に関する研究

・27 年 6 月 10 日～16 日に当館研究員 3 名をイギリスへ派遣。現地時間 11 日にはイーストアングリア大学美術館において同館所蔵の春日鹿曼荼羅をはじめとする日本仏画を調査し、翌 12 日には大英博物館において、同館所蔵の春日社寺曼荼羅、春日地蔵曼荼羅等の日本仏画を調査した。

(2) 春日若宮社経及び厨子に関する研究

・根津美術館において、同館所蔵の大般若経厨子を、27 年 4 月 5 日と 28 年 2 月 16 日の 2 度にわたり調査した。

・説話文学会研究会「女院と尼僧の信仰の軌跡―根津美術館蔵『春日若宮大般若経』をめぐって」（27 年 9 月 27 日、会場：根津美術館）に研究員 2 名を派遣した。

(3) 鹿島社・香取社に関する研究

・千葉県立美術館で開催の特別展「香取神宮」（会期：27 年 11 月 17 日～28 年 1 月 17 日）に出陳の文化財を調査した（28 年 1 月 17 日）。

・茨城県立歴史館で開催の特別展「茨城の宝Ⅰ」（会期：28 年 2 月 6 日～3 月 21 日）に出陳の鹿島神宮所蔵の文化財（剣、鞍、神輿、狛犬等）を調査した（28 年 2 月 26 日、3 月 20 日）。

(4) 銅鏡に関する研究

・春日大社末社金龍社神体の禽獣葡萄鏡を 3D 計測した（28 年 3 月 1 日）。

・香取神宮（千葉県香取市）に研究員を派遣し、同神宮所蔵の大型の海獣葡萄鏡を 3D 計測した（28 年 3 月 18 日）。

(5) その他

・昭和 40 年代の発掘調査で当館敷地内の春日塔跡から出土した品を順次、整理し、写真撮影した（年間を通じて）。

・春日大社の依頼を受け、現在式年造替が進む本殿前に安置されていた 8 軀の狛犬を調査し（12 月 1 日、28 年 1 月 20 日）、各像の作られた年代が推定されるに至った。この調査成果は、28 年 3 月 24 日付で新聞各社より報道された。

【備考】科学研究費補助金事業の　3 年計画の 2 年目

論文等：清水健「神仏と人の織りなす造形」（『日本美術全集 11　テーマ巻②　信仰と美術』、小学館、10 月 23 日）　他 6 件　　研究発表等：10 件　　調査及び研究の回数：11 回　　新聞掲載等：6 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展覧事業等の他業務の合間を縫って、数多くの春日信仰関連の遺品を調査することができている。なかでも、銅鏡2面の3D計測や春日大社本殿の狛犬調査は特筆される成果であった。しかし、当初の計画からすると調査の実施回数は少なめであり、海外調査も2回の予定がイギリスへの1回に留まったため左の評定とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	プロジェクトは順調に推移し、中期計画に掲げられた「文化財に関する調査及び研究の推進」を順調に達成した。27年度に実行できなかったもう一回の海外での文化財調査は、28年度上半期の実施を予定しているところである。28年度下半期には研究を取りまとめ、報告書の刊行を予定しているため、報告書編集に注力できる体制を早急に整える必要がある。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4543-6

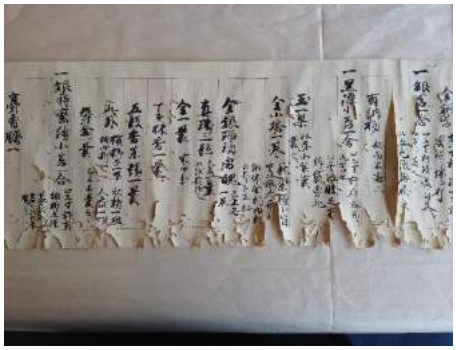
業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6)真言密教聖教の歴史史料としての調査・研究と活用（学術研究助成基金助成金）（(5)-④）		
【事業概要】真言密教聖教の歴史史料としての調査・研究と活用			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室員　斎木涼子

【主な成果】

(1)・購入した史料・論文集等により、院政期の密教法会に関する新たな知見を得た。また今後調査すべき聖教・文書について検討を行った。

(2)・『醍醐寺文書聖教目録』を確認し、研究テーマに関連し詳細な調査が必要と思われる史料（聖教）を検討した。
・目録よりピックアップした醍醐寺所蔵の聖教の閲覧を醍醐寺に申請し、醍醐寺霊宝館において、担当者立ち会いの下、調査を行った（27 年 8 月 20 日）。



醍醐寺における聖教調査の様子

・醍醐寺における調査により、発表されている一部史料の誤読の訂正ができた。また、未発表聖教の確認・解読を行う事ができた。

【備考】
学術研究助成基金助成金事業の 2 年計画の 1 年目
調査回数：1 回
論文：「円宗寺結縁灌頂―御願寺仏事の変転―」『畿内の古代学』Ⅴ、雄山閣、28 年 4 月出版予定
講演：奈良国立博物館サンデートーク「平安時代の密教修法」（27 年 7 月 21 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査日数については、先方の都合等により当初予定より少なくなったものの、満足できる調査結果を得ることができた。また、新たに入手した図書・資料等により、講演・講座の内容をより正確かつ充実したものにすることができた。また、それらの図書・資料により、今後の新たな検討素材などを得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	従来、着目・紹介されることの少なかった寺院聖教の調査を開始することができた。また調査結果、新たな資料の検討結果を反映した成果を公表することができ、28年度以降も引き続き公表予定がある。なお、27年度実施回数が不十分であった調査等については、28年度の実施で十分補えるものである。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-1-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1　特別展「始皇帝と大兵馬俑」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 近年、中国陝西省内では発掘調査と資料公開が進んだことで、始皇帝及び秦について全面的な見直しをする時期にきているといえる。本研究ではこれら最新の発掘成果を整理し、出土資料から秦のなりたちと始皇帝時代の実像について再検証する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展主任研究員　市元　塁
【主な成果】 ・27 年 6 月 8 日～13 日に中国陝西省において資料調査を実施した。なかでも宝鶏市においては、北方遊牧文化とのつながりを示す金製品や、楚など南方地区に由来する文化財を調査したことで、秦を取り巻く多元的な社会構造の一端を明らかにすることができた。また、9 月には秦始皇帝博物院において兵馬俑を詳しく調査する機会を得て、これにより、兵馬俑の制作に時期差が存することや、設計規格においても複数の系統が存在するとの見通しをたてることができた。27 年度までの成果については、展覧会図録『始皇帝と大兵馬俑』(共著)として上梓し、また同題の展覧会を開催した。 陝西省宝鶏市での調査風景			
【備考】 論文等： 図録「特別展　始皇帝と大兵馬俑」　「始皇帝と大兵馬俑　兵馬俑の設計規格とその理念」 図録「特別展　始皇帝と大兵馬俑」　コラム「兵士や軍馬ではない兵馬俑」			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国西方の小国であった秦が、統一国家を築くまでの過程を出土資料によって示すことができた。またその成果を展覧会及び図録によって、広く公開することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各地の文化財所蔵機関の全面的な協力、また東京国立博物館との連携を経て、中期計画記載の「アジアを中心に世界等の交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」という視点に即した特別展にかかる調査を限られた時間のなか、遂行することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-1-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-2　特別展「東山魁夷展　自然と人、そして町」に関する調査研究((5)-⑤)

【事業概要】

28 年度に、戦後の日本画、なかでも風景画に大きな足跡を残した文化勲章受章者・東山魁夷（1908-1999 年）の画業を、代表作を通して紹介する。

東山が描き続けた清澄かつ深い情感に富む風景画は、日本人の自然観や心情までも反映する普遍性を有するものとして高く評価され、20 年には「生誕 100 年　東山魁夷展」が、東山作品多数を所蔵する東京国立近代美術館などで開催された。国民的画家として知られる東山の展覧会は、これまで首都圏、関西圏や記念館のある長野県などで開かれることが多く、九州の国公立館として初の本格的東山魁夷展となる。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　臺信祐爾

【主な成果】

(1) 27 年 7 月 21 日に、長野県長野市・長野県立信濃美術館東山魁夷館で開催中の特別展「日展三山」出品作品調査及び担当学芸員との協議を実施した。
27 年 7 月 22 日に千葉県市川市東山魁夷記念館にて展示作品調査を実施した。
27 年 7 月 27 日に奈良県奈良市・唐招提寺にて関係者と協議及び御影堂にて障壁画調査を実施した。
随時、展示に関わる協議を、本展監修者と重ねた。
本展準備のため、28 年 2 月 8 日～11 日に、唐招提寺御影堂障壁画の状態確認と梱包作業を実施した。
(2) 障壁画を実際の配置のまま、自然光で観察し、効果的な照明についての参考となる情報を得ることができた。
(3) 唐招提寺御影堂障壁画の点検作業を通じて、日本の風景を彩色で描く第一期障壁画から、中国の山水を水墨で描く第二期障壁画への画風の展開をよりよく理解することができた。

唐招提寺御影堂内部

【備考】

※作品の調査研究　所蔵機関にて 4 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東山魁夷が描いた風景画作品の制作の過程及びその背景を、東山が残した大量の文章などに関するさまざまな調査から確認することができた。また東山魁夷の絵画作品研究の第一人者尾嵜正明氏（茨城県立近代美術館長）に監修の協力を得ていることから、学術的にも正確かつ高水準な研究成果を、本展の作品選定にも反映させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	20世紀に活躍した現代日本画家であり、戦前のベルリン大学留学経験を含む国際的な視野と活躍を見せた東山魁夷に関する調査研究を実施することで、中期計画に挙げられた「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う」という観点を実証的に展開することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-1-3

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)-3　特別展「京都 高山寺と明恵上人―特別公開　鳥獣戯画―」に関する調査研究((5)-⑤)

【事業概要】
特別展「京都 高山寺と明恵上人―特別公開 鳥獣戯画―」(28 年 10 月 4 日～11 月 20 日）に関する調査研究。
平安から鎌倉にかけて、京都・高山寺を拠点に活躍した明恵上人に焦点を当て、彼の激動の生涯を彩る様々な作品を展示し、ひいては鎌倉仏教の旺盛な状況を紹介する特別展「京都 高山寺と明恵上人―特別公開 鳥獣戯画―」に向けて、内容について検討するとともに候補作品の出陳交渉を進める。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員　森實　久美子

【主な成果】
・28 年度開催予定の特別展「京都 高山寺と明恵上人―特別公開 鳥獣戯画―」の出陳交渉を進めるとともに、各所蔵者の協力を得ながら展示予定作品の現地調査を実施し、輸送計画及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。特に 27 年 9 月 20 日～23 日までの 4 日間には高山寺において作品の状態確認も含めて調査を行い、大きな収穫を得た。

【備考】
・主たる出陳者である高山寺と密に連絡交渉を行い、展示内容について相互に意見交換を行った。特に、高山寺における定例の文書調査に加わって調査を行い、詳細な知見を得ることができたことは意義深かった。
・東京国立博物館にて、特別展「鳥獣戯画 京都 高山寺の至宝」を調査し、図録からでは確認しにくい細部の観察を行うことができた。
・調査実施先
京都・高山寺、京都国立博物館、奈良国立博物館、山口・神上寺、大阪・久米田寺、国立歴史民俗博物館、京都・仁和寺、大谷大学博物館、天理大学附属天理図書館、大阪歴史博物館、韓国・国立中央博物館ほか

奈良国立博物館における調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作品の調査により、出陳作品の精査及び展示計画の立案に有効なデータを得ることができた。準備作業も予定通り進んでおり、28年度の作業計画策定に向けての準備も順調である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「アジアを中心に世界等の交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う」という目標のもと、高山寺の所蔵品や明恵ゆかりの品ばかりでなく、当該期の中国（南宋）や朝鮮半島（高麗）との交流を示す作品についての調査研究も行った。研究成果を展示に反映させることができるよう作品調査を精力的に進め、その調査成果を輸送・展示作業の安全性を高めることにも活かしていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)－⑤)

【事業概要】
当館がコンセプトに掲げているアジアとの交流について、関係諸国との様々な形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告の形などで示していく。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長兼文化交流展室長　河野一隆

【主な成果】
27 年度は開館 10 周年の節目にあたり、特別展「美の国　日本」の開催など当館の原点である「日本文化の形成を、アジア史的観点から捉える。」といった当館基本のコンセプトに立ち返り、第 1 回目の特別展と同じく韓国・中国からの作品の出陳を前提とした調査を実施した。本展で対象とした作品は、中国・揚州市の煬帝墓と韓国・公州市の百済武寧王陵であった。いずれも、日本との深い結び付きをもつ作品で展示効果も高いものである。

(1) 煬帝墓
煬帝は『隋書』倭国伝に「海西の菩薩天子」と記され巡幸先の揚州で不慮の死を遂げた。24 年に建築現場で磚室墓が見つかり、墓誌から煬帝を葬った墓所であることが判明した。数多くの副葬品のうち、対象としたのは 4 点の獅嚙環付金具である。これらは隋代の工芸品の代表格で、隋文化の我が国への影響を考える上でも格好の資料と言える。本品については、27 年 7 月に揚州市文物考古研究所を訪問して遺跡と遺物の実見調査を行った。

煬帝墓の調査

(2) 百済武寧王・王妃陵
百済第 25 代の王である武寧王は、古代日本とのつながりも強く、当館でも 26 年度に開催した「古代日本と百済の交流―大宰府、飛鳥そして公州・扶餘―」でも、墓誌の出陳をはじめとして大きく扱ったものである。1971 年に公州市宋山里古墳群から発見された磚室墓は、武寧王ならびに王妃を葬った墓で、金製の冠飾は王家に相応しい風格を備えたものである。本品については、国立公州博物館と韓国国立中央博物館とに分けて保管されており、それぞれの機関を訪問して調査を行った。
両機関での調査の成果は、特別展「美の国　日本」の展覧会図録及び展示に活用し、両者とも日本では初めての公開であり、大きな話題と反響を得た。
このほか、将来の特別展への布石として、メキシコにおけるビオンボの調査や中国瀋陽故宮博物院の調査を行った。

武寧王陵の冠の調査

特別展「美の国　日本」の展示風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	10周年記念に相応しく、韓国の国宝、中国の一級文物を調査・借用できた。それにより、日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究の計画を充分に達成し、「美の国　日本」の特別展に活用して大きな成果をあげることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画の「世界との交流」という観点から捉えた調査研究として、特別展につながる大きな成果をあげている。また、タイを中心とする東南アジアに加えて、26年度の特別展「古代日本と百済の交流」など、近年、韓国・中国との文化交流に焦点を当てた研究も着実に積み重ねられつつある。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－⑤）

【事業概要】本研究は、中世～近世初期における対馬宗氏領国の特質を、日本列島の政治史、とりわけ中央政権との関連性のなかで連続的にとらえ、もって日本・朝鮮両国の国境地域に存立する宗氏領国の主体性・従属性のありかたを明らかにしようとするものである。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員　荒木和憲

【主な成果】

4 月～6 月期は、27 年度の主たる研究課題である「環玄界灘地域」（九州―対馬―朝鮮）の戦争と平和に関する研究を進めた。なお、当該研究課題に関しては、所属機関変更後も継続的に取り組み、学会報告に結実した（「室町・戦国期の対馬と壱岐―海域の秩序をめぐる政治史」、九州史学会大会日本史部会、12 月）。その成果の一部は単著『対馬宗氏の中世史（仮）』（吉川弘文館より刊行予定）に反映させた。

種別	元号	年	月	日	発出	書判	宛名	本文	典拠	刊本
	永禄	7	7	11	山右[有馬晴純]		谷議屋新三郎・波多津但書守・向江対馬守・日高大和守・浪崎右衛門亮[隈崎]・健賀式部大輔	御札被見候、御意[波多真芳]上州[大友宗麟]に被差遣候節、大小被下置之由に候、殊に尊意最仮名並御字拝領、千秋万歳目出候、従後室被加冠日、御書被持候之条、日地大農此時に候、猶期書可略候、恐々謹言、	松浦拾風土記	北波多村史（通）655
	永禄	7			義調		御つほね[波多真芳]	至松浦慈雲庵御便之時）其御かた堺目御とりみだしのよしうけ給候、如何ニおはしまし候や、尤御々申まいらせべく処に海路ゆへうち過候、御心もとなく申候まゝ、只今飛脚申付候、委御返事待入候、尚かさね＼申候、すゑかしく、　あまり物ならず候へ共油布	諸家引著109	北波多村史99
	永禄	7			義調？盛円？		御つほね[波多真芳]	其後は海路ゆへ連々申おくれ候、仍其かた堺目とり乱のやう風聞申候間、ふと飛脚申付られ候、いかがおはしまし候や、御心もとなく申候、さためて程なく静謐申べく候、御悦申まいらせべく候、すゑかしく、　あまりかすかにおはしまし候へ共紬一端候、	諸家引著111	北波多村史101
	永禄	8	9	9	義調		日高大膳亮・立石和泉守・立石三河守・保利次郎左衛門尉・牧山源六・内山備前守・井手書左衛門尉・松雲軒	〈瑞泉使仁被渡候時〉岸岳御取乱之由申来候条、態以飛脚被申渡候、如何御座候哉、尤至松浦雖可申遣候、実否不分明候間、先以申候、此由謹々仁可預御心得候、猶彼使可申候条、間筆候、恐々謹言、〈松雲軒：裏一字几下　白絹布一端〉	諸家引著137	
	永禄	8	9	9	盛円		日高大膳亮	至岸岳御取乱之由申来候条、態以飛脚被申渡候、如何御座候哉、早々於松浦雖可被申渡候、実否然々不承候間、先以被申候、此由各江御心得賜存候、委曲彼使可被申候条、不能紬筆候、恐々謹言、	諸家引著138	
	永禄	9	4	21	盛円		鶴手田左衛門大夫	壱州松浦心（公＋心）劇之由風聞候条、態以飛脚被申渡候、如何御座候哉、其御心許候、殊隣境之事候間、別而其油断被存候、御調義不及申候、自然相替之儀候者可被仰渡候、猶彼者可申候、恐々謹言、	諸家引著141	
	永禄	9	4	21	義調		松浦肥前守	〈於口源右衛門尉御便之時〉其後者久令無音候、心外之至候、仍壱州松浦騒乱之由承候、如何御座候哉、兼御心許候、隣境之儀之事候之条、可然之様御調略之儀、万端干要候、就者只今飛脚被申付候、猶彼者可申遣候条、令省略候、恐々謹言、	諸家引著138	
	永禄※	8	5	1	義純・義真		有浦四郎左衛門尉・御宿所	近年者依不慮之弓箭、連々不申承候、心外之至候、仍後室（真芳）同舅（波多鎮）于今地御之御立精、不及是非次第候、於彼御進退者、御寄合中可依御存分事候歟、各被仰談、早速可被遣御本意御調達、可目出候、殊日高甲斐守方・同義田因幡守方（義田）・同越前守方、無別儀由候之条、幸之儀候、可有御相談候、猶連綿可申遣候之条、先省略候、恐々謹言、	有浦文書187号	松浦党有浦文書　北波多村史105
	永禄	9	8	7	義調		日高甲斐守[著]	〈従松浦松雲軒便之時〉態預御便者候、祝着之至候、今程其境静謐之由候、弥御分別尊一候、仍松浦肥前守殿依所目被仰談候由承候、必於御入国者急度御祝儀可申入候、殊綾筋二端被懸御意候、次花席二枚進入候、誠軽微之至候、委松雲軒可有演説候、恐々謹言、	諸家引著144	

1 / 319

中世壱岐・松浦関係史料データベース

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究の期間は25～27年度の3ヵ年であり、27年度が最終年度にあたる。27年度の主たる研究課題は、「環玄界灘地域」（九州―対馬―朝鮮）の戦争と平和の様相を明らかにすることである。4～6月期においては、26年度までに収集した史料の分析を進め、12月の学会報告に結実した。研究の進捗状況は概ね良好である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、日本と朝鮮との国境地域に存立する対馬宗氏領国（対馬藩）の具体的様相を明らかにしようとするものであり、中期計画1-4-(5)-⑤「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究を行う」の趣旨に即したものである。研究の進捗状況は概ね良好である。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 契丹壁画墓の集成と公開－唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解－に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-⑤)

【事業概要】唐滅亡後の東アジアにあって、中国北方に覇をとなえた遊牧民族国家の契丹（遼）は、唐から中国文化や仏教を継承する一方、契丹文字を創出するなど文化的な自立を示している。契丹による、こうした国家形成における重層性を考えるために、当時の社会構造を視覚的に示す、内蒙古自治区内所在の契丹（遼）壁画墓壁画を、高精細画像で記録・集成し、公開のための環境整備と新しい展示手法を検討する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　臺信祐爾

【主な成果】

(1) 27 年 4 月 19 日～25 日に、臺信祐爾特任研究員、市元塁主任研究員、秋山純子研究員及び京都大学工学部井手亜里研究室関係者 2 名が、内蒙古博物院で遼代耶律弘世壁画墓（1087 年）剥ぎ取り壁画の高精細画像（RGB 及び赤外線画像）を作成するとともに、携帯型蛍光 X 線分析装置を用いての顔料分析を実施した。
27 年 9 月 2 日～26 日に、臺信特任研究員が、内蒙古博物院で 27 年度撮影の高精細画像データベース（壁画作品ごとにデータ処理を加えた高精細画像ファイル）を内蒙古博物院と共有するとともに、現在開発中の博物館展示環境に応用可能な展示用モデル（ビューワー）について協議した。

(2) 上記展示用モデル（ビューワー）について開発を完了した。

遼代壁画墓剥ぎ取り壁画の高精細画像作成の様子

壁画の顔料分析の様子

(3) 本研究のまとめとして、内蒙古博物院の塔拉院長及び杜暁黎研究員を招き、遼代壁画墓研究の現状と、壁画剥ぎ取り及び保存修復の実際について、また京都大学井手亜里教授に高精細画像作成計画策定と安全管理の実際及び高精細画像データ利用の実例について、そして臺信が博物館におけるヴァーチャルな空間の生成及び展示用モデル（ビューワー）開発とデータベースの現状について発表するシンポジウムを 28 年 2 月 27 日に、当館研修室で実施した。

【備考】

科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 3 年目

・現地調査及び協議　2 回、シンポジウム　1 回

・27 年 5 月 23 日に、第 2 回京都大学 - ボルドー大学共催シンポジウム第 2 分科会文化財科学において、遼代壁画墓壁画高精細画像作成の現状と博物館展示環境における画像利用の見通しに関する招待講演を、臺信特任研究員がフランス語で担当した。

・27 年 8 月 25 日～26 日に、文化庁の補助事業「ミャンマー連邦共和国の文化遺産のデジタル保存展示に関する拠点交流事業」の一部として、ヤンゴン大学化学部で実施された文化遺産デジタル化セミナーで、遼代壁画墓高精細画像作成の現状と博物館展示環境における画像利用の今後の見通しに関する招待講演を、臺信特任研究員が英語で担当した。

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	壁画墓内部空間をヴァーチャルに再現することによって、来館者が現存壁画の原位置を確認し、高精細画像を呼び出して細部まで観察できる展示用モデル（ビューワー）を作成した。耶律弘世壁画墓発掘関連の情報は、内蒙古博物院から提供を受けており、その正確性は群を抜いている。博物館の来館者にも高精細画像を見てもらうことで、最新の研究成果の一端を広く公開する契機となる、独創的な取り組みといえる。調査時の壁画の状態を正確に記録することで、将来起こりうる状態変化を確認したり修理計画を前もって準備できることなどが期待されている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が、内蒙古博物院をはじめとする内蒙古自治区の研究機関と長期間にわたって培ってきた信頼関係があってこその研究であった。高精細画像を生成･収集し展示に活用するという当初の目標が充分に達成された。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)水中遺跡の保存・活用に関する調査研究（文化庁受託事業）((5)-⑤)

【事業概要】我が国は、海外との交流によって歴史文化を育んできた。この直接の担い手が船であるが、近年、長崎県鷹島神崎の海底遺跡から沈没した元寇船が発見されるなど、海中には多くの船体や遺跡が存在すると思われる。こうした水中遺跡は、海外との交流を語る貴重な文化遺産であるが、水中という特殊な立地条件にあるため、その調査や保存活用の手法が確立されていない。そこで水中遺跡の保存活用について国内外の取組みについて調査研究を行う。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　今津節生

【主な成果】

(1) 諸外国の水中遺跡に関する取り組みを調査するため、フランスの国立水中考古学研究所（27 年 5 月）、アメリカで水中文化遺産のマネージメントを行っているアメリカ合衆国国立公園局、他４ヵ所（27 年 8 月と 28 年 1 月）、韓国の国立海洋文化財研究所から水中発掘課長の招聘（27 年 5 月）及び韓国において現地調査（28 年 3 月）を実施した。これらの調査を通して各国の水中文化遺産に関する先進的な取組みについて学び、日本でも同様の取り組みを応用する可能性を探ることができた。

(2) 漁師など市民による情報の提供から水中遺跡のおよその範囲の確定に至るプロセスを検証するため、27 年 10 月 1 日～10 日に福岡県新宮町相島、また 27 年 10 月 21 日～30 日に沖縄県宮古郡多良間村において音波探査装置や水中ロボットを使用して遺跡発見のための探査を行い、海底の遺物を確認した。得られたデータをもとに、遺物の広がる範囲の確定を行うことができた。地元の小・中学校で調査の様子と水中文化遺産保護の重要性などについてプレゼンを行い、また、新聞やテレビなどにも広く取り上げられた。

(3) 水中遺跡から引き揚げられた遺物の展示手法や水中遺跡の活用を検討するため、海外の博物館や国内の水中遺跡や遺物の展示が行われている博物館などの現地調査を実施した。特にフランスやアメリカで発掘が行われた船やその遺物の展示を視察し、担当者などとの面談を通して効果的な展示方法を学ぶことができた。また、国内では神奈川県・宮城県・和歌山県などで海事文化遺産の活用方法を視察・検証した。

(4) 地方自治体で行う水中文化遺産の保護と活用の取組みを支援するため、26 年度調査を行った鹿児島県奄美大島の倉木崎海底遺跡について 27 年 8 月 28 日～29 日に現地でシンポジウムと遺跡説明会を実施した。27 年 11 月 30 日に沖縄県多良間村において 27 年度行われた調査の完了報告を村民向けに行った。また、26 年度から引き続き長崎県松浦市の鷹島海底遺跡において遺物の保存・活用方法や遺跡の現位置保存について検討と助言を行っている。

(5) 受託事業の中間報告と 27 年度事業報告書の執筆、及び 28 年度の調査・研究対象を特定するため、諸外国の水中文化遺産のマネージメント形式や法律、日本近海の海難・海事資料、日本の水中遺跡の現状などに関する資料の収集を行った。

多良間沖海底で発見された金属製の箱
（10 月　水中ロボットで撮影）

【備考】

文化庁の取り組み：水中遺跡調査検討委員会会議(3 回)、文化財担当員協力者会議(1 回)、研究会(6 回)
調査件数　計 12 回（海外調査 4 回、国内水中遺跡探査 2 回、国内水中遺跡の展示・活用事例調査 6 回）
発表件数　3 件（鹿児島県宇検村倉木崎海底遺跡シンポジウム、沖縄県多良間村調査成果発表会、他）
報告件数　1 件『水中遺跡の保存活用に関する調査研究 3』（文化庁事業報告書）
取材　15 件 新聞（読売・朝日・西日本 他）・テレビ４局（NHK・RKB 他）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度計画していた研究や課題について予定通り実施することができた。特にアメリカの訪問を通して今後の日本の水中文化遺産の取り組みについて取り入れることが可能な具体的な例を学ぶことができた。また、メディアからも想定以上に多くの取材依頼を受けた。28年度は、イタリアや中国などを訪問、調査も引き続き進めていく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は、当事業の中間年度であり、これまでの基礎的な情報の集積から今後の具体的な方向性を示す調査研究へと移行していくために十分な成果を得た。28年度からは、これまでの調査で得られた結果をもとに、日本の水中文化遺産保護の取り組みを決定していくための詳細な情報の分析と、これまでに示された課題を克服していくための調査・研究が必要となる。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-6

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）平成 20 年度に開催した特別展「工芸のいま　伝統と創造」の成果を基礎とした、九州・沖縄の伝統工芸作家についての継続的かつ発展的な調査研究（(5)－⑤）

【事業概要】
九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動についての継続的調査研究である。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長　原田あゆみ

【主な成果】
(1)27 年 5 月 27 日に第 50 回記念西部伝統工芸展の作品を調査し、情報収集を実施した。27 年は 50 回記念であり、現代作家の作品とあわせて伝統工芸各分野の名品も同時に紹介され、伝統工芸の伝承と新しい取り組みについて取材するよい機会を得た。
(2)27 年 5 月 31 日に久留米絣人間国宝・松枝玉記生誕 110 周年講演会に参加し、併せて九州の染織作家の活動について情報収集を実施した。
(3)27 年 10 月 11 日に福岡県久留米絣の普及活動について取材し、情報収集を実施した。
(4)27 年 11 月 5 日に沖縄県立博物館・美術館において開催された展覧会資料を調査し、那覇市首里の紅型制作について情報収集を実施した。同日、琉球芭蕉紙の鈴木芭蕉布工房、NPO 法人沖縄県工芸産業協働センター、琉球漆工藝舎等の作家から現在の活動についての取材を行った。
(5)27 年 12 月 6 日に沖縄県大宜味村喜如嘉の芭蕉布制作について人間国宝・平良敏子氏の記録映画会及び講演会（沖縄 県立博物館・美術館）に参加し、情報収集を実施した。同日、琉球漆器の老舗「紅房（べんぼう）」出身の作家が開催した展覧会にて、琉球漆器技術の保存と新たな創造について調査を行った。紅房は漆器工業組合(昭和 6 年～18 年)を引き継ぐ形で昭和 23 年、株式会社紅房としてスタートし、県外からのデザイナーを迎え新しい琉球漆器のスタイルを確立したが、現代生活の中に漆器を使う機会が少なくなったことに加え、長引く不況で 13 年に惜しまれながらも廃業した。
(6)27 年 12 月 19 日に福岡県大牟田市倉永に所在する日本刀製作・研磨工房の「四郎國光（しろうくにみつ）」にて、刀剣の製作と研磨について調査を行った。「四郎國光」は、天明 6 年（1786）創業の九州を代表する刀剣工房であり、伝統工芸の伝承について情報収集を行った。また、時代の変化に柔軟に対応した職掌の変化についても多くの知見が得られた。
(7)28 年 1 月 8 日に「有田焼創業 400 年記念十三代今右衛門×十四代柿右衛門展」のギャラリートークに参加し、今右衛門窯及び柿右衛門窯の活動について情報収集を行った。

「四郎國光」工房外観

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新たな作家を対象に新規の調査を実施することができた。また、伝統工芸と産業化の問題、後継者の育成に係る課題などの状況を理解することができた。調査対象を広げるだけでなく分野横断型の情報共有と情報整理が課題である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初目標は達している。将来、本プロジェクトを展覧会につなげ、九州沖縄の伝統工芸の活性化のための一助とするために、伝統工芸作家及び作家が属する団体との信頼関係を深め、主体的に本プロジェクトに関わってもらうよう調査活動を継続する。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)タイにおける異文化の受容と変容－13 世紀から 18 世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)-⑤）

【事業概要】本研究は美術史的視点に立脚して、13～18 世紀のタイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。タイにおける異文化の受容と変容を明らかにするために、交易品に着目してその関係資料を横断的に調査する。これまでに知られていた資料の理解を深め、新出資料も加えた基礎資料集成を行うとともに、それぞれの資料について正しい評価を行う。これにより、タイ王国芸術局と情報共有し、資料の活用を進めるものである。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長　原田あゆみ

【主な成果】

27 年はこれまでの調査研究を報告書にまとめるため､以下のことに注力した。

(1)　26 年度に開催した調査研究の中間報告セミナーの内容をまとめ、タイ国側と情報共有するため英訳を行った。本研究はタイ芸術局と協力し進めてきたもので、両者で情報を補完することにより、各種文化財についての認識を改める機会となった。

(2)対外交易品としてインド更紗・ヨーロッパ更紗に着目し、タイと日本に伝わった更紗を比較検討することで、それぞれの流通と受容の傾向について理解を深めることができた。本研究の成果は報告書として公開した（28 年 3 月 31 日発行）ほか、大谷大学博物館における公開講座（28 年 3 月 17 日）を通して広く普及することができた。

(3)本研究の成果は、27 年度科学研究費補助金「日タイ間の文化交流に関する資料集成と総合的研究」にも有効に活用されている。

成果報告書に掲載した九博所蔵端物切本帳

【備考】

科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 4 年目

論文等：原田あゆみ「タイの弥勒菩薩像－仏教説話にあらわされた弥勒の功徳－」報告書『タイにおける異文化の受容と変容－13 世紀から 18 世紀の対外交易品を中心として－』(28 年 3 月 31 日)

発表等：原田あゆみ「大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本の包裂について」大谷大学真宗総合研究所主催 公開講演会「大谷大学所蔵タイ王室寄贈パーリ語貝葉写本の世界」(28 年 3 月 17 日)

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初は、研究期間を24年度から26年度の3年間と設定していたが、日本学術振興会に研究期間の延長を申請し、承認された。そのため、27年はこれまで収集してきたデータの整理に注力し、研究成果の公開に努めた。本研究はタイ芸術局との信頼関係の下に進められ、情報公開や意見交換を行うなど相互補完的に研究成果を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に対する進捗状況はほぼ順調である。本研究成果を、27年度新たに採用された科学研究費補助金「日タイ間の文化交流に関する資料集成と総合的研究」の調査研究に継続させた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)トピック展示「有田焼創業 400 年記念展　旧家の生活を彩った器―古伊万里―」に関する調査研究((5)-⑤)

【事業概要】
江戸時代初期に日本初の磁器として誕生し、世界を魅了した有田焼は、28 年（2016 年）に創業 400 年を迎える。本展覧会はこれを記念して 28 年度に開催するトピック展示である。有田焼は創業からまもなくして海外輸出されたことにより、国内向けと海外向けの製品が受容層それぞれの文化や生活の違いに応じて誕生し、別々に、ときには影響し合いながら様式展開していった。本展覧会では、公家、大名家、豪商など国内の旧家ゆかりの作品と、欧州の城館や宮殿を彩った名品を紹介し、国内と海外それぞれの生活を彩った古伊万里の特徴や魅力の違いに注目する。特に国内向け製品については、全国各地への流通に着目し、地域ごとの製品の伝播や需要の違いについて、貴重な伝来品や古文書、出土資料の展示を通して紹介する。江戸時代に日本と世界を舞台に花開いた有田焼の大いなる魅力に迫る。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　酒井田　千明

【主な成果】

(1) これまで、古伊万里の伝来品では、公家では京都・冷泉家、大名家では仙台・伊達家や佐賀・鍋島家等、豪商では酒田・本間家や須坂・田中本家等で調査研究を実施した。
(2) 流通については、北前船による日本海航路、最上川舟運、阿武隈川舟運、奥州街道、大笹街道等に関する調査を実施し、資料を収集した。
(3) 生産者に関わる資料として、有田の金ケ江家文書、酒井田家文書、陶器商に関わる資料として伊万里・前川家文書の調査を実施した。
(4) 出土資料については、京都・公家屋敷跡、江戸・大名家屋敷跡の資料の調査を実施した。

冷泉家伝来古伊万里　18 世紀　冷泉家時雨亭文庫所蔵

伊達家伝来古伊万里　17～18 世紀　仙台市博物館所蔵

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査は計画どおり順調に進んでいる。28年度は、秋の展覧会開催に向けて調査を継続し、展覧会の展示と図録の刊行においてその成果を公表する。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「アジアを中心に世界等の交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」を実施し、進捗状況は順調である。本研究の成果を28年度秋の展覧会とその図録に公表し、今後も本研究テーマの継続的かつ長期的な調査研究を行っていきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4554-9

業務実績書

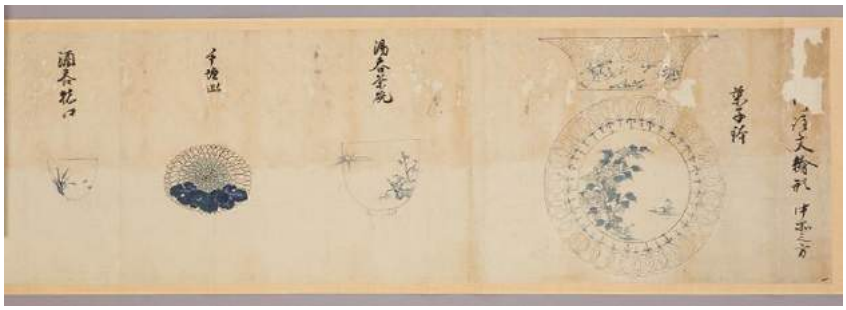
中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	9)酒井田家文書にみる大名家からの御注文品に関する研究（公益信託　西田記念東洋陶磁史研究助成基金）（(5)-⑤）

【事業概要】
江戸時代より肥前（現佐賀県）・有田で窯業を営む、柿右衛門窯の当主酒井田家には 70 件を超える文書（以下酒井田家文書）が伝わる。その内容は佐賀藩からの注文の指示や陶磁器商人からの注文書、あるいは窯の運営に関する証文等多岐に亘る。これらは酒井田家の動向に限らず、江戸時代の窯業地有田の様子を示す歴史資料としても貴重なものである。本研究では皿山代官を通じて指示のあった佐賀藩主鍋島家及び将軍家に調進した品物の注文書や他の大名家からの注文書に着目し、御注文品の実態について明らかにすることを目標としている。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　酒井田　千明

【主な成果】

(1) 酒井田家の承諾を得て、酒井田家文書 74 件を一括資料として九州国立博物館でお預かりし、状態確認と目録作成を実施した。
(2) 全件の写真撮影を実施した。
(3) 研究計画に沿って御注文書の解読を進めた。



酒井田家文書　御注文絵形　19 世紀

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は文書全件の目録作成と写真撮影を主に実施し、研究計画に沿って御注文書の解読を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「アジアを中心に世界等の交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」を実施し、進捗状況は順調である。今後も本研究テーマの継続的かつ長期的な調査研究を行っていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-10

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	10）出土・在銘遺品を中心とした調査による明代彫漆器の基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-⑤）

【事業概要】
本研究は、世界各地に伝存する中国・明時代の彫漆器のうち、特に在銘・出土遺品の調査を通じてその様式や特質を明らかにし、いまだ判別の難しい明代彫漆器の制作地や編年を正しく捉えることを目的とする。

【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員　川畑憲子

【主な成果】
27 年度は、計画していた調査を進めて調査データを整理し、28 年度に向けて新たな検討課題について考察を進めることに努めた。

具体的には、国内外に所蔵される明代彫漆器及び関連作品について、さらに広範囲に、作品調査を行った。
27 年度、調査に訪れたおもな所蔵先は、上海博物館、浙江省博物館、安吉博物館、個人（東京）、個人（京都）などである。調査では、明代彫漆器のみならず、宋代、元代などの彫漆器も合わせて調査することができ、当初の計画よりも多くの貴重な作例データを集積することができた。さらには、調査データをもとに国内外の研究者と議論を交わし、研究を深めることができた。
また、文献資料をあらためて博捜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討し、彫漆器の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。

牡丹堆朱香合（上海博物館）

【備考】
学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 1 年目
調査回数　　国内 2 ヵ所　海外 3 ヵ所
収集資料数　漆器ほか　約 200 点

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画通りに研究を進めることができ、28 年度の総括に向けて、調査データを整理し、新たな検討課題について考察を進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における、「アジアを中心に世界との交流という観点から捉えた、日本文化に関する調査・研究」を達成することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4554-11

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11）日タイ間の文化交流に関する資料集成と総合的研究（科学研究費補助金）（(5)-⑤）

【事業概要】
日本とタイとの関係は深く、先学が示したさまざまな史料が両国の長い歴史を裏付けている。
これまでタイにおいて美術品を中心とした交易資料の調査を行い、併行して日本関係資料の発掘にも力を注いできた。本研究は、これまで知られてきた史料を、新出の交易・文化交流資料から見直し、日本とタイにおける文化交流の実相を再構築することを目的とする。また、これまで続けてきたタイにおける日本美術、日本におけるタイ美術の悉皆調査を継続させ、資料そのものに関する正しい評価を行い、共有できるデータベースを公開することで、これまで埋もれていた資料の活用を図る。さらに、本研究の成果を、29 年の日タイ修好 130 周年記念特別展において紹介するなど、日タイ文化交流の進展に資することを最終目的とする。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室長　原田　あゆみ

【主な成果】
本研究は、九州国立博物館が中心となり、日本各地の研究機関、タイ文化省芸術局、研究協力者と連携して調査研究を行っている。

(1)　国内の調査では、各地の博物館に関係資料に関する情報提供を依頼し、情報蒐集に努めている。
27 年 9 月 22 日～23 日に九州国立博物館および柳川・立花家史料館においてタイ関係資料の調査を日タイ合同で行った。

(2)　27 年 11 月 22 日～23 日に静岡大学、静岡市教育委員会の協力を得て、静岡・浅間神社において、山田長政資料の調査、研究会を行った。現地調査の実施により、浅間神社および静岡市文化財資料館の資料について、29 年の日タイ修好 130 周年記念特別展への出陳を検討した。

(3)　平戸におけるタイ関係資料の調査を 28 年 2 月 3 日に、松浦史料博物館、是心寺、最教寺霊宝館で行った。

(4)　本プロジェクトチームの調査により、タイにおいて日本刀は、その束や鞘を美しく装飾し上層位の持物として伝わっただけではなく、交易品としての日本刀が、タイ社会において深く受容され、権威の象徴としての「日本刀」が新たに創造されていたことが明らかになった。27 年 11 月 17 日、18 日にスミソニアン博物館において、タイ王室から海外に贈られたとされる日本刀の調査を行い、タイにおいて日本刀が受容され、新しい意義付けがなされていたことについて検討した。

(5)　28 年 1 月 18 日～19 日、バンコク国立博物館において、タイにおける日本美術に関する調査を行った。タイ側協力者と合同で調査について報告し、情報の共有化を図った。また、27 年度における調査研究の問題点や課題を洗い出し、28 年度の調査について対処体制を整えた。

(6)　タイにおける異文化の受容と変容－13 世紀から 18 世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）の調査研究成果を本研究に継続させることができた。

大谷大学貝葉写本の包裂と同じタイ更紗（バンコク国立博物館蔵）

【備考】
科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目
研究会等実施回数：2 回
国内調査実施回数：4 回（静岡、平戸、福岡）
海外調査実施回数：3 回（タイ、ベトナム、アメリカ）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究はタイ芸術局との信頼関係の下に進められ、情報公開や意見交換を行うなど相互補完的に研究成果を蓄積することができている。27年度は、タイ側の人事異動に伴う、人的・時間的制約の中で、静岡市や柳川市との協力を得て効率的に共同調査を行えた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度も、予定していた国内・海外調査をほぼ行うことができた。国内外の協力者および協力機関は本事業に対して協力的で、両者の信頼関係は良好に築かれているため、28年度にかけて順調に調査研究を進めることが可能である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4561-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)博物館の環境保存に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　高橋裕次

【主な成果】

26年度に引き続き、展示環境に関する調査研究の内、展示ケース内の湿度環境について特殊な要件を実現するための手法に関する研究と現存の照明器具(蛍光灯、ハロゲンランプ)及び次世代型照明器具(LED、OLED)の比較評価と、次世代型照明器具を効果的かつ安全に導入するための研究を中心に実施した。具体的な成果は下記のとおり。

(1)平成館考古展示室の改修に伴い、窒素封入方式による低酸素濃度維持機能をもつ展示ケースを新規に製作し、酸素濃度のモニタリング機能等を強化したことで、展示室開館時に十分な低酸素濃度環境を維持する状況を実現できた(27年10月)。

(2)平成館考古展示室の壁面ケースについて、新たに調湿機能を付加し、調湿剤交換等のメンテナンス性も向上したケースを実現した。従来よりも安定した温湿度環境を実現できた(27年10月)。

(3)法隆寺宝物館の改修に伴い、太子絵伝の展示ケースへ設置するLED照明器具の検証実験を実施し、輝度計測等による客観的な評価による照明器具の選択手法の確立を進めることができた(27年10月)。

(4)第34回日本展示学会研究大会東京大会にて「展示ケース内蔵型下部照明器具の開発事例と評価」として研究成果発表を実施した(27年6月21日)。

(5)文化財保存修復学会第37回大会にて「OLEDを用いた展示照明」として研究成果発表を実施した(27年6月27日)

(6)文化財保存修復学会第37回大会にて「歴史的建造物における展示環境改善の取り組み-風除室の効果の検証-」として研究成果発表を実施した(27年6月27日)

(7)2015東アジア文化遺産保存シンポジウムin奈良にて「博物館展示に用いるOLED照明器具の開発」として研究成果発表を実施した(27年8月27・28日)

(8)2015東アジア文化遺産保存シンポジウムin奈良にて「博物館における温湿度環境の評価方法とその活用」として研究成果発表を実施した(27年8月27・28日)

法隆寺宝物館における展示照明実験

【備考】
学会発表：5件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特に、博物館用照明器具に関しては次々と新規の製品が市場に出ている。また、国内的には蛍光灯からLED他への移行が今後急速に進むという状況から、博物館用照明器具に関する研究は急務であると考えている。そのような背景において、上記成果を比較的短期間で積み上げた点については高い評価を与えられるべきものと考えている。また、幾度の展示室改修を通して、展示環境の安全性を構築するための理論を十分に蓄積できたものと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究」に沿った調査研究を継続的に実施し、その成果を東京国立博物館における実際の環境の向上に結びつけることができた。さらに成果についても積極的に学会他で公開しており、社会的にも十分に貢献できたものと考える。こうした基盤的研究を軸として、本館他の大規模な改修計画をより理想的に実施できるように発展させたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4561-2

業務実績書

中期計画の項目	４ 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 被災博物館等の汚染ガスからみた資料と環境の安定化およびその評価手法の研究(科学研究費補助金　研究代表者：筑波大学　松井敏也)((5)-⑥)

【事業概要】研究全体を通して、被災資料の情報収集調査、施設の空気室調査、資料汚染ガス調査、汚染空気室の改質調査研究を実施する。被災資料の情報収集調査として、災害発生時の取り扱いに関して災害対策プログラムに関する資料収集などを国内外で実施する。また、研究成果を関連学会等で公表する。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長　和田浩

【主な成果】

(1)福島県の被災資料収蔵施設の現状について調査を実施し、直面する課題等について協議を実施した(27 年 6 月 25 日)。

(2)研究分担者による進捗状況の報告会を開催し現在直面する課題、今後の展開についての協議を行った(27 年 6 月 26 日)。

(3)日本包装学会において、梱包資材に関する研究発表を行い、会場にて各資材から放散するガス成分に関する研究を実施している研究者との情報交換も行い今後の研究展開に有益な情報を得た(27 年 7 月 2 日)。

(4)国際シンポジウム「2015 International Symposium on Conservation of East Asian Cultural Heritage in Nara」において研究チーム全体の成果発表を行った(27 年 8 月 28 日)。

(5)国立民族学博物館にて公開フォーラム「世界の博物館 2015」に参加し、園田直子教授、日高真吾准教授と、特に発展途上国における博物館の防災を含めた環境保存や取組みに関しての協議及び情報収集を行い、今後の研究展開に有益な情報を得た(27 年 11 月 3 日)。

(6)「人と防災未来センター」にて 1995 年に発生した阪神淡路大震災の記録及び記録の公開手法に関する調査を実施し今後の研究展開に有益な情報を得た(27 年 11 月 6 日)

(7)神戸大学震災文庫に保管されている阪神淡路大震災関連の文献の調査を実施し今後の研究展開に有益な情報を得た(27 年 11 月 13 日)。

(8)立命館大学歴史都市防災研究所にて京都市内における防災体制の確立に向けた取組みに関しての調査を実施し今後の研究展開に有益な情報を得た(27 年 11 月 19 日)。

(9)大阪大学石塚裕子特任助教と被災博物館を含む震災遺構の活用手法に関して協議を行い、今後の研究展開に有益な情報を得た (27 年 11 月 29 日)。

(10)ドレスデン美術館(ドイツ)において博物館のリスクマネジメントを担当する研究者と協議を行い、ドイツにおける博物館の防災、減災に関する最新の情報と研究動向を得ることができた(28 年 2 月 3 日)。

福島県の被災文化財一時保管施設における調査

【備考】

・科学研究費補助金事業の 5 年計画の 2 年目

・学会発表：「Development of deterioration prediction diagnosis using Acoustic Emission」Toshiya Matsui (No,2)、Yosuke Atomi 2 Authors(2015 International Symposium on Conservation of East Asian Cultural Heritage in Nara、pp.102-103、27.8.28、奈良春日野国際フォーラム甍) 他 1 件

・調査回数：9 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各施設への聞き取り調査によって「汚染ガス」を指標の一つとして捉えた上で、被災博物館等の施設及び被災資料の評価手法を確立しようという試みは世界的にも類を見ない切り口を持つものであることが分かった。また、被災前の対処として、地域全体での避難先共有化や日常的に遠隔地に収蔵庫を設置するなどの防災体制等、今後の国内における防災体制を考える上での重要な実例を収集することができ、順調といえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究」に沿った調査研究を継続的に実施し、特に国内外の施設調査によって得た知見を基に、博物館の防災、減災に関する研究を進め、現場レベルへ具体的に応用可能な環境管理手法を導き出す方向性を確立することができたと考える。また、現状では専門家に対する情報公開等は進んでいるが、一般向けの普及活動等がやや手薄になっている。28年度以降ではそうした取組みを強化したい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4562-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)修復文化財に関する資料収集及び調査研究((5)-⑥)		
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　大原　嘉豊

【主な成果】

(1)情報の収集と調査

・27 年度、文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、113 件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。

・京都国立博物館研究員により 11 回行った修理工房の巡回のほか、適宜、修理技術者とともに実施した調査を通じ、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。

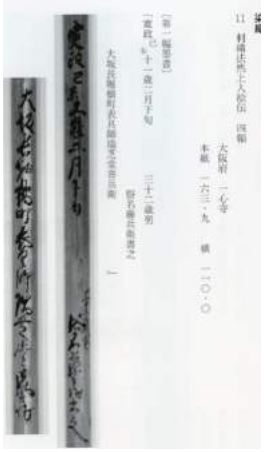
(2)情報の整理

・26 年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書（報告書)」に基づき、1,378 件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。

(3)情報の共有

・24 年度に修理が完成した文化財 93 件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第 13 号(28 年 2 月 29 日発行)に掲載した。

・修理時の調査により発見された銘文 12 件を「銘文集成」として同書に報告した。



「修理報告書」13 銘文集成(部分)

【備考】

(1)データ収集件数　113 件

　巡回回数　11 回

(2)データベースの追加更新件数　1,378 件

(3)報告書　1 冊（修理報告 93 件、銘文報告 12 件を含む）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所で行われる修復文化財情報の収集・整理については、データのデジタル化処理方法等、将来的な情報の応用に対する発展性を見据えて継続的に実施してきた事業であり、効率性・正確性を担保しつつ順調に実施されている。『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告集』第13号は、28年2月に刊行し、諸研究機関に送付を済ませている。28年度計画も27年度に準じて実施するが、得られた知見を元にした研究の活性化が望まれる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、法人化以前から継続してきた事業であり、中期計画でもその重要性に鑑みて継続性を重視している。文化財保存修理所に搬入される修復文化財の多寡は他律的条件であるため定量的評価になじまないものであるが、ほぼ安定した件数で推移しており、所期の目標は順調に達成している。今後の最大の改善点としては、一時期停頓していた『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』の刊行速度を速め、修復次年度に報告刊行という速やかな情報公開を実現することにある。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4562-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2）文化財の保存・修復ならびに復元模写に関する調査研究（(5)-⑥）

【事業概要】
修理を実施している文化財について、その保存修復に関する調査研究を修理事業者と協力して行い、また、復元模写事業を行うことで文化財の保全と公開に役立てる。あわせて、調査研究の過程で得ることのできた貴重な情報を蓄積し、学術的な利用のみならず、最適な修理方針の策定など、今後の保存修復事業にも活用する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　大原　嘉豊

【主な成果】
(1) 博物館が実施した社寺調査事業の一環として行われた知恩寺阿弥陀堂阿弥陀如来立像の総合的調査において、胎内から発見された納入品のうち、7 月に巻子の展開を修理業者（光影堂）に依頼した。それが「紙本金字阿弥陀経」と判明したが、虫喰が甚大なため展開の方法や今後の本格修復の在り方について種々の課題を検討した。
(2) 博物館と模写修理事業者（六法美術）とによって、当館館蔵扇面貼交屏風のうち「山水図」の復元模写を実施し、紙質調査と技法調査を行った。
(3) 国宝「釈迦金棺出現図」について、27 年 12 月に博物館と模写修理事業者（六法美術）に京都工芸繊維大学佐々木良子当館調査員を加えて、蛍光Ｘ線分析装置と分光分析装置による顔料調査が行われた。

修理事業者による復元模写

【備考】
・調査項目　3 項目
（知恩寺阿弥陀堂阿弥陀如来立像胎内納入品…虫損紙本文化財の修復方針の在り方、扇面貼交屏風…紙質・技法、国宝「釈迦金棺出現図」…顔料）
・外部資金の導入
知恩寺阿弥陀堂阿弥陀如来立像胎内納入品…京都大学大学院人間・環境学研究科協力講座研究経費、「山水図」復元模写…清風会研究支援経費、釈迦金棺出現図…メトロポリタン東洋美術研究センター助成金（大原嘉豊研究代表）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度事業の最大の特色は、屏風に貼り込まれた扇面画をもとの扇面に再現するという理念をもとに復元模写事業を行うことで技法の問題に取り組んだことにあり、独創性について自負がある。これに限らず、将来的に館蔵品以外の文化財修理に関しても応用することのできる発展性を意識した研究を蓄積している。また、外部資金を導入して研究の活性化を図っているが、特に館蔵以外の寄託品を含めた文化財についてはこの種の措置の必要性が高く、今後も継続を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理事業者を含めて綿密な調査、検討を重ね、文化財の保存と公開のため、参考となる情報を蓄積するなど、順調に成果を上げている。積極性という点では27年度からは顕著な改善を図っており、復元模写という新規事業は、作品観察の視点を広げることから若手研究員に主体的参加を求めており、かつ一般の観覧にも資する所が大きい点から、今後も定期的に行うべく28年度以降の計画に反映させるようにしている。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4563-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究（(5)-⑥）

【事業概要】館内施設（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的とする。主に次の 3 点の調査を継続的に実施した。蓄積されたデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を計った。
(1)　温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査
(2)　展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察）
(3)　文化財害虫トラップの設置及び回収

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】
(1)　展示室・展示ケース各所に無線機能付き温湿度センサーを設置した。24 時間リアルタイムモニタリングによる温湿度データの蓄積を行い、展覧会ごとの報告書へ整理した。また、収蔵庫については、温湿度データロガーやデジタル温湿度計を用いて、定期的なモニタリングと温湿度データ回収を実施した。これらの調査から得たデータを分析し、展示や保管時の文化財環境の保持や改善につなげている。
(2)　正倉院展の終了後、展示ケース内から塵埃を回収し電子顕微鏡による観察を行った。観察結果を基に、単位面積当たりの塵埃量を測定し気密性に関する調査を行っている。塵埃の混入量が多いと判断されるケースについては、気密性向上のためのメンテナンスを実施した。
(3)　展示室や収蔵庫、文化財保存修理所等の館内の各施設に、文化財虫害調査用トラップを設置した。トラップは 150 箇所に設置し、2 ヵ月に 1 回の頻度で交換を行った。回収したトラップは外部業者に調査委託を行い、捕獲された文化財害虫の種類や頭数の把握を行った。この情報をデータとして蓄積することで、害虫の発生が予見される箇所等の忌避対策や殺虫処理を実施している。また、害虫の侵入対策や清掃についても実施に努めた。
学芸部内の保存修理指導室員及び総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を月に 1 回の頻度で開催した。以上に記載した調査内容と結果を基礎とし、保存環境に関する課題点や改良案について議論を重ねた。

無線機能付き温湿度センサーの設置状況

【備考】
(1)展示室内温湿度調査：135 箇所
(2)展示ケース内粉塵調査：25 箇所
(3)文化財虫害生息状況調査：150 箇所
・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：11 回開催

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26年度に引き続き、調査の実施やデータの蓄積を実施した。また、調査で得られた結果を基礎に、ワーキンググループでの情報共有や議論を通し、保存環境の保持と改善に取り組むことができた。今後、取得データの精度向上も視野に入れながら、保存環境の保持や改善が円滑な体制を整えたいと考えている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続的なモニタリングや調査を実施し、データの蓄積を着実に行っている。28年度について、取得データの精度向上も視野に入れながら着実な調査を実施したい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4563-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)収蔵品・寄託品等の文化財修理の観点からの調査研究（(5)－⑥）

【事業概要】本事業では、以下の 3 点の内容について実施した。

(1) 修理方法を記録し将来の文化財修理に反映するため、館蔵品や寄託品の保存状態の調査を実施する。その内容を保存カルテとして記録した。

(2) 館蔵品や寄託品の修理を実施するにあたり、事前に修理文化財の保存状態を詳細に調査した。また、調査結果を基に修理調書を作成した。

(3) 修理中の文化財から得られた材質や銘文等の情報について、調査・分析を実施した。その結果を当館の研究紀要への掲載などを通しデータの蓄積を計った。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】

(1) 館蔵品や寄託品の貸与の際、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察し、そこで得られた情報を基に保存カルテを作成した。また必要に応じて光学調査を実施し、作品データの蓄積に努めた。

(2) 館蔵品や寄託品の修理を行う場合、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテ記載にされた情報と調査結果を参考に修理調書を作成し、館内鑑査の後に修理方針を策定した。

(3) 修理中の文化財から得られた木片は、京都大学生存圏研究所との協定に基づき樹種同定を実施した。この調査は、共同研究の一環としても位置づけられている。また、修理中に発見された銘文については、当館研究員が翻刻を行っている。これらの調査成果は、当館の研究紀要等に掲載し広く公表を行う予定である。
保存カルテや修理調書を基に修理した文化財は、修理後の 28 年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表する予定である。

採取した材質調査試料片

【備考】

(1) 保存カルテ作成件数：総計 100 件
（内訳　絵画：40 件、書跡：16 件、彫刻：14 件、工芸：14 件、考古：16 件）

(2) 修理調書作成件数：総計 12 件
（内訳　絵画：5 件、書跡：2 件、彫刻：2 件、工芸：1 件、考古：2 件）

(3) 材質調査及び銘文調査件数：11 件
（内訳　材質調査実施件数：10 件、銘文調査実施件数：1 件）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財修理所の修理技術者と密な連携を取り、修理に伴う文化財の調査を行うことができた。保存カルテの作成は修理時の修理調書へと反映され、修理方針の策定に掛かる基礎情報として用いている。また、材質や銘文の調査についても実施し、掲載に向けた準備を実施している。今後、これらの調査成果を含む修理成果報告書の作成を計画しており、データの取得と蓄積をより正確に実施したいと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館は文化財修理所を併設していることから、修理事業は重要な位置づけとなっている。本事業は、修理に関わる基礎データの収集と公表を兼ねることから、今後の修理計画の指針となる。28年度についても、継続した調査を実施したいと考えている。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4563-3

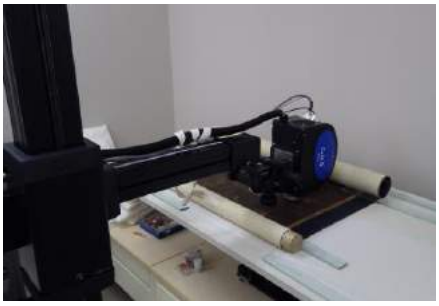
業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3)収蔵品・寄託品等の保存科学の観点からの調査研究((5)-⑥)

【事業概要】
本事業では、以下の２点の内容について実施した。
(1)　館蔵品や寄託品について、修理前や修理中などに光学調査（Ｘ線透過撮影・蛍光Ｘ線分析）を実施し、修理方針に反映させた。
(2)　文化財修理所での修理中の文化財について、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、その情報を修理へ反映した。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長　鳥越俊行

【主な成果】
(1)　館蔵品や寄託品の修理等の際に、Ｘ線透過撮影を実施し内部構造の把握を行った。この調査は、彫刻作品や漆工品などの文化財について実施している。また、蛍光Ｘ線分析装置を用いた材質分析として、彫刻作品の材質や絵画の顔料を分析した。これらの光学調査から、修理方針の策定へ情報を反映させると共にデータの蓄積も同時に行うことが可能となった。
(2)　館蔵品や寄託品の修理前や修理中において、当館の研究員と工房の技術者が共同でＸ線透過撮影及び蛍光Ｘ線分析などの光学調査を行い、これらの調査で得られた結果を修理へ反映させることができた。



蛍光Ｘ線分析の様子

【備考】
調査件数
（Ｘ線透過撮影調査回数：4 件、蛍光Ｘ線分析実施回数：3 件）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品や寄託品の修理等の際に、内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を取得するため光学調査を実施した。修理状況により年度ごとに増減はあるが、着実に調査を行うことができ、修理調書への反映から、修理方針決定のための重要な情報源となっている。28年度についても継続して調査を行いたいと考えている。また、データの蓄積についても継続して実施していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修理方針の策定や修理に伴い着実な調査を実施することができた。28年度も継続して実施し、着実なデータ収集に努めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-1

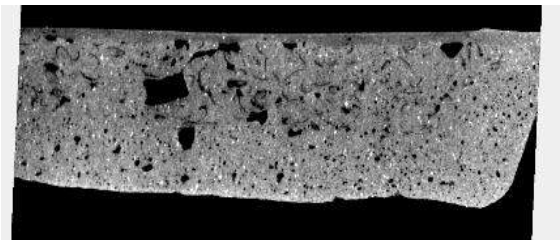
業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）文化財の材質・構造等に関する共同研究（(5)－⑥）

【事業概要】
文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。当館において、古代の金属製品鋳造技術の解明のため鋳造鋳型のＣＴ調査を中心とした総合的な実験を行う。弥生時代の土製鋳型についてＣＴ撮影を行い、粘土内部の空隙の大きさや体積について検証を行う。またこの土製鋳型のＣＴデータを参考に鋳型を作製、鋳造実験を行い構造技法の解析を行う。本研究の報告は学会などで公表する。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長　今津節生

【主な成果】
(1)　春日市須玖タカウタ第５次遺跡出土の土製鋳型片及び筑前町東小田峰遺跡出土鋳型片についてＣＴ調査を行った。(27 年 5 月 1 日)
(2)　ＣＴデータを基に鋳型の中に散在する空間を可視化したことで、真土に添加した有機物が焼結してできた空間の形状と分布を認識し、これが注湯時のガス抜きに寄与していることがわかった。さらにこの空間について、欠陥・介在物解析モジュールを用いて鋳型の中に散在する閉鎖空間の体積を計測し、鋳型毎に空間の体積ヒストグラムを比較することによって、土製鋳型のガス抜き構造の違いを明瞭にすることができた。
また、真土に添加された有機物の種類を検証するため鋳型の再現実験を行い、その資料についてもＣＴ調査を行った。その結果、空間の中で微細かつ円形または球形をしているものについては、添加物の種類に関わらず粘土に含まれること、モミなど特定の物質を添加すると、体積ヒストグラムにおいて特徴的なピークとして現れることがわかった。
(3)　この成果について、日本文化財科学会やＣＴシンポジウムなどで研究発表を行った。


タカウタ第５次遺跡出土の土製鋳型片のＣＴ像

【備考】
調査・研究　件数：120 件、回数：600 回
学会研究会等発表件数：14 件（日本文化財科学会 10 件、文化財保存修復学会 4 件）
今津節生ら「X 線 CT を用いた鋳型の構造調査」日本文化財科学会第 32 回大会（27 年 7 月 11、12 日開催）
シンポジウム件数：1 件（「Ｘ線ＣＴを用いた文化財の研究と活用」九州国立博物館 10 周年記念シンポジウム（27 年 12 月 19 日開催））

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	Ｘ線ＣＴ・３Ｄデジタイザは、短時間でデータを取得できるので、時間的投資効果が大きい。また、Ｘ線ＣＴでは文化財内部の構造を約 0.2 ㎜、３Ｄデジタイザでは 0.02 ㎜の高精度で記録することができる。本調査によって、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形の文化財への応用性を発展させることができた。当館では年間 600 回の調査を行い、数多くの成果を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら、順調に調査を遂行することができた。引き続き、外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-2

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2）博物館における文化財保存修復に関する研究（(5)－⑥）		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装潢技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員　志賀智史

【主な成果】

(1) 27 年 8 月 17 日（月）～21 日（金）の 5 日間実施した。
(2) 九州産業大学 2 名、佐賀大学 1 名、別府大学 1 名、広島市立大学 2 名、吉備国際大学 1 名の計 5 大学 7 名が参加した。
(3) 当館文化財保存修復施設を使用している一般社団法人国宝修理装潢師連盟（国の認定する選定保存技術保存団体）の協力が得られたことにより、少人数で実践的な研修を実施することができた。
(4) 本研修の実施により、修理技術者の育成に寄与すると共に、参加学生の文化財保護への理解を深めることができた。

研修風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	修復技術者の育成は、公共の財産である文化財を後世に伝えていくために不可欠である。また、育成は継続的に行う必要があり、毎年実践的な研修を少人数で継続している本研修は、適時性や継続性が高い。大学で保存修復の基礎教育を受けた学生を対象に実践的な研修の場を提供できる機関は、極めて少ない。また、研修日を大学の夏季休暇中に設定しており、学生が参加しやすい状況も作っている。加えて当館には、装潢文化財の修理技術を持つ技術者が常駐しており、効率性、正確性の高い研修が実施できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	17年度より少数で実践的な研修を継続して行っている。参加者及び参加者の所属する大学からも好評を得ている。そのため、中期計画における「有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究」を行う目標を達成している。28年度以降も引き続き同様の研修を実施する予定である。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-3

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）博物館危機管理としての市民協同型ＩＰＭシステム構築に向けての基礎研究（(5)－⑥）

【事業概要】
本研究の目的は、我が国の博物館等におけるＩＰＭ（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本研究では、地元ＮＰＯ法人や市民ボランティアとの共働による研修会の開催及び大学・専門研究機関・地域文化施設の連携によるＩＰＭ研修プログラム確立を通し、ＩＰＭの社会的理解度を深めつつ、博物館等におけるＩＰＭを軸にした自立的地域共働システムづくりを目指すものである。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　本田光子

【主な成果】
(1) 継続的に行ってきたミュージアムＩＰＭ研修（基礎編）の募集に関して、これまで受講していない地域の博物館学芸員を積極的に受け入れることで、さらにＩＰＭの普及に努めた。
・ 27年度新たに受け入れた地域：北海道、群馬県、富山県、香川県
・ 27年度新たに受け入れた博物館・美術館・資料館・図書館・文書館等：10館

(2) 参加申込受付開始日に定員 20 人のところ 80 人以上の応募があり、前年同様、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。
地域や館種を超えた新たな受講生が加わり、ミュージアムＩＰＭ研修（基礎編）の内容をより充実したものに検討する材料を得られた。
基礎編に続く、技術編、実践編においても、新しい館の参加があり、基礎編だけでなくさらに次の段階を望む受講生が多いことがわかった。

(3) 市民ボランティア、地元ＮＰＯ法人が研修の補佐をした。受講生との交流で普段取り組んでいるＩＰＭに関して、新たな視点を持つことができたので、今後の活動に生かしていきたい。

ミュージアムＩＰＭ研修（基礎編）における温湿度計取扱い実習

【備考】
ミュージアムＩＰＭ研修開催回数・・・・3回
ミュージアムＩＰＭ研修参加者数・・・・58人
・ミュージアムＩＰＭ研修（基礎編）：　29人
・ミュージアムＩＰＭ研修（技術編）：　16人
・ミュージアムＩＰＭ研修（実践編）：　13人
学会研究会等発表：2件
「開口部における文化財害虫の発見とその対応」文化財保存修復学会（27 年 6 月 27 日）
「事例報告１　九州国立博物館におけるＩＰＭ研修について」27 年度公開承認施設担当者会議（27 年 11 月 5 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでミュージアムＩＰＭ研修の基礎編、技術編、実践編について内容を改良し、続けて行ってきた。年を重ねるごとに受講希望者が増え、全国的にＩＰＭに取り組む館が増えてきたことが伺える。研修を積み重ねて開催してきたが、その成果が少しずつ現れていると考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度が最終年度であるが、ＩＰＭ研修としての研修の一つのあり方を示すことができた。その結果、中期計画における「有形文化財の保存環境・保存修復に関する調査・研究」という計画を達成することができた。今後も引き続きＩＰＭの普及のため研修を継続していく予定であるが、地域に根ざしたＩＰＭを展開するべく、この研修が一つのきっかけとなるよう内容を精査していきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-4

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-⑥）

【事業概要】
本研究では、弥生時代～古墳時代の墳墓の埋葬施設（室、槨、棺）への赤色顔料の塗布について、その種類や塗布範囲の調査を行い、時期差や地域差、階層差の有無を検討することを目的とする。これまで墳墓から出土する赤色顔料の使用方法については、塗布や散布、敷かれたなどと言われることがあるが、使用対象が木棺や遺骸といった有機物であることが多く、実際にはその使用方法は明確でない。ここでは、石棺や甕棺などの腐朽しない棺を主な調査対象とし、これらの点について検討を行うものである。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員　志賀智史

【主な成果】
(1) 福井県坂井市に所在する古墳時代前期中頃の牛ケ島石棺の調査を行い、石棺内面に朱が塗布されていた可能性が高まった。
(2) 発掘中の福岡県久留米市高三潴遺跡と福岡県みやこ町三ツ塚古墳で石棺の調査を行い、九州での赤色顔料使用状況を把握できた。
(3) 26 年度に引き続き、赤色顔料の塗布・付着が明瞭な木棺の痕跡が残る城の山古墳（新潟県胎内市）の報告書作成のため、赤色顔料使用の様相が不明な東日本の古墳について調査を行い、その位置付けを行った。
(4) 調査遺跡数は、山形 3 件、福井 1 件、愛知 2 件、福岡 2 件、鹿児島 1 件の合計 9 件となった。
(5) 個人が所蔵する赤色顔料とその関連資料について、整理に着手した。

石棺の調査風景

【備考】
学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 3 年目
・ポスター発表
「ベンガラ粒子の形態からみた北関東の前期古墳出土の丹塗土器について」
日本文化財科学会第 32 回大会（27 年 7 月 11 日～12 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	出土赤色顔料を考古学的に検討する研究はほとんど行われておらず、責任者が毎年継続して調査を行い、少しずつその様相が明らかになりつつあり、適時性、独創性、継続性が極めて高い研究である。また、毎年調査を継続している関係で、短時間で正確に効率良く調査を行うことができ、効率性や正確性が高い調査を行うことができている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	既存資料の調査だけでなく、発掘現場での新出資料の調査にも恵まれた。中期計画における「保存環境・保存修復における調査・研究」を達成できたと考える。28年度は最終年度に当たるため、これまでの調査成果を元に本研究を纏める予定である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4564-5

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)酸化促進剤の添加による文化財建造物用油性塗料の塗膜形成研究（学術研究助成基金助成金）((5)-⑥)

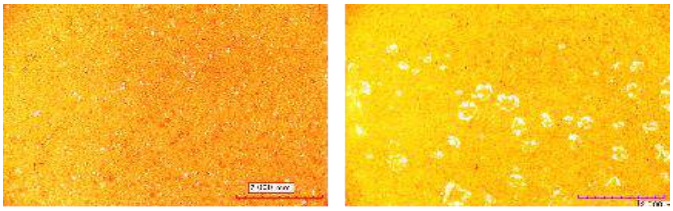
【事業概要】近年の研究結果から、文化財建造物には漆や膠以外に油性塗料が用いられていたことがわかっている。一方で、油性塗料の性質に関する研究は漆や膠と比べ十分であるとはいえない。そこで、より実用性の高い油性塗料の開発を目的とした調査研究を開始した。具体的には、油性塗料の塗膜の形成実験と劣化に関する実験を行った。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室アソシエイトフェロー 赤田昌倫

【主な成果】

(1) 実験内容

油性塗料（荏胡麻油）の塗膜の形成について、酸化促進剤の添加量の変化による塗膜の乾燥過程を観察した。(塗膜形成速度と塗膜表面の亀裂) また、塗膜は紫外線によって大きなダメージがあることがわかっている。そこで、油性塗料が固化した塗膜の紫外線による劣化 (膜厚の減少や彩色の退色、表面成分の変化、劣化生成物発生の有無) について検証した。実験試料は酸化促進剤の添加量を変化させたもの、色料として天然顔料を混ぜ合わせたものを作製した。



鉛丹添加試料の表面
（左：実験前　右：紫外線 120 時間照射後）

(2) 実験結果

(2) -1 酸化促進剤の添加量の変化による油性塗料の乾燥過程の観察

・酸化促進剤なし：酸化促進剤を添加しなかった塗料は乾燥に非常に長い時間がかかり、表面は塗膜が形成されても、内部は乾燥していないことがわかった。

・酸化促進剤あり：酸化促進剤を添加した塗料は、添加量に応じて塗膜の形成速度が速いことがわかった。一方で酸化促進剤が多くなると、乾燥が早すぎるため塗膜の収縮が発生し塗膜全体に細かなクラックが発生することがわかった。

(2) -2 強制劣化試験による塗膜の変化

・油性塗料が固化した塗膜に紫外線を 120 時間照射した結果、膜厚の減少、彩色の退色、表面成分のステアリン酸鉛の発生が確認された。これによって油性塗料が固化した塗膜の特性を理解することができた。

・劣化試験後の実験試料の中で色料として鉛丹を添加した試料の表面から白色物質が発生した。白色物質について調査した結果、この物質は炭酸鉛であること、また湿度 60%以上の環境下で発生することがわかった。白色物質の発生は実際に油性塗料によって施工が行われた神社等でも発生しており、発生メカニズムがわかったことは今後の対策を立てる上で大きな成果であるといえる。

(3) 実験結果は学会等で発表を行ったほか、実際の寺社仏閣への施工に関しても意見提供を行った。

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 2 年計画の 2 年目
調査・研究の回数：5 回
学会研究会等発表総数：1 件
27 年 8 月 27～28 日「マイクロＸ線ＣＴスキャナを用いた彩色文化財の構造調査」
2015 International Symposium on Conservation of East Asian Cultural Heritage in Nara

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実験サンプルを作製し乾燥及び強制劣化試験を行った。27年度は経過観察中である。近年、油性塗料で施工されたことを確認できた寺社仏閣色の数は増加しており、研究に関する適時性と発展性は高い。27年度は塗膜の形成実験や劣化による様々な変化を検証したことによって、油性塗料、油性塗膜の特徴に関する知見を得ることができた。27年度の結果は学会発表等を行い、成果を公表した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	油性塗料の保存と活用の向上に関する調査・研究を行い、塗料の性質と特徴を検証することができた。特により長持ちする塗装を考えるために劣化による影響についての成果が得られたことで、実際の施工に役立つ研究を行うことができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム（文化庁文化芸術振興費補助金）((5)-⑥)

【事業概要】
未曾有の大災害や地域の文化財の盗難が懸念されている昨今、館同士のみならず地域と一体となって対策を講じ危機を乗り越える強さを備えたミュージアム機能の強化が求められている。九州山口ミュージアム連携事業実行委員会（事務局：長崎県文化振興課）・各県立拠点館・地域市民と連携協力し、各地のミュージアムが地域の文化・文化財をまもる拠点となるように、関係職員と地域市民が共に防災危機管理能力を高めることのできる研修プログラムを策定する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員　本田光子

【主な成果】
（1）東北・関東・東海・関西地域において被災地・防災先進地の調査情報収集を計５回行い、九州山口各県から延べ100名が参加して、文化財の伝統的な危機管理方法や、先進的取り組み事例を学び、参加者で課題を共有した。
・関東：伝統的な危機管理法及び最新の防災取り組みや被災文化財修復を学んだ。（27年７月６日～8日：20名）
・関西（和歌山）：和歌山県の防災取り組みと市民による自主的な防災取り組みを学んだ。（27年８月17日～19日：17名）
・東海：東海地震に備えた防災対策及び避難訓練と文化財の悉皆調査について調査した。（27年10月26日～28日：17名）
・関西（神戸・大阪・奈良）：阪神淡路大震災と文化財の防災危機管理について調査した。（27年12月９日～12日：21名）
・東北：東日本大震災の被災施設と文化財の現況及び市民参加の保全活動を学んだ。（28年１月６日～8日：25名）
（2）全体合同会議（協力者会議・ワーキング会議・実行委員の合同会議）を２回開催して２件の事例発表とともに、会議形式で文化財の危機管理に関して議論を行い、地域防災計画への文化財の記載や、動産文化財の悉皆調査の重要性について課題を共有した。（27年６月15日：62名、28年１月25日：52名）
（3）繰り返しの実施と工夫を要する市民向けワークショップ関係の研修プログラムと、健康被害対策についての講義を計２回先行的に試行し、参加者による討論によって改善点を抽出することができた（27年11月29日～30日：16名、28年１月25日：39名、２月29日：27名、３月13日～14日：13名）。
（4）地域防災計画策定会議を２回実施、地域防災計画への文化財事項の記載充実のための課題を共有した（27年８月20日：９名（長崎県）、27年10月14日：７名（東京都））。
（5）調査情報収集レポート及び全体会議や研修試行会の記録を報告書として刊行した。

研修試行会の様子

【備考】
・調査情報収集：５回（参加者計100名）
・「みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム」事業全体合同会議：２回（出席者計114名）、事例発表件数：２件
・研修試行会：４回（参加者計95名）
・地域防災計画調査策定会議：２回（参加者計16名）
・みんなでまもる文化財みんなをまもるミュージアム事業報告書：１冊800部（28年３月22日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	頻発する大規模災害を受け文化財の防災への関心が高まる中、危機管理の手法とその共有が喫緊の課題となっており、本研究には適時性があるといえる。また、九州・山口8県との県域を越えた連携協力及び市民の参加を得るという取り組みは他に例がなく、独創的である。 さらに当館での取り組みを通して、九州山口地域の県域・館種を超えたネットワーク構築が強力に進んでおり、発展性もある。本研究に対する関心の高さは、九州博物館協議会大会でも取り上げられたこと等から明らかになった。今後は、研修プログラムの見直しと事業終了後の継続実施を目指して、研究を進めていきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	26年度より取り組んでいる本研究は、危機管理や防災といったその内容の適時性とともに、県域を越えた連携協力及び市民の参加型といった取り組み方法の独創性から、これまでにない成果や活用性が得られた。28年度も引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果が活用されるように進展させたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-7

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)文化財に使用された彩色材料に関する面的調査法の検討（学術研究助成基金助成金）((5)－⑥)

【事業概要】
近年、文化財の科学調査が一般的に行われるようになってきた。しかし文化財は脆弱な材質、構造のものが多く、文化財の科学調査は調査のための作品移動の機会をなるべく少なくし、短時間に非破壊で行うことが求められる。これまでは制限がある中で部分的な分析が主流であったが、文化財を総合的に理解するには面的な広がりで捉える調査が必要である。そこで本研究では文化財の科学調査に面的な手法を導入した有効な調査法を検討する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員　秋山純子

【主な成果】
(1)「絹本著色羅漢図」（九博所蔵）の赤外線撮影を行い、分光スペクトル分析及び蛍光Ｘ線分析も同時に実施した。（27 年 5 月 14 日）
裏彩色（重ねて彩色）がある場合、赤外線画像ではどのように写るのか検証することにより、赤外線画像による彩色材料の把握に役立てるための情報を得ることができた。
(2)「阿弥陀三尊像」（九博所蔵・南宋時代）の赤外線撮影を行い、分光スペクトル分析も同時に実施した。（27 年 6 月 25 日）
彩色はあまり残っていないが中国絵画に対しても調査を行うことができた。
(3)「博物図譜」（香川ミュージアム保管）画帖 13 帖の調査を行った。（27 年 9 月 2 日～3 日）
この調査により、今後「博物図譜」の調査の方向性を検討することができた。
(4)「博物図譜」（香川ミュージアム保管）画帖 13 帖の赤外線撮影及び科学分析を行った。（28 年 2 月 5 日）
(5) 中国：内蒙古博物院にて壁画の彩色材料の科学分析を行った。（27 年 4 月 19 日～26 日）その結果、壁画に使用されている彩色材料を推測でき、赤外線画像と照らし合わせることで、今後の彩色調査に有効な情報を得ることができた。

「絹本著色羅漢図」の赤外線画像

【備考】
学術研究助成基金助成金事業の 4 年計画の 1 年目
調査回数 5 回（国内 4 回、国外 1 回）
学会発表等
「赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究３」日本文化財科学会（27 年 7 月 12 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	いわゆる美術工芸品の彩色材料だけでなく、壁画や歴史資料といった文化財に対し、彩色材料の検討を行うことができた。今後は顔料だけでなく、染料や合成顔料といった彩色材料に対して、赤外線撮影と科学調査の組み合わせを検討していきたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	これまでの美術工芸品の調査だけにとどまらず、広く文化財に使用されている彩色材料の検討をすることができた。引き続き、28年度以降は無機顔料だけでなく、染料や合成顔料といった彩色材料を視野に入れた調査を進めていきたい。彩色材料を広く調査することにより、この調査法の有効性が広がることにつながると思われる。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4564-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	8)彩色塗装のある歴史的木造文化財建造物の加湿温風処理による虫害処理方法の検討に係る調査研究（科学研究費補助金）((5)－⑥)

【事業概要】
歴史的木造文化財建造物の劣化要因として、虫害などの生物劣化は大きなウェイトを占める。従来、文化財建造物が木材害虫であるシバンムシなどによって顕著な被害を受けた場合には、修理にあわせて建物全体のガス燻蒸処理が実施されてきた。ガス燻蒸は、比較的短時間で部材内部に生息する虫まで駆除できるという点で、現時点で唯一の有効な方法である反面、燻蒸剤は毒ガスであるため、作業者や観光客の安全確保のために厳重な対策が必要となる。また、施工後放出される有毒ガスの周辺環境に対する影響も懸念される。本研究では、人体や環境に対して安全で、かつ有効な殺虫処理として、既に欧州などで小型の文化財について実績のある調湿温風による殺虫をとりあげ、これを漆などの彩色を施した日本の大型建造物に適用する手法を確立する。

【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長　木川りか

【主な成果】
(1)プロトタイプチャンバー（約 30㎥）の試作と試験：研究分担者の京都大学農学研究科・藤井義久教授の研究室にて、研究協力者の北原博幸氏の協力のもと、気密・断熱性を確保し、調湿温風を発生・循環できるチャンバー及び、その制御プログラムを試作し、ある程度の大空間で正確に殺虫条件として望まれる温度湿度制御が可能かどうか試験を実施した。その結果、昇温、昇湿についてはほぼプログラム通りの制御が実現された。降温については、外気をうまく取り入れる方法によって、温度を下げる工夫が必要となり、空気取り入れ口を設置した結果、状況が改善された。殺虫に必要な温度（60℃）、かつ木材が乾燥しないような湿度（約 60％RH）については問題なく制御できるプロトタイプのチャンバーとなった。

試作されたチャンバー内の測定用検体の様子

(2)彩色層を毀損しないための安全処理条件の明確化：調湿温風処理による彩色層・木部における含水率とひずみ分布を測定し、彩色層を毀損しないための安全処理条件を明確化する。温風処理中の含水率変化を抑制することで、彩色層の毀損は原理的に免れる。試作したプロトタイプチャンバーの中で、調湿条件とひずみとの関係を明らかにするために測定を実施し、継続している。（京都大学にて測定）

(3)上記原理とプログラムを使用した小規模処理装置の試作と山笠基台部の処理：上記で試作した制御プログラムと方法を用いて、彩色がない山笠基台部の竹、縄部の調湿温風処理を目的に小規模装置を試作し、処理対象となる無地の木材、縄などを用いて影響試験を実施した。また、実地に装置が機能することが確かめられたので、山笠基台部の調湿温風による殺虫処理を実施した。（27 年 12 月）

調湿温風による山笠基部の処理

(4)実地（大規模）試験を念頭においた設計と準備：本研究では、建物処理でもエネルギー効率を向上させ電力駆動としたシステムとするため、現在装置の仕様と断熱方法を検討している。

【備考】　科学研究費補助金事業の 3 年計画の 1 年目
研究打ち合わせ 5 回（京都大学（27 年 6 月 9 日）、東京文化財研究所（27 年 7 月 29 日）、日光（27 年 8 月 28～29 日）、京都大学（27 年 11 月 20 日）、京都大学（28 年 1 月 20 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度に計画していたプロトタイプ装置の試作、諸条件のなかでの木材のひずみの測定が実施され、また試作したシステムやプログラムが実用的に働くことを確認できたため、進捗状況は順調である。28年度はさらに詳細な測定と屋外での大きな規模の処理をめざした検討を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	プロトタイプのシステムが無事稼動したのを受け、28年度以降は建造物規模の実地での処理が可能なシステムの試作をめざし、エネルギー効率のよい電力駆動のシステム構成、断熱性・気密性についても設計の専門家とともに検討を行い、文化財塗膜に影響の少ない処理条件を実現できる装置の試作に臨みたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4571-1

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)博物館環境デザインに関する調査研究((5)-⑦)

【事業概要】東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長　木下史青

【主な成果】

(1) 27年10月14日にリニューアルオープンの平成館 考古展示室のため、本館・平成館の＜館内案内・誘導サイン＞及び展示室内の＜展示解説サイン＞について、多国語（4言語 ：日英中韓、2言語：日英）での整備を行った。

(2) 平成館改修工事にともなって拡張された、本館・平成館連絡通路の明るさ感向上のため、拡張部の天井部段差に＜ＬＥＤ照明による間接照明＞をデザインし、適切な照明器具の設置工事を行った。 ＜ポスター掲示板＞や新設の＜平成館誘導サイン＞の視認性が改善し、また空間の快適性が向上した。

(3) 考古展示室の「江田船山古墳 銀象嵌銘大刀」の展示スペースに、＜スペースプレーヤー（ライティングダクト設置用映像投影機器）＞を設置し、大刀の象嵌意匠（花・魚・馬・鳥）を壁面へ投影することにより、展示作品鑑賞への誘導効果について検証した。

本館→平成館への誘導サイン

本館平成館連絡通路の天井間接照明

考古展示室スペースプレーヤー設置

【備考】

他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例・環境デザインを調査し、特に27年度においては平成館・考古展示室リニューアルオープンの参考とした。

調査先／平等院ミュージアム鳳翔館（京都・宇治）、那覇市立壺屋焼物博物館、松戸市立博物館、山形：山形美術館、山形県立博物館、本間美術館、東京：森美術館(リニューアル)、ソウル：韓国国立中央博物館、韓国国立現代美術館、サムソン美術館リウム、韓国国立民俗博物館、公州：韓国国立公州博物館、等

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は平成館 考古展示室のリニューアルにおいて、各種サイン、照明等において調査研究の成果を反映させることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「文化財を活用した効果的な展示や、歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動等に関する調査・研究」に沿った調査研究を実施し、展示等に反映させることができた。引き続き次期中期計画においては、国際化対応への推進が期待される。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4571-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究((5)―⑦)

【事業概要】総合文化展及び特別展に関連した様々な教育普及事業の実施並びに、参加者に対するアンケート等を通して、博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を行った。また、学校の教員を対象とした研修のなかで、教育普及プログラムについての研究会を行った。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　小林　牧

【主な成果】

(1)本館地下、19 室及び東洋館 2 室、6 室「みどりのライオン」におけるアクティビティやワークショップ、並びスクールプログラムの運営を通して、さまざまな来館者のニーズにそったプログラムの開発とより効果的な運営に関する研究を行い、ファミリーワークショップや大人向けのワークショップ、スクールプログラムなど、多様なユーザーに向けたプログラムを展開することができた。また、それらの運営とアンケート調査によって、さらに知見と考察が深まった。

(2)教育的展示「親と子のギャラリー　ミイラと古代エジプトの神々」において、凸版印刷株式会社との連携により、ＩＴ技術を使ったワークシートの研究と制作を行った。

(3)スマートフォンによる公式ガイドアプリ「トーハクなび」におけるユーザーログを集積・解析し、外国人を含むより広いターゲットに向けた情報のあり方、発信の仕方、さらにそのための的確なシステムのあり方について、調査・研究を行った。これらの調査と、通常の学校向けプログラムの実践を通して得た知見をもとに、学校団体向けのアプリの開発を行った。

(4)触れる展示、ハンズオン企画の調査・研究を行い、考古展示室リニューアルに伴ってハンズオン展示を開始した。

(5)全国高等学校美術工芸教育研究会の教員を対象とした研修において、博物館における鑑賞教育のあり方について意見交換を行った。

(6)小･中・高等学校の教員を対象とした研修において、博物館における教育プログラムを立案する研究会を実施し、討議のなかで意見と情報の交換を行った。

(7)ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行った。

埴輪のハンズオン模型

【備考】

発表：1 回　「東京国立博物館におけるボランティア制度の現状と課題」ボランティア室長　鈴木みどり
27 年 7 月 5 日　文化庁主催「第 9 回　企画・展示セミナー」

調査：各種教育事業における参加者調査のほか、教員研修会　アンケート調査　3 回、トーハクなび　ログ解析　27 年 10 月～3 月

成果物：考古展示室ハンズオン展示（27 年 10 月、28 年 3 月に設置）、トーハクなび学校版アプリ（28 年 3 月納品、28 年 6 月運用開始予定）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	レクチャーから体験型プログラムまで、幅広い教育事業の実践や、ボランティア組織の運営を通じて、博物館教育についての研究を行うことができた。その結果、考古展示室におけるハンズオン企画や、学校向けアプリなど新規プログラムの開発という成果を得られた。博物館教育の現場ならではの、調査・実践・検証という、切れ目のない研究活動を行うことができた。スマートフォンアプリの充実や、幅広い層に対応するプログラムの開発などにより、進化する情報課社会への適応、多様化する来館者に対するサービスの提供という、館全体の課題の実現にも寄与することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館教育に関しては、中期計画に沿って順調に進んでいる。時代の変化に対応しつつ、より多様化する来館者対して適切なプログラムを提供し、よりよい鑑賞体験が実現するよう、28 年度以降も取り組んでいきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－⑦)

【事業概要】東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	情報管理室長　村田良二

【主な成果】

(1) 収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、貸与管理、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。
(2) ユーザ向けのオンラインヘルプを一部改訂した。作業を実施する観点でのわかりやすさを検討し、よりわかりやすいヘルプを作成できた。
(3) ユーザ認証の方法について調査を行い、権限管理等の開発がより容易な認証フレームワークに移行することができた。
(4) 総合文化展の展示作業において用いる題箋作成のためにデータをダウンロードする機能を改善し、作業効率向上に役立てた。
(5) 旧字や日本語以外の漢字が作品名等に用いられた場合に、正しく印刷出力するための方法について調査し、PDF 出力の代替として HTML による出力を検討し、試験的に実装した。
(6) 個人情報保護及び不必要な情報へのアクセス制限の観点から、人物・団体に関するデータの表示画面で、ユーザがログインしていない場合には詳細情報を表示しないよう変更した。
(7) 京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館のデータベース担当者との間で、データの統合的な検索や相互バックアップについて意見交換し、実施に向けて検討を進めた。

収蔵品管理システム（オンラインヘルプ）

【備考】

収集データ件数　219,041 件
（内訳）
作品データ件数　210,903 件
平常展データ件数　4,109 件
鑑査会議データ件数　84 件
貸与データ件数　1,375 件
修理データ件数　2,570 件

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発でき、学芸業務に欠かせないツールとして着実に発展させることができた。オンラインヘルプの改訂により使い勝手を全体として向上させることができ、ユーザ認証機能やアクセス権限等の見直しにより、現在求められる情報セキュリティ水準に対応することができた。旧字・外国語等の対応において、博物館固有の問題について調査し、知見が得られた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画について、順調に進行している。26年度の全体的なプログラム見直しにより、追加の機能や改修を行うことが容易になっていることが確認できたため、28年度以降も漸進的な改良を継続する。特に、作品情報の入力・編集画面を見なおしてよりわかりやすく、一貫したデータ整備に役立つインターフェースを検討する。また、ユーザ認証機能の改善をさらに進め、館内業務システムとアカウント情報を連携させる。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4571-4

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4）凸版印刷と共同で実施する、ミュージアムシアターでの公開に向けた調査研究（(5)－⑦）

【事業概要】

館蔵文化財のデジタル・アーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。

19 年度から「国宝　聖徳太子絵伝」「国宝　灌頂幡」「重要文化財　洛中洛外図　舟木本」「土偶」「十一面観音菩薩立像」「伊能忠敬の日本図」「エジプトのミイラ」の高精細デジタル・アーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアムシアターにおけるコンテンツの公開を実施している。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長　井上洋一

【主な成果】

(1) 26 年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した「パシェリエンプタハのミイラ」（TJ-1835）について、当館及び外部研究者の監修のもとに、ミュージアムシアターの新規ＶＲコンテンツ「東博のミイラ―デジタル解剖室へようこそ」を制作し、27 年 7 月から 10 月に公開した。

(2)新たに列品 2 件（重文 色絵月梅図茶壺・国宝 八橋蒔絵螺鈿硯箱）についてＸ線ＣＴスキャナーを使用して 3 次元データを取得し、作品の材質、構造等について新たな知見を得た。

(3)上記データをもとに、当館研究員の監修により、新コンテンツ「日本工芸の名宝 色絵月梅図茶壺・八橋蒔絵螺鈿硯箱」を製作し、28 年 1 月から公開した。

(4)既に取得した作品のデータを元にしたコンテンツの内容の修正について監修し、下記のとおり公開した。

・　「江戸城と寛永寺」
・　「伊能忠敬の日本図」

ミュージアムシアターのＶＲコンテンツ
「東博のミイラ
―デジタル解剖室へようこそ」

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画どおりにデータの取得と新コンテンツの制作、公開が行われ、年度計画における文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査・研究を充分に達成することが出来た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画を順調に達成している。凸版印刷との共同研究を継続しており、新規に導入した３ＤＣＴスキャナーの利用を含めた作品データの蓄積と調査研究への活用を進めるとともに、その成果をもとにした新シアター向けのコンテンツを公開することができた。引き続き、研究対象の選定と方法について協議を進め、新たな素材に関する研究とデータ及びコンテンツ制作に取り組む。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-5

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5）聴力障害を持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築(学術研究助成基金助成金)((5)－⑦)

【事業概要】聴覚に障害をもつ児童・生徒の博物館での学習や鑑賞の困難さの特徴を示し、その具体的解決方法としての鑑賞プログラムを構築することを目的とする。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長　小林牧

【主な成果】

聴覚障害をもつ児童・生徒への特別支援教育及び、国内外の美術館・博物館で行われているバリアフリー化、ユニバーサル化事業の調査を行うとともに、当館で実施するプログラムにおいて、聴覚障害者のモニター調査を行った。

(1)美術館博物館における聴覚障害者への対応の遅れと、その解決法について意見交換を行った。
調査：川崎市立日本民家園、ちひろ美術館、富士美術館、刀剣美術館

(2)国内外の美術館・博物館で聴覚障害に限らず、障害者に対応しているプログラムや設備、ツールに関する調査、情報収集した。

(3)音声認識して即時的に文字データ化する聴覚障害者のための支援アプリ「ＵＤトーク」のモニター調査を体験型プログラム（ワークショップ「能の裏側体験」27 年 9 月 17 日）と座学のプログラム（講演会「日本美術が面白くなる様々な見方」27 年 10 月 10 日）について実施した。

(4)補聴器の性能を高める聴覚障害者のための磁気ループ（ヒアリングループ）を導入し、東京国立博物館での教育普及事業で試行、モニター調査を行った。

東京国立博物館でのワークショップにおけるモニター調査
聴覚障害者支援アプリ「ＵＤトーク」によって、タブレット端末に表示される音声を見ながらプログラムに参加するモニター（右手前）

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の２年計画の２年目
博物館における教育事業の聴覚障害者のモニター調査　３回　　のべ９人
美術館等調査回数　４回
特別支援教育施設等調査回数　４回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	美術館・博物館における教育普及事業に聴覚障害者が参加するための方策について検討し、モニター調査を実施し、問題点や改善点について具体的な検討を行った。東京国立博物館での聴覚障害者を対象とした支援の実践に大きく近づいた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は、概ね研究計画に沿ったかたちで順調に進められたと考える。博物館という場をいかした実践的プログラムの開発の手がかりをつかみ、その実施の第一歩を踏み出すことができた。今後、東京国立博物館におけるプログラムにおいて、実践を重ねることによって、聴覚障害者への支援の方法と参加しやすいプログラムの開発を進めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 東京国立博物館　処理番号 4571-6

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6）ミュージアムにおける鑑賞者開発の研究：新来館者の定着に向けた実証的調査分析（学術研究助成基金助成金）（(5)－⑦）

【事業概要】

ミュージアムにおける「鑑賞者開発（Audience Development)」の実証的な研究である。鑑賞者開発は、芸術団体と人々の関係強化を目指した考え方で、英国を中心に研究・導入されているが、ミュージアムにおける実証研究はいまだ発展途上にある。そこで申請者は、インターネットやモニタリング調査、海外比較等をもとに我が国ミュージアムにおける鑑賞者開発のモデルを構築し、それを実際のミュージアム事業と連動させることにより、ミュージアムにおける鑑賞者開発の先駆的な実証研究になりうると考え、本研究を計画した。研究を通して我が国ミュージアムに最適な鑑賞者開発の在り方を明らかにし、将来的にはミュージアムへの多様化するニーズを満たし、ミュージアムの社会的価値を増進することにつなげていきたい。

【担当部課】	総務課	【プロジェクト責任者】	総務課係長　関谷　泰弘

【主な成果】

(1)英国ミュージアム調査
27 年 7 月 26 日～8 月 3 日にかけて、英国ロンドン及びオックスフォードの主要ミュージアムにてインタビュー調査を実施。

(2)米国ミュージアム調査
28 年 2 月 29 日～3 月 8 日にかけて、米国ワシントン DC、クリーブランド及びニューヨークの主要ミュージアムにてインタビュー調査を実施。

(3)論文発表
26 年の鑑賞者開発イベントにおける調査結果をまとめ、研究論文として発表。

(4)国際学会口頭発表
(3)の論文の内容をもとに、国際博物館協会・広報マーケティング部会（ICOM-MPR）2015 アルメニア大会にて口頭発表（27 年 10 月 25 日）。

(5)論文集における発表
26 年度の国際博物館協会・広報マーケティング部会（ICOM-MPR）2014 台湾大会における口頭発表を発展させ再構築し、同大会の論文集にて発表。

自然史博物館（ロンドン）で視察した若者向けイベント Friday　Late の様子

【備考】

学術研究助成基金助成金事業の 3 年計画の 2 年目
(1)メールインタビュー2 件を含め、合計 7 ミュージアムの回答を得ることができた。
(2)合計 5 ミュージアム、1 機関より回答を得ることができた。
(3)東京国立博物館における若者向けミュージアム・イベント「博物館で野外シネマ」を事例とした鑑賞者開発の研究、関谷泰弘、文化経済学、第 12 巻、第 2 号、27 年、62-75 ページ.　（査読有）
(4)Cultivating Museum Visits in Young Audiences: A case study on audience development at the Tokyo National Museum, Yasuhiro Sekiya, ICOM-MPR 2015, Almenia Conference, 2015.　（査読有）
(5)Challenge to Change; A Case Study of Branding of the Tokyo National Museum, Yasuhiro Sekiya, Museum Branding-Redefining Museums for the 21st Century selected papers from the ICOM MPR 2014 Conference, pp.194-211, 2015.　（査読有）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
C	海外調査及び研究発表は当初予定通り実施でき、一定の成果を上げたと言える。一方、27年度に実施予定の事業のうち、国内調査及び過去に実施した調査の分析作業が完了しておらず、最終年度の28年度は、実施ペースを上げる必要がある。年度当初に調査を実施し、夏ごろをめどに分析を進め、年末ごろまでには研究発表を行いたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	28年度は、本研究の最終年度であり、インターネット調査と合わせて、過去に実施した調査を分析し、論文としてまとめる予定。27年度の調査は目標に達しなかったが、研究成果としては、26、27年度合わせて研究発表2回、論文発表2回とすでに当初の目標を達成しており、研究全体としては順調である。本研究により我が国における鑑賞者開発の発展の方向性はある程度見えてきているので、本研究を発展させる形で次回も継続して科学研究費が獲得できるように成果を上げていきたい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)　藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究（科学研究費補助金　研究代表者：奈良県立橿原考古学研究所　今尾　文昭）((5)－⑦)

【事業概要】
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する藤ノ木古墳出土品をはじめ 11 件（3,000 点以上）の国宝等国指定文化財を対象に、照度・大気・振動・温湿度等の展示・収蔵環境の調査と非接触高精度三次元形状計測及び透過 X 線撮影検査による微細物理的検査との相関性について研究し、適正保管・管理・公開を促進するための計画の指針（試案）を検討する。

【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室 主任研究員　品川欣也

【主な成果】

(1)調査
東京国立博物館にて銅鐸などの三次元形状計測を行った。(27 年 11 月 18 日、12 月 10 日など)
三次元計測を行ったデータの解析処理を行い、またフォトスキャンなど新たな計測方法について検討を行った（28 年 3 月 28 日)。

(2)調査の結果得られた知見・発見など
作品の高精度な三次元計測データが得られ、今後の適正保管・管理・公開を促進するための基礎データとすることができた。

(3)調査・研究の成果
28 年度の特集「親と子のギャラリー　美術のうら側探検隊」に計測データを解析して得られた画像データを展示に使用予定。

三次元計測風景

【備考】
科学研究費補助金事業の 4 年計画 3 年目

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究課題の対象資料(藤ノ木古墳出土品)の比較検討資料として、基礎的なデータの集積を行い、年度計画における文化財を活用した効果的な展示に関する調査を、達成することが出来た。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿った調査研究を実施することができた。とくに本研究課題は新しい計測機器及び方法(非接触高精度三次元形状計測及び透過X線撮影検査)を用い、文化財の適正保管・管理・公開を促進するための基礎資料が構築できた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 東京国立博物館　　処理番号 4571-8

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査・研究
プロジェクト名称	8)「シーボルト旧蔵本」の修理およびデジタル化による公開事業((5)-⑦)

【事業概要】安政６年（1859 年）にドイツ人医師シーボルトが再来日したときに携えてきた洋書、及び滞留中に収集した洋書で、「シーボルト献納本」ともよばれる。明治２年（1869 年）に長子アレキサンダー・シーボルトが外務省に寄贈した後、同 17 年（1884 年）に農商務省博物館の所管となり、現在にいたったもので、約 300 冊を数える。西欧の日本に対する深い関心が知られる内容のものが少なくない。貴重図書として保管されてきたこれらの図書を修理し、詳細調査によって画像データベースを作成し、その学術的意義を明らかにするとともに公開、活用することを目的とする。なお、26～27 年度に公益財団法人図書館振興財団の助成を得て実施した。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長　髙橋裕次

【主な成果】

①　シーボルトが来日後まもなく作成した目録をもとに作成したデータベースの内容を、当館の所蔵するシーボルト旧蔵本の書誌学的調査に基づいて更新した。また収集した資料や、台帳などの基礎データによって、目録中の書誌情報を分析し、その全貌を明らかにするための研究を進めることができた。

②　シーボルト献納本を永く保存・活用するための修理とデジタル撮影を実施した。修理によって安全な取り扱いが可能にした。修理の方針や、その過程を伝える画像などを、当館のウェブ上で公開した。

③　当初の姿を伝える残す修理の様子や、保存箱の作成手順などをウェブ上で公開したことで、貴重図書に対する博物館の取り組みを広く伝えることができた。

修理前

修理後

【備考】

調査件数　308 冊
修理件数　115 冊
デジタル撮影件数　92 冊（26,000 カット）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	26～27年度に公益財団法人図書館振興財団の助成を得て実施した事業であり、当館が所蔵する308冊について調査を行い、一部のものについては、修理やデジタル撮影を行い、公開、活用に寄与する事業を効率よく進めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「文化財を活用した効果的な展示や、歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動等に関する調査・研究」に沿った調査研究を実施することができた。公益財団法人図書館振興財団の助成事業は、27年度で終了するが、28年度においても、「シーボルト旧蔵本」を含む洋書の調査を充実させ、計画に従って着実に進行し、所期の目標を達成したい。

【書式Ｂ/博】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 4572-1

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）文化財情報に関する調査研究（(5)-⑦）

【事業概要】
当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討や機構内共通システムの運用に対する対応、博物館システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員　浅見　龍介

【主な成果】

(1) 各種アーカイブのデータベースや博物館ネットワーク等について検討する情報システム検討会を隔月で開催し、博物館システムの整備方針を定めた。

(2) 各種調査から寄託・寄贈まで、極めて高度な保護を求められる博物館特有の個人情報管理のあり方と、公共機関として求められるセキュリティ管理のあり方、一方で研究機関としてのアーカイブ公開のあり方等について調査・検討を進めた。

(3) デジタル化の推進に伴う情報容量の増大にあわせ、機器・設備の改善や増強を計画した。

(4) 科学調査機器の整備にあわせ、研究系サーバの能力強化や仮想化技術の導入を進めた。

(5) 文化財防災に関わる機能強化のため、災害下における通信機能の維持や作品に関わる重要データの取り扱いについて、調査・検討を進めた。

文化財情報システム（検索条件）

【備考】
・情報システム検討会　　6 回
・情報システム調査　　6 回

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	博物館情報システム・ネットワークの整備を推進するとともに、文化財情報や画像ストレージの整備・将来計画の検討などを通じ、文化財情報の調査研究を推進できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通じて対応を要する事項を整理し、喫緊の問題から順次検討を行って改良を継続している。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4572-2

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)平成知新館における、ハンズオン教材を活用した教育普及に関する調査研究((5)-⑦)

【事業概要】

26 年 9 月の平成知新館オープンとともに活動を開始した京博ナビゲーター（ボランティア）は、館内のミュージアム・カートやレファレンスコーナーで活動している。ミュージアム・カートでは、展示作品に関連するハンズ・オン教材を用いて来館者と対話を行っている。27 年度からは特別展を平成知新館にて実施することになったため、特別展に合わせたミニワークショップも行った。本事業は、ミュージアム・カートやミニワークショップの実践を行うとともに、来館者の主体的な興味・関心を引き出すためには、どのような手法や教材が最も有用かについて調査研究を行う。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員　水谷亜希

【主な成果】

(1)27 年度は 26 年から継続して 151 人が京博ナビゲーターとして登録､それぞれ月に 1 回程度来館し、館内で活動を行った。朝は防災センターの職員が朝礼を行い、夕方は学芸部の研究員が交代で終礼を担当した。通常時の活動では、ナビゲーターは 26 年度の研修をもとに、ミュージアム・カートに設置されたハンズ・オン教材を用いて来館者と交流した。

(2)特別展に関連したミニワークショップ「琳派デザインに挑戦！」「禅ワークショップ（仮）（28 年度事業)」実施に向けた研修会を 12 回行った。「琳派デザインに挑戦！」は開館日の毎日（39 日間）実施し、合計で 15,841 人の体験者があった。

琳派デザインに挑戦！

(3)名品ギャラリーの特集陳列「日本の仮面」､「さるづくし」に合わせて仮面や猿根付の複製を新たに作成し、追加ででカートに設置した。これらの複製はＣＴスキャナー等、当館の科学調査機器を利用して制作した。特集陳列「獅子と狛犬」期間中にはレファレンスコーナーにおいて人気投票を実施し、対話のきっかけづくりとした。28 年度に向け、カートに追加する教材（刀装具・甲冑・鏡・玉眼・蒔絵手板）を作成した。

根付複製

(4)ナビゲーター同士の交流、職員とボランティア相互の理解を深めるために､「ナビゲーター感謝会」を行った。

(5)活動によって、子どもだけでなく大人もハンズ・オン教材に熱中することが分かった。来館者からは「本で読んでも分からなかったことが分かった」「話ができたのが楽しかった」などの意見があり、近年増加している海外の旅行者にも好評である。展示を見るだけでなく、人同士の対話する場を設けることが、来館者の興味・関心を増大させるのに大いに役立つことが分かった。この活動はナビゲーター自身の生涯学習の場としても機能している。

(6)ミュージアム・カートや京博ナビゲーターについて、他館からの視察があった（栃木県美術館、岡山県立美術館、豊田市教育委員会、石橋美術館、九州国立博物館)。

(7)活動中の見守りは教育室スタッフが中心となって行っているが、土日祝日は目が届きにくく、ボランティアとの意思疎通に影響が出始めているため、限られた人員でどのように運営を継続するかが課題となっている。

【備考】

・ナビゲーター登録：151 人　・ミュージアム・カート活動日数：260 日
・カートに設置したハンズ・オン教材：14 件　・28 年度に向けて制作したハンズ・オン教材：5 件
・ミニワークショップ「琳派デザインに挑戦！」：39 日 15,841 人
・ナビゲーターに向けた研修会：12 回　・感謝会：1 回
・外部視察：5 件　・テレビ取材：NHK「趣味どき！国宝に会いにいく」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初計画では名品ギャラリーの展示に合わせたミュージアム・カートの活動を継続する予定であったが、27年度より特別展を平成知新館で行うことになり、特別展に関連した活動を実施する必要が生じた。そのためナビゲーターに向けた研修を行い、通常活動とは別に新規ワークショップを実施した。また28年度以降にカートに追加する教材5件を制作した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平成知新館の開館に向け、24年度より本研究を開始し、26年度より調査研究の成果を実際に事業にて展開し、27年度はその内容の更新・拡大と現中期期間において、調査研究の成果を生かした新たな取り組みを実行することができた。

【書式Ｂ/博】　施設名 京都国立博物館　処理番号 4572-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育に関する調査研究((5)-⑦)

【事業概要】本事業は、高精細デジタル複製を学校に持ち込んで訪問授業を行い、子ども達が文化財に親しむきっかけを作る活動である。京都国立博物館は21年に訪問授業を開始し、26年にはNPO法人京都文化協会・京都市教育委員会と共に「文化財に親しむ授業実行委員会」を立ちあげた。訪問授業で講師をつとめるのは大学生ボランティアの「文化財ソムリエ」であり、子ども達が学ぶだけでなく、実践を通じた大学生の学びの場としても機能している。本事業は、複製を軸として博物館、教員、大学生が交流することで互いに学び合い、新たな活動領域や価値観を獲得する試みである。その成果は訪問授業や教員への情報提供に反映するほか、論文、研究発表等で公開することを目指す。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室研究員　水谷亜希

【主な成果】

(1)文化財ソムリエ6期生6名を新たに採用し、計19名が活動した。27年度は22回のスクーリングを博物館にて実施、絵画担当の研究員が作品に関する勉強会を行ったほか、教育室研究員の助言のもと、文化財ソムリエが授業の進め方、内容を検討した。27年7月には「文化財の複製を用いた授業に関する交流会」を行い、学校教員と意見交換を行うとともに、過去の授業例の紹介や複製の取り扱いレクチャーを行った。以上の訪問授業に関わる活動のほか、こどもひかりプロジェクトが主催する東北地方での活動に参加、27年10月には京都にこどもひかりユース（大学生ボランティア）を招き、互いの活動紹介や意見交換を行った。

(2)スクーリングでは、文化財ソムリエが主体的に考え、行動できるよう議論を促した。また絵画担当研究員が作品解説を行うことで、専門性の高い内容を学んだ上で、授業内容を検討することができた。教員との交流会では、学校教育と博物館教育の違いを再認識するとともに、互いのスキルを活かす方法について有意義な意見交換を行うことができた。また、こどもひかりプロジェクトへの参加は、他地域の大学生や他分野の博物館職員との交流の場となり、文化財ソムリエのモチベーションを大いに高める効果があった。

(3)スクーリングでの準備に基づき、京都市内への訪問授業7回を行った。また、交流会に出席した教員による複製を活用した授業が5回実施された。27年度は琳派400年記念に関連し、京都市中学校総合文化祭においても、琳派をテーマにした制作が行われ、交流会に参加した教員の経験が反映された。琳派関連の生徒作品を展示した会場では文化財ソムリエによる「おしゃべり鑑賞会」を実施した。さらに生徒の作品集を実行委員会で発行・配布した。特別展覧会「琳派―京を彩る―」の期間中には「描こう風神雷神」を行い、文化財ソムリエがプログラムの補助を行った。

文化財ソムリエによる
おしゃべり鑑賞会

(4)複製を使った活動や鑑賞教育に関して、他館の調査7件（愛媛県美術館等）を行い、28年度の論文発表に向けて資料・情報の整理を行った。

【備考】・文化財ソムリエ：19人　・スクーリング：22回
・教員との交流会：1回29人　・こどもひかりユースとの交流会：1回23人
・訪問授業：7回658人（小学校4回、中学校3回）　・教員による授業5回約857人（中学校5回）
・おしゃべり鑑賞会：2回63人　・描こう風神雷神：1回22人
・こどもひかりプロジェクトの体験イベント：2回256人
・「RIMPA創造展　作品集」の発行：500部　・テレビ取材：MBS毎日放送「美の京都遺産」
・他館調査：7件　・助成金：平成27年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業　4,552,000円

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	本活動はノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、年々内容が深まっている。27年度はこれまでの活動に加え、琳派400年記念に関連して児童・生徒の作品制作・展示・作品集の刊行や鑑賞会も行われた。また、交流会をもとに教員による授業が実施されたことで、訪問授業に加えて857人もの生徒に学習の機会を提供することができ、質・量ともに大変充実したものとなった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	21年度より開始した高精細複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容を深めると共に活動も多様になっており、外部との協力・交流も広がりを見せている。27年度はその内容の更新・拡大と現中期計画期間において、調査研究の成果を生かした新たな取り組みを実行することができた。

【書式Ｂ/博】　　施設名 奈良国立博物館　　処理番号 4573-1

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1)歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究（(5)-⑦）

【事業概要】
奈良を中心とした寺社の歴史や伝統行事に関する情報を集め、「世界遺産学習」をはじめとする教育プログラムに反映させられるか検討を行い、重要度の高い情報、適切な内容を発信する仕組みを考える。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長　谷口耕生

【主な成果】

(1) 世界遺産学習の実施対象を全国から来館する小中高校生に拡大することを目的としてプログラム改定作業を進め、奈良の文化財の保存・公開に当館が果たしてきた歴史的役割を子供たちにわかりやすく伝える方法などについて検討を重ねた。

(2) 奈良教育大学・奈良市教育委員会・奈良県立万葉文化館とともにESDコンソーシアム文化遺産教育ワーキンググループを立ち上げ、博物館施設を活用して地域社会への関心を高めるための方策について協議を重ねた。

(3) 同ワーキングで提言された展示と密接に関連するクラフト教材活用及びワークショップの実践として、白鳳展関連の夏休みの親子イベント「水煙チョコ鋳造体験　白鳳時代の笛吹き童子を作ってみよう」を開催し、合計34名の小学生がチョコ作りという体験を通じて白鳳時代の鋳造技術への理解を深めた。

「水煙チョコ鋳造体験
白鳳時代の笛吹き童子を作ってみよう」
実施風景

【備考】
・「世界遺産学習」で来校した小学校　37校

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「世界遺産学習」を中心とした子供向けのプログラムを検討し、仏教美術を中心とする当館のオリジナリティを持たせた文化財学習が実施できた。さらに「世界遺産学習」を中心とした子供向けの教育・普及活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向け解説サービスの向上にも繋がっている。「世界遺産学習」は、 内容を随時検証し、より正確で分かりやすい内容を継続的に検討していくことによって、その継続性と質の確保に努めている。学芸部職員による研修や勉強会を通じて、内容の修正を行い、正確性を確保した。 プログラムの見直しにあたり、ESDワーキングあるいは職員とボランティアの間で情報の検討を通じて、「世界遺産学習」 の精度が向上し、来校する学数も所期の目標に達している。この数値を維持するためにも今後とも検討を重ねていく必要があり、それらの成果が来館者サービスの向上につながるものと考える。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画期間中、歴史、伝統文化の教育事業として 継続して行ってきた 「世界遺産学習」は 一定の成果を上げた。 28年度は、「世界遺産学習」をユネスコが提唱するESD（持続的開発のため教育）一環として位置づけ、教育機関などとの連携により方法論の検討を行い「世界遺産学習」の質的向上を目指す。

【書式Ｂ/博】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 4573-2

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究((5)-⑦)		
【事業概要】当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開ならびに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長　宮崎幹子
【主な成果】デジタル撮影の安定的な稼働を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのデータ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。 ・写真撮影としては、特別展「まぼろしの久能寺経に出会うー平安古経展ー」及び「白鳳ー花ひらく仏教美術ー」の開催と連動して、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各分野の文化財の撮影を多数行った。平安古経展では、修理の完了した久能寺経の新規撮影が叶い、また白鳳展では全国各地の白鳳時代の金銅仏の出陳にともなって、これらの写真撮影を実施することが出来た。中でも薬師寺月光菩薩立像の撮影は特筆に値する。これらによって、当館における文化財写真アーカイブズの更なる充実を図ることが可能となった。 ・新たに館蔵のガラス乾板のデータベースを作成し、館内での公開を実施した。このデータベースは、館内で進めているガラス乾板の保存活用の成果の一つである。ガラス乾板の整理作業は、デジタル化、ガラス乾板の保存処置（カビや埃の除去)、畳紙・保存箱への納入、新たな専用キャビネットへの排架とが連動したもので、館内の貴重な資料の保存活用と情報公開が同時に目指された活動であり、今後も継続して行う計画である。 ・奈良地域の文化財の画像公開を目的とする「奈良地域関連資料画像データベース公開事業」において、奈良女子大学附属図書館と学術協力の協定を締結している。27 年度はこの事業の一環として、寄託品の春日宮曼荼羅（南市町自治会）の撮影を実施し、画像提供を行った。 ・収蔵品・画像データベースから画像の無償ダウンロードが可能なように、システムの改修を行った。これにより、利用者はインターネットから直接画像をダウンロードすることが可能となり、画像データの利用促進に貢献するものと期待される。 ・地下回廊において仏像写真展「大和のほとけたちー奈良博写真技師の眼ー」を引き続き実施するなど、当館における文化財写真撮影とアーカイブズ形成の成果を一般に広めることにも継続して取り組んだ。			
【備考】 (1)画像撮影件数　2,896 件 (2)データ登録件数（画像データベースへの個別登録）　5,418 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代の経典や白鳳時代の金銅仏など、学術的に重要でありながら調査と撮影の機会を充分に得ることが難しかった分野について、調査を実施し、質の高い画像を取得して、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。さらに、画像の無償ダウンロードは、高品質の画像を、利用者に活用しやすいかたちでの情報提供を目指しており、調査研究の成果を幅広い層に向けて還元していくという意義が大きい。人員と予算が限られる現在のような体制の中で、意義が大きく幅広い活動を展開できた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に則り、文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能するべく、文化財アーカイブズ形成に継続的に取り組むことができた。 デジタル撮影については現在のところ安定的な稼働を実現できており、また仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重な画像コレクションの維持管理を遂行できている。 なお、館内での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望や現在行っているカラー・近赤外線・透過Ｘ線のデジタル撮影にとどまらず、ＣＴ撮影についてもデジタル化を実現すべく、機材・設備の整備が必要となる。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-1

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1）NHK と共同で実施する、高精細画像を活用したスーパーハイビジョンシアターでの映像公開に向けた研究（(5)－⑦）

【事業概要】
テレビの世界ではフルハイビジョンが主流だが、その４倍の画素数の４Ｋテレビという高画質のテレビが近年シェアを伸ばしている。当館では開館以来、この４Ｋのさらに４倍の密度を有する８Ｋというスーパーハイビジョンシステムによる映像を、世界で唯一の常設施設として公開してきた。このスーパーハイビジョンの質感と臨場感に優れた特性を、文化財の保存と活用のために、魅力的なコンテンツ制作と、コストも考慮した新しいシステムの調査研究を推進する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員　市元塁

【主な成果】
(1) 26 年度の調査、協議を踏まえ、27 年 7 月 28 日～8 月 5 日にかけて宗像大社沖津宮及び辺津宮にて神宝及び祭祀遺跡の撮影を実施し、これをもとに新番組「神やどる島　宗像沖ノ島」を作製することができた。九州国立博物館のスーパーハイビジョンシアター用映像としては初の動画映像（空撮含む）を導入し、これまでにない臨場感によって沖ノ島祭祀の空間を表現することができた。番組は、27 年 10 月 6 日から九州国立博物館文化交流展示室内のスーパーハイビジョンシアターにおいて公開を開始した。
(2) 27 年 12 月以降、スーパーハイビジョンシアターの多言語対応について、赤外線通信や、飛行機の座席のように、座席横に設置したイヤホンから放送を聞く方法などについて初歩的な調査を実施し、その有用性と問題点について明らかにすることができた。
(3) 28 年 3 月 4 日に東京で開催されたシンポジウム「8K から∞へ～超高精細映像のゆくえ～」で当館のスーパーハイビジョンをめぐる取り組みを発表した。

宗像大社神宝館での撮影風景

【備考】
・スーパーハイビジョンシアターの多言語放送化については、日英中韓での導入を検討しており、低コストでの実現に向けて模索中である。
・報告「国立博物館のスーパーハイビジョン」シンポジウム「8K から∞へ～超高精細映像のゆくえ～」28 年 3 月 4 日（東京）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の文化交流展示室では、宗像大社の全面的な協力のもとで、沖ノ島関連の展示を通年で実施している。普段は立ち入ることのできない沖ノ島のすがたを展示室内において紹介することは、来館者の展示鑑賞の理解促進にとってきわめて重要な作用をもたらす。その手段として、肉眼と同等水準の画質を提供できる８K映像はもっとも有効な手段であり、本研究では、沖ノ島をおとずれたときの空気感・臨場感の追及に注力した。その結果、空撮を含む動画によって、沖ノ島の祭祀空間を多面的にとらえなおすことができ、沖ノ島という祭祀空間のすがたをより実地に近い形で提供できることができた。また立ち入りが厳しく制限されている沖ノ島のいまのすがたを記録することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	17年度に作製した沖ノ島の映像は、祭祀の時系列的な解説に力点をおいた。本作はそれと方向性を異にし、沖ノ島は立ち入りが厳しく制限された祭祀の島であることをふまえ、沖ノ島のいまのすがたを記録することに注力した点に特徴がある。中期計画における「文化財を活用した効果的な展示」に関する調査・研究を達成できたと考える。当館では、この沖ノ島関連の2番組を効果的に使い分けることで、沖ノ島に対する理解をいっそう深めていきたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-2

業務実績書

中期計画の項目	４　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究（(5)－⑦）

【事業概要】
特別展ごとに、観覧者に展示内容をよりよく理解してもらうため、教育普及プログラムを実施する。27 年度は、「戦国大名―九州の群雄とアジアの波涛―」「大英博物館展―100 のモノが語る世界の歴史―」「美の国　日本」「黄金のアフガニスタン―守りぬかれたシルクロードの秘宝―」「始皇帝と大兵馬俑」の 5 つの特別展において、教育普及プログラムを実施した。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　西島亜木子

【主な成果】体験コーナーや解説パネルの設置、ワークショップやイベントの実施をそれぞれの特別展にあわせて行った。アンケートでは「体験を通して展覧会を楽しめた」「わかりやすかった」などの高評価を得た。

(1)特別展「戦国大名」では、「戦国大名の手紙」をテーマに、楮と雁皮の原料と紙を触れる体験、手紙の包み方「切封」体験、花押制作体験の 3 箇所のコーナーを展示室内に設けた。また、子どもの日のイベントとして、出品作品の兜をペーパークラフトで作るワークショップ「手づくり兜を作ろう」を行った。展覧会関連史跡を巡るウォーキングイベント「歴史学者と行く！ 岩屋城探訪」を企画したが、天候不良のため中止となった。

(2)特別展「大英博物館展」では、展示室内に 2 箇所の体験コーナーを設けた。「楔形文字を書いてみよう」では、世界最古の文字を、葦ペンを使って粘土に書く体験、「アストロラーベを使ってみよう」では、中世ヨーロッパの天体観測機器「アストロラーベ」の北部九州版を制作し、実際に使うことで展示を見るだけではわからないアストロラーベの魅力を体験してもらうことができた。子ども向けのプログラムとしてジュニアガイドを製作し、近隣の小学 5～6 年生に事前配布したほか、来館した小中学生に配布した。親子、一般を対象にしたイベント「夜の博物館へ行こう！九博ナイトミュージアム」を計 5 回実施した。また、プロモーションビデオを製作し、展覧会を周知した。

(3)特別展「美の国　日本」では、日本独自の製作技法や、大陸から伝わり日本で発達した技法を紹介するコーナー「技あり日本！」を設置。3D プリンタで出力した銅鐸や銅鏡を触れるコーナー、漆の技法「蒔絵」をパネルや動画、道具で紹介、葦手絵をパネルで紹介した。

(4)特別展「黄金のアフガニスタン」では、展示室の外に出土した衣装の装飾と衣装を再現し、試着体験コーナーを設けた。展示室内では、金属に浮き彫りされた魚のヒレが動く作品を再現し、ヒレが動く様子を体験してもらった。また、アフガニスタンや展覧会について楽しく学べるこどもガイドを製作し、近隣の小学 5～6 年生に事前配布したほか、来館した小中学生に配布した。

「美の国　日本」体験コーナー

(5)特別展「始皇帝と大兵馬俑」では、展覧会に興味を持ってもらうようなクイズや始皇帝の生涯を紹介する読みものを盛り込んだジュニアガイドを製作した。また、展示室内では体験コーナー「秦の単位で身体測定」を実施し、秦の単位で数字が表記してある身長計と体重計を設置して来館者に体験してもらった。

【備考】「歴史系博物館と科学系博物館の連携プロジェクトー「大英博物館展」教育普及事業における北部九州版アストロラーベの製作及び活用への取り組み」－『東風西声　九州国立博物館紀要　第 11 号』（28 年 3 月 31 日）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示理解を深め、展示を楽しむためのバラエティに富んだプログラムを各特別展で実施し、子どもから大人まで幅広い年齢層から高い評価をいただいた。それぞれの展覧会で必要とされる知識や期待される情報を適時に提供できた。巡回展でも他館では実施していない展示室内での体験コーナーやワークショップなど、独創性に富んだ内容を実施することができた。27年度は科学系博物館とのプログラム共同開発も行い、他館と連携という観点で発展性も見込まれる。ただし、効率性、継続性については担当者の能力に依存する面があり、今後改善が必要である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	教育普及プログラムの調査・研究は、全ての特別展において、計画的に実施されている。特別展のアンケートでも7割以上が「楽しんだ」と回答し、高い評価を得ており、来館者から満足度、期待度も高い。それにより、中期計画における「歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動に関する調査・研究」は充分に達成できたと考える。28年度はアンケートでの意見を踏まえ、さらに調査研究を進めたい。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-3

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3）学校教育現場との連携を図って作り上げる学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・開発（(5)－⑦）

【事業概要】
現在、13 種類の「きゅうぱっく」を準備し（各 2 セット、計 26 セット）、学校や社会教育団体等への貸出を行っている。今後の新規ぱっく開発を見据えて、現在ある「きゅうぱっく」の有効な活用法に関する実践事例を収集するとともに、教員研修や出前授業を通して博物館の活用や「きゅうぱっく」に関する情報を発信し、利用の普及を図る。

【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員　釜瀬進一郎

【主な成果】
「きゅうぱっく」を活用した実践事例や博物館を活用した授業作りに関する指導案を収集することで、今後の新規ぱっくの開発の方向性について検討した。教員向けの研修会を新規に立ち上げるなど、「きゅうぱっく」に関する情報発信・利用の普及を図った。また、既存アイテムの充実及び更新を進めた。

【備考】
(1)「きゅうぱっく」利用報告書を元に、学校現場が「きゅうぱっく」を利用して改善が必要と感じている部分や追加してほしい内容等をキット別に集計することで、今後の新規キット開発に向けた調査・検討を引き続き行った。また、多くの「きゅうぱっく」を活用した指導案や学習プリント等の資料を収集した。

(2)県下全域から 40 名の教諭が参加して、当館を会場に実施した福岡県教育センターのキャリアアップ講座において、博物館を活用した実践事例を含む具体的な指導案を多数収集するとともに、「きゅうぱっく」の活用について周知を図った。

(3)新規事業として当館主催の教職員向け研修会「博物館活用術!」を 4 回実施し、「きゅうぱっく」の活用について周知を図った。

(4)太宰府市立太宰府中学校の「総合的な学習の時間（飛梅タイム）」の歴史探訪講座に職員を派遣する出前授業を行った。また、春日市立須玖小学校、那珂川町立岩戸小学校、福岡市立西畑小学校にも「きゅうぱっく」を利用した出前授業を行うことで、児童生徒の反応を検証した。

(5)現在、新たな取り組みとして、3D プリンタで再現した銅戈を提供しているが、今後は青銅で再現した銅戈をパックするよう準備を進め、現状の経年劣化したアイテムを更新し、利用者の期待に応えた。

「きゅうぱっく」を利用した授業

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「きゅうぱっく」の貸出については、75件と26年度よりやや増加し、特別支援学校等の館内利用も定着してきており、概ね順調である。出前授業での活用や教員研修に関する新規事業を立ち上げることで、有効な学習教材として認知されるよう情報発信に努めた。 今後は、収集した多くの実践事例を精査し、オリジナルの指導案等の形で公開するなどの活用方法を検討するとともに、「きゅうぱっく」の内容を充実させたいと考えている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動に関する調査・研究」は充分に達成できたと考える。例えば、カリキュラムに「きゅうぱっく」の活用や、来館時の「きゅうぱっくを活用した体験活動」が位置づけられている学校があるなど、学校教育との連携が深化している。学校の要望に応えるために、的確な時期の情報発信や教員研修の充実、積極的な受け入れを進めるとともに、内容の充実・新規ぱっくの開発・作製が求められている。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-4

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)文化交流展示室に関して現在の展示施設、展示環境や展示方法の調査研究（(5)－⑦）		
【事業概要】開館 10 周年を迎える 27 年度は、文化交流展示室のリニューアルを行う。文化交流展示室は来館者のニーズに合わせて自由動線を基本としていたが、展示テーマ・ストーリーがわかり難い点が指摘されてきた。そこで、展示構成をよりわかりやすくする点を主眼にサインや題箋の改善、映像や会場模型の導入などを行うものとする。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長　楠井隆志

【主な成果】

(1) 文化交流展示室改善に関する全研究員、非常勤職員が参加する検討会は 23 年度より実施してきた。リニューアル実施年度にあたり、展示課・企画課研究員を中心に、より具体的な立案を行い、意見交換を重ねた。

(2) リニューアルの設計・施工に関しては、プロポーザル方式により丹青社が選定され、頻繁に検討を重ねた。図面上だけでなく、現場でのモックアップも繰り返し実施し、検討と改良を加えた。

(3) 5 つに分かれる展示テーマをよりわかりやすく示すために、色と数字を強調したサインを採用し、4 階文化交流展示室エントランスでのイメージグラフィックの提示や、展示室中央における模型を活用したガイダンスの作成、展示テーマを端的に示す映像放映を導入した。解説題箋にも展示テーマを色分けにより表記した。

(4) 展示室中央のボード裏に「きゅーはくの絵本」コーナーを新たに設置した。子供にも親しみやすい内容を目指し、当館で刊行した絵本を手にとってみることができるとともに、それに関する作品を展示するケースを設けた。

(5) 27 年 10 月 17 日開催の開館 10 周年記念式典にあわせ、計画のリニューアルを完了した。

(6) リニューアルの内容は、さまざまな媒体を活用して周知広報に努めた。

展示室中央の映像・展示室模型

色・数字による展示テーマの表示

【備考】
リニューアルに関する設計・施工業者との打ち合わせ　11 回
印刷物：当館季刊情報誌『アジアージュ』での紹介記事、リニューアル案内チラシ
新聞取材：6 件（西日本新聞、産経新聞、他）　テレビ取材：6 件（ＴＮＣ、ＦＢＳ、他）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	開館10周年という節目の年に、文化交流展示室の課題を整理・改善したリニューアルを実施することができた。来館者アンケートでも、展示構成がわかりやすくなったという意見がみられ、効果があったことを裏付けるものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査・研究成果をよりわかりやすい形で明示する取り組みがなされた。リニューアルの成果について来館者の動向調査やアンケート調査等を通じてよりニーズを把握し、さらなる改善を図っていく必要がある。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-5

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5)高等学校所蔵考古資料の調査研究((5)－⑦)

【事業概要】
日本各地の高等学校には様々な考古資料が保管されている。収蔵資料の多くは、教員や地元有志からの寄贈、構内遺跡出土品、歴史系クラブ活動の調査資料品などである。いずれも高校がその地域において知の集積地として機能していたことを示し、収蔵資料の実態把握は、考古学上重要であるばかりでなく、近現代の社会史的あるいは教育史的意義を有する。しかしながら、学校によっては管理者が不在であったり、知識不足から活用がなされなかったりと、各種の問題を抱え、資料の活用が進んでいない。本研究は、高等学校が所蔵する考古資料の更なる活用にむけて、全国的な調査を実施し、その成果を展示等の博物館機能を通じて広く公開していくものである。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員　市元塁

【主な成果】
(1)27 年 4 月 20 日に長野県松本市の松商学園高等学校の考古資料を調査し、保管・活用状況を明らかにした。
(2)27 年 4 月 28 日に佐賀県立小城高等学校の考古資料を小城市教育委員会のご協力のもと調査し、基本台帳を作製した。
(3)27 年 6 月 18 日に福岡県立朝倉高等学校の考古資料を調査し、保管・活用状況を明らかにした。
(4)27 年 6 月 25 日に鞍手町歴史民俗資料館を訪問し、福岡県内の高校考古資料に関する情報収集を実施した。
(5)27 年 7 月 14 日に佐賀県立小城高等学校を訪問し、前回作製した基本台帳をもとに、より詳細に個々の資料を調査した。その結果、特に 1960 年代末から 70 年代初頭にかけての同校郷土史研究部の活動を示す資料が充実して保管されていることを明らかにした。
(6)27 年 8 月 15 日に第 2 回全国高等学校考古学フォーラムを開催し、現在の高校における考古学的活動事例を収集した。また現役高校教員による座談会を開催して、高等学校における考古資料の扱いに関する課題を整理した。
(7)27 年 9 月 15 日に千葉県習志野市の東邦大学付属東邦中高等学校を訪問し、同校考古部の活動状況を調査した。
(8)27 年 10 月 1 日に秋田県立大舘鳳鳴高等学校の考古資料を秋田県教育委員会のご協力のもと調査し、保管・活用状況や現在の部活動の実態を明らかにした。
(9)28 年 1 月 28 日に福岡県立嘉穂高等学校、嘉穂東高等学校の考古資料を調査し、保管・活用状況を明らかにした。

秋田県立大舘鳳鳴高等学校での調査風景

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新規の調査を多く実施することができた。また、当館の調査研究を契機のひとつとして、全国で学校所蔵文化財に対する関心が高まり、様々な企画展や調査が進められたことを明記したい。とはいえ、こうした学校所蔵文化財の認識はいまだ限定的であり、関心も低く、現に8月に開催したフォーラムの聴講者数は26年度の第1回フォーラムが100人であったのに対し、今回は50人未満であった。広報予算が確保できず、十分に周知させることができなかったことが要因と考える。28年度も開催予定なので、特に広報の充実を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画における「歴史・伝統文化の理解促進に資する教育活動に関する調査・研究」は充分に達成できたと考える。例えば27年度の調査においては、調査対象校がおかれた自治体との連携が比較的円滑に行えた。その手法は28年度にも継承していきたい。また28年度は、27年度までの成果を含めたトピック展示を開催する予定であり、今後も継続して調査研究を実施する予定である。

【書式Ｂ/博】　　施設名 九州国立博物館　　処理番号 4574-6

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6)文化財管理及び画像情報データベースの効率的な運用についての調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】 収蔵品をはじめとする文化財情報のデータベース化の基盤となるシステムの構築と安定的運用、写真(画像)資料の永久的保管と撮影機材の整備を図る。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長　冨坂　賢

【主な成果】

(1) 収蔵品情報・画像資料の永久的保管を実現するため、バックアップ体制や障害耐性を十分に実装したハードウェア機器を導入した。

(2) 新収蔵品システムの運用を開始した。26 年度に制作されたプロトタイプを元に館内で議論を重ね、幾度かの運用テストを踏まえて本稼働に至り、全体的なアクセシビリティを向上させた。28 年度への課題として、データそのものの整備を進めることで引き継ぐデータの正確性を保証し、運用効率を高めることが挙げられる。

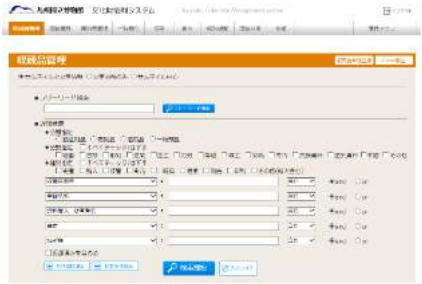
(3) 26 度採用された文化財データベース専任アソシエイトフェローが総務省主催の情報システム統一研修に 2 度参加し、より専門性を高め当館に成果を還元した。

(4) 27 年 10 月より写真撮影専任のアソシエイトフェローが着任し、撮影及び写場の機材整備・画像データの管理をより効率的にできるようになった。27 年 12 月には実際に館所有の機材・写場の大型ストロボ等機材を用いて宗家文書の撮影を行い、当館での撮影体制の構築に向けて準備を進めることができた。

(5) 撮影・機材整備の打ち合わせのため、27 年 10 月に京都国立博物館、27 年 11 月に奈良国立博物館に訪問し、他館の持つ撮影技術や機材の工夫などのノウハウを得ることができた。27 年 12 月には奈良文化財研究所にて行われた文化財写真研修に参加し、埋蔵文化財の野外撮影など新たな技術を習得することができた。

(6) 27 年 11 月 4 日に、Profoto 社主催の機材展示会及びセミナーに参加し、撮影機材選定のための情報収集を行った。また赤外線撮影用に保有するデジタルバックセンサーの改造、写場大扉に小扉を設置することにより大扉の開閉による写場内の温湿度変化や撮影作業の負担を抑えるなど、環境改善を図った。

(7) ポジフィルム・マイクロフィルムの物理的な保管環境の改善を図るため、保管場所を一般執務エリアから写場機材庫内にある防湿庫へ移動を行った。写場の環境はＩＰＭ定期的実施や温湿度の管理などがなされており、収蔵庫の環境とほぼ同等であるためフィルム原版の安定的保管には適している。



新収蔵品システム画面

【備考】

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	撮影の専任アソシエイトフェローを配置し、文化財機構間での連携のうえ館内で文化財撮影の実施・保管体制を確立することができた。新たな収蔵品管理システムの運用を開始し、収蔵品の管理効率を上げるとともに画像を管理するための基盤を構築した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	予算・人的資源を最大限に活用し、文化財の保存・活用そして研究の基盤としての文化財情報の整備に計画的に着手した。これにより、中期計画における「有形文化財の管理にかかる研究」を行い、目標を達成することができた。28年度は新任の撮影技師による文化財の撮影を進めつつ、これを管理・活用する体制を整える。

【書式Ｂ/博】　施設名 九州国立博物館　処理番号 4574-7

業務実績書

中期計画の項目	4　文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7)潜在的利用者とつくる新しい博物館の活動「きゅーはく女子考古部」についての調査研究((5)-⑦)

【事業概要】平成 25 年に行った調査によると、当館に一度も来館したことがない人の割合は、年齢別では若い世代が最も多い結果となった。そこで、新たな来館者層開拓のため、考古学を通して当館の魅力を知ってもらう「きゅーはく女子考古部」を発足させる。また博物館が提供するプログラムを来館者が実施するこれまでのプログラムと違い、本研究は当館考古担当研究員が顧問となり参加者自らが活動内容を決める新たな方法を採用する。

【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー　西島亜木子

【主な成果】

27 年 7 月から 28 年 3 月まで毎月 1 回活動した本プロジェクトでは、体験を通した活動により参加者が考古学の魅力を発見するとともに、部員それぞれがソーシャルメディアなどを通じて外部に発信をした。また、メディアの露出も多数あり、当館の魅力を十分発信することができた。

(1) 27 年 7 月のオリエンテーションでは、これまでの当館の考古関係プログラムやワークショップ等を紹介した。また、参加者の中から部長、副部長を決め、翌月以降の活動計画を立てた。
(2) 27 年 8 月は考古学入門講座として当館の文化交流展示室を考古担当研究員が案内するとともに、バックヤードツアーとして、保存修復施設等を見学し、文化財保存について学んだ。
(3) 27 年 9 月は考古学者の仕事体験の一環として福岡県桂川町の天神山古墳を訪れ、測量体験を行うとともに、王塚装飾古墳館を訪問し装飾古墳について学んだほか、土器を実際に触って質感や重さなどを体験した。
(4) 27 年 10 月は板付遺跡を訪問し、弥生時代の生活体験をした。その後、金隈遺跡を訪問し、弥生時代の埋葬文化や甕棺の変遷について学んだ。
(5) 27 年 11 月は弥生時代の住居跡が復元してある平塚川添遺跡にて、古代からある食材を使い、火おこしなど古代の調理方法で料理を作った。また、狩猟体験として、弓矢を使う体験をした。
(6) 27 年 12 月は弥生時代の衣装や装身具についてのレクチャーの後、弥生時代の服、貫頭衣を作った。また、貝や植物を使って古代アクセサリー作りも行った。
(7) 28 年 1 月は当館所蔵の「鬼瓦」「草葉文鏡」「文様磚」の 3D データから作った実物の縮小版から型を取り、チョコレートを作った。
(8) 28 年 2 月は当館展示中の資料や図録などを元に、土器づくりを行った。
(9) 28 年 3 月は年間の活動発表の場として、「きゅーはく女子考古部サミット」を開催し、広く一般に考古学の魅力を伝えるワークショップや衣装体験、女子考古部と顧問のディスカッションを行った。

古代衣装＆アクセサリー作り

【備考】

論文：「潜在的利用者とつくる新しい博物館の活用について－『きゅーはく女子考古部』の活動を通して－」
『東風西声　九州国立博物館紀要　第 11 号』(28 年 3 月 31 日)
取材：30 件（うち新聞 10 件、テレビ 5 件、ラジオ 2 件、情報誌 2 件、ウェブ：11 件）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	参加者へのアンケート調査では、回答があった14名の全員がこの活動についてSNSやブログで発信したと答えた。また、13名が活動日以外に当館を訪れたと回答した。また、新聞、若者向けの雑誌やWEBなど多数のメディア露出により、九州のみならず全国にもあらゆる世代に向けた情報発信ができた。ただし、年9回の活動は短いという意見や、座学を増やして欲しいとの意見もあり、改善しながら28年度も継続して活動を行いたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	潜在的利用者に対しての当館のアピールは十分行えた。また、新たな手法として行った参加者自身が活動内容を決める活動も、順調に実施できた。これにより、中期計画における「教育活動等に関する調査・研究」を行い、目標を達成することができた。28年度は新たな参加者を募り、さらに発信を続けていきたい。